

元総社蒼海遺跡群(9) 元総社蒼海遺跡群(10)

前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業および
元総社公民館新築移転工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2007.3

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

元総社蒼海遺跡群(9) 元総社蒼海遺跡群(10)

前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業および
元総社公民館新築移転工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2 0 0 7 . 3

前橋市埋蔵文化財発掘調査団



J-4号住居 耳飾り出土状況



J-4号住居出土の小型台付浅鉢



調査区全景（西から）



B-1号掘立柱建物跡 P₀柱穴断面状況（西から）



B-1号掘立柱建物跡全景（北東から）



W-1・2号溝 全景（西から）



元総社若海遺跡群(9)・(10) 出土の平安時代後期の土器

はじめに

前橋市の北にそびえる赤城山は、往古から人々とかかわりが深く、親しまれ愛される逍遙の山であります。とりわけ、赤城山南麓は、その悠々と裾野を広げる台地を中心として、岩宿遺跡に代表されるように遠い旧石器時代から現在まで人々のさまざまな生活が繰り広げられました。

古代において前橋台地には、広大に分布する穀倉地帯を控え、前橋天神山古墳などの初期古墳をはじめ王山古墳・天川二子山古墳といった首長墓が連綿と築かれ、上毛野の国の中心地として栄えました。また、総社古墳群が築かれた総社・元総社地区には山王廃寺、国分僧寺、国分尼寺、国府など上野国の律令中枢施設が次々に造されました。

中世になると、戦国武将の長尾氏、上杉氏、武田氏、北条氏が籠をけずった地として知られ、近世においては、譜代大名の酒井氏、松平氏が居城した関東三名城の一つに数えられる肥前橋城が築かれました。

近代では、横浜港が開港されると、輸出の花形商品として生糸をもって一番乗りしたのが、前橋の糸商人でした。前橋藩は、藩をあげて蚕糸に力を注ぎ、我が国初の製糸の機械化に取り組みました。生糸により、横浜と前橋が結ばれ、文化交流が始まりました。このように本市は、まさに、歴史性豊かなまちです。

今回、報告書を上梓する元総社蒼海遺跡群（8）～（12）は古代上野国の中枢地域の調査であります。推定上野国府域に隣接することから多くの注目を集めております。今回の調査では、「国府のマチ」を形成する集落のほか、千綱谷戸遺跡に代表される漏斗型耳飾りを出土した縄文晩期後半の住居跡、大溝の北側から検出された大型掘立柱建物跡1棟、鳥羽遺跡の対岸から検出された縁結陶器群、また、中世の館跡など豊富な資料が発見されました。残念ながら、現状のまでの保存が無理なため、記録保存という形になりましたが、今後、地域の歴史を解明する上で、貴重な資料を得ることができました。

最後になりましたが、この調査事業を円滑に進められたのは、関係機関や各方面のご配慮の結果といえます。また、炎天下や寒風の中、直接調査に携わってくださった担当者・作業員のみなさんに厚くお礼申しあげます。

本報告書が斯学の発展に少しでも寄与できれば幸いに存じます。

平成19年3月

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

団長 根 岸 雅

例　　言

1. 本報告書は、前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業および前橋市元総社公民館新築移転工事に伴う元総社蒼海遺跡群（9）・（10）発掘調査報告書である。

2. 調査主体は、前橋市埋蔵文化財発掘調査団である。

3. 発掘調査の要項は次のとおりである。

調　　査　　場　　所	群馬県前橋市元総社町3丁目1-1他
発　　掘　　調　　査　　期　　間	平成18年5月12日～平成18年9月31日
整　　理　　・　報　　告　　書　　作　　成　　期　　間	平成18年12月18日～平成19年3月20日
発　　掘　　・　整　　理　　担　　当　　者	梅澤克典・池田史人・綿貫綾子・遠藤たか美（発掘調査係員）

4. 本書の原稿執筆・編集は梅澤・池田・綿貫・遠藤が行った。

5. 発掘調査・整理作業にかかわった方々は次のとおりである。

阿部シゲ子・石原義夫・井上和久・岩木操・大澤俊夫・神澤とし江・岸フクエ・北爪啓子・齊藤亀寿
齊藤頼江・杉潤富雄・須田博治・高澤京子・角田燈・勅使河原幸枝・登坂うた子・渡本秋子・友永茂
中澤光江・中山昭・中央のり子・萩原秀子・橋本茂・平林しのぶ・星野和子・山野居綾・峯岸淳子
森下陽介・湯浅たま江・湯浅道子

6. 発掘調査で出土した遺物は、当発掘調査団より前橋市教育委員会に保管を依頼し、前橋市教育委員会文化財保護課で保管されている。

凡　　例

1. 挿図中に使用した北は、座標北である。

2. 握図に国土地理院発行の1：200,000地形図（宇都宮・長野）、1：25,000地形図（前橋）、1：6,000前橋市現形図を使用した。

3. 本遺跡の略称は、18A130-9・10である。

4. 遺構及び遺構施設の略称は、次のとおりである。

H…古墳・奈良・平安時代の堅穴住居跡	B…掘立柱建物跡	T…堅穴状遺構	W…溝跡
D…土坑	P…柱穴・貯蔵穴・灰原・ピット	D B…土坑墓	O…落ち込み

5. 遺構・遺物の実測図の縮尺は、原則的に次のとおりである。

遺構　　全体図…1：200	住居跡・堅穴状遺構・土坑…1：60	
掘立柱建物跡…1：100（柱穴断面図…1：60）	溝跡…1：80	竈…1：30
遺物　　土器・漆器…1/3・1/4	石器・石製品・土製品…2/3・1/3・1/4・1/5	鉄器・鉄製品…1/2
瓦…1/2・1/6		

6. 計測値については、（　）は現存値、〔　〕は復元値を表す。

7. セクション注記の記号は、縦まり・粘性の順で示し、それぞれ以下のように表現する。

◎…縦まり・粘性非常にあり、○…縦まり・粘性あり、△…縦まり・粘性ややあり、×…縦まり・粘性なし

8. セクション注記の色調・粒度の区分については新版標準土色帳（小山・竹原1976）によった。粒度については、粗（～0.2mm）、細（0.2～0.02mm）、微（0.02mm～）の3段階で表記した。

9. 遺構平面図の-----は推定線を-----は堅縦面を表す。

10. スクリーントーンの使用は、次のとおりである。

遺構断面図	構築面…■
遺物実測図	須恵器断面…■ 灰釉陶器・綠釉陶器断面…■■■■■ 灰釉陶器表面…■■■■■
	煤付着…■■■■■ 粘土付着…■■■■■ 油煙付着…■■■■■ 内黒…■■■■■

11. 主な火山降下物等の略称と年代は次のとおりである。

As-B　　（浅間B軽石：供給火山、浅間山、1108年）

Nr-FP　　（榛名二ヶ岳伊香保テフラ：供給火山・榛名山、6世紀中葉）

Nr-FA　　（榛名二ヶ岳渋川テフラ：供給火山・榛名山、6世紀初頭）

As-C　　（浅間C軽石：供給火山・浅間山、4世紀前半～中葉）

目 次

I 調査に至る経緯	1
II 遺跡の位置と環境	
1 遺跡の立地	1
2 歴史的環境	1
III 調査方針と経過	
1 調査方針	7
2 調査経過	7
IV 基本層序	9
V 遺構と遺物	
1 縄文時代	
(1) 竪穴住居跡	12
(2) 縄文時代の土器について	12
(3) 縄文時代の石器について	15
2 古墳～奈良・平安時代	
(1) 竪穴住居跡	15
(2) 竪穴状遺構	25
(3) 掘立柱建物跡	26
(4) 溝 跡	26
(5) 土 坑	27
(6) グリッド等出土遺物	27
VI まとめ	
1 縄文時代の遺構・遺物について	44
2 古墳～奈良・平安時代の集落について	44
3 大型掘立柱建物跡（B-1号）について	46
4 古代の大溝（W-1号溝）について	51

挿図

- Fig.1 元絶社蒼海遺跡群位置図
 2 周辺遺跡図
 3 元絶社蒼海遺跡群位置図とグリット設定図
 4 基本層序
 5 元絶社蒼海遺跡群(9)・(10)全体図
 6 J - 2号住居跡
 7 J - 4号住居跡
 8 J - 4号住居跡出土土器
 9 J - 4号住居跡出土土器
 10 J - 4号住居跡、調査区出土土器
 11 調査区出土土器
 12 調査区出土土器、J - 4号住居出土土器・石製品
 13 J - 2、J - 4号住居、調査区出土の石器
 14 J - 4号住居、調査区出土の石器
 15 J - 4号住居、調査区出土の石器
 16 J - 2、J - 4号住居、調査区出土の石器
 17 H - 3・4・24・25号住居跡
 18 H - 5・6・7・12号住居跡
 19 H - 8・9・14・18号住居跡
 20 H - 10・11・15号住居跡
 21 H - 13・16号住居跡
 22 H - 17・19・20号住居跡、T - 2・3号堅穴状遺構
 23 H - 21号住居跡
 24 H - 22号住居跡
 25 H - 22・23号住居跡
 26 H - 26号住居跡
 27 H - 27号住居跡
 28 H - 29・30号住居跡
 29 H - 31・32号住居跡

- 30 H - 33・34・45号住居跡
 31 H - 35・36号住居跡
 32 H - 37号住居跡
 33 H - 38・40号住居跡、O - 1号落ち込み
 34 H - 41・42号住居跡
 35 H - 43・44号住居跡
 36 H - 46・47・48号住居跡
 37 H - 49・50・51号住居跡
 38 H - 53・54号住居跡、T - 1・4・5号堅穴状遺構
 39 B - 1号掘立柱建物跡柱穴断面図
 40 B - 1号掘立柱建物跡
 41 W - 1・2号溝跡
 42 D - 3・6・8・17号土坑
 43 D - 21・22・24・27・42号土坑
 44 H - 3・6・8・11号住居跡出土土器
 45 H - 13・18号住居跡出土土器
 46 H - 21・25号住居跡出土土器
 47 H - 26・27・29・31号住居跡出土土器
 48 H - 31・35号住居跡出土土器
 49 H - 36・38・40号住居跡出土土器
 50 H - 40・42号住居跡出土土器
 51 H - 43・45号住居跡出土土器
 52 H - 46・48・51・54号住居跡、B - 1号掘立柱建物跡、T - 2・3号堅穴状遺構出土土器
 53 T - 4・5号堅穴状遺構、W - 1号溝跡、土坑、グリット出土土器、表探土器
 54 瓦実測図
 55 石製品・土製品実測図
 56 鐵羽口、鉄器実測図

図版

- 図1 J - 4号住居耳飾り出土状況
 2 J - 4号住居出土の小型台付浅鉢
 3 調査区全景(西から)
 4 B - 1号掘立柱建物跡柱穴断面状況(西から)

- P.L. 1 J - 2・4号住居跡
 2 J - 2・4号住居跡出土土器・土製品・石製品
 3 調査区出土の繩文土器
 4 J - 2・4号住居跡、調査区出土石器
 5 H - 3・9号住居跡
 6 H - 10・17号住居跡
 7 H - 18・19・21・24号住居跡
 8 H - 26・27・29・50・51号住居跡
 9 H - 30・34・45号住居跡
 10 H - 36・38・41号住居跡
 11 H - 40・42・44号住居跡
 12 H - 46・49号住居跡、D - 4・10・11・14号土坑
 13 B - 1号掘立柱建物跡

- 5 B - 1号掘立柱建物跡全景(北東から)
 6 W - 1・2号溝全景(西から)
 7 元絶社蒼海遺跡群(9)・(10)出土の平安時代後期の土器

- 14 T - 1・4号堅穴状遺構、W - 1号溝
 15 H - 4・6・8・11号住居跡出土土器
 16 H - 11・13・16・18号住居跡出土土器
 17 H - 17・21・25号住居跡出土土器
 18 H - 26・27・29・32・34・35号住居跡出土土器
 19 H - 36・38・40・41号住居跡出土土器
 20 H - 41・44号住居跡出土土器
 21 H - 44・46・48・51・54号住居跡、B - 1号掘立柱建物跡、T - 2・3号堅穴状遺構出土土器
 22 T - 4・5号堅穴状遺構、W - 1号溝、土坑、グリット出土土器
 23 瓦
 24 鐵器・石製品・土製品

表

- Tab.1 元絶社蒼海遺跡群周辺遺跡概要一覧表
 2 繩文時代堅穴状遺跡計測表
 3 繩文時代土器観察表
 4 繩文時代土製品観察表
 5 繩文時代石器観察表
 6 繩文時代石製品観察表
 7 古墳～奈良・平安時代堅穴状遺跡等計測表

- 8 H - 27号住居跡ピット計測表
 9 溝跡計測表
 10 古墳～奈良・平安時代土坑計測表
 11 古墳～奈良・平安時代土器観察表
 12 古墳～奈良・平安時代石製品・土製品観察表
 13 鐵器観察表
 14 瓦観察表

I 調査に至る経緯

本発掘調査は、前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業および前橋市元総社公民館新築移転工事に伴い実施され、それぞれ7年目と2年目にあたる。本調査地は、周辺で埋蔵文化財調査が長年に渡って行われていることから、遺跡地であることが確認されている。

平成18年4月14日付けで、前橋市長 高木政夫より前橋市元総社公民館新築移転工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の依頼が前橋市教育委員会に提出された〔元総社蒼海遺跡群(10)〕。さらに、平成18年4月19日付けで、前橋市長 高木政夫より前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の依頼が前橋市教育委員会に提出された〔元総社蒼海遺跡群(9)〕。前橋市教育委員会ではこれを受け、内部組織である前橋市埋蔵文化財発掘調査団 団長 根岸雅に対し、調査実施を協議し、調査団はこれを受諾した。平成18年5月1日、調査依頼者である前橋市長 高木政夫と前橋市埋蔵文化財発掘調査団 団長 根岸雅との間で、本発掘調査の委託契約を締結し、5月12日に現地での発掘調査を開始するに至った。

なお、遺跡名称「元総社蒼海遺跡群(9)・(10)」の「元総社蒼海」は区画整理事業名を採用し、区画整理対象地域一帯を一つの遺跡群として捉えた。数字の「(9)・(10)」は過年に実施した調査を区別するために付したものである。

II 遺跡の位置と環境

1 遺跡の立地

前橋市は、利根川が赤城・榛名の両火山の裾合を経て関東平野を望むところに位置し、地形・地質の特徴から、北東部の赤城火山斜面、南西部の前橋台地利根川右岸、南部から南西部にかけての前橋台地利根川左岸、東部の広瀬川低地帯という4つの地域に分けられる。

本遺跡の立地する前橋台地は、約24000年前の浅間山爆発によって引き起こされた火山泥流堆積物とそれを被覆するローム層（水成）から成り立っている。台地の東部は広瀬川低地帯と直線的な崖で画されていて、台地の中央には現利根川が貫流している。現在の利根川の流路は中世以降のもので、旧利根川は現在の広瀬川流域と推定される。台地の西部には榛名山麓の相馬ヶ原扇状地が広がり、榛名山を源とする中小河川が利根川に向かって流下し、台地面を刻んで細長い微高地を作り上げている。総社・元総社付近の染谷川や牛池川は、微高地との比較3m～5mを測り、段丘崖上は高燥な台地で、桑畑を主とした畠地として利用されてきた。

本遺跡は、前橋市街地から利根川を隔て、西へ約2.5kmの地点、前橋市元総社町地内に所在している。牛池川左岸の崖線沿いに立地し、崖線上台地部と崖線下低地部から成る。崖線下低地部は、河川改修により埋め立てられた牛池旧河道である。南約0.5kmの所には上野国總社神社があり、西方約1kmには関越自動車道が南北に走っている。さらに、遺跡地の南側には国道17号、主要地方道前橋・群馬・高崎線が東西に走り、東側には市道大友・石倉線が南北に走り、これらの幹線道路を中心にオフィスビルや大規模小売店が進出している。本遺跡はこれらの幹線道路から奥に入ったところに位置し、周囲には田畠が多い住宅地という静かで落ち着いた環境である。

2 歴史的環境

本遺跡地周辺には、古墳時代後期から終末までの上野地域と中央政権との関連をうかがわせる總社古墳群と山王庵寺、古代の中心地であった上野国府、さらに、中世には長尾氏により国府の堀割りを利用し築かれたとされる蒼海城があり、歴史的環境に優れている。周辺の埋蔵文化財発掘調査によって、これまで連続と続いてきた歴史を物語る多くの新しい知見が集積されている。



Fig. 1 元總社蒼海遺跡群位置図

縄文時代の遺跡としては、前期・中期の集落跡が検出された産業道路東・西遺跡や上野国分僧寺・尼寺中間地域が筆頭に挙げられ、縄文文化を考える上で重要な資料といえる。

弥生時代の調査例は少ない。当時の稻作の様子を示す水田・集落跡等が検出された日高遺跡、後期住居跡が検出された上野国分僧寺・尼寺中間地域や桜ヶ丘遺跡、下東西遺跡等に散見するだけである。

古墳時代の遺跡としては、まず本遺跡の最も北に広がる總社古墳群が挙げられる。總社古墳群を代表するものには、前方後円墳である遠見山古墳、川原石を用いた積石塚である王山古墳、前方部と後円部にそれぞれ石室をもつ二段に築造された前方後円墳の總社二子山古墳、横穴式石室をもつ方墳の愛宕山古墳、點内終末期と考えられ仏教文化の影響を強く受けた方墳の宝塔山古墳・蛇穴山古墳がある。また、宝塔山古墳の南西500mには白鳳期の建立と考えられる山王廐寺跡(放光寺)がある。さらにもこの寺の塔心礎や石製鰐尾、根巻石等の石造物群は、宝塔山古墳の石棺や蛇穴山古墳の石室と同系統の石造技術を駆使して加工されている。これらのことから、この寺は上野地域を治めていた「上毛野氏」の氏寺であり、この古墳群には「上毛野氏」一族が葬られているとも考えられている。これから、この地が「車評」の中心地として、仏教文化が古墳文化と併存しながら機能していた様子が窺える。なお、平成18年度から5ヵ年計画で「山王廐寺範囲内容確認調査」が実施され、平成18年度では「講堂」の版築基壇や「回廊」の北東礎石が確認された。

奈良・平安時代に至ると、上野国府、国分僧寺、國分尼寺の建設と相まって、本地域は古代の政治的・経済的・文化的中心地としての様相を呈てくる。律令期における国司の政治活動の拠点で地方を統治する機能をもつ国府は、元總社地区に置かれたとされる。

国府に関連する遺跡には、県下最大級の掘立柱建物跡が検出された元總社小学校校庭遺跡や、「國厨」「曹司」「國」「邑厨」等と書かれた墨書き土器や人形が出土した元總社寺田遺跡、律令期の掘立柱建物跡と考えられる柱穴が検出された元總社宅地遺跡がある。また、国府城の推定を可能にした大規模な東西方向の溝跡が検出された閑泉橋遺跡や元總社蒼海遺跡群(7)と、南北方向の溝跡が検出された元總社明神遺跡の調査成果により、国府城の東北外郭線が想定されるに至った。さらに、周辺遺跡からは官人の用いたと考えられる円面硯、巡方(腰帶具)、綠釉陶器も出土し、国府について考えるうえで貴重な資料となっている。

国分僧寺は大正15年に国指定史跡となり、昭和40年代からは部分的ながら調査が進められるようになった。本格的な発掘調査は昭和55年12月から始まり、主要伽藍の礎石、築垣、堀等が確認されている。さらに国分尼寺の調査では、昭和44・45年に推定中軸線上のトレンチ調査が行われ伽藍配置が推定できるようになった。さらに平成12年に前橋市埋蔵文化財発掘調査團で南辺の寺域確認調査を行い、東南隅と西南隅の築垣、それと平行する溝跡や道路状遺構が確認された。国分僧寺・尼寺周辺では、関越自動車道建設に伴う発掘調査が行われ、上野国分僧寺・尼寺中間地域では、当時の大規模な集落跡や掘建柱建物跡群が検出されている。

また、群馬町の調査等により、本遺跡から約1.5km南の地点にN-64°-E方向の東山道（国府ルート）があることが推定されている。さらに、推定日高道は、日高遺跡で検出された幅約4.5mの道路状遺構を国府方面へ延長したものである。これらは、当時の交通網を物語る重要な遺構である。

中世に至り、永享元年（1429）、上野国守護代の長尾氏によって古代国府跡に築かれた蒼海域は城郭としての機能を有し県内でも最古級に位置づけられる。しかも、県下最初の城下町を形成したと考えられている。蒼海域の縄張りは国府と関係が深く、現在の本地域の主要道路はこの縄張りに沿って作られていると推測される。

このように歴史的に重要な役割を果たしてきた總社・元總社地区であるが、その中でも上野国府が所在したと推定される元總社地区は注目される地域の一つである。元總社蒼海土地区画整理事業に伴い、平成11年より継続的に本地域の発掘調査が行われている。これにより、手つかず状態であった本地域の全容が明らかになっていくであろう。今後、この調査の進捗によって、上野国府や蒼海域が解明されていくことを期待する。

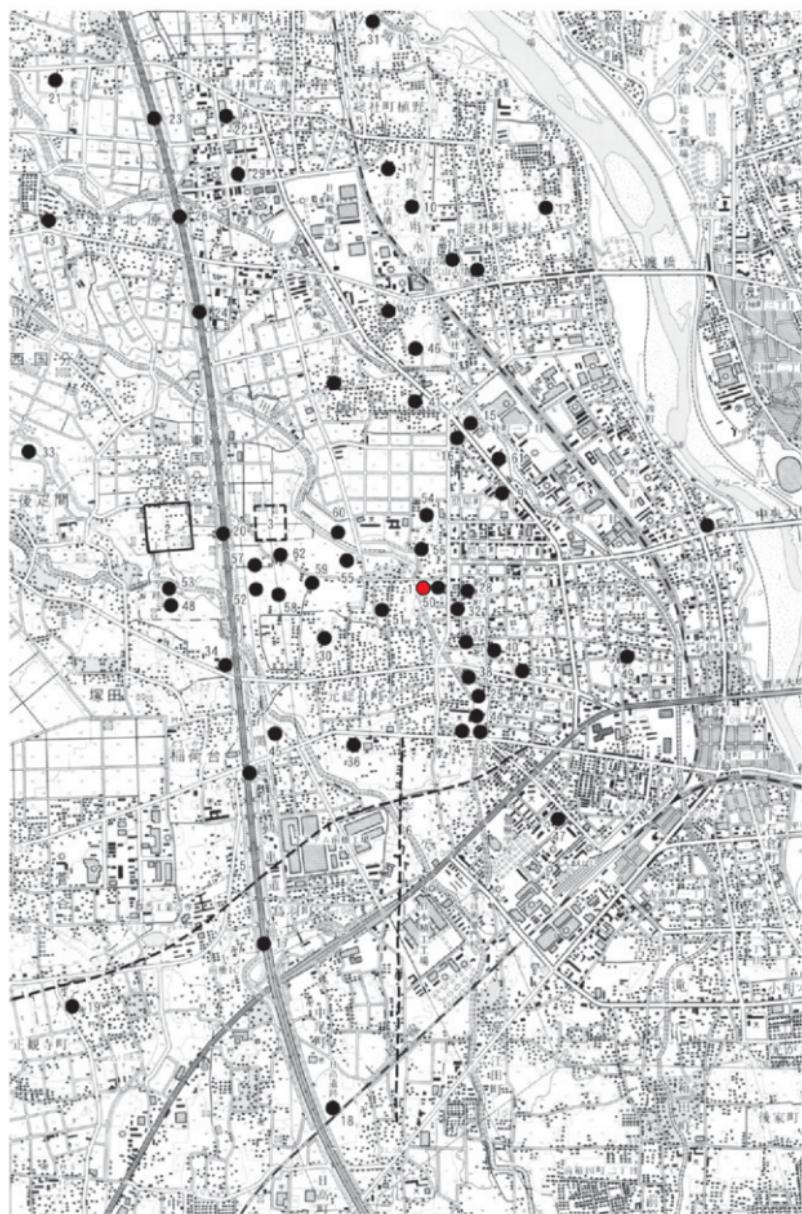


Fig. 2 周辺遺跡図

Tab.1 元總社蒼海遺跡群周辺遺跡概要一覧表

番号	遺跡名	調査年度	時代	主な遺構・出土遺物
1	元總社蒼海遺跡群(9)・(10)	2006	本遺跡	
2	上野国分寺跡(県教委)	1980~88	奈良:金堂基壇・塔基壇	
3	上野国分尼寺跡	(1999)	奈良:西南隅・東南隅塗垣	
4	山王廢寺跡	(1974)	古墳:塔心礎・根巻石	
5	東山道(推定)			
6	日高道(推定)			
7	玉山古墳	1972	古墳:前方後円墳(6C中)	
8	蛇穴山古墳	1975	古墳:方墳(8C初)	
9	福荷山古墳	1988	古墳:円墳(6C後半)	
10	愛宕山古墳	1996	古墳:円墳(7C初)	
11	總社二子山古墳	未調査	古墳:前方後円墳(6C末~7C初)	
12	達見山古墳	未調査	古墳:前方後円墳(5C後半)	
13	宝塔山古墳	未調査	古墳:方墳(7C末)	
14	元總社小学校庭遺跡	1962	平安:掘立柱建物跡・柱穴群・周濠跡	
15	産業道路東道跡	1966	縄文:住居跡	
16	産業道路西道跡		縄文:住居跡	
17	中尾遺跡(事業団)	1976	奈良・平安:住居跡	
18	日高道跡(事業団)	1977	弥生:水田跡・方形周溝墓・住居跡・木製農耕具・平安:条里制水田跡	
19	正觀寺遺跡I~IV(高崎市)	1979~81	弥生:住居跡・古墳:住居跡・奈良・平安:住居跡・中世:溝跡	
20	上野国分僧寺・尼寺中間地城(事業団)	1980~83	縄文:住居跡・配石遺構・弥生:住居跡・方形周溝墓・古墳:住居跡・奈良・平安:住居跡・掘立柱建物跡・中世:掘立柱建物跡・溝状遺構・道路状遺構	
21	清里南部遺跡群Ⅱ	1980	縄文:ビット・奈良・平安:住居跡・溝跡	
22	中島遺跡	1980	奈良・平安:住居跡	
23	下東西遺跡(事業団)	1980~84	縄文:屋外埋糞・弥生:住居跡・古墳:住居跡・奈良・平安:住居跡・横列・中世:住居跡・溝跡	
24	国分地遺跡(事業団)	1990	古墳:住居跡・奈良・平安:住居跡	
	国分境Ⅱ遺跡	1991	古墳:住居跡・奈良・平安:住居跡	
	国分境Ⅲ遺跡(群馬町)	1991	古墳:住居跡・奈良・平安:住居跡・畠跡・中世:土塙墓	
25	元總社明神遺跡I~XⅢ	1982~96	古墳:住居跡・水田跡・廻跡・奈良・平安:住居跡・溝跡・大形人形 中世:住居跡・溝跡・天目茶碗	
26	北原遺跡(群馬町)	1982	縄文:土坑・集石遺構・古墳:水田跡・奈良・平安:住居跡・掘立柱建物跡	
27	鳥羽遺跡(事業団)	1978~83	古墳:住居跡・鍛冶場跡・奈良・平安:住居跡・掘立柱建物跡(神殿跡)	
28	闇泉橋遺跡	1983	奈良・平安:溝跡(上幅6.5~7m、下幅3.24m、深さ2m)	
29	柿木遺跡・Ⅱ遺跡	1983.88	奈良・平安:住居跡・溝跡	
30	草作遺跡	1984	古墳:住居跡・平安:住居跡・中世:井戸跡	
31	桜ヶ丘遺跡		弥生:住居跡	
	元總社桜ヶ丘遺跡・Ⅱ遺跡	1985.87	奈良・平安:住居跡	
32	闇泉橋南遺跡	1985	古墳:住居跡・奈良・平安:溝跡	
33	後庄間遺跡I~Ⅲ(群馬町)	1985~87	古墳:住居跡・奈良・平安:住居跡・中世:道路状遺構	
34	塚田村東遺跡(群馬町)	1985	平安:住居跡	
35	寺田遺跡	1986	平安:溝跡・木製品	
36	天神遺跡・Ⅱ遺跡	1986.88	奈良・平安:住居跡	
37	星敷遺跡・Ⅱ遺跡	1986.95	古墳:住居跡・平安:住居跡・中世:堀跡・石敷遺構	
38	大友星敷Ⅱ・Ⅲ遺跡	1987	古墳:住居跡・平安:住居跡・溝跡・地下式土坑	
39	環越遺跡	1987	奈良・平安:住居跡・溝跡	
40	環越Ⅱ遺跡	1988	平安:住居跡	
41	昌楽寺跡向遺跡・Ⅱ遺跡	1988	奈良・平安:住居跡	
42	村東遺跡	1988	古墳:住居跡・溝跡・奈良・平安:住居跡・中世:堀跡	

番号	遺跡名	調査年度	時代：主な遺構・出土遺物
43	熊野谷遺跡	1988	縄文：住居跡、平安：住居跡・溝跡
	熊野谷Ⅱ・Ⅲ遺跡	1989	平安：住居跡
44	元能社寺田遺跡I～III（事業団）	1988～91	古墳：水田跡、溝跡、奈良・平安：住居跡・溝跡・人形・壺串・墨書き器 中世：溝跡
45	弥勒遺跡・II遺跡	1989, 95	古墳：住居跡、平安：住居跡
46	大星敷遺跡I～VI	1992～2000	縄文：住居跡、古墳：住居跡・奈良・平安：住居跡 中世：掘立柱建物跡・地下式土坑・溝跡
47	元能社緑葉遺跡	1993	縄文：土坑・平安：住居跡・瓦塔
48	上野国分寺参道遺跡	1996	古墳：住居跡・平安：住居跡
49	大友宅地添遺跡	1998	平安：水田跡
50	總社閑泉明神北II遺跡	1999	古墳：畠跡・水田跡・溝跡・中世：溝跡
	總社閑泉明神北II遺跡	2001	古墳：住居跡・溝跡・平安：住居跡・溝跡
	總社閑泉明神北V遺跡	2004	古墳：水田跡・奈良・平安：住居跡
	元能社蒼海遺跡群(7)	2005	奈良・平安：住居跡・溝跡
51	元能社宅地遺跡I～23トレanche	2000	古墳：住居跡・平安：住居跡・掘立柱建物跡・鍛冶場跡・溝跡・道路状遺構 中世：溝跡・近世：住居跡・五輪塔・陶瓶
52	元能社小見遺跡	2000	縄文：住居跡・古墳：住居跡 奈良・平安：住居跡・掘立柱建物跡・溝跡・道路状遺構
53	元能社西川遺跡（事業団）	2000	古墳：住居跡・畠跡・奈良・平安：住居跡・溝跡
54	總社甲種荷塚大道西遺跡	2001	奈良・平安：住居跡・溝跡・中世：畠跡・近世：溝跡
	總社甲種荷塚大道西II遺跡	2001	古墳：住居跡・奈良・平安：住居跡・溝跡・近世：溝跡
55	元能社小見内Ⅲ遺跡	2001	古墳：住居跡・溝跡・奈良・平安：住居跡・掘立柱建物跡・溝跡 中世：掘立柱建物跡・溝跡
	元能社小見内Ⅳ遺跡	2003	奈良・平安：住居跡・溝跡・中世：井戸跡
56	總社甲種荷塚大道西III遺跡	2002	古墳：住居跡・奈良・平安：住居跡・高跡・溝跡
	總社閑泉明神北III遺跡	2002	縄文：住居跡・古墳：住居跡・奈良・平安：住居跡
	總社甲種荷塚大道西IV遺跡	2003	古墳：畠跡・中世：畠跡
57	元能社小見Ⅱ遺跡	2002	縄文：住居跡・古墳：住居跡・奈良・平安：住居跡・掘立柱建物跡 中世：溝跡・道路状遺構
	元能社小見Ⅳ遺跡	2003	縄文：住居跡・古墳：住居跡・奈良・平安：住居跡・中世：溝跡
	元能社小見Ⅴ遺跡	2003	縄文：住居跡・古墳：住居跡・奈良・平安：住居跡・中世：掘立柱建物跡
	元能社小見Ⅵ遺跡	2004	縄文：住居跡・古墳：住居跡・奈良・平安：住居跡
	元能社小見Ⅶ遺跡	2004	縄文：住居跡・古墳：住居跡・奈良・平安：住居跡
	元能社蒼海遺跡群(4)	2005	縄文：住居跡・古墳：住居跡・奈良・平安：住居跡
58	元能社小見Ⅸ遺跡	2002	縄文：住居跡・古墳：住居跡・奈良・平安：住居跡・溝跡 中世：溝跡・道路状遺構
	元能社草作Ⅴ遺跡	2002	古墳：住居跡・奈良・平安：住居跡・中世：溝跡
59	元能社小見内Ⅳ遺跡	2002	奈良・平安：住居跡・掘立柱建物跡・溝跡 中世：土壙墓・掘立柱建物跡・溝跡
	元能社小見内Ⅹ遺跡	2003	奈良・平安：住居跡・溝跡・中世：堅穴状遺構
	元能社小見内Ⅺ遺跡	2004	奈良・平安：住居跡・中世：溝跡
	元能社小見内Ⅻ遺跡	2004	古墳：住居跡・奈良・平安：住居跡・工房跡・粘土探掘坑・金片・金粒 中世：溝跡・土壙墓
	元能社蒼海遺跡群(2)、(6)	2005	古墳：住居跡・奈良・平安：住居跡・井戸跡・鍛冶工房跡・中世：溝跡
60	元能社北川遺跡（事業団）	2002～04	古墳：水田跡・奈良・平安：住居跡・高跡 中・近世：掘立柱建物跡・水田跡・火葬墓
61	福荷塚道東遺跡（事業団）	2003	古墳：住居跡・奈良・平安：住居跡・溝跡・竈構築材探掘痕・井戸跡
62	元能社小見内Ⅷ遺跡	2003	縄文：住居跡・奈良・平安：住居跡・掘立柱建物跡・中世：畠跡・溝跡
	元能社蒼海遺跡群(1)、(5)	2005	奈良・平安：住居跡・溝跡・中世：溝跡・土坑墓

* 調査年度の欄の（ ）は調査開始年度を表す。

* 調査名の欄の（事業団）は別群馬県埋蔵文化財調査事業団を表す。

III 調査方針と経過

1 調査方針

委託調査箇所は、前橋市元総社公民館新築予定地で、調査面積は4,201m²である。グリッド座標については、元総社蒼海遺跡群発掘調査で継続的に用いている4mピッチのものを使用し、西から東へX1、X2、X3…、北から南へY1、Y2、Y3…となり、グリッドの呼称は北西杭の名称を使用した。なお基点X0・Y0の公共座標（日本測地系第IX系）はX = +44,000、Y = -72,200である。

本遺跡のX275・Y140の国家座標（第IX系）は次のとおりである。

日本測地系 X = +43440.000 Y = -71100.000

世界測地系 X = +43794.904 Y = -71391.765

調査方法は、表土掘削・遺構確認・杭打ち・遺構掘下・遺構精査・測量・全景写真撮影の手順で行った。

図面作成は、平板・簡易造り方測量を用い、遺構平面図は原則として1/20、住居跡廻・炉は1/10の縮尺で作成した。遺物については平面分布図を作成し、台帳に各種記録をしながら収納した。包含層の遺物はグリッド単位で収納し、重要遺物については分布図・遺物台帳の記載を行い収納した。

2 調査経過

本調査は5月12日より現地調査を開始した。調査地は、牛池川左岸の崖線沿いに立地し、崖線上台地部と崖線下低地部から成る。調査対象面積は4,201m²で、調査にあたり地形や現況により調査区を3つに分けた。東側台地部分を北の「1地区」、南の「2地区」に分け、西側低地部分を「3地区」とした（p.9, Fig.5）。このうち、過年度の調査により古墳～奈良・平安の集落の分布が予想される1地区の調査から着手した。表土掘削はパックホウ0.4m³および0.7m³を使用し、現表土とAs-B軽石混土層を剥ぎ、その下の暗褐色土層中で遺構確認を行った。西半部はやや削平を受けていたが、全体としては遺構の残りは良く、遺構確認の結果、堅穴住居跡や掘立柱建物跡などを検出した。5月18日に方眼杭打ちを行い、その後、掘り下げ・精査・測量・各種記録等の作業を順次進めていった。つづいて6月20日には、2地区の表土掘削を開始した。この調査区は、昨年度調査を行った蒼海遺跡群（7）の西側に隣接する場所で、昨年度検出された古代の大溝の延長部分が確認できる場所であった。ただ、2地区は遺構上面が大きく削平されており、古代の大溝は深さ50cmほどの残存状況であった。2地区では、溝が2条検出されたのみである。

1・2地区では遺構がそれほど重複していなかったことや晴天にも恵まれ調査が順調に進み、7月6日にはラジコンヘリによる、調査区全景写真撮影を行うことができた。また、7月8日には、近隣の住民を対象に現地説明会を開催した（来場者150名）。

その後、調査終盤になり10間×3間の大形掘立柱建物の精査や、当初想定していなかった縄文時代晚期の遺構・遺物が検出され、その調査・精査など時間を要した。そのため、1・2地区的調査終了後に行う予定であった3地区の調査開始も遅れた。3地区は東西方向のトレンチを3本設定し、8月28日～31日にかけて掘削を行い、遺構・遺物の包蔵状況を確認した。その結果、遺構・遺物は検出されず全面調査は行わなかった。

精査の結果、最終的に、縄文時代：堅穴住居2軒、古墳～奈良・平安時代：堅穴住居52軒、掘立柱建物跡1棟、土坑42基、溝跡1条などを検出した。9月20日に最後に残った縄文時代の遺構の調査を終え、その後埋め戻しを行って、現地での作業をすべて完了した。

12月18日より文化財保護課庁舎において、整理作業を開始した。遺物の水洗い・注記・接合・復元・実測・写真撮影・収納、図面の修正・整理・収納、写真的整理・収納を行い、3月20日にすべての作業を終了した。

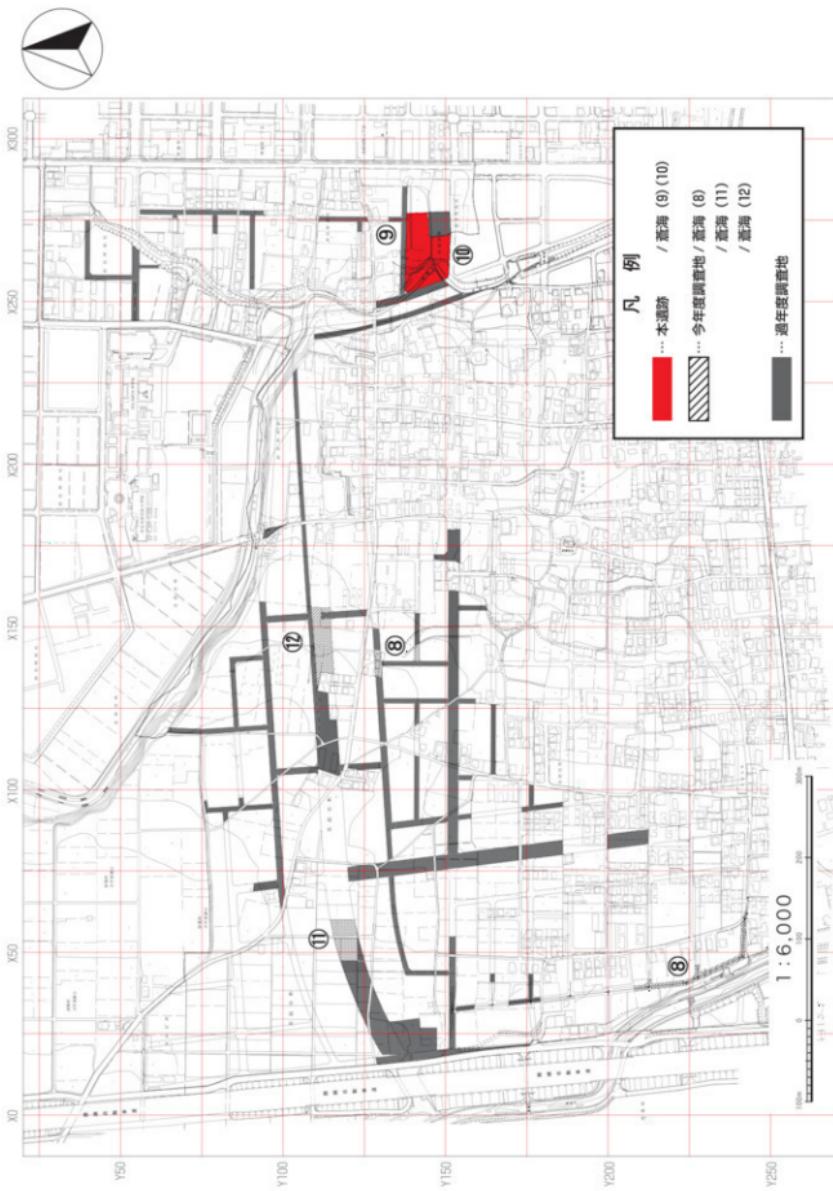


Fig. 3 元總社蒼海遺跡群位置図とグリッド設定図

IV 基本層序

本遺跡の調査にあたり、地形や現況から調査区を1地区から3地区に区分した(Fig.5参照)。1地区の基本層序採取地点は、調査区東端X278・Y143グリッドで、0-1号遺構の南側にあたる部分である。層序はFig.4に図示したとおりである。このうちV-VII層は地山を形成する所謂総社砂層で、漸移層を含み3層が確認されている。VII層は凝灰岩質層で周辺の古代集落遺跡において、竈材としての使用例が多くみられるものである。現に今回調査されたW-1号溝底面際には、これに関連する多数の凹状探掘痕が検出されており、今回検出した竪穴住居跡群の竈材としても活用されたであろう。

今回中心となる古墳後期～平安時代の包含層はIII層であり、縄文時代の遺構・遺物は、第V層の褐色土中において確認されている。各土層の堆積状況は、地山層までは大きな起伏もなく均一である。こうした状況は北側道路を挟んで、平成13年度に調査された「総社閑泉明神北II遺跡」においても同様の土層状況が観察されている。

2地区は、土地の造成によりV層の上面から削平されていた。3地区は、牛池川の旧河道であり、遺構・遺物の確認のためトレーナー調査を行ったが、表土下には砂質粘土が厚く堆積しており、その下位には旧路の砂礫層が堆積していた。砂質粘土中にAs-B、Hr-FA、As-C等の火山灰の堆積は認められず、下位の砂礫層は中世以降の路路と考えられる。

各土層の詳細は以下のとおりである。

- | | | | | |
|-----|---------|------|-----|--------------------------------|
| I | 灰黄褐色土 | 縮まり○ | 粘性× | 現耕作土。 |
| II | にぶい黄褐色土 | 縮まり○ | 粘性× | As-B軽石混土層。
古代遺物包含層。 |
| III | 暗褐色土 | 縮まり○ | 粘性○ | As-C・Hr-FP粒10%含む古代遺物包含層。 |
| IV | 暗褐色土 | 縮まり○ | 粘性○ | As-C1粒%、赤色粒1%含。 |
| V | 褐色土 | 縮まり○ | 粘性○ | 褐色軽石1%含。総社砂層漸移層。
縄文時代遺物包含層。 |
| VI | 黄褐色土 | 縮まり○ | 粘性○ | 総社砂層。鉄分凝集粒1%含。 |
| VII | 明黄褐色土 | 縮まり○ | 粘性△ | 凝灰岩質層。 |

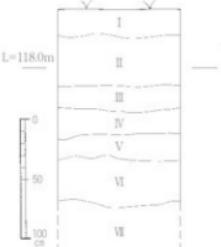


Fig.4 基本層序

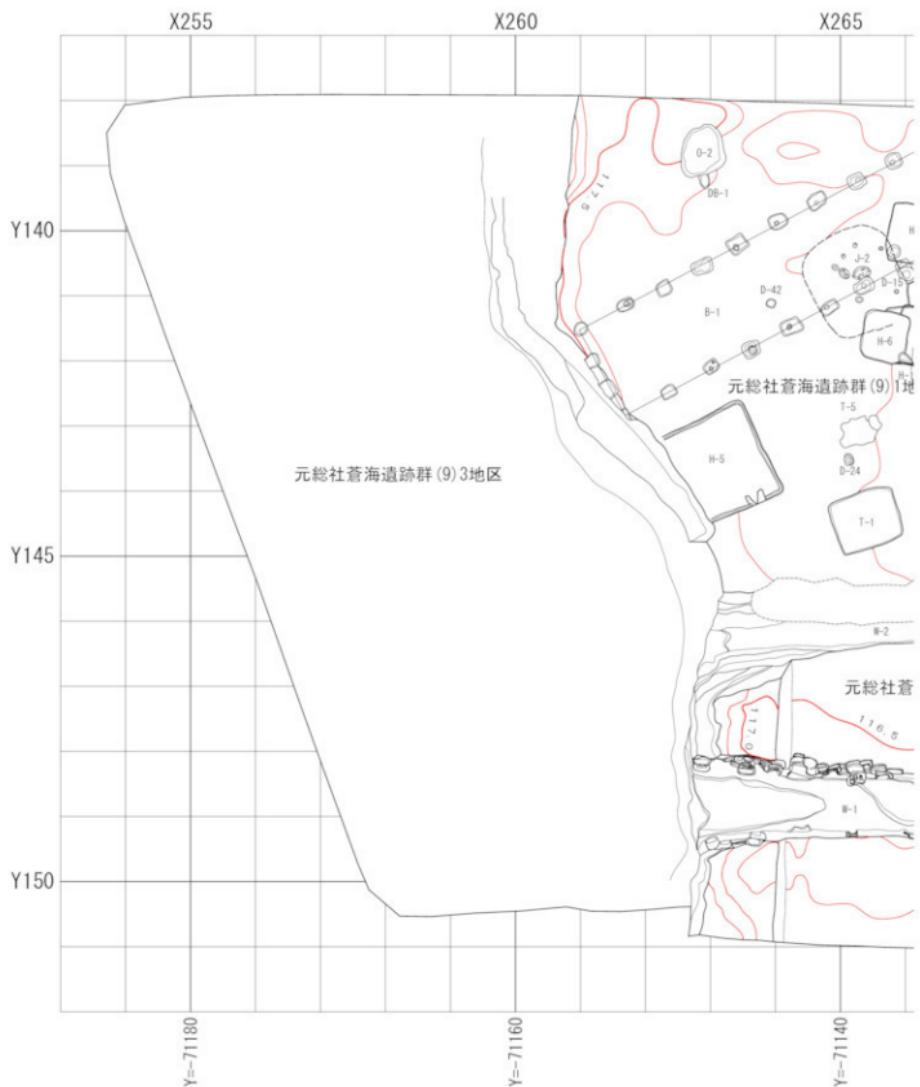
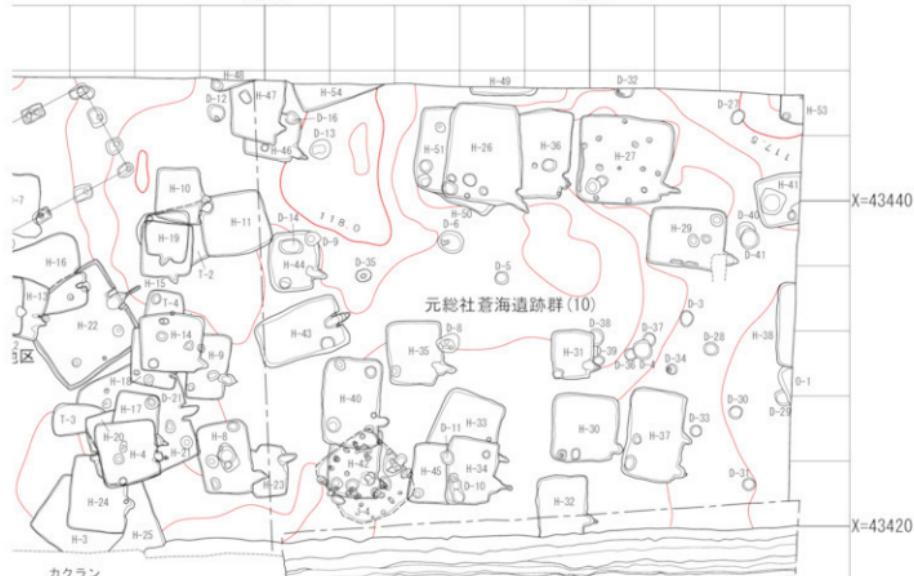


Fig. 5 元總社蒼海遺跡群(9)・(10) 全体図



X270

X275



カクラン

海遺跡群(9)2地区



Y=-71120

Y=-71100

0 1:300 20m

平成17年度調査区



X=43400

V 遺構と遺物

1 繩文時代

(1) 堪穴住居跡

J-2号住居跡 (Fig. 6・13, PL. 1・4)

X264~265、Y140~141グリッドに位置する。本住居跡の位置する部分は、VI層の総社砂層まで削平されており、確認の時点で既に炉石が露出していた。そのため、壁の立ち上がりは失われており、確認面がわずかにしみ状に汚れた箇所をもって住居の範囲を想定した。それによる平面形状は隅丸方形で、長軸方向は真北より60度西に偏する。規模は長軸が9.28m、短軸が5.9mで、面積は22.29m²と想定される。床面は硬化部分などが認められず明瞭ではない。炉は楕円形の掘り込みを2つ有し、その内、東側の掘り込みは方形に配された石窓を伴っており炉の本体部分と考えられる。西側は炉の付属的施設と考えられ、その南に、緑泥片岩の長幅平な礫が数個添えるように配されていた。炉の周囲には6個のピットが不規則に配されていたが、いずれも掘り込みが浅く、地柱穴と認められるものはない。遺物は図示できるものが少なく、炉の側からIV群に分類した、1と2の土器片が出土しており、晚期前半の時期が考えられる。他に石錐が2点出土している。

J-4号住居跡 (Fig. 7・8~10・12~16, PL. 1・2・4)

X270~272、Y143・144グリッドに位置する。平面形状はややいびつな隅丸方形で、長軸方向は真北より55度西に偏する。規模は北西壁一南東壁間が5.35m、南西壁一北東壁間が4.85m、面積は19.28m²である。各壁の床面から確認面までの高さは、北西壁21cm、南西壁15cm、南東壁20cm、北東壁22cmである。なお土層断面では、各壁とも深くて明瞭に立ち上がるよう見えるが、これは上層のH-42号住居のセクションベルトを踏襲したためで、実際にはベルト上面より30cm以上掘り下げたV層の漸移層中が確認面である。床面はVI層のやや硬質な総社砂層上層に営まれ、概ね平坦であるが住居南コーナー寄りの床面が他よりやや高い。床面中央には石で固られた炉が認められた。石は北東辺と南東辺に3石あり、北西辺と南西辺は抜き取られていたが、住居の方向に沿った方形の石窓の炉が想定できる。床面および壁際から全部で24個のピットが確認できた。その内柱穴は、住居の方向に沿って方形に配置されたP₁からP₄と考えられ、他のピットよりも深く掘り込まれている。また、住居の中軸線上に配置されたP₂とP₃も深く掘り込まれており、これら6個のピットが住居の上屋構造に直接関わる柱穴と考えられる。壁際穴は北西壁際と南東壁際で4個（P₅を除く）ずつ概ね規則的に並ぶが、北東壁と南西壁では壁中に不規則に掘り込まれている。なお北東壁中央の落ち込みは一見入り口施設に見えるが本住居構築以前のものである。本住居では入り口を想定できる柱穴等は認められなかった。遺物は3の台付小型浅鉢、4の浅鉢、5の皿、8の深鉢、土製品2の中空土偶の脚等が南東壁中央寄りの床面からまとまって出土している。いずれもIV群の土器で、晚期前半から中葉の時期に比定できる。また石製品1の勾玉、土製品1の耳飾り破片が西隅寄りの覆土中から出土した。耳飾りの破片は、ほかにも住居内各所の覆土中から出土している。他に覆土中および床面から石錐25点が出土している。

(2) 繩文時代の土器について

概観

本遺跡からは総数2000点を越える繩文土器片が出土した。しかし大半が時期の特定困難な小破片であり、からうじて時期推定可能な土器片から見ると、繩文時代中期後半から晚期前半までの時期の繩文土器が出土している。量的には晩期に分類したものが大半を占め、次いで中期であり、後期に分類したものは僅かである。遺構別

の出土傾向を見ると、全資料の過半数を占めるJ-2、J-4号住居出土土器は殆どが晩期の土器である。また、住居以外にX269、270、Y142、143グリッドにJ-1、X268、269、Y140、141グリッドにJ-3にとした遺物集中出土箇所があり、J-1では晩期土器の出土が若干多いもののほぼ同数の中期土器が出土しており、J-3ではJ-1と同じ割合での中期・晩期資料に加え、僅かに後期の土器の出土が見られる。また、土師住居覆土中からも散点的に出土しているが、調査区全体で見ると中央部分での出土量が大半を占める。

本遺跡の縄文土器全体を概観すると、量的に少なく、また小破片が多くて各時期の特徴的な文様構成が窺える資料が僅かである。したがって土器形式毎に変遷が追えるような分類是不可能で、大まかに、時期・特徴とする文様要素・部位からの分類をしただけである。以下に分類した基準について簡単に述べる。なお、弥生時代と考えられる土器も出土しているが、量的に非常に少ないので、ここで併せて述べることとした。

上器群の分類

①群土器

縄文時代中期後葉から後期初頭の土器で、加曾利E2からE4式土器を1類、称名寺式土器を2類とした。

1類 (Fig.10-44~56) 44・45は退化した口縁部文様域から沈線が垂下して胴部を縱に区画する。46~48、52・53は胴部に楕円形区画を配する類で、47は口縁部にも逆三角形状の楕円形区画を横位に配し、48は楕円形区画の間に庚手状の沈線を垂下させる。52・53は楕円形区画が上下二段に分かれれる。54は底部破片で胴部区画下端の隆線が認められる。55は橋状把手、56は橋状把手を付した口縁突起である。45、47がE2段階、他はE3~E4段階と考えられる。

2類 (Fig.10-57) 57は称名寺2式の口縁突起である。本類に比定できる土器はこの一片だけである。

②群土器

縄文時代後期前半から中葉の土器で、堀之内式土器を1類、加曾利B式段階の土器を2類とした。

1類 (Fig.11-58~62、65・66) 58から61は平行沈線により横に連続した三角形をモチーフとし、堀之内2式に比定されよう。62の内側に僅かに屈曲する角頭状口縁は堀之内式に特徴的である。65・66は網代痕を有する底部である。

2類 (Fig.11-63・64、67~74) 本類は加曾利B1式・B2式と考えられる土器である。67は台付土器である。68から71、74は口縁部破片、72は胴部破片である。68、67、72は横位の平行沈線を基調とし、70・71は曲線を基調とする。63・64は横方向の平行沈線と弧線文の組み合わせが、B2式的な文様構成であるため本類に含めたがⅢ群とすべきかも知れない。また、68も口縁部縄文帯の文様構成から本類としたが、下位の縄文帯内の沈線の文様構成によってはⅢ群となる可能性もある。

③群土器

縄文時代後期後葉の在地関東系の土器を一括した。後期後葉から晩期初頭の土器を1類、晩期前半の安行系の土器を2類、無文の粗製土器を3類とした。

1類 (Fig.11-75、88・89) 出土資料は極めて少ない。88・89は後期後葉の曾谷式としたが小破片で明瞭でない。75は新地式に見られるような瘤の貼り付けがある。1点のみの出土であるため明確にできないが一応本類に含めておく。

2類 (Fig.6-1、Fig.8-7、9、11-12、Fig.11-76~87) 晩期初頭から前半までの、安行2式から3a・3b式段階と考えられる土器を本類とした。1、7、76~81は波状口縁あるいはその基部付近の破片である。1および76~78の縦長で上下2つの圧痕がある貼付文は安行3b式の特徴で、79にも同じ貼付文が剥落した痕跡がある。80の縦長の刻みのある貼付文は3a式に特徴的である。これらの波状線の下には入組三叉文が配されると考えられるが、81・82では入組三叉文の構成が認められない。83は平縁で小さな口縁突起を有する深鉢であるが、

同様に入組三叉文の構成がたどれない。9、11・12、84～87は入組帶状文、入組三叉文、三角文を持つ胴部破片である。これらの文様は安行2式からたどれるが、本遺跡では明瞭に安行2式の特徴を示す土器が出土していないため、すべて安行3a・3b段階に収まるかも知れない。

③類 安行系の無文の粗製土器を本類とした。無文の土器をa類、地文繩文のみが施されるものをb類とした。

a類 (Fig.6-2、Fig.9-20～Fig.10-36、Fig.12-106～110、112) 20～25、106～109、101は折り返し口縁の土器である。折り返し口縁は一段、二段、三段以上のものがあり、二段以上のものは、多くが折り返し部分を接合した擬似折り返し口縁である。また、25も擬似折り返し口縁であるが、口縁全周ではなく一部分のみの折り返し口縁となり、おそらく2単位か4単位の緩やかな波状を呈するものと考えられる。24、108は口縁部に刺突が加えられる。26～30は無文の単純口縁の深鉢である。26は口唇上に木片の柱目を押し付けてのキザミが施される。また、100は口唇に棒状工具を押し付けて小波状口縁としている。

これら無土器の器形は、緩やかに内湾するものと、あまり内湾しないで開くものとが見て取れる。また、31のように頭部がくびれるものもある。器面は継縫のナデにより調整されているが、中には条痕のように粗くナデ跡を残したものもある。33～36、112は粗製無文土器の底部である。底部が外側に張り出すものと、そうでないものがある。35は肉厚の底部が強く外側に張り出している。

b類 (Fig.9-18-19、Fig.12-111) 18-19、111は地文繩文のみ施文されるものである。どれも単節L Rで、18は継縫に、19、111は横位に施文されている。

④群土器

繩文時代晩期前半の大洞系の土器で、精製土器を1類、粗製土器を2類とした。

1類 (Fig.8-3～6、16、Fig.10-37・38、Fig.11-96～Fig.12-100、103・104、114) 3は注口土器に似せた小型台付の浅鉢で手彫形土器かも知れない。頭部に小さな透かし孔があり、体部は雲形文で装飾される。96・97も3と同様な頭部が括れ肩部が強く張る浅鉢形の土器で、97の体部も雲形文が見られる。4は小型丸底の浅鉢で、体部に横方向に連続した入組三叉文が見られる。16、104も同様の器形で、16は4と同じ文様構成が考えられる。5は平行沈線のみで装飾され、6は無文の小型丸底の皿である。4～6には底面中央に特徴的な小さな丸い窪みが付けられ、38にも同じ窪みが見られる。98～100は浅鉢の口縁、37は浅鉢の底部である。114は地文が特異で、文様構成が不明だが一応本類に含めた。

2類 (Fig.8-8、10、13-15、17、Fig.11-90～95、Fig.12-101・102、105) 8は口縁に小突起を有する平縁の深鉢で、唯一器形が窺える資料である。大洞B C式に比定されよう。14・15は器面全面に繩文が施される。口縁下に平行沈線による文様を描き、口唇にはキザミが入る。また、口縁下の沈線が続く小突起が付される。10、17、90～95、105には横位の磨消繩文が見られる。10は繩文帯の中に三叉文が施され、90～95は刺突が施される。102は磨消繩文による雲形文が施される。13は地文繩文で沈線による横位区画内に刺突を施す。

⑤群土器 (Fig.10-39、Fig.12-113、115～118)

弥生時代初頭の土器を本群とした。出土点数は少ない。113は太めの沈線により三角を基調とする磨消繩文を施す。115は条痕文系の土器である。39、116～118は条線や非常に条の細かな原体を使って繩文を施文しており、本遺跡の他の土器と比べて異質である。不明な部分が多いが、一応本群に含めておく。

⑥群土器 (Fig.10-40～43、Fig.12-119)

弥生時代中期以降の土器を本群とした。出土点数は少ない。40の壺は、四線で区画した頭部文様帶に継ぐ櫛描きを施した上に四角形の幾何学文を描き、口唇には繩文の圧痕が見られる。119は壺の口縁である。櫛歯状工具による、鋸歯文、波状文が口縁、頭部に施される。ともに弥生時代中期の土器である。41～43は櫛描文、櫛描波状文が施文された破片で、弥生時代中期から後期と考えられる。

(3) 縄文時代の石器について

石族、スクリーパー、石角についてのみ概述する。他の石器については、石器観察表を参照されたい。

石鏡 (Fig.13-1 ~ Fig.14-45)

本遺跡から出土した石鏡のうち、形態の判るもの45点を図示した。その形態を分類してみると、平基有茎、凸基有茎、凹基無茎、尖基、円基の6タイプに分けられる。各タイプの数量は平基有茎が最も多く16点、次いで、凸基有茎11点、円基8点、尖基6点、凹基有茎と凹基無茎が2点ずつである。遺構毎の出土点数を見てみると、J-2号住居からは平基有茎と尖基鏡が1点ずつ出土し、J-4号住居からは平基有茎10点、凸基有茎7点、尖基4点、凹基有茎と円基鏡が2点ずつ出土している。石鏡の最終消費地が集落内とは考えられないで、本遺跡出土の石鏡がそのまま、J-2、J-4号住居の時期である晩期前半の石鏡の形態を示しているとは言えないが、少なくとも出土点数の少ない凹基の石鏡は有茎、無茎とともに晩期的ではないと言えよう。平基有茎、凸基有茎、尖基、円基の石族が目立っていることは、他の縄文時代晩期遺跡の出土傾向とも合致している。

スクリーパー類 (Fig.14-47~Fig.15-59)

本遺跡では磨石類を除いて、石鏡以外に定形的な石器は見られない。日常的な切削作業に使用したと考えられるスクリーパー類についても不定形な剥片に簡単な調整を施したもののが、僅かに出土しているのみである。しかも、2次調整が加えられた剥片も使用の痕跡があり見られないものが多く、かえって、打ち欠いただけの剥片の鋭利な端部を利用していることのほうが多い。50および56は両側縁ないし上下單から大きめな剥離によって縁辺を鋭利に仕上げているが使用痕が認められない。50は途中で放棄された石鏡の未製品、56は大型で身の厚い円基鏡の素材と考えられようか。

石核 (Fig.15-61~65)

5点の石核を図示した。石材は硬質頁岩2点、黒色安山岩2点、硅質頁岩が1点である。本遺跡から出土した石器、剥片の大半を占める黒色頁岩の石核は認められなかった。出土した剥片の石材別数量では、硬質頁岩は黒色頁岩に次いで多く、黒色安山岩はそれに次ぐ。硅質頁岩製の石器は図示した石核1点のみである。硬質頁岩製の61、65は剥離工程や目的とする剥片の分析はできなかったが、何度も打面を変えて執拗に剥離を行っている。

黒色安山岩製の43は河原石を打ち欠いて平坦面をつくり、そこを打面としている。62は河原石の平坦な面を打面としている。両方とも基本的に打面は1面である。硅質頁岩製の62は主な剥片剥離は表面のみに認められる。偏平な河原石を断面凸レンズ上に調整し、裏面の上端に斜め上から加撃して剥離を行っている。いずれの石核からもあまり大きな剥片素材は得られなかつたと考えられる。

2 古墳～奈良・平安時代

(1) 壇穴住居跡

H-3号住居跡 (Fig.17・44、PL.5)

位置 X266・267、Y144・145グリッド 主軸方向 (N-53°-W) 規模 東西(4.16)m、南北(2.64)m、壁現高13cm。面積 (12.02)m² 床面 全体的に平坦な床面。竈 不明。周溝 なし。重複 H-24・H-25と重複し、新旧関係はH-25→本遺構→H-24の順である。出土遺物 総数231点。そのうち土師壺1点を図示。 時期 埋土や出土遺物から7世紀中葉と考えられる。

H-4号住居跡 (Fig.17・44、PL.5・15)

位置 X267・268、Y143・144グリッド 主軸方向 N-85°-E 規模 東西4.15m、南北3.88m、壁現高30cm。面積 15.23m² 床面 全体的に平坦な床面。竈 東壁中央南寄りに位置する。主軸方向N-86°-W。全長

99cm、最大幅94cm、焚口部幅26cm。周溝なし。ピット P7：長径68cm、短径58cm、深さ36.2cmの円形。重複 H-17・H-20・H-21・H-24と重複し、新旧関係はH-21→H-24→H-20→H-17→本遺構の順である。出土遺物 総数495点。そのうち須恵壺2点、須恵碗2点、須恵皿1点、灰釉陶器皿1点、羽釜1点を図示。時期 埋土や出土遺物から10世紀後葉と考えられる。

H-5号住居跡 (Fig.18・44, PL.5・15)

位置 X262~264、Y142~144グリッド 主軸方向 (N-63°-E) 規模 東西(654)m、南北(5.38)m、壁現高7.5cm。面積(22.61)m² 床面 全体的に平坦な床面。竈 南壁中央東寄り。主軸方向 (N-24°-W)。全長(74)cm、最大幅(120)cm、焚口部幅(58)cm。周溝 西壁・北壁・南壁を巡る。重複なし。出土遺物 総数19点。そのうち土師壺1点を図示。時期 埋土や出土遺物から7世紀後葉～8世紀後葉と考えられる。

H-6号住居跡 (Fig.18・44, PL.5・15)

位置 X265・266、Y141・142グリッド 主軸方向 N-80°-W 規模 東西3.3m、南北2.92m、壁現高11cm。面積 11.81m² 床面 全体的に平坦な床面。竈 東壁中央南東寄り。主軸方向 N-58°-W。全長98cm、最大幅68cm、焚口部幅20cm。周溝なし。重複 J-2・H-12・H-13と重複し、新旧関係はJ-2→H-13→H-12→本遺構の順である。出土遺物 総数13点。そのうち土師椀1点、釘1点を図示。時期 埋土や出土遺物から10世紀後葉と考えられる。

H-7号住居跡 (Fig.18, PL.5)

位置 X265・266、Y139・140グリッド 主軸方向 [N-86°-E] 規模 東西[3.98]m、南北[3.43]m、壁現高(6)cm。面積 [13.44]m² 床面 全体的に平坦な床面。床面全面から多量の炭化物を検出。焼失住居と考えられる。竈 東壁南隅寄り。主軸方向 (N-72°-W)。全長(52.8)cm、最大幅(110)cm、焚口部幅(-)cm。周溝なし。ピット P₇：長径90cm、短径88cm、深さ20.5cmの円形。重複なし。出土遺物 総数8点。時期 不明。

H-8号住居跡 (Fig.19・44, PL.5・15)

位置 X268・269、Y142・143グリッド 主軸方向 N-80°-E 規模 東西4.8m、南北3.43m、壁現高25cm。面積 15.64m² 床面 全体的に平坦な床面。竈 東壁南東隅寄り。主軸方向 N-87°-W。全長108cm、最大幅110cm、焚口部幅76cm。周溝なし。ピット P₇：長径90cm、短径74cm、深さ36cmの円形。P₈：長径76cm、短径53cm、深さ41.8cmの楕円形。P₉：長径74cm、短径64cm、深さ24.7cmの円形。P₁₀：長径172cm、短径10.5cm、深さ15.5cmの楕円形。重複 H-21・H-23と重複し、新旧関係はH-21→H-23→本遺構の順である。出土遺物 総数401点。そのうち須恵壺3点、灰釉陶器皿1点、羽釜1点、鉄鎌1点を図示。時期 埋土や出土遺物から10世紀後葉と考えられる。

H-9号住居跡 (Fig.19・44, PL.5・15)

位置 X268・269、Y142・143グリッド 主軸方向 [N-88°-E] 規模 東西[4.02]m、南北[2.6]m、壁現高18.5cm。面積 [13.98]m² 床面 全体的に平坦な床面。竈 東壁中央南寄り。主軸方向 N-81°-W。全長121cm、最大幅103cm、焚口部幅21cm。周溝なし。ピット P₇：長径50cm、短径48cm、深さ32.2cmの楕円形。重複 H-14と重複し、新旧関係は本遺構→H-14の順である。出土遺物 総数325点。そのうち須恵壺1点を図示。時期 埋土や出土遺物から10世紀中葉～10世紀後葉と考えられる。

H-10号住居跡 (Fig.20・44、PL.6・15)

位置 X268・269、Y139・140グリッド 主軸方向 N-88°-W 規模 東西2.94m、南北3.68m、壁現高23cm。面積 12.36m² 床面 全体的に平坦な床面。竈 東壁中央（A）と東壁南東寄り（B）に位置する。（A）主軸方向 N-90°-E。全長66cm、最大幅66cm、焚口部幅16cm。（B）主軸方向 N-27°-E。全長38cm、最大幅62cm、焚口部幅20cm。周溝なし。重複 H-11・H-15・H-19・T-2と重複し、新旧関係はT-2→H-11→H-19→本遺構→H-15の順である。出土遺物 総数272点。そのうち須恵器2点、土師壺1点、を図示。時期 埋土や出土遺物から9世紀後葉と考えられる。

H-11号住居跡 (Fig.20・44、PL.6・15・16)

位置 X269・270、Y140・141グリッド 主軸方向 N-80°-E 規模 東西4.48m、南北4.02m、壁現高37.5cm。面積 14.83m² 床面 全体的に平坦な床面。竈 不明。周溝なし。重複 H-10・T-2と重複し、新旧関係はT-2→本遺構→H-10の順である。出土遺物 総数412点。そのうち土師壺2点、須恵器1点、土師壺1点、刀子1点を図示。時期 埋土や出土遺物から7世紀後葉と考えられる。

H-12号住居跡 (Fig.18、PL.6)

位置 X265・266、Y141・142グリッド 主軸方向 [N-88°-E] 規模 東西[3.64]m、南北[2.38]m、壁現高9.5cm。面積 [11.58]m² 床面 全体的に平坦な床面。竈 東壁中央南寄り。残存状態が良くないため計測不能。周溝なし。重複 J-2・H-6・H-13・H-16・H-22と重複し、新旧関係はJ-2→H-22→H-16→H-13→本遺構→H-6の順である。出土遺物 総数14点。時期 埋土や出土遺物から10世紀中葉と考えられる。

H-13号住居跡 (Fig.21・45、PL.6・16)

位置 X264・266、Y141・142グリッド 主軸方向 N-74°-W 規模 東西3.3m、南北3.74m、壁現高25.5cm。面積 11.80m² 床面 全体的に平坦な床面。竈 東壁中央南寄り。主軸方向 N-71°-W。全長106cm、最大幅120cm、焚口部幅72cm。周溝なし。重複 H-6・H-12・H-16・H-21と重複し、新旧関係はH-21→H-16→本遺構→H-12→H-6の順である。出土遺物 総数186点。そのうち須恵器1点、須恵碗3点、羽釜1点、刀子2点を図示。時期 埋土や出土遺物から10世紀初頭～前葉と考えられる。

H-14号住居跡 (Fig.19・45、PL.6・16)

位置 X268・269、Y142・143グリッド 主軸方向 N-89°-E 規模 東西4.16m、南北3.68m、壁現高22.5cm。面積 14.68m² 床面 全体的に平坦な床面。竈 東壁中央南寄りに位置する。主軸方向 N-70°-W。全長 74cm、最大幅116cm、焚口部幅60cm。周溝なし。ピット P₇：長径64cm、短径60cm、深さ32.8cmの円形。P₈：長径64cm、短径60cm、深さ23.4cmの円形。重複 H-9・H-18・H-21・H-22・T-4と重複し、新旧関係はH-22→H-21→H-18→T-4→H-9→本遺構の順である。出土遺物 総数390点。そのうち須恵器4点、土師壺1点、須恵碗2点、土釜1点を図示。時期 埋土や出土遺物から10世紀後葉～11世紀前葉と考えられる。

H-15号住居跡 (Fig.20・45、PL.6・16)

位置 X268、Y140・141グリッド 主軸方向 N-87°-W 規模 東西[3.26]m、南北[3.66]m、壁現高17cm。面積 [12.89]m² 床面 全体的に平坦な床面。竈 南壁中央東寄りに位置する。主軸方向 N-24°

W。全長76cm、最大幅58cm、焚口部幅42cm。周溝なし。重複 H-10・H-19・T-2と重複し、新旧関係はT-2→H-19→H-10→本遺構の順である。出土遺物 総数192点。土師壺1点を図示。時期 埋土や出土遺物から9世紀中葉と考えられる。

H-16号住居跡 (Fig.21・45, PL. 6・16)

位置 X266・267、Y140・141グリッド 主軸方向 [N-73°-E] 規模 東西 [4.64]m、南北 [4.96]m、壁現高13.5cm。面積 [16.96]m² 床面 全体的に平坦な床面。竈 東壁中央南寄り。主軸方向 (N-73°-E)。全長 (71)cm、最大幅 (129)cm、焚口部幅 (60)cm。周溝なし。重複 H-12・H-13・H-22と重複し、新旧関係はH-22→本遺構→H-12→H-13の順である。出土遺物 総数125点。そのうち土師壺2点、土師甕1点を図示。時期 埋土や出土遺物から8世紀中葉と考えられる。

H-17号住居跡 (Fig.22・45, PL. 6・17)

位置 X268・269、Y142・143グリッド 主軸方向 (N-79°-E)。規模 東西 (2.6)m、南北 (3.16)m、壁現高17.5cm。面積 (12.68)m² 床面 全体的に平坦な床面。竈 東壁南東隅寄りに位置する。主軸方向 N-74°-W。全長116cm、最大幅110cm、焚口部幅34cm。周溝なし。重複 H-4・H-17・H-20・H-21と重複し、新旧関係はH-21→H-20→本遺構→H-4の順である。出土遺物 総数71点。そのうち須恵壺1点、須恵甕1点を図示。時期 埋土や出土遺物から10世紀前葉～10世紀中葉。

H-18号住居跡 (Fig.19・45, PL. 7・16)

位置 X267・268、Y141・142グリッド 主軸方向 (N-79°-W) 規模 東西 (3.00)m、南北 (3.80)m、壁現高13cm。面積 (12.67)m² 床面 全体的に平坦な床面。竈 東壁中央南寄りに位置する。主軸方向 (N-14°-E)。全長 (35)cm、最大幅 (-)cm、焚口部幅 (27)cm。周溝なし。ピットP₆: 長径52cm、短径46cm、深さ23.3cmの円形。P₇: 長径58cm、短径50cm、深さ20.8cmの円形。重複 H-14・H-21・H-22と重複し、新旧関係はH-22→H-21→本遺構→H-14の順である。出土遺物 総数77点。そのうち須恵壺2点を図示。時期 埋土や出土遺物から10世紀後葉と考えられる。

H-19号住居跡 (Fig.22, PL. 7)

位置 X268、Y140グリッド 主軸方向 [N-86°-E] 規模 東西 [280]m、南北 [3.56]m、壁現高18cm。面積 [10.89]m² 床面 全体的に平坦な床面。竈 南壁中央に位置する。主軸方向 [N-21°-E]。全長 [66]cm、最大幅 [86]cm、焚口部幅 [26]cm。周溝なし。重複 H-10・H-15・T-2と重複し、新旧関係はT-2→本遺構→H-10→H-15の順である。出土遺物 総数55点。時期 埋土や出土遺物から9世紀中葉と考えられる。

H-20号住居跡 (Fig.22)

位置 X267、Y143・144グリッド 主軸方向 (N-72°-E) 規模 東西 (3.78)m、南北 (2.16)m、壁現高16.5cm。面積 (11.73)m² 床面 全体的に平坦な床面。竈 西壁中央南寄りに位置する。主軸方向 N-81°-E。全長52cm、最大幅80cm、焚口部幅36cm。周溝なし。重複 H-4・H-17・H-21・H-24・T-3と重複し、新旧関係はH-21→T-3→H-17→H-24→本遺構→H-4の順である。出土遺物 総数59点。時期 埋土や出土遺物から10世紀後葉と考えられる。

H-21号住居跡 (Fig.23・46、PL.7・17)

位置 X 267～269、Y 142～144グリッド 主軸方向 [N - 65° - E] 規模 東西 [6.76]m、南北 [6.94]m、壁現高26.5 cm。面積 [14.95]m² 床面 全体的に平坦な床面。竈 東壁中央南寄りに位置する。主軸方向 (N - 72° - E)。全長 (56)cm、最大幅 (128)cm、焚口部幅 (56)cm。周溝 なし。貯蔵穴 長径76cm、短径72cm、深さ34.1cmの円形。柱穴 P₁: 長径56cm、短径52cm、深さ92.4cmの楕円形。P₂: 長径70cm、短径42cm、深さ65.9cmの楕円形。P₃: 長径80cm、短径62cm、深さ70.5cmの楕円形。P₄: 長径70cm、短径55cm、深さ70cmの円形。ピット P₅: 長径30cm、短径28cm、深さ47.9cmの円形。P₆: 長径40cm、短径32cm、深さ25.5cmの円形。重複 H - 4・H - 8・H - 14・H - 17・H - 18・H - 20・H - 24・T - 3と重複し、新旧関係は本遺構→T - 3→H - 20→H - 24→H - 17→H - 18→H - 8→H - 4の順である。出土遺物 総数780点。そのうち土師坏7点、須恵大甕1点、朝顔形埴輪1点、円筒埴輪1点を図示。時期 埋土や出土遺物から7世紀後葉と考えられる。

H-22号住居跡 (Fig.24・25・46、PL.7・17)

位置 X 266～268、Y 140～142グリッド 主軸方向 [N - 53° - E] 規模 東西 [6.22]m、南北 [6.32]m、壁現高40.5cm。面積 [25.40]m² 床面 全体的に平坦な床面。竈 東壁中央に位置する。主軸方向 N - 31° - W。全長192cm、最大幅245cm、焚口部幅78cm。周溝 西壁・北壁・南壁を巡る。柱穴 P₁: 長径31cm、短径28cm、深さ74.5cmの円形。P₂: 長径37cm、短径35cm、深さ72cmの円形。P₃: 長径48cm、短径48cm、深さ73.5cmの円形。P₄: 長径44cm、短径35cm、深さ75cmの長円形。ピット P₅: 長径25cm、短径25cm、深さ41.5cmの隅丸方形。重複 H - 12・H - 13・H - 14・H - 16・H - 18と重複し、新旧関係はH - 12→H - 13→H - 14→H - 18→H - 16→本遺構の順である。出土遺物 総数409点。そのうち土師坏3点、須恵蓋1点、須恵高环1点を図示。時期 埋土や出土遺物から7世紀前葉～7世紀中葉と考えられる。

H-23号住居跡 (Fig.25・46、PL.7・17)

位置 X 269・270、Y 143・144グリッド 主軸方向 (N - 88° - W) 規模 東西 (2.50)m、南北 (3.58)m、壁現高21cm。面積 (10.59)m² 床面 全体的に平坦な床面。竈 東壁中央北寄りに位置する。主軸方向 (N - 81° - E)。全長 (78)cm、最大幅 (128)cm、焚口部幅 (38)cm。周溝 不明。貯蔵穴 長径54cm、短径50cm、深さ52cmの円形。重複 H - 8と重複し、新旧関係は本遺構→H - 8の順である。出土遺物 総数334点。そのうち須恵坏3点、須恵碗1点、須恵皿1点を図示。時期 埋土や出土遺物から10世紀後葉と考えられる。

H-24号住居跡 (Fig.17・46、PL.7・17)

位置 X 266・267、Y 143～145グリッド 主軸方向 [N - 87° - W] 規模 東西 [5.0]m、南北 [3.64]m、壁現高21cm。面積 [16.29]m² 床面 全体的に平坦な床面。竈 東壁中央南寄りに位置する。主軸方向 N - 90° - E。全長110cm、最大幅224cm、焚口部幅140cm。周溝 不明。ピット P₅: 長径(21.8)cm、短径(21)cm、深さ11cmの円形。P₆: 長径48cm、短径39.5cm、深さ13.5cmの楕円形。重複 H - 3・H - 4・H - 20・H - 21・H - 25と重複し、新旧関係はH - 3→H - 21→H - 25→本遺構→H - 20→H - 4の順である。出土遺物 総数210点。そのうち須恵坏2点、須恵耳皿1点、須恵小型鉢1点、羽釜1点を図示。時期 埋土や出土遺物から10世紀中葉～10世紀後葉と考えられる。

H-25号住居跡 (Fig.17・46、PL.17)

位置 X 268、Y 144・145グリッド 主軸方向 (N - 71° - E) 規模 東西 (4.32)m、南北 (3.72)m、壁現高

H-26号住居跡 (Fig.26・47、PL. 8・18)
位置 X272~274、Y138~140グリッド 主軸方向 N-91°-E 規模 東西5.00m、南北6.35m、壁現高23.0cm。面積 27.57m² 床面 ほぼ平坦だが、概して東半部側に向かい低くなる。竈 南東コーナー部に設置。凝灰岩礫・安山岩礫構築材。主軸方向 N-137°-E。全長150cm、最大幅130cm、燃焼部幅約40cm、焚口部幅65cm。周溝なし。貯蔵穴 南西隅に位置。長径101cm、短径80cm、深さ48cmの楕円形。ピット P₇: 長径54cm、短径50cm、深さ70cmの楕円形。P₈: 長径33cm、短径31cm、深さ22cmの円形。重複 H-50・51・36号住居と重複。いずれよりも本跡が新しい。出土遺物 総数604点。大半の土器類ほか、若干の瓦類出土。小形杯類3点、高台椀1点、羽釜1点など図化。時期 10世紀後半~11世紀前半代。備考 構築材に大形凹石を使用。

H-27号住居跡 (Fig.27・47、PL. 8・18)
位置 X274~276、Y138~140グリッド 主軸方向 N-94°-E 規模 東西5.80m、南北5.50m、壁現高32cm。面積 29.40m² 床面 北壁側の一部を除き、地山堅緻面が広がる。竈 東壁南端寄りに付設。凝灰岩礫を主とする構築材、燃焼部付近に散在。主軸方向 N-97°-E。全長130cm、最大幅85cm、焚口部幅50cm。煙道部幅30cm。周溝 西壁下の一部に出土。最大幅25cm、深さ6cm。貯蔵穴 南西隅に出土。長径95cm、短径90cm、深さ45cm。ピット P₁~P₆が支柱穴、南壁下を除く三壁下のP₇・P₈・P₉は、これに対する支柱穴であろうか。前者は深さ45~50cm前後、後者は25cm前後である。P₉・P₁₀は出入口に関連するか。深さは26~30cm前後を計る。各ピットの形状・規模についてはTab.8 (p.35) 参照。重複なし 出土遺物 竈手前側を軸に、総数165点出土。このうち小形杯3点、形骸化した羽釜1点、鉄製品礫1点を図化。時期 10世紀後半~11世紀前半代。備考 H-26号住居跡と同時期。

H-29号住居跡 (Fig.28・47、PL. 8・18)
位置 X275~277、Y140~141グリッド 主軸方向 N-93°-E 規模 東西4.80m、南北3.80m、壁現高43.5cm。面積 16.40m² 床面 ほぼ平坦。各壁下を除く中央部分に堅緻面。掘り方掘削後、地山ブロック含む褐色土主体による貼床形成。竈 東壁南寄りに付設。壁面は粘土貼りこむ。南半部は搅乱で破壊。主軸方向 N-96°-E 全長(106cm)、最大幅(160cm)。周溝 南壁下に2箇所。出入口関連の落ち込みか。最大幅25cm、深さ6~8cm。貯蔵穴 北東隅部に出土。長径73cm、短径72cm、深さ42cm。床下土坑 P₇・P₈を確認。いずれも底面に地山ブロック含む褐色粘土充填。深さは22~25cm程度確認。重複なし 出土遺物 総数203点。竈手前、北壁下周辺に散在。うち杯1点、高台付鉢1点、羽釜2点を図化。時期 10世紀後半代。

H-30号住居跡 (Fig.28・47、PL. 9・18)
位置 X274・275、Y142・143グリッド 主軸方向 N-93°-E 規模 東西4.20m、南北4.30m、壁現高34.5cm。面積 16.40m² 床面 平坦。地山ブロック・灰白色粘土含む黒褐色土を充填し貼り床形成。南側は堅緻であるが、北壁付近は軟。竈 東壁南寄りに付設。構築材として壁面に粘土・凝灰質砂岩、支脚に安山岩を使用。須恵器坏(挿図No.89)が支脚に被せられた状態で出土。右袖周辺に灰分布。主軸方向N-109°-E 全長69cm、最大幅71cm、焚口部幅45cm。貯蔵穴 北東隅部より検出(P₈)。長径66cm、短径55cm、深さ31cm。

P_e東側にP_rを検出。長径73cm、短径53cm、深さ23.5cm。貯蔵穴の作り替えもしくは増設か。重複なし
出土遺物 総数341点。うち杯2点、羽釜1点、土釜1点、土錘2点を図示。時期 10世紀後半～11世紀前。

H-31号住居跡 (Fig.29・48、PL.9・18)

位置 X274・275、Y141・142グリッド 主軸方向 N-91°-E 規模 東西2.66m、南北3.08m、壁現高50.0cm。面積 7.54m² 床面 平坦。地山ブロックを含む黒褐色土を充填し貼り床形成。全体的に堅緻。
竈 東壁南寄りに付設。構築材として粘土のはか右袖部に凝灰質砂岩の切石使用。主軸方向N-99°-E 全長90cm、最大幅80cm、焚き口部幅40cm。貯蔵穴 北東隅より検出。長径69cm、短径58cm、深さ17.5cm。重複D-38・39と重複し、新旧関係はD-38・39→本遺構の順。
出土遺物 総数157点。うち杯4点、羽釜2点、土釜1点を図示。時期 10世紀後半～11世紀前。

H-32号住居跡 (Fig.29・48、PL.9・18)

位置 X274・275、Y144・145グリッド 主軸方向 N-89°-E 規模 東西3.20m、南北(3.82)m、壁現高41.0cm。面積 (11.35)m² 床面 平坦で全体的に堅緻。地山ブロックを含む暗褐色土を充填し貼り床形成。
竈 東壁に付設。構築材として粘土のはか両袖部に凝灰質砂岩の切石を使用。主軸方向N-98°-E、全長92cm、最大幅83cm、焚き口部幅48cm。貯蔵穴 南西隅より検出。重複 昨年度の調査で検出されたW-2と重複し、新旧関係は本遺構→W-2の順。
出土遺物 総数226点。うち杯1点、内里高台椀1点、灰釉椀3点、小鉢1点、灰釉瓶1点、鉄製紡錘具1点、砥石1点、輪羽口3点を図示。時期 10世紀後半。

H-33号住居跡 (Fig.30・48、PL.9)

位置 X272・273、Y142～144グリッド 主軸方向 N-112°-E 規模 東西4.08m、南北(3.98)m、壁現高36.5cm。面積 (11.67)m² 床面 平坦で全体的に堅緻。
竈 東壁に付設。主軸方向N-108°-E、全長(71)cm、最大幅(73)cm。焚口部は重複するH-34により壊される。構築材として壁面に粘土を使用。竈正面に灰掻き穴(P_e)を検出。長径27cm、短径25cm、深さ20cm。貯蔵穴 検出されず。重複 H-34・45と重複し、新旧関係は本遺構→H-45→H-33の順。
出土遺物 総数238点。うち羽釜1点、銅製品1点を図示。時期 10世紀代。重複するH-34・45より古いが、それほど時期差はないものとみられる。

H-34号住居跡 (Fig.30・48、PL.9・18)

位置 X272・273、Y143・144グリッド 主軸方向 N-100°-E 規模 東西3.25m、南北4.28m、壁現高28.5cm。面積 12.46m² 床面 平坦で全体的に堅緻。地山黄橙色粒を含む暗褐色土を充填し貼り床形成。
竈 東壁南寄りに付設。主軸方向N-103°-E 全長134cm、最大幅117cm、焚き口部幅80cm。煙道部が長く、煙道部長67cm。竈前に広く灰・焼土流出。
貯蔵穴 検出されず。重複 H-33・45、D-10・11と重複し、新旧関係はH-33→H-45→本遺構→D-10・11の順。
出土遺物 総数297点。うち杯1点、灰釉皿1点、羽釜1点、輪羽口1点を図示。時期 10世紀後半～11世紀前。

H-35号住居跡 (Fig.31・48、PL.18)

位置 X271・272、Y141・142グリッド 主軸方向 N-88°-E 規模 東西3.50m、南北4.06m、壁現高34.5cm。面積 13.18m² 床面 平坦で全体的に堅緻。
竈 東壁南寄りに付設。主軸方向N-98°-E、全長106cm、最大幅87cm、焚き口部幅54cm。構築材として壁面・天井部に凝灰質砂岩、支脚に安山岩を使用。右袖前に灰流出。
貯蔵穴 南西隅より検出。長径70cm、短径55cm、深さ39cm。重複 D-8と重複し、新旧関係は

D-8→本造構の順。 出土遺物 総数404点。うち杯2点、皿1点、土釜1点、白玉1点を図示。 時期 10世紀後半～11世紀前。

H-36号住居跡 (Fig.31・49, PL.10・19)

位置 X273・274、Y138・139グリッド 主軸方向 N-91°-E 規模 東西(3.44)m、南北5.60m、壁現高20cm。 面積 (16.24)m² 床面 ほぼ平坦だが南に向かってやや低くなる。 窟 東壁南寄りに付設。主軸方向N-105°-E、全長64cm、最大幅82cm、焚き口部幅48cm。構築材として右袖部に安山岩を使用。 貯蔵穴検出されず。 床下土坑 中央やや南東寄りから検出。長径92cm、短径78cm、深さ10cm。底面に灰白色粘土貼り込み。 重複 H-26と重複し、新旧関係は本造構→H-26の順。 出土遺物 総数98点。うち杯2点、高台碗2点、土釜1点、瓦1点、鉗1点を図示。 時期 10世紀後半～11世紀前。重複するH-26より旧いが、それほど時期差はないものとみられる。

H-37号住居跡 (Fig.32・49, PL.10・19)

位置 X275・276、Y142・144グリッド 主軸方向 N-97°-E 規模 東西3.58m、南北5.75m、壁現高39.0cm。 面積 19.47m² 床面 ほぼ平坦だが北に向かってやや低くなる。地山ブロック・灰白色粘土粒を含む黒褐色土を充填し貼り床形成。 窟 東壁中央(窓1)および南寄り(窓2)に付設。窓1には焼土を含む單一層で人為的に埋められた痕跡が看取できることから、窓1から窓2への作り替えが行われたものとみられる。窓2は両袖部および支脚に安山岩を使用。須恵器坏(挿図No.122)が支脚に被せられた状態で出土。窓1：主軸方向N-106°-E、全長(68)cm、最大幅(78)cm。窓2：主軸方向N-109°-E、全長86cm、最大幅101cm、焚き口部幅49cm。 貯蔵穴 南西隅部より検出(P_s)。長径93cm、短径64cm、深さ33cm。なお、西壁際中央やや南より検出されたP_sは位置的に旧窓(窓1)に対応する貯蔵穴の可能性が高く、P_sからP_vへの作り替えが考えられる。 床下土坑 住居ほぼ中央にP_sを検出。底面から壁面にかけて灰白色粘土貼り込み。 重複 なし 出土遺物 総数519点。うち杯6点、灰釉皿1点、高台碗2点、土釜1点、砥石1点、土鍤1点を図示。 時期 10世紀後半～11世紀前。 備考 窓や貯蔵穴の作り替えが行われている。住居の南側への拡張に伴うものか。

H-38号住居跡 (Fig.33・49, PL.10・19)

位置 X277・278、Y141・142グリッド 主軸方向 N-92°-E 規模 東西(1.19)m、南北[5.24]m、壁現高38.5cm。 面積 (5.35)m² 床面 ほぼ平坦。地山黄褐色土が床面。南側が一部堅緻。 窟 調査区外。 貯蔵穴 検出されず。 重複 O-1と重複し、新旧関係はO-1→H-38の順。 出土遺物 総数36点。うち坏1点、壺2点を図示。 時期 10世紀後半代。

H-40号住居跡 (Fig.33・49・50, PL.11・19)

位置 X270・271、Y142・143グリッド 主軸方向 N-93°-E 規模 東西3.60m、南北5.85m、壁現高31.5m。 面積 19.17m² 床面 ほぼ平坦。一部地山四面にAs-C含黒色土層堆積。中央部に堅緻面確認。 窟 東壁南寄りに付設。主軸方向N-89°-E、全長(82cm)、最大幅85cm、焚き口部幅53cm。袖部・壁面および支脚に安山岩・凝灰質砂岩使用。北隣に礫群を伴う落ち込みを検出。旧窓痕跡か。 貯蔵穴 南西隅部に検出(P_s)。長径93cm、短径83cm、深さ63cm。 ピット 窓左袖前に灰原(P_s)を検出。円形を呈し、長軸38cm、短軸34cm、深さ20cm。掘り方面でP_s～P_vを確認。P_sは深く、覆土中にHr-FA・As-C含黒色土がブロック状に混入、貯蔵穴機能も想定される。P_s：円形、長軸73cm、短軸40cm、深さ43cm。P_v：梢円形、長軸78cm、短軸69cm、深さ

25cm。P₉: 楕円形、長軸56cm、短軸44cm、深さ18cm。重複 南側でH-42号住居跡と重複、本跡が新。出土遺物 総数387点。うち杯2点、高台椀1点、羽釜のほか、小形砥石・棒状鉄製品などが出土。時期 10世紀中～後半代。

H-41号住居跡 (Fig.34・50、PL.10・19・20)

位置 X 277・278、Y 139・140グリッド 主軸方向 N-80°-E 規模 東西(3.0m)、南北3.20m、壁現高40.0cm。東壁側は調査区外。面積 (8.05m²) 床面 平坦。竈手前付近に堅緻面。竈 袖石および焚き口部を検出。東壁南寄りに付設されるものと思われる。焚口部付近に灰分布、構築材凝灰岩疊出土。規模ほか詳細不明。貯蔵穴 未検出。ピット 竈右袖石より灰原(P₆)を検出。重複 西壁下に土坑状遺構検出。底面で方形状をなし、長軸168cm、短軸158cm、深さ13cm。土層から土坑状遺構が新しい。出土遺物 総数319点。図化したものは、小形を含む杯11点、高台椀5点、高台皿1点、灰釉陶器椀1点、変形土器1点。土坑状内で小形杯6点(挿図No.139～144)が重なって出土。時期 10世紀後半～11世紀前半代。備考 住居跡外で綠釉片出土。

H-42号住居跡 (Fig.34・50、PL.11・20)

位置 X 270・271、Y 143・144グリッド 主軸方向 N-92°-E 規模 東西3.20m、南北4.35m、壁現高33.5cm。面積 (8.05m²) 床面 掘り方は、暗褐色土層地山面を掘削、黒褐色土(As-C含)・總社砂層ブロック混暗褐色土で貼床面形成。ほぼ床面全体に堅緻面確認。竈 東壁南寄りに付設。主軸方向N-100°-E。内面で構築材疊3点、手前付近で大形疊数点出土。出土。全長85cm、最大幅83cm、煙道部幅46cm。貯蔵穴 南西隅部に位置。長径71cm、短径65cm、深さ50cm。ピット 未検出 床下土坑 南壁下中央部に出土。長径(82cm)、短径72cm、深さ21cm。底面～壁面に黄橙色粘土を貼付している。重複 H-40号住居跡より旧い。出土遺物 総数302点。竈付近周辺に散在。このうち杯1点、羽釜1点を図化。時期 10世紀後半代。

H-43号住居跡 (Fig.35・51、PL.11・20)

位置 X 269～271、Y 141・142グリッド 主軸方向 N-73°-E 規模 東西5.40m、南北3.50m、壁現高46cm。東西に長い長方形の形状。面積 17.16m² 床面 平坦、堅緻な床面。掘り方は地山掘削後、黄色粘土ブロック含暗褐色粘土で貼床形成。竈 東壁中央部に付設。袖部粘土主体。主軸方向N-65°-E 全長173cm、最大幅93cm、焚口部幅45cm、緩い長円形状の浅い落ち込み。周辺に灰・焼土分布。貯蔵穴 南東隅部寄りに位置。長径85cm、短径65cm、深さ16cm。ピット 未検出 重複 なし 出土遺物 総数609点。床面全体に疊・土器群・小形砥石群・鉄滓・輪羽口片などが出土。特に砥石類は、いずれも製品を作る際の調整砥石の一群である。この他、円板状土器製品がある。土器群は土師器杯・須恵器短頸壺・平瓶・大甕などが出土。時期 7世紀後半～末頃。

H-44号住居跡 (Fig.35・51、PL.11・21)

位置 X 270、Y 140・141グリッド 主軸方向 N-86°-E 規模 東西3.10m、南北3.73m、壁現高45.5cm、ほぼ方形。面積 10.75m² 床面 平坦、竈手前付近を中心に堅緻面。竈 東壁南寄りに付設。袖部付近に構築材の疊類、煙道部側に丸瓦等が出土。また両袖部に疊抜き取り痕、一部壁面に構築材粘土が確認された。主軸方向N-107°-E 全長135cm、最大幅75cm、焚口部幅約34cm。貯蔵穴 南西隅部に位置。長径71cm、短径65cm、深さ28cm。ピット P₆は灰原状。長径53cm、短径49cm、深さ8cm。重複 北壁側でD-9・14号土坑と重複。本跡が切られる。出土遺物 総数413点。うち竈内の杯1点、高台椀1点、羽釜1点、壺形土器1点、ほか鉄製品刀子柄部1点を図化。時期 10世紀末 備考 竈支脚に安山岩疊使用。

H-45号住居跡 (Fig.30・51, PL.9)

位置 X272、Y143・144グリッド 主軸方向 N-98°-E 規模 東西(2.60m)、南北3.70m、壁現高20.0cm。面積 (8.02m²) 床面 ほぼ平坦。西壁側が一部擾乱状の掘り込み。部分的に貼床を形成する黄色土分布を確認。竈 重複するH-10内に構築材とみられる礫材数点出土、東壁南寄りに位置するとみられる。詳細は不明。貯蔵穴 南西隅部に位置。長径66cm、短径60cm、深さ45cm。 ピット 未検出 重複 H-34号住居跡・D-10号土坑・D-11号土坑と重複。そのいずれよりも本跡が古い。 出土遺物 総数50点。床面で内黒土器高台甕1点、土師器甕1点、羽釜片1点、瓦転用円板状製品1点等のはか、貯蔵穴内より6面使用の大形紙石1点が出土。

時期 10世紀後半代 備考 重複するH-34号住居跡との時間差が短く、建て替えの可能性も考えられる。

H-46号住居跡 (Fig.36・52, PL.12・21)

位置 X269・270、Y138・139グリッド 主軸方向 N-95°-E 規模 東西3.40m、南北2.93m、壁現高29.5cm。形状は方形状。面積 9.61m² 床面 ほぼ平坦。中央部付近は硬く縮まる堅織面。竈 東壁南寄りに付設。焚口部付近は、構築材礫はか土器片等が出土。主軸方向N-113°-E。全長118cm、最大幅72cm、焚口部幅約60cm。貯蔵穴 未検出 ピット 南壁下中程にP_rを確認。長径47cm、短径45cm、深さ10cm。 重複 北西辺部でH-47号住居跡、北東隅でD-16号土坑と重複。新旧は各造構より本跡が古い。 出土遺物 総数88点。うち國化した遺物は、須恵器杯2点、羽釜2点、盤状鉄製品、鎌2点である。 時期 10世紀後半代。

H-47号住居跡 (Fig.36・52, PL.12)

位置 X269・270、Y138・139グリッド 主軸方向 N-88°-E 規模 東西(3.42m)、(南北3.99m)、壁現高25cm。北壁東側は調査区外。やや不整台形状のプラン。面積 11.23m² 床面 ほぼ平坦。中央部分は地山黄橙色ブロック混土の貼床形成、硬く堅織面形成。竈 東壁南寄りに付設。主軸方向 N-101°-E 貯蔵穴・ピット 未検出 重複 北西壁側でH-48号住居跡と重複。本跡が切られる。またH-46号住居跡との関係は前述した通り。 出土遺物 総数115点。窓内および竈手前付近を中心に散在する。このうち須恵器小形杯1点、灰釉陶器碗1点、土釜1点を國化。 時期 10世紀後半代。

H-48号住居跡 (Fig.36・52, PL.12・21)

位置 X269、Y138グリッド 主軸方向 N-72°-E 規模 住居跡北側部分の大半は調査区外。東西(2.77m)、南北(0.96m)、壁現高30cm。面積 1.15m² 床面 検出部分ではほぼ平坦。貯蔵穴 南西隅部に位置。長径73cm、短径60cm、深さ22.5cm。 ピット 未検出 重複 南壁側でH-47号住居跡と重複。新旧は上層からみて、本跡が新しい。 出土遺物 総数43点。貯蔵穴付近にまとまって出土。このうち高台甕2点、土釜状の甕1点を國化した。 時期 10世紀後半代

H-49号住居跡 (Fig.37, PL.12)

位置 X273・274、Y138グリッド 主軸方向 N-90°-E 規模 東半部の大半は調査区外で、詳細は不明。東西(4.17m)、南北不明、壁現高35cm。面積 不明 床面 検出部分から見る限り、ほぼ平坦面形成。貯蔵穴・ピット 未検出 重複 南壁やや西寄りで、梢円形状の擾乱坑に切られる。 出土遺物 総数25点。南東隅部付近で若干の土器片、礫などが出土。小片のため國化するには至らなかった。 時期 不明

H-50号住居跡 (Fig.37, PL.8)

位置 X272・273、Y139・140グリッド 主軸方向 N-112°-E 規模 重複するH-26号住居跡に大半を切

り取られ、詳細は不明。壁現高30cm。面積 不明 床面 検出面では平坦。貯蔵穴・ピット 未検出 重複 H-26・51号住居跡と重複。その新旧関係は、H-50→H-51→H-26の順で新しい。出土遺物 遺物は未検出。

H-51号住居跡 (Fig.37・52, PL.8・21)

位置 X272, Y138・139グリッド 主軸方向 N-12°-E 規模 東西(2.14m)、南北5.30m、壁現高30cm。当初西半部を確認、東半部の大半はH-26号住居跡に切られていると判断した。そのH-26号住居跡床面を精査したところ、本跡の竈痕を確認するに至った。面積(9.18m²) 床面 ほぼ平坦、硬く締まる。竈 構築面上に灰・焼土分布のみ確認。およそその範囲は東西1.3m、南北1.5mである。貯蔵穴 南西隅部に位置。また、位置的に本遺跡の検出例でもっとも多かった南西隅部分にはPがある。規模・深さなどから判断して同機能とも考えられる。P_s-長径85cm、短径75cm、深さ26cm。P_t-長径80cm、短径78cm、深さ40cm。床下土坑 住居中央やや南より検出。底面に白色粘土貼付。長径80cm、短径70cm、深さ23cm。ピット P_s・P₁₀・P₁₁を検出。規模は計測表に示したとおり。重複 H-26・51号住居跡との新旧は、土層断面からH-50→H-51→H-26の順である。出土遺物 総数111点。竈周辺のはか検出面全体に散在して出土。北西コーナー付近で小形高台椀2点(挿国No.186・187)が重なった状態で出土。小形高台椀2点のはか、小形杯2点、高台椀1点を図化。

時期 10世紀末～11世紀初頭頃。

H-53号住居跡 (Fig.38)

位置 X277・278, Y138グリッド 主軸方向 (N-89°-E) 規模 東西(1.46)m、南北(1.31)m、壁現高18cm。面積(6.19)m² 床面 全体的に平坦な床面。竈 不明。周溝 なし。重複 なし。出土遺物 総数13点。時期 不明

H-54号住居跡 (Fig.38・52, PL.21)

位置 X270・271, Y138グリッド 主軸方向 (N-70°-E) 規模 東西(5.28)m、南北(2.1)m、壁現高45.5cm。面積(12.99)m² 床面 全体的に平坦な床面。南西隅から多量の石が出土。竈 不明。周溝 不明。重複 なし。出土遺物 総数61点。そのうち土師壺1点、須恵壺1点、須恵甕1点を図示。時期 埋土や出土遺物から7世紀後葉と考えられる。

(2) 壺穴状遺構

T-1号壺穴状遺構 (Fig.38, PL.14)

位置 X264・265, Y143・144グリッド 主軸方向 N-71°-E 規模 東西4.23m、南北3.72m、壁現高20cm 面積 14.42m² 床面 全体的に平坦な床面。重複 D-24と重複し、新旧関係は本遺構→D-24の順である。出土遺物 総数51点。時期 不明。

T-2号壺穴状遺構 (Fig.22・52, PL.14・21)

位置 X268・269, Y140・141グリッド 主軸方向 (N-76°-E) 規模 東西(3.94)m、南北(5.30)m、壁現高32.5cm。面積(14.39)m² 床面 全体的に平坦な床面。重複 H-10・H-11・H-15・H-19と重複し、新旧関係は本遺構→H-11→H-19→H-10→H-15の順である。出土遺物 総数153点。そのうち土師壺1点を図示。時期 埋土や出土遺物から7世紀後葉と考えられる。

T-3号竪穴状遺構 (Fig.22・52、PL.14・21)

位置 X266・267、Y143グリッド 主軸方向 (N-87°-E) 規模 東西 (3.96)m、南北 (2.18)m、壁現高 15.5cm。面積 (8.98)m² 床面 全体的に平坦な床面。重複 H-20・H-21と重複し、新旧関係は H-21 → H-20 → 本遺構の順である。出土遺物 総数43点。そのうち須恵坏3点を図示。時期 埋土や出土遺物から10世紀中葉と考えられる。

T-4号竪穴状遺構 (Fig.38・53、PL.14・22)

位置 X268、Y141グリッド 主軸方向 (N-81°-W) 規模 東西 (2.26)m、南北 (1.82)m、壁現高 21.5cm。面積 (7.17)m² 床面 全体的に平坦な床面。ピット P₇: 長径66cm、短径54cm、深さ22.5cmの円形。P₈: 長径28cm、短径25cm、深さ10.4cmの円形。P₉: 長径42cm、短径32cm、深さ23cmの梢円形。重複 H-14と重複し、新旧関係は本遺構→H-14の順である。出土遺物 総数51点。そのうち須恵坏2点を図示。時期 埋土や出土遺物から8世紀後葉と考えられる。

T-5号竪穴状遺構 (Fig.38・53、PL.22)

位置 X265、Y142・143グリッド 床面 堅地面のみ検出。ピット P₆: 長径59cm、短径59cm、深さ26cmの円形。上面に多量の灰を確認したため、灰落とし穴と考えられる。重複なし。出土遺物 総数24点。そのうち須恵坏1点、須恵碗1点を図示。時期 埋土や出土遺物から10世紀後葉と考えられる。

(3) 挖立柱建物跡

B-1号掘立柱建物跡 (Fig.39・40・52、PL.13・21)

位置 X260~267、Y138~143グリッド 主軸方向 N-62°-W 規模・形状 柱行10間、梁行3間。東西に長い側柱建物。柱行総長28.1m、梁行総長5.9mを測る。柱穴 掘方の平面プランは長方形を呈すものが多い。規模については、長軸91~142cm、短軸70~102cmで、確認面からの深さは18.5~74.5cmである（各柱穴の形状・規模の詳細については、Fig.40参照）。柱穴間隔は、柱行2.45~3.45m、梁行1.70~2.20mである。P₄・P₅・P₇・P₉～P₁₃、P₁₅～P₁₆、P₂₀では柱痕と柱掘り方埋土が明瞭に識別できた。柱痕の規模は、径30cmほどである。柱痕の埋土は、褐色味が強く粒子の細かい粘質土で、練まりがなくふかふかしている。また、柱痕底部には非常に堅く練まった層があり、柱の圧痕（あたり）と思われる。柱掘り方埋土は、2~5層程度に分層でき、暗褐色土の中に地山の黒色土や黄褐色土のブロックを含む。P₁₃では、土質の異なる土を版築状に埋めている状況が断ち割りで確認できた（口絵4）。重複 J-1、H-7と重複し、新旧関係は J-1 → 本遺構 → H-7 の順である。出土遺物 総数248点。そのうち土師器坏3点を図示。いずれも、柱掘り方埋土より出土した遺物である。時期 出土遺物や主軸方向から7世紀中葉頃と考えられる。建替えはない。

(4) 溝跡

W-1号溝跡 (Fig.41・53、PL.14・22)

位置 X262~269、Y148・149グリッド 主軸方向 N-87°-W 長さ 28.7m 最大幅 上幅5.3m、下幅2.8m 深さ 120cm 形状等 台形 重複なし。出土遺物 総数463点。そのうち土師器坏1点、須恵坏2点、須恵碗3点、須恵壺1点を図示。時期 埋土や出土遺物から古代と考えられる。

W-2号溝跡 (Fig.41)

位置 X262~269、Y145~147グリッド 主軸方向 (N-85°-W) 長さ 27.5m 最大幅 上幅1.38m、下幅

0.45m 深さ 138cm 形状等 台形 重複 略などが搅乱により削平されている。 出土遺物 総数26点。 時期 埋土や出土遺物から中世と考えられる。

(5) 土坑 (Fig.42・43・53, PL.12・22)

計33基を検出。うちD-5・6・12は、埋土から As-B 低下以降で中世以降の土坑である。その他は、すべて古墳～奈良・平安時代にかけての土坑である。形状・規模等については、Tab.10 土坑計測表(P.36)を参照のこと。

なお、D-8の管玉1点、D-9の須恵坏1点、D-14の須恵坏1点、D-21土坑の須恵椀1点、D-22の須恵坏1点、D-24の須恵坏1点・須恵椀2点、D-40の須恵坏1点・須恵椀1点、D-42の須恵坏1点を図示した。

(6) グリッド等出土遺物 (Fig.53, PL.22)

総数3520点の土器器・須恵器片等が出土した。そのうち須恵椀1点、壺1点、砾石1点を図示した。

Tab. 2 繩文時代堅穴住居跡計測表

遺構名	位 置	規 標			面積 (m ²)	主軸方向	部		主な出土遺物		
		東西 (m)	南北 (m)	壁厚高 (cm)			位 置	構造材	土 器	石 器	その他の
J - 2	X264~265 Y140~141	[5.90]	[6.28]	-	[2229]	[N-60°-E]	中央	安山岩	深鉢	石器	
J - 4	X270~272 Y143~145	5.48	[5.56]	52	[19.28]	N-55°-E	中央	安山岩	深鉢、浅鉢、石器、ビエ 皿、壺、石核	耳飾、土偶 ス、石核	耳飾、土偶 脚、勾玉

Tab. 3 繩文時代土器觀察表

番号	出土遺物 場所	器種名	分類	①胎土 ②焼成 ③色調 ④道存度	特 徴	登錄番号	備考	
1	J - 2 床	床	深鉢	Ⅲ-2	①繩粒。石英を微量含む。②良好。③にい・黄褐色。④口縁部破片	波状口縁波頂部。入組文。沈澱区画内に単節R Lを光埴。	18	
2	J - 2 床	床	深鉢	Ⅲ-3a	①繩粒。石英、長石を微量含む。②良好。③にい・黄褐色。④口縁部破片	無文 折返し口縁	28	
3	J - 4 床	小型台付 土器	深鉢	Ⅳ-1	①繩粒。石英、長石を微量含む。②良好。③(3)は完形	台付小型土器。杏印あるいは手彫形土器。稍製。単節R Lを壇に光埴。面部に透し孔。	636	
4	J - 4 覆土	覆土	小型浅鉢	Ⅳ-1	①繩粒で微密。②良好。③にい・黄褐色。④胴部約1/2	稍製。入組三叉文 非常に細かい無施しの磨消纏文。	715ほか	
5	J - 4 床	床	深鉢	Ⅳ-1	①繩粒で微密。碎石、長石を微量含む。②良好。③(3)は崩壊	稍製。口縁下と体部、底部壇に平行沈澱	639	
6	J - 4 覆土	覆土	小型浅鉢	Ⅳ-1	①繩粒で微密。②良好。③にい・黄褐色。④(3)は空窓	稍製。	503	
7	J - 4 覆土	覆土	深鉢	Ⅲ-2	①やや繩粒。長石を含む。②やや良好。③にい・黄褐色。④口縁部破片	波状口縁波頂部。波頂下の三角区画に単節R Lを光埴。	X271, Y144 一括	
8	J - 4 覆土	覆土	深鉢	Ⅳ-2	①繩粒。②良好。③黒褐色。④口縁部削除	平縁に小突起。口唇にキザミ。頭部並行沈殿間に斜窓。肩部に入組み三叉文。単節R Lを光埴。	390ほか	
9	J - 4 覆土	覆土	深鉢?	Ⅲ-2	①繩粒。碎石、長石を微量含む。②良好。③(3)は崩壊	入組帶状文。単節R Lを光埴。	470ほか	
10	J - 4 覆土	覆土	壺?	Ⅳ-2	①繩粒。②良好。③(3)は空窓	入組文? 单節R Lの磨消纏文。	28	
11	J - 4 覆土	覆土	深鉢?	Ⅲ-2	①繩粒。②良好。③灰黃	入組み三叉文が雲形の磨消纏文。細かい単節R L	236	
12	J - 4 覆土	覆土	不明	Ⅲ-2	①繩粒。②良好。③灰黃	沈澱による入組文か?	206	
13	J - 4 床	床?	壺?	Ⅳ-2	①やや繩粒。雲母、長石を微量含む。②良好。③(3)は崩壊	地文単節R Lに平行沈殿と斜窓	582	
14	J - 4 覆土	覆土	小型深鉢	Ⅳ-2	①繩粒で微密。②良好。③黒褐色。④口縁部破片	稍製。口縁下に平行沈殿。口縁に小突起。4単節になるか。地文に単節R Lの結晶纏文。	4ほか	
15	J - 4 覆土	覆土	小型深鉢	Ⅳ-2	同上	17と同一側面	169ほか	
16	J - 4 覆土	覆土	浅鉢	Ⅳ-1	①繩粒で微密。②良好。③黒褐色。④口縁部削除	稍製。非常に細かい単節R Lの磨消纏文。	184	
17	J - 4 覆土	覆土	深鉢?	Ⅳ-2	①やや繩粒。砂粒を多く含む。②良好。③(3)は崩壊	平行沈殿を基調とし、単節R Lの磨消纏文を採用。	159ほか	
18	J - 4 覆土下層	覆土下層	深鉢	Ⅲ-3b	①やや繩粒。砂粒を多く含む。②良好。③(3)は崩壊	地文に単節R L。上端に横位沈澱	5ほか	
19	J - 4 覆土下層	覆土下層	深鉢	Ⅲ-3b	①やや繩粒。②やや良好。③(3)は黄褐色	口縁上に纏文全体を押しつけてキザミを描く。地文に単節R L	413ほか	
20	J - 4 床	床	深鉢	Ⅲ-3a	①やや繩粒。長石を含む。②やや良好。③(3)は崩壊	新文 折返し口縁部に纏文ナゲの調整痕が残る。	519ほか	
21	J - 4 床	床	深鉢	Ⅲ-3a	①やや繩粒。②やや良好。③にい・黄褐色。④口縁・側面部削除	新文 極似折返し口縁 口縁外面に摺位圧痕。内部に折り返し口縁の接合板が残る。	661ほか	
22	J - 4 覆土	覆土	深鉢	Ⅲ-3a	①やや繩粒。②やや良好。③にい・黄褐色	無文 折返し口縁	103ほか	
23	J - 4 覆土	覆土	深鉢	Ⅲ-3a	①やや繩粒。長石を微量含む。②良好。③にい・黄褐色。④口縁・側面部削除	無文 二段の擬似折返し口縁。脇部に纏文ナゲの調整痕が残る。	481ほか	
24	J - 4 覆土	覆土	深鉢	Ⅲ-3a	①繩粒。②良好。③黒褐色。④口縁部破片	無文 二段以上の擬似折返し口縁。口縁外縁に斜窓。	352ほか	
25	J - 4 床	床	深鉢	Ⅲ-3a	①繩粒。②良好。③黒褐色。④口縁部削除	無文 一部折返し口縁 折り返し口縁部は瓶やかな形状を呈す。	583ほか	
26	J - 4 覆土下層	覆土下層	深鉢	Ⅲ-3a	①繩粒。長石・石英を微量含む。②良好。③にい・赤褐色	無文 口唇に木片等の押圧による刻み。	707ほか	
27	J - 4 覆土	覆土	深鉢	Ⅲ-3a	①繩粒。②良好。③にい・赤褐色	無文 単純口縁	36ほか	
28	J - 4 覆土下層	覆土下層	深鉢	Ⅲ-3a	①繩粒。②良好。③黒褐色。④口縁・側面部削除	無文 角頭状の単純口縁	534ほか	
29	J - 4 覆土下層	覆土下層	深鉢	Ⅲ-3a	①やや繩粒。砂をや多く含む。②良好。③(3)は崩壊	無文 単純口縁	492ほか	
30	J - 4 床	床	深鉢	Ⅲ-3a	①やや繩粒。砂を多く含む。②良好。③にい・黄褐色	無文 角頭状の単純口縁	218ほか	
31	J - 4 床	床	深鉢小壺	Ⅲ-3a	①やや繩粒。砂を多く含む。②良好。③にい・黒褐色	無文 頭部がくびれる。	646ほか	

番号	出土遺物 場所	器種名	分類	土胎土 ②焼成 ③色調 ④過存度	特徴	登録番号	備考	
32	J - 4 覆土	深鉢	III - 3a	①粗粒。鉢を多く含む。 ②良好。	無文 制部に縦條ナメの調整痕。	8 ほか		
33	J - 4 覆土	深鉢	III - 3a	①粗粒。鉢を多く含む。 ②良好。	無文 制部に縦條ナメの調整痕。	563 ほか		
34	J - 4 覆土	深鉢	III - 3a	①やや粗粒。 ②良好。	無文 底部に木葉痕	70 ほか		
35	J - 4 覆土	深鉢下盤	深鉢	III - 3a	①粗粒。鉢を多く含む。 ②良好。	無文 底部厚く、やや外に張る。	777	
36	J - 4 床	深鉢	III - 3a	①やや粗粒。 ②良好。	無文 底部やや外に張る。	297		
37	J - 4 覆土	浅鉢?	IV - 1	①粗粒。 ②良好。 ③黒褐色。	精製? 内面に緻密な粘土	452		
38	J - 4 覆土	皿か浅鉢	IV - 1	①粗粒。 やや砂を含む。 ②良好。	精製? 先底浅鉢の底部	431		
39	J - 4 覆土	盃?	V	①粗粒。 やや砂を含む。 ②良好。	沈親区画内に付加柔L R + L ? を充填	175		
40	J - 4 覆土	弦生窓	VI	①粗粒。 ②良好。 ③にぶい黄褐色。	口唇に単脚R L。口唇下辺に幅広の棒状凹溝で頭部文帯を区画。縦條条幅の上に凹溝で方形文様を施す。	185 ほか		
41	J - 4 覆土	不明	VII	①粗粒。 ②やや良好。	標識文。 弦生後期か?	162		
42	J - 4 覆土	不明	VII	①にぶい黄褐色。 ②粗粒。	標識文。 弦生後期か?	732		
43	J - 4 床	不明	VII	①粗粒。 ②やや良好。	標識文。 弦生後期か?	403		
44	X268 Y141	深鉢	I - 1	①粗粒。 石片、石灰を多く含む。 ②やや不良。 ③にぶい黄褐色。	横位沈親による口縁部無文帯と想する沈親。 L R 横位。 縦條による羽状纖維。	J - 3 162		
45	表土	深鉢	I - 1	①やや粗粒。 ②良好。 ③にぶい黄褐色。	横位沈親による口縁部無文帯。 制部には想する丸彫。 単脚R L 施文。	表探		
46	X269 Y141	深鉢	I - 1	①やや粗粒。 ②やや良好。 ③黄褐色。	口縁部無文帯に単脚R L を縱位、 俄位に施文し羽状に。 横位円形の無文帯。	J - 3 197		
47	X269 Y142	深鉢	I - 1	①やや粗粒。 ②やや良好。 ③黄褐色。	口縁部に三角を呈する棒円形区画に単脚R L を充填。	J - 36		
48	表土	深鉢	I - 1	①やや粗粒。 ②やや良好。 ③黒褐色。	口縁下から縱位棒円形区画に単脚R L を充填。 織目上部無文。	表探		
49	T - 2 覆土	深鉢	I - 1	①やや粗粒。 ②やや良好。 ③黄褐色。	口縁部無文帯を陰帶で作り出す。 制部は無文の縦條円形区画。 地文單脚R L。	75		
50	X268 Y140	深鉢	I - 1	①やや粗粒。 ②やや良好。 ③黄褐色。	口縁部無文帯を陰帶で作り出す。 制部は沈親が直下で縦区画。 地文單脚R L。	X268, Y140 括		
51	X269 Y141	深鉢	I - 1	①やや粗粒。 ②やや良好。 ③黄褐色。	口縁部のやや肥厚で無文帯となる。 織手狀沈親が直下で縦に区画。 地文単脚R L。	J - 3 216		
52	X269 Y141	深鉢	I - 1	①やや粗粒。 ②やや良好。	横位棒円形区画内を単脚R L で充填。	J - 3 258		
53	X270 Y143	深鉢	I - 1	①やや粗粒。 ②やや良好。 ③黄褐色。	横位円形区画を基調とし区画内を単脚R L で充填。	J - 1 2		
54	H - 47 覆土	深鉢	I - 1	①やや粗粒。 ②やや不良。	底部。 想する陰帶の下端が残る。	覆土一括		
55	表土	深鉢	I - 1	①やや粗粒。 鉢を多めに含む。	横状把手	表土		
56	T - 2 覆土	深鉢	I - 1	①やや粗粒。 ②やや良好。	把手先下端から鷹爪把手が付くか。	70		
57	H - 44 覆土	深鉢	I - 2	①やや粗粒。 ②やや良好。	圓筒状の口縁突起。	覆土一括		
58	H - 47 覆土	深鉢	II - 1	①粗粒で微細。 微量の鉢石を含む。	口縁部半周のある微細起線。 制上部横位。 斜位の沈親による菱形、 三角のモチーフ。 細かな单脚R L を削消しにより充填。	覆土一括		
59	H - 46 覆土	深鉢	II - 1	同上。	58と同一個体。	覆土一括		
60	X268 Y138	深鉢	II - 1	①粗粒で微細。 微量の鉢石を含む。	横位、 斜位の沈親による菱形、 三角のモチーフ。	X268, Y138 括		
61	D - 12 覆土	深鉢	II - 1	①粗粒。 微量の鉢石を含む。	横位、 斜位の沈親による菱形、 三角のモチーフ。	覆土一括		
62	H - 4 覆土	深鉢?	II - 1	①粗粒。 微量の鉢石を含む。	口縁下から半脚R L が施文。 口唇は内側にわざかに屈曲する。	覆土一括		
63	X275 Y144	深鉢?	II - 2	①やや良好。 ③にぶい黄褐色。	口縁部半周のある微細起線。 制上部横位。 斜位の沈親による菱形、 三角のモチーフ。	X275, Y144 括		
64	X275 Y144	深鉢?	II - 2	①やや良好。 ③黄褐色。	地文單脚R L 施文に横走沈親と弧状の沈親。	X275, Y144 括		
65	H - 4 覆土	深鉢	II - 1	①やや粗粒。 ②やや良好。	底部斜面直角。	120		
66	H - 43 覆土	深鉢	II - 1	①やや粗粒。 ②やや良好。	底部斜面直角。	覆土一括		
67	表土	台付土器	II - 2	①やや粗粒。 微量の長石を含む。	台付直の陰帶。 沈親区画内は単脚R L で充填。	表探		
68	J - 3	浅鉢?	II - 2	①粗粒。 ②良好。	口縁部無文帯は平行沈親を基調とし、 制部無文帯は曲線を基調とする。 単脚R L を削消しで充填。	J - 3 65		

番号	出土遺物 層		器種名	分類	丁胎土 ②焼成 ③色調 ④遺存度	特 徴	登録番号	備考
69	H-34 覆土	覆土	浅跡?	II - 2	①細粒。微量の長石を含む。 ②良い。 ③に古い褐色。	手縫に小突起。口縫下端部は平行沈縫を施調とし、縫位の弧線が分断。平脚L Rの崩落	覆土一括	
70	T - 4 覆土	覆土	深跡	II - 2	①細粒。少量の砂を含む。 ②良好。	口縫下端部破片		
71	X209 Y141		深跡	II - 2	①細粒。少量の砂を含む。 ②良好。	口縫下端部破片		
72	表土		深跡	II - 2	①細粒。微量の長石、長石を含む。 ②や良好。	口縫下端部破片		表探
73	H-14 覆土	覆土	深跡	II - 2	①細粒。 ②良好。	口縫下端部-底端部破片		
74	H-44 覆土	覆土	浅跡?	II - 2	①や細粒。 ②やや良好。	口縫下端部破片		
75	H-22 覆土	覆土	浅跡?	III - 1.5	①や細粒。 ②やや良好。	口縫下端部破片		
76	表土		深跡	III - 2	①やや細粒。微量の輝石、長石を含む。 ②良好。	底状口縫底部。波浪下に貼付文		表探
77	H-43 覆土	覆土	深跡	III - 2	①やや細粒。少量の輝石、長石を含む。 ②良好。	底状口縫底部。波浪下に貼付文		覆土一括
78	H-14 覆土	覆土	深跡	III - 2	①やや細粒。少量の輝石、長石を含む。 ②良好。	底状口縫底部。波浪下に貼付文		
79	H-22 覆土	覆土	深跡	III - 2	①細粒。 ②良好。	口縫下端部破片		
80	X270 Y142		深跡	III - 2	①細粒。少量の砂を含む。 ②良好。	口縫下端部-底端部		
81	J - 3		深跡	III - 2	①細粒。少量の砂を含む。 ②良好。	口縫下端部破片		X270, Y142 一括
82	表土		深跡	III - 2	①細粒。少量の砂を含む。 ②良好。	口縫下端部-底端部破片		表土
83	H-43 覆土	覆土	深跡	III - 2	①細粒。少量の砂を含む。 ②良好。	口縫下端部破片		表土一括
84	J - 1		深跡	III - 2	①細粒。微量の長石を含む。 ②良好。	口縫下端部破片		J - 1 193
85	J - 1		深跡	III - 2	①やや粗粒。微量の小礫を含む。 ②良好。	口縫下端部破片		J - 1 145
86	表土		深跡	III - 2	①やや粗粒。微量の長石を含む。 ②良好。	口縫下端部破片		表土
87	H - 9 覆土	覆土	深跡	III - 2	①細粒。 ②良好。	口縫下端部破片		
88	J - 1		深跡	III - 1	①細粒。微量の長石を含む。 ②良好。	口縫下端部破片		J - 1 37
89	J - 1		深跡	III - 1	①細粒。微量の輝石を含む。 ②良好。	口縫下端部破片		J - 1 94
90	表土		広口底?	N' - 2	①細粒。長石、石英を含む。 ②良好。	口縫下端部-底端部破片		
91	J - 1		広口底?	N' - 2	①細粒。長石、石英を含む。 ②良好。	口縫下端部-底端部破片		J - 1 9
92	表土		広口底?	N' - 2	①細粒。長石、砂鉄を含む。 ②やや良好。	口縫下端部破片		
93	J - 1		深跡?	N' - 2	①やや細粒。微量の砂鉄を含む。 ②良好。	口縫下端部破片		J - 1 152
94	表土		底?	N' - 2	①やや粗粒。微量の長石、砂鉄を含む。 ②良好。	口縫下端部破片		
95	H-32 覆土	覆土	不明	N' - 2	①やや細粒。微量の砂鉄を含む。 ②良好。	口縫下端部破片		表土一括
96	H-30 覆土	覆土	浅跡	N' - 1	①細粒で緻密。 ②良好。	口縫下端部破片		
97	表土		浅跡	N' - 1	①細粒。微量の長石を含む。 ②良好。	口縫下端部破片		表土
98	T - 1 覆土	覆土	浅跡	N' - 1	①細粒。微量の長石、石英を含む。 ②良好。	口縫下端部破片		
99	H-22 覆土	覆土	浅跡	N' - 1	①やや細粒。少量の砂鉄を含む。 ②良好。	口縫下端部破片		
100	表土		浅跡	N' - 1	①細粒。微量の長石を含む。 ②良好。	口縫下端部破片		表探
101	表土		深跡?	N' - 2	①やや粗粒。 ②良好。	口縫下端部破片		
102	B - 1 P5覆土	P5覆土	底?	N' - 2	①細粒。少量の長石、輝石を含む。 ②良好。	口縫下端部破片		P5 覆土
103	H-13 覆土	覆土	底?	N' - 1	①細粒。少量の長石を含む。 ②良好。	口縫下端部破片		
104	H - 4 覆土	覆土	浅跡?	N' - 1	①細粒で緻密。 ②良好。	口縫下端部破片		
105	J - 3		深跡?	N' - 2	①やや細粒。長石を含む。 ②良好。	口縫下端部破片		J - 3 69
106	表土		深跡	III - 3a	①やや粗粒。長石を含む。 ②良好。	口縫下端部破片		表探
107	H - 3 覆土	覆土	深跡	III - 3a	①細粒。微量の長石を含む。 ②良好。	口縫下端部破片		

番号	出土遺構／層位	器種名	分類	①胎土 ②焼成 ③色調 ④遺存度	等 級	登録番号	備考
108	表土	深鉢	Ⅲ-3a	①やや細粒。微量の長石を含む。 ②良好。 ③灰褐色。 ④なし。	無文 二段以上の階級折返し口縁。口縁部に刻文。		表土採
109	H-9 覆土	深鉢	Ⅲ-3a	①やや細粒。微量の長石を含む。 ②良好。 ③灰褐色。 ④なし。	無文 折返し口縁に陰帯が付く。口縁と隣帶に浅い刻文。		覆土一括
110	H-32 覆土	深鉢	Ⅲ-3a	①やや細粒。少量の長石を含む。 ②良好。 ③灰褐色。 ④なし。	無文 キザミ口縁		覆土一括
111	H-22 覆土	深鉢	Ⅲ-3b	①やや粗粒。少量の長石を含む。 ②良好。 ③灰褐色。 ④なし。	無文 单筋L.R.の粘節織文。	39	
112	表土	深鉢	Ⅲ-3a	①やや細粒。微量の長石を含む。 ②良好。 ③灰褐色。 ④なし。	胸下部～底部。無文の粗製。		表土
113	O-2	浅鉢？	V	①細粒で緻密。 ②良好。 ③黒褐色。 ④なし。	精製。織かい單筋L.Rの粘節織文。三角のモチーフと波状沈模	O-22	
114	O-2	深鉢？	IV-1	①細粒で緻密。 ②良好。 ③黒褐色。 ④なし。	精製。波綻と撫拭しLを施す。	O-21	
115	X277 Y144	深鉢	V	①細粒。少量の鉄を含む。 ②良好。 ③褐色。 ④なし。	口唇にキザミ 横位の条痕。	X277, Y144 一括	
116	H-8 覆土	浅鉢？	V ?	①細粒。 ②良好。 ③褐色。 ④なし。	口縁 口縁下部に横位の条痕？ その下位に斜めの条痕。		覆土一括
117	X269 Y142	深鉢？	V ?	①細粒。 ②良好。 ③灰褐色。 ④なし。	口縁 角頭状 口縁下に細かな单筋L.Rを施す。	J-1 144	
118	X262 Y138	深鉢？	V ?	①粗粒。長石を含む。 ②良好。 ③灰褐色。 ④なし。	円形、縦位、横位の集合沈模	X262, Y138 一括	
119	H-10 覆土	裏	VI	①細粒。 ②良好。 ③灰褐色。 ④なし。	口縁 織引き波状文		覆土一括

Tab.4 繩文時代土製品観察表 (単位:mm, g)

番号	出土遺構／層位	器種名	最大長	最大幅	最大厚	重さ	①胎土 ②焼成 ③色調 ④遺存度	登録番号	備 考
1	J-4 覆土	透し彫り 付耳飾り	(109.0)	—	31.0	—	①繩粒。 ②良好。 ③明褐 ④全体約1/8	186ほか	
2	J-4 底	土偶	(65.0)	40.0	44.0	(1200)	①繩粒で緻密。微量の長石を含む。 ②良好。 ③褐色。 ④右脚部	361	足首周りにベンガラ付着。

Tab.5 繩文時代石器観察表 (単位:mm, g)

番号	出土遺構／層位	器種名	最大長	最大幅	最大厚	重さ	石材	遺存度	登録番号	備 考
1	J-2 底	石族	20.0	13.5	5.0	0.5	黒曜石	完形	78	平基有茎
2	J-2 底	石族	(30.0)	8.0	6.0	(1.4)	黒色頁岩	先端欠損	炉一括	尖基
3	J-4 覆土	石族	(19.0)	14.0	5.0	(0.6)	黒色頁岩	先端欠損	X271, Y143 b	平基有茎
4	J-4 底	石族	(18.5)	12.5	3.5	(0.6)	黒色頁岩	基部欠損	X271, Y144 a	平基有茎
5	J-4 底	石族	(21.0)	16.0	4.0	(1.0)	硬質頁岩	先端・基部欠損	X272, Y144 a	平基有茎
6	J-4 覆土	石族	(27.0)	16.0	4.0	(0.9)	黒色頁岩	先端欠損	358	平基有茎
7	J-4 覆土	石族	(27.0)	18.0	4.5	(1.3)	黒色頁岩	左側縁一部欠損	391	平基有茎
8	J-4 底	石族	23.0	13.0	4.0	0.8	黒色頁岩	完形	炉一括	平基有茎
9	J-4 底	石族	(23.0)	12.0	5.0	(0.8)	黒色頁岩	先端欠損	X271, Y144 c	平基有茎
10	J-4 底	石族	(24.0)	12.0	4.0	(0.8)	黒色頁岩	基部欠損	X271, Y144 c	平基有茎
11	J-4 底	石族	26.0	12.5	3.0	0.7	硬質頁岩	完形	X271, Y144 b	平基有茎
12	J-4 覆土	石族	27.0	16.0	7.0	2.0	黒色頁岩	完形	323	平基有茎
13	J-4 覆土	石族	(23.0)	17.5	4.5	(1.0)	硬質頁岩	先端・基部欠損		覆土一括 凸基有形
14	J-4 底	石族	(23.0)	17.0	6.0	(1.8)	黒色頁岩	基部欠損	X271, Y144 b	凸基有形
15	J-4 覆土	石族	25.0	(16.5)	7.0	(1.6)	硬質頁岩	側縁欠損	X271, Y144 b	凸基有形

番号	出土遺構／層位	器種名	最大長	最大幅	最大厚	重さ	石材	遺存度	登録番号	備考
16	J-4 覆土	石旗				(19)	黒色頁岩	先端欠損	X271, Y143 b	凸基有形
17	J-4 覆土	石旗	(30.0)	12.0	50	(13)	黒色頁岩	側縁・ 先端欠損		覆土一括
18	J-4 床	石旗	(29.0)	(17.0)	45	(14)	黒色頁岩	かえり・ 先端欠損	X271, Y144 c	凸基有形
19	J-4 床	石旗	19.0	8.0	30	0.3	硬質頁岩	完形	X271, Y144 c	凸基有形
20	J-4 覆土	石旗	(18.0)	16.0	60	(14)	黒色頁岩	先端・ 基部欠損	624	円基有形
21	J-4 覆土	石旗	(21.0)	(14.0)	25	(0.6)	黒色頁岩	かえり・ 先端欠損		覆土一括
22	J-4 床	石旗	21.0	7.5	50	0.7	黒色頁岩	ほほ完形	X271, Y144 b	尖基
23	J-4 覆土	石旗	(28.5)	22.0	45	(14)	黒色頁岩	基部欠損	229	尖基
24	J-4 覆土	石旗	(34.0)	8.0	40	(0.6)	硬質頁岩	基部欠損	23	尖基
25	J-4 床	石旗	(38.0)	11.0	40	(11)	黒色頁岩	基部欠損	X271, Y144 c	尖基？ 長身の凸基有形か。
26	J-4 覆土	石旗	32.0	(22.5)	80	(4.4)	黒色頁岩	側縁・ 一部欠損	306	円基
27	J-4 覆土	石旗	(44.0)	25.0	80	(8.4)	黒色頁岩	基部欠損	X272, Y144	円基
28	H-9 覆土	石旗	(23.0)	16.5	45	(1.0)	黒色頁岩	基部欠損	40	平基有茎
29	表土	石旗	(20.5)	14.0	35	(0.8)	硬質頁岩	基部欠損	表探	平基有茎
30	H-21覆土	石旗	25.0	13.5	40	0.8	硬質頁岩	完形	79	平基有茎
31	表土	石旗	22.5	14.0	40	1.0	黒色頁岩	完形	表探	平基有茎
32	H-33掘り方	石旗	32.0	(22.0)	80	(11)	黒色頁岩	かえり・ 欠損	床下一括	平基有茎
33	H-32掘り方	石旗	(21.0)	17.0	35	(0.9)	黒色頁岩	先端欠損	床下一括	凸基有形
34	H-23覆土	石旗	(24.0)	13.5	45	(12)	黒色頁岩	先端・ 基部欠損	カマド一括	凸基有形
35	表土	石旗	(29.0)	(16.0)	75	(29)	黒色 安山岩	基部・か えり欠損	表土一括	凸基有形
36	H-12覆土	石旗	(34.5)	(14.5)	45	1.6	黒色頁岩	基部・ 側縁・か えり欠損	3	凸基有形
37	X272, Y139	石旗	14.0	10.0	15	0.2	チャート	完形	X272, Y139 一括	円基無茎
38	X266, Y139	石旗	[32.0]	(19.0)	30	(14)	黒曜石	かえり 欠損	X266, Y139 一括	円基無茎
39	H-4 覆土	石旗	(27.0)	(12.0)	45	(16)	黒色頁岩	先端・ 基部欠損	覆土一括	尖基？ 長身の凸基有茎か。
40	H-21覆土	石旗	35.5	23.0	100	6.9	黒色頁岩	ほほ完形	279	円基
41	H-32覆土	石旗	(30.5)	25.0	110	(8.9)	黒色頁岩	先端欠損	26	円基
42	表土	石旗	34.0	25.0	115	8.5	黒色頁岩	ほほ完形	表探一括	円基
43	表土	石旗	(39.5)	27.0	130	(12.8)	黒色頁岩	先端欠損	表土一括	円基基部やや尖る。
44	H-21覆土	打製石斧	(40.0)	27.0	75	(12.8)	黒色頁岩	基部欠損	93	円基本葉形。
45	H-21覆土	石旗	(43.0)	34.5	9.5	(10.4)	黒色頁岩	基部のみ		円基長身の本葉形。基部やや尖る。
46	H-21覆土	打製石斧	(59.0)	57.0	130	(54.0)	黒色頁岩	下半のみ	271	短冊ないし楕形。
47	J-4 覆土	スクレー バー類	30.0	(17.5)	90	(37)	黒曜石	右側欠損	600	下端に漬れが顕著。
48	J-4 覆土	スクレー バー類	(36.0)	22.5	60	(59)	硬質頁岩	上端のみ	144	下部欠損。残存部に明瞭な使用痕はない。

番号	出土遺構／層位	器種名	最大長	最大幅	最大厚	重さ	石材	遺存度	登録番号	備考
49	J - 4 覆土	スクレー バー類	32.5	21.0	5.5	3.3	硬質頁岩		X271, Y144 b	片側縁に調整痕あるも、明瞭な使用痕は認められない。
50	J - 4 覆土	スクレー バー類	39.5	22.0	11.5	9.1	黑色頁岩		覆土一括	使用痕明瞭でない。石礫の未製品か。
51	J - 4 覆土	スクレー バー類	(56.5)	(30.5)	12.0	(17.2)	黑色頁岩	下半欠損	51	右側縁に調整痕。わずかに使用痕跡。
52	H - 4 覆土	スクレー バー類	(28.0)	24.0	7.5	(5.4)	硬質頁岩	下端欠損	a区一括	両側縁に調整痕。右側縁にわずかに使用痕。
53	H - 15 覆土	スクレー バー類	40.5	24.5	10.0	7.8	硬質頁岩		1	右側縁に裏面からの調整痕。使用痕なし。
54	X273, Y140	スクレー バー類	85.0	68.5	24.0	77.5	硬質頁岩		X273, Y144 一括	下端に刃部作成。使用痕明瞭でない。
55	H - 9 覆土	スクレー バー類	66.0	57.5	22.0	72.5	黑色頁岩		9	下端に簡単な二次調整。わずかに使用痕跡。
56	H - 21 覆土	スクレー バー類	62.0	48.0	15.0	44.4	黑色頁岩		276	ほぼ全面を鋸利に作り出しているが、使用痕はない。石礫等の素材か。
57	H - 13 覆土	スクレー バー類				235.0	黑色頁岩		S - 10	周辺に簡単な二次加工。左側縁から下端に漬れ。右側縁は使用痕が不明瞭。
58	H - 22 覆土	スクレー バー類	85.0	44.0	9.0	38.4	黑色頁岩		b区一括	使用痕のある剥片。
59	X265, Y144	スクレー バー類	90.0	72.0	14.0	110.0	黑色頁岩		X265, Y144 一括	使用痕のある剥片。
60	J - 4 床	ピエス スキュー	22.0	21.5	11.0	11.6	玉髓		18	多方向で使用。
61	J - 4 床	石核	43.0	43.5	54.0	120.0	硬質頁岩		565	打面変更2面以上。
62	J - 4 覆土	石核	66.5	88.5	33.0	190.0	硅質頁岩		X270, Y144	主要な剥離は上端背面側より。
63	J - 4 覆土	石核	64.5	107.5	45.5	430.0	黑色 安山岩		551	背面に大きく原石面を残す。
64	J - 4 覆土	石核	102.0	75.0	62.0	435.0	黑色 安山岩		418	正面以外は原石面を大きく残す。
65	表土	石核	81.0	51.0	50.0	250.0	硬質頁岩	表採一括	打面変更5面以上。	
66	H - 35 覆土	磨製石斧	140.0	52.0	27.5	405.0	綠泥片岩	覆土一括		ほぼ全面を平滑に磨く。刃部の漬れが顕著。
67	B - 1 P20	磨製石斧	(67.0)	33.0	11.0	(42.4)	蛇紋岩か	覆土一括		側縁、上端とも丁寧に面をつくる。右側縁は面取り仕上げ。
68	J - 2 床	磨石	135.0	73.0	50.0	750.0	閃綠岩		64	両面とも平滑に研磨。上下端に敲打痕。
69	J - 4 床	凹石	90.0	90.0	48.0	490.0	閃綠岩		650	両面とも平滑に研磨。周囲には3ヶ所の敲打痕。
70	J - 4 覆土	石皿	(68.0)	—	25.0	200.0	閃綠岩	約1/4	346	両面とも平滑に研磨。
71	J - 4 覆土	磨石	74.0	65.0	69.0	365.0	閃綠岩		419	ベンガラ付着。周囲にわずかに敲打痕。

Tab. 6 繩文時代石製品観察表 (単位: mm, g)

番号	出土遺構／層位	器種名	最大長	最大幅	最大厚	重さ	石材	遺存度	登録番号	備考
1	J - 4 床	勾玉	27.0	8.0	8.0	7.2	蛇紋岩	完形	178	片面からの穿孔。孔径4 mm → 2 mm
2	J - 4 覆土	管玉	7.5		4.0	0.5	滑石	—	X272, Y143 b	小口面の切断面が斜め。破損品の再生か。孔径2 mm。

Tab. 7 古墳～奈良・平安時代堅穴住居等一覧表

遺構名	位 置	規 標			面積 (m ²)	主軸方向	遺 墓		主な出土遺物					
		東西 (m)	南北 (m)	壁厚高 (cm)			位 置	構築材	周溝	土師器	須恵器	その他		
H - 1											H17年度調査済			
H - 2											H17年度調査済			
H - 3	X266・267 Y144・145	(2.64)	(4.16)	13	(1202)	N - 53° - E	-	-	杯					
H - 4	X267・268 Y143・144	4.15	3.88	30	15.23	N - 58° - E	東壁中央南	凝灰岩	杯、椀、皿	灰釉陶器、羽釜				
H - 5	X262・264 Y142・144	(6.54)	(5.38)	8	(2261)	N - 63° - W	南壁中央東	凝灰岩	○	环				
H - 6	X265・266 Y141・142	3.30	2.92	11	11.81	N - 80° - E	東壁南隅		椀					
H - 7	X265・266 Y139・140	[3.98]	[3.43]	6	[13.44]	[N - 86° - E]	東壁南隅							
H - 8	X268・269 Y142・143	4.80	3.43	25	15.64	N - 80° - W	東壁南	安山岩・凝灰岩	杯	灰釉陶器、羽釜、鐵旗				
H - 9	X268・269 Y142・143	(4.02)	(2.60)	19	[13.08]	[N - 88° - E]	東壁中央南	凝灰岩?	杯	杯				
H - 10	X268・269 Y140	2.94	3.68	23	12.36	N - 88° - W	東壁南隅、東壁中央		甕	椀				
H - 11	X269・270 Y140・141	4.48	4.02	38	14.84	N - 80° - W	-	-	杯、甕	蓋				
H - 12	X265・266 Y141・142	[3.64]	[2.38]	10	[11.58]	[N - 88° - E]	東壁中央南	-		刀子				
H - 13	X265・266 Y141・142	3.30	3.74	26	11.80	N - 74° - E	東壁中央南	凝灰岩	杯、椀	羽釜、刀子				
H - 14	X268・269 Y142・143	4.16	3.68	23	14.68	N - 89° - E	東壁中央南	○	椀、土釜	杯、椀				
H - 15	X268・269 Y140・141	3.26	3.66	17	12.89	N - 87° - W	東壁中央南	凝灰岩?	杯					
H - 16	X266・267 Y140・141	[4.64]	[4.96]	14	[16.96]	N - 73° - E	東壁中央南	安山岩・凝灰岩	甕、杯					
H - 17	X268・269 Y142・143	(2.60)	(3.16)	18	(12.68)	(N - 79° - E)	東壁南東隅		杯、椀					
H - 18	X267・268 Y141・142	(3.00)	(3.80)	13	(12.67)	(N - 79° - W)	東壁中央南		杯					
H - 19	X268 Y140	[2.81]	[3.56]	18	[10.89]	[N - 86° - E]	東壁中央							
H - 20	X267 Y143・144	(3.78)	(2.16)	17	(11.73)	(N - 72° - E)	西壁中央南							
H - 21	X267・269 Y142・144	6.76	6.94	27	24.95	N - 65° - E	東壁中央南	凝灰岩	杯	大甕、埴輪				
H - 22	X266・268 Y140・142	6.22	6.32	41	25.40	N - 53° - E	東壁中央	凝灰岩	○	杯、高杯、蓋				
H - 23	X269・270 Y143・144	(2.50)	(3.58)	21	(10.59)	(N - 88° - W)	東壁中央北	凝灰岩	杯、椀、皿					
H - 24	X266・267 Y143・145	[5.0]	[3.64]	21	[16.29]	[N - 87° - E]	東壁中央南	安山岩・凝灰岩	杯、耳皿、小鉢	羽釜				
H - 25	X268 Y144・145	(4.32)	(3.72)	16	(14.48)	(N - 71° - E)		-	杯					
H - 26	X272・273 Y138・140	5.00	6.35	230	25.57	N - 91° - E	東壁南隅	安山岩・凝灰岩	环、高台椀	瓦、鐵旗				
H - 27	X274・276 Y138・140	5.80	5.50	320	29.40	N - 94° - E	東壁南	安山岩・凝灰岩	环、高台椀	鐵旗、刀子				
H - 28											欠 香			
H - 29	X275・277 Y140・141	4.80	3.80	435	17.57	N - 93° - E	東壁南	安山岩	环、高台椀、羽釜	瓦				
H - 30	X274・275 Y142・143	4.20	4.30	345	16.40	N - 93° - E	東壁南	安山岩・凝灰岩	环、羽釜、土釜					
H - 31	X274・275 Y141・142	2.66	3.08	500	7.54	N - 91° - E	東壁南	凝灰岩	环、羽釜、土釜					
H - 32	X274・275 Y144・145	3.30	(3.82)	410	(11.35)	N - 89° - E	東壁	凝灰岩	环、高台椀、小鉢	筋縫瓦、瓦石、羽釜				
H - 33	X272・273 Y142・144	4.08	(3.98)	365	(11.67)	N - 112° - E	東壁			羽釜				
H - 34	X272・273 Y143・144	3.25	4.28	285	12.46	N - 100° - E	東壁南		环、羽釜	灰釉皿				
H - 35	X271・272 Y141・142	3.50	4.06	345	13.18	N - 88° - E	東壁南	安山岩・凝灰岩	环、皿、土釜					
H - 36	X273・274 Y138・139	(3.44)	5.60	200	(16.24)	N - 91° - E	東壁南	安山岩	环、高台椀、土釜	瓦				
H - 37	X275・276 Y142・144	3.58	5.73	390	19.47	N - 97° - E	東壁中央東 東壁南	安山岩	环、高台椀、土釜	灰釉皿、瓦石				
H - 38	X277・278 Y141・142	(1.19)	[5.24]	385	(5.35)	N - 92° - E	-	-	环、甕	铁鍔				
H - 39							欠 香							

遺構名	位 置	規 模			面積 (m ²)	主軸方向	甌		周溝	主な出土遺物		
		東西 (m)	南北 (m)	壁高 (cm)			位 置	構築材		土師器	須恵器	その他の
H-40	X270・271 Y142・143	360	558	31.5	19.17	N-93°-E	東壁南	安山岩・凝灰岩		環、皿、高台輪、羽釜		
H-41	X277・278 Y139・140	(300)	320	40.0	(8.05)	N-80°-E	東壁南	凝灰岩		環、皿、高台輪、土釜		
H-42	X270・271 Y143・140	320	43.5	33.5	(8.05)	N-92°-E	東壁南	安山岩		環、羽釜		
H-43	X269・271 Y141・142	540	350	46.0	17.16	N-73°-E	東壁中央	粘土	环	甌、平盤、埴輪、石瓦		
H-44	X270 Y140・141	310	373	45.5	10.75	N-86°-E	東壁南	安山岩・凝灰岩瓦		環、高台輪、甌、羽釜	瓦、万子	
H-45	X272 Y143・144	(260)	370	20.0	(8.02)	N-98°-E	-	-	甌	内里碗、羽釜	砾石、土製円盤	
H-46	X269・270 Y138・139	340	298	29.5	9.64	N-95°-E	東壁南			環、羽釜	錘	
H-47	X269・270 Y138・139	(342)	(399)	25.0	(11.23)	N-88°-E	東壁南			環、土釜	灰釉輪	
H-48	X269 Y138	(277)	(0.96)	30.0	(1.15)	N-72°-E	-				高台輪	
H-49	X273・274 Y138	(417)	(0.55)	35.0	(1.94)	N-90°-E	-					
H-50	X272・273 Y139・140	(425)	(0.86)	30.0	(1.64)	N-112°-E	-					
H-51	X272 Y138・139	(214)	53.0	30.0	(9.18)	N-12°-E	東壁南			環、高台輪		
H-52							欠番					
H-53	X277・278 Y138	(1.46)	(1.31)	(1.48)	(6.19)	(N-89°-E)			-			
H-54	X270・271 Y138	(5.20)	(2.10)	(5.36)	(12.99)	(N-70°-E)			-	杯、甌		
T-1	X264・265 Y143・144	423	372	20	14.42	N-71°-E						
T-2	X268・269 Y140・141	(394)	(5.30)	33	(14.39)	(N-76°-E)			杯			
T-3	X266・267 Y143	[396]	[218]	16	[8.98]	[N-87°-E]	無し			杯		
T-4	X268 Y141	(226)	(182)	22	(7.17)	(N-81°-W)				杯		
T-5	X265 Y142・143	-	-	-	7.71	-				杯、碗		

Tab.8 H-27号住居跡ピット計測表

No.	形 状	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	備 考	No.	形 状	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	備 考
P ₁	円 形	37	31	49.5	主柱穴	P ₅	円 形	35	28	17	
P ₂	椭円形	45	36	47	主柱穴	P ₆	円 形	35	34	31	
P ₃	円 形	33	27	45.5	主柱穴	P ₇	椭円形	37	32	27	
P ₄	円 形	33	30	48.5	主柱穴	P ₈	円 形	32	30	28	
P ₅	円 形	95	90	49.5	貯蔵穴	P ₉	円 形	41	35	44	
P ₆	円 形	36	35	22		P ₁₀	円 形	29	25	33.5	
P ₇	円 形	75	68	48	旧貯蔵穴か	P ₁₁	円 形	23	20	26	

Tab.9 溝跡計測表

遺構名	位 置	長さ (m)	深さ (cm)		上幅 (cm)		下幅 (cm)		主軸方向	断面形	時 期
			最大	最小	最大	最小	最大	最小			
W-1	X142・143 Y109・115	213	35.5	19.5	110.0	80.0	45.0	5.0	N-4°-W	U字形で東側に平坦部有	As-B 降下以前
W-2	X141・142 Y109・115	213	65	10	95.0	20.0	85.0	5.0	N-5°-W	U字形	As-B 降下以降

Tab.10 古墳～奈良・平安時代土坑計測表

遺構名	位 置	長軸 (m)	短軸 (cm)	深さ (cm)	形 状	出土遺物	備 考
D-1					H17年度調査済		
D-2					H17年度調査済		
D-3	X276, Y141	100	82	38	橢円形	鏡7、鉄1	
D-4	X275, Y142	118	116	67	円形	鏡51、瓦3、	
D-5	X273, Y141	84	82	62.5	円形	鏡5、石1	中世
D-6	X272・273, Y140	160	136	40	橢円形	鏡7、灰1	中世
D-7					欠 奈		
D-8	X272, Y142	142	112	72	橢円形	鏡7、管玉1、石2	
D-9	X270, Y140	96	84	50	橢円形	鏡6、瓦1	
D-10	X272・273, Y144	100	78	25	長円形	鏡21	
D-11	X276, Y143・144	90	76	44	橢円形	鏡5	
D-12	X269, Y138	116	104	63	円形	鏡17、繩3	
D-13	X270・271, Y139	128	120	73.5	円形	鏡11、繩1、石2	
D-14	X270, Y140	146	88	54	長円形	鏡16、灰1、繩3	
D-15	X265・266, Y140	105	85	33.5	橢円形	鏡2	
D-16	X270, Y138	83	75	69.5	円形	鏡3	
D-17	X269, Y138	84	60	32.5	橢円形	-	
D-18					欠 奈		
D-19					欠 奈		
D-20					欠 奈		
D-21	X268, Y143	90	84	52.5	円形		
D-22	X268, Y140	60	39	7.5	橢円形		
D-23					欠 奈		
D-24	X264, Y144	96	54	20.0	橢円形		
D-25					欠 奈		
D-26					欠 奈		
D-27	X271, Y139	94	80	11.6	橢円形		
D-28	X277, Y142	89	80	17.5	円形		
D-29	X277・278, Y142・143	103	実測不能	27.0	不明		
D-30	X278, Y143	84	80	27.0	円形		
D-31	X277, Y144	79	78	23.0	円形		
D-32	X266, Y138	114	不明	47.0	不明		中世
D-33	X277, Y143	70	68	19.0	円形		
D-34	X276, Y142	74	65	27.5	円形		
D-35	X271, Y142	98	76	46.8	円形		
D-36	X275, Y142	[77]	71	10.0	円形		
D-37	X275, Y142	84	[82]	22.5	円形		
D-38	X275, Y141・142	180	[85]	24.0	橢円形		
D-39	X275, Y142	[73]	[67]	5.5	円形		
D-40, 41	X277, Y140	172	127	57.0	変形		
D-42	X263, Y141	58	54	12.5	方円形		

※繩…繩文土器、土…土師器、鏡…鏡芯部、灰…灰釉陶器、鉄…鉄器・鉄製品、石…石類

Table.11 古墳－奈良・平安時代土器観察表

番号	出土遺物 名	器種名	①口径 ②底径	③高さ ④色調 ⑤遺存度	⑥軸部 ⑦底部 ⑧縁部	器種の特徴、整形、調整技術	登録番号	備考
1	H-3 埋土	土器部 环	①(11.0) ②(3.2) ③ - ④(3.6)	⑤(4.6)	⑥(1.6)	丸底気泡の体部から口縁が外反して聞く。底部と口縁は後により削される。外面：口縁横撫で。底部是削り。内面：口縁横撫で。底部削で。	20	
2	H-4 床窓	瓶	① 96 ② 28 ③ 66	④(2.6)	⑤(5.6)	浅いの体部から口縁が内側に聞く。内・外面輪郭整形撫で。底部：底部削り後、回転是削り。	137	
3	H-4 床窓	瓶	① 11.0 ② 36 ③ 59	④(4.6)	⑤(4.6)	瓶やかに内側する体部から口縁が外反して聞く。内・外面・輪郭整形撫で。底部：回転系切り未調査。	56	
4	H-4 埋土	瓶	① 104 ② (42) ③ (6.2)	④(2.6)	⑤(5.6)	体部削やかに内側。口縁わずかに外反する。内・外面・輪郭整形撫で。底部：回転並びに削り、両面を付し輪郭部撫で。	84	
5	H-4 埋土	瓶	① 134 ② 58 ③ 84	④(4.5)	⑤(3.2)	瓶やかに内側する体部から口縁が外反して聞く。内・外面・輪郭整形撫で。回転削り後、輪郭部横撫で。底部：回転系切り未調査。	10ほか	
6	H-4 覆土	瓶	① 104 ② 15 ③ 51	④(2.6)	⑤(4.5)	体部直線的に聞く。内・外面：輪郭整形撫で。底部：回転系削り未調査。	66	
7	H-4 床窓	瓶	①(154) ② 26 ③ (89)	④(1.5)	⑤(1.5)	体部直線的に聞く。内・外面：輪郭整形。底部：断面三日月状の高台を付した後、回転削り。添けが付属。	98	
8	H-4 床窓	羽加	①(230) ②(120) ③ - (278)	④(2.6)	⑤(1.8)	瓶削やかに内側。口縁は内側する。断面三角形状の短い鶴を付す。外面：輪郭整形。内面：輪郭整形撫で。	14ほか	
9	H-5 床窓	土器部 环	① 108 ② 33 ③ -	④(3.6)	⑤(3.5)	浅いの体部が瓶やかに凸曲し口縁は仄く内屈する。外面：口縁横撫で。底部是削り。内面：輪郭撫で。	1	
10	H-6 床窓	土器部 环	①(91) ② 38 ③ (39)	④(2.6)	⑤(4.5)	内面気泡の体部から口縁がやかに外反する。内・外面：輪郭整形撫で。底部：回転削り未調査。断面台形の高台を付す。	11	
11	H-8 床窓	瓶	① 100 ② 35 ③ 54	④(2.6)	⑤(3.6)	体部削やかに内側する。内・外面：輪郭整形撫で。底部：回転系削り未調査。	13	
12	H-8 床窓	瓶	①(110) ② 38 ③ 61	④(2.6)	⑤(2.5)	下部に丸みを持ち内側する体部から口縁がやかに外反する。内・外面：輪郭整形撫で。底部：回転系削り未調査。	97	
13	H-8 床窓	瓶	①(110) ② 34 ③ 50	④(2.6)	⑤(2.5)	体部削やかに内側する。内・外面：輪郭整形撫で。底部：回転系削り未調査。	12ほか	
14	H-8 窓内	瓶	① 124 ② 23 ③ 70	④(2.6)	⑤(2.3)	わかに外反して聞く。内・外面・輪郭整形撫で。底部：回転削り未調査。断面三角形の高台を付す。添けが付属。	91ほか	
15	H-8 羽加	瓶	①(240) ②(117) ③ - (287)	④(2.6)	⑤(4.6)	瓶削やかに内側。口縁は仄く内屈。断面三角形の短い鶴を付す。外面：輪郭整形。内面：輪郭整形直線で。	67ほか	
16	H-9 床窓	瓶	①(120) ② 35 ③ 61	④(2.6)	⑤(3.6)	浅いの体部が瓶やかに内側する。内・外面輪郭整形撫で。底部：回転系削り未調査。	21ほか	
17	H-9 窓内	瓶	①(110) ② 35 ③ 57	④(2.6)	⑤(2.5)	浅いの体部が瓶やかに内側する。内・外面輪郭整形撫で。底部：回転削り未調査。	38	
18	H-10 床窓	瓶	① 136 ② 55 ③ 69	④(2.6)	⑤(3.5)	直線的に聞く体部から口縁が外反する。内・外面輪郭整形撫で。底部：回転削り未調査。断面方形の高台を付す。	24	
19	H-10 床窓	瓶	① 100 ② 62 ③ 79	④(2.6)	⑤(1.4)	直線的に聞く深い体部。内・外面輪郭整形撫で。底部：断面三日月の高台を付す。削れ。	17	
20	H-10 床窓	土器部 环	①(190) ②(132) ③ - (215)	④(2.6)	⑤(3.6)	口縁部コの字を呈する。外面：口縁横撫で。胴上部斜位削り。胴下部輪郭足削り。内面：口縁横撫で。胴上部斜位削り。	9ほか	
21	H-11 床窓	土器部 环	① 104 ② 33 ③ -	④(3.6)	⑤(3.6)	先端の体部から瓶やかに内側する。背面：口縁部横撫で。体部削り。内面：輪郭撫で。	144ほか	
22	H-11 埋土	土器部 环	① 100 ② 34 ③ -	④(3.6)	⑤(3.2)	先端の体部から瓶やかに内側する。背面：口縁部横撫で。体部削り。内面：輪郭撫で。	2ほか	
23	H-11 埋土	瓶	① 110 ② (22) ③ -	④(2.6)	⑤(2.2)	天井部から瓶やかに内側する。内側した短い立ち返りがつく。内面：口縁部横撫で。底部：回転削り未調査。	42ほか	
24	H-11 床窓	土器部 环	①(240) ② (88) ③ -	④(2.6)	⑤(1.6)	瓶削。頭部やかに内側して聞く。外面：口縁部横撫で。胴上部横位削り。内面：口縁部横撫で。胴上部横位削り。	51	
25	H-13 埋土	瓶	① 124 ② 40 ③ 52	④(2.6)	⑤(3.6)	内面気泡の体部から口縁がやかに外反して聞く。内・外面輪郭整形撫で。底部：回転削り未調査。	30	
26	H-13 床窓	瓶	①(150) ② 53 ③ 70	④(2.6)	⑤(2.2)	内面気泡の体部から口縁がやかに外反して聞く。内・外面輪郭整形撫で。底部：回転系削り未調査。断面横撫で。内面：口縁横撫で。底部：回転削り未調査。	61	
27	H-13 窓内	瓶	① - ② (27) ③ - 68	④(2.6)	⑤(3.6)	深いの体部が直線的に聞く。内・外面輪郭整形撫で。底部：回転削り未調査。鍔な高台を付す。	35	
28	H-13 窓内	瓶	① 124 ② 40 ③ (67)	④(2.6)	⑤(1.2)	内面気泡の体部から口縁がやかに外反して聞く。内・外面輪郭整形撫で。底部：回転削り後、台形の低い高台を付し削れを撫で。	43ほか	
29	H-13 窓内	羽加	①(190) ②(122) ③ - (255)	④(2.6)	⑤(3.6)	瓶から口縁に付いて最もやかに内側する。断面三角形の短い鶴を付す。外面：輪郭整形。内面：口縁横撫で。胴部輪郭整形直線で。	37	
30	H-14 床窓	瓶	① 134 ② 42 ③ 67	④(2.6)	⑤(3.6)	浅いの体部が瓶やかに内側する。内・外面：輪郭整形撫で。底部：回転削り未調査。	88	
31	H-14 床窓	瓶	① 124 ② 43 ③ 68	④(2.6)	⑤(3.6)	瓶やかに内側する体部から口縁がやかに外反する。内・外面輪郭整形撫で。底部：回転削り未調査。	71	
32	H-14 埋土	瓶	① 94 ② 30 ③ 57	④(2.6)	⑤(2.2)	瓶やかに内側する体部から口縁がやかに外反する。内・外面輪郭整形撫で。底部：回転削り後、三角形の高台を付し、削位削り。	43	
33	H-14 埋土	瓶	① 116 ② 33 ③ 54	④(2.6)	⑤(3.6)	浅いの体部がやかに内側する。内・外面：輪郭整形撫で。底部：回転削り未調査。	67	
34	H-14 床窓	瓶	① 110 ② 49 ③ 63	④(2.6)	⑤(3.6)	下部に丸みを持ち内側する体部から口縁が内反気味に聞く。内・外面：輪郭整形撫で。底部：静止系切り後、高台を付し削間を撫で。	83	
35	H-14 埋土	瓶	①(110) ② 47 ③ 58	④(2.6)	⑤(2.3)	体部削やかに内側する。内・外面：輪郭整形撫で。底部：回転系削り後、三角形の高台を付し、削位削り。	42	
36	H-14 床窓	瓶	①(138) ② (50) ③ (65)	④(2.6)	⑤(3.6)	体部がわかに内側する。内・外面：輪郭整形撫で。底部：回転削り後、台形の低い高台を付し削間を撫で。	57ほか	
37	H-14 埋土	土器	①(238) ②(165) ③ - (247)	④(2.6)	⑤(4.8)	鋼部削やかに内側。頭部に削離して口縁が短く聞く。外面：口縁横撫で。底部：削離による斜面の撫で。内面：口縁部横撫で。頭部削離によく撫で。	59ほか	
38	H-15 床窓	土器部 环	①(142) ② 58 ③ 59	④(2.6)	⑤(3.6)	下部に丸みを持つ体部から口縁がわかに外反して聞く。外面：輪郭整形。底部：回転削り後、外縁を撫で。	61	

番号	出土地點	層級名	①口仔	②深部	③底盤	④色彩	⑤造形	器種の特徴・整形・調査技術	登録番号	備考
39	H-16 埋土	土師器 环	①[108] ② 3.5 - -	②焼成 ③底盤 ④色彩	①船形 ②良好 ③橙	丸底気味の体部から口縁が短く内屈する。外面：口縁横擴て。体部底削り。内面：横擴て。	63はか			
40	H-16 埋土	土師器 环	①[116] ② 4.0 - -	②焼成 ③底盤 ④口縁一部欠	①船形 ②良好 ③橙	丸底気味の体部から口縁が短く内屈する。外面：口縁横擴て。体部底削り。内面：横擴て。	15はか			
41	H-16 埋土 直底	土師器 环	①[220] ② 6.5 - -	②焼成 ③底盤 ④口縁部破片	①小輪 ②良好 ③橙	長脚形。腹部での穴に筋付し、口縁は直線的に開く。外面：口縁部横擴で。脚部削底。斜位底削り。内面：口縫部横擴で。	33ほか			
42	H-17 埋土 直底	土師器 环	① 11.0 ② 3.3 - 5.2	②焼成 ③底盤 ④口縁	①中軸 ②良好 ③底盤	上手な氣味の底部から体部底やから立ち上がり、口縁はわずかに外反する。内・外面：縦縫整彌撫で。底部：刮削系切り未調整。	16ほか			
43	H-17 埋土 直底	土師器 环	① - ② (35) - 8.8	②焼成 ③底盤 ④口縁	①相較 ②焼成化 ③底盤 ④口縁	高台の穴や外反について聞く。内・外面：縦縫整彌撫。底部：高台を付した後削る。	24			
44	H-18 埋土 直底	土師器 环	① 11.0 ② 3.5 - 5.3	②焼成 ③底盤 ④口縁	①相較 ②焼成化 ③底盤 ④口縁	体部部に丸みを持ち口縁は直線的に開く。内・外面：縦縫整彌撫で。底部：刮削系切り。外側部削除。	28			
45	H-18 埋土 直底	土師器 环	① 11.2 ② 4.1 - 5.6	②焼成 ③底盤 ④口縁	①相較 ②焼成化 ③底盤 ④口縁	下部に丸みを持った体部が底やから立ち上がり、口縁はわずかに外反する。内・外面：縦縫整彌撫で。底部：刮削系切り未調整。	18			
46	H-21 埋土 直底	土師器 环	① 11.7 ② 3.1 - -	②焼成 ③底盤 ④口縁	①相較 ②良好 ③底盤 ④口縁	丸底気味の底部から体部底やから立ち上がり、口縁は短く内屈する。外面：口縁横擴で。体部削削り。内面：口縫部横擴で。体部削削。	163			
47	H-21 埋土 直底	土師器 环	① 13.8 ② 4.1 - -	②焼成 ③底盤 ④口縁	①相較 ②良好 ③底盤 ④口縁	丸底気味の底部から体部底やから立ち上がり、口縁は短く内屈する。外面：口縫部横擴で。体部削削り。内面：口縫部横擴で。体部削削。	138			
48	H-21 埋土 直底	土師器 环	① 11.0 ② 3.5 - -	②焼成 ③底盤 ④口縁	①相較 ②良好 ③底盤 ④口縁	丸底気味の底部から、口縁が外反気味に直立する。外面：口縫部横擴で。体部削削り。内面：横擴で。	89ほか			
49	H-21 埋土 直底	土師器 环	① 13.5 ② 3.9 - -	②焼成 ③底盤 ④口縁	①中軸 ②良好 ③底盤 ④口縁	やや丸底の浅い体部から、口縁が内唇気味に立ち上がる。外面：口縫部横擴で。体部削削り。内面：横擴で。	173			
50	H-21 埋土 直底	土師器 环	① 10.8 ② 3.3 - -	②焼成 ③底盤 ④口縁	①相較 ②良好 ③底盤 ④口縁	まるる気味の浅い体部から、口縁が短く内屈して立ち上がる。外面：口縫部横擴で。体部削削り。内面：横擴で。	140			
51	H-21 埋土 直底	土師器 环	① 11.8 ② 3.7 - -	②焼成 ③明鏡 ④口縁	①相較 ②良好 ③明鏡 ④口縁	丸底気味の浅い体部から、口縁が短く内屈する。外面：口縫部横擴で。体部削削り。内面：口縫部横擴で。体部削削。	177			
52	H-21 埋土 直底	土師器 环	① 11.6 ② 3.8 - -	②焼成 ③底盤 ④口縁	①中軸 ②良好 ③底盤 ④口縁	丸底気味の浅い体部から、外反気味の口縁が直立する。外面：口縫部横擴で。体部削削り。内面：口縫部横擴で。体部削削。	93			
53	H-21 埋土 大腹	土師器 环	①[240] ② (7.7) - -	②焼成 ③底盤 ④口縁部/2	①中軸 ②慶元 ③底盤 ④口縁部	腹部から外反し、口縁は外縫部中央に開く。口唇下に核。外面：口縫部横擴で。脚部削削きに機位の様き目。内面口頭部横擴で。脚部削削心円凹具真。	147			
54	H-21 埋土 朝顔形 直底	土師器 环	①[316] ② (11.9) - -	②焼成 ③赤 ④上段の約2/3	①相較 ②良好 ③赤 ④上段の約2/3	上端は外縫で反して聞く。断面台形の凸面。外面：浅い刷毛後。凸面貼付で。内面：斜削の浅い刷毛后。	16ほか			
55	H-21 埋土 直底	土師器 环	①[372] ② (22.7) - -	②焼成 ③底盤 ④口縁	①相較 ②良好 ③底盤 ④口縁	上端は必ず外反し反して聞く。断面台形の凸面。外面：浅い刷毛後凸面削除貼付。内面：ごく浅い斜削の刷毛后。	148ほか			
56	H-22 埋土 直底	土師器 环	①[116] ② 3.5 - -	②焼成 ③底盤 ④口縁	浅いの体部から口縁が短く屈する。外面：口縫部横擴で。体部削削。脚部削削。内面：横擴で。	53ほか				
57	H-22 埋土 直底	土師器 环	① 11.4 ② 3.2 - -	②焼成 ③底盤 ④口縁	浅いの体部から口縁が短く屈する。外面：口縫部横擴で。体部削削。脚部削削。内面：横擴で。	85				
58	H-22 埋土 直底	土師器 环	① 11.6 ② 3.6 - -	②焼成 ③底盤 ④口縁	浅いの体部から口縁が直立する。口縁と体部の端は斜めの体部から口縁が短く屈する。外面：口縫部横擴で。体部削削。内面：横擴で。	40ほか				
59	H-22 埋土 直底	土師器 环	① [110] ② (3.7) - -	②焼成 ③底盤 ④口縁	天井部をややくし口縁に至る。口縁との隙に核を持つ。外面：口縫部横擴で。天井部削削り。内面：縦縫整彌撫で。	71				
60	H-22 埋土 直底	土師器 环	① [124] ② (5.0) - -	②焼成 ③底盤 ④口縁	杯部から内面に丸みを持ち、口縁はわずかに外反して直線的に立ち上がる。外面：口縫部横擴で。脚部削削。内面：横擴で。	87				
61	H-23 埋土 直底	土師器 环	① 9.2 ② 3.3 - 5.0	②焼成 ③明鏡 ④口縁	平底からわずかに内唇しした体部が直線的に聞いて立ち上がる。内・外面：縦縫整彌撫で。底部：刮削系切り未調整。	31				
62	H-23 埋土 直底	土師器 环	① 9.7 ② 2.8 - 5.6	②焼成 ③底盤 ④口縁	内唇する浅い体部から口縁が外反して聞く。内・外面：縦縫整彌撫で。底部：刮削系切り未調整。	48				
63	H-23 埋土 直底	土師器 环	① 11.6 ② 4.2 - 4.5	②焼成 ③底盤 ④口縁	底部が小さく内唇する体部から、口縁が外反して聞く。内・外面：縦縫整彌撫で。底部：刮削系切り未調整。	55				
64	H-23 埋土 直底	土師器 环	① 8.7 ② (5.2) - -	②焼成 ③底盤 ④口縁	下部に丸みを持った体部。外反気味の断面三角の高台を付す。外面：脚部削削。内面：横擴で。	32				
65	H-23 埋土 直底	土師器 环	① [128] ② 2.0 - 7.0	②焼成 ③底盤 ④口縁	体部がすかに溝する。内・外面：縦縫整彌撫。底部：静止系切り未調整。	57				
66	H-24 埋土 直底	土師器 环	① 9.8 ② 2.5 - 6.6	②焼成 ③底盤 ④口縁	平底から浅い体部が底ややくし直角して立ち上がる。内・外面：縦縫整彌撫で。底部：刮削系切り前後撫。	64				
67	H-24 埋土 直底	土師器 环	① [156] ② 6.1 - 6.7	②焼成 ③底盤 ④口縁	平底から深めの体部が底ややくし直角して立ち上がる。内・外面：縦縫整彌撫で。底部：刮削系切り未調整。	48ほか				
68	H-24 埋土 直底	土師器 环	① [156] × 4.2/4.5 - 5.6	②焼成 ③底盤 ④口縁	口縁はわずかに外反して聞く。外面：縦縫整彌撫。内面：磨き。黑色乳頭。底部：刮削系切り後。断面台形の高台を付す。内面：脚部削削。	49				
69	H-24 埋土 直底	土師器 环	① [100] ② (6.6) - 109	②焼成 ③底盤 ④口縁	脚部がややくし、脚中部がやや張る。口縁短く外反する。内・外面：縦縫整彌撫。内面：脚部削削。	101				
70	H-24 埋土 直底	土師器 环	① [202] ② 3.6 - 390.279	②焼成 ③赤 ④口縁	脚部から口縁に付けて底ややくし内唇する。脚部に最大洋。断面三角の短い核を付す。外面：縦縫整彌撫。内面：脚部削削未調整。	13ほか				
71	H-25 埋土 直底	土師器 环	① 11.2 ② 3.5 - -	②焼成 ③底盤 ④口縁	尖り底部の丸底の体部から、口縁が短く内屈する。外面：口縫部横擴で。体部削削位前回り。内面：横擴で。	4ほか				
72	H-26 埋土 直底	土師器 环	① 9.0 ② 1.6 - 5.6	②焼成 ③底盤 ④口縁	縦縫整彌撫。体部：浅い底状。下部若干千穀らみ、上半ハの字に聞く。口縁は短く外反。口縫部回転撫で。底部：右回転系切り。	20				
73	H-26 埋土 直底	土師器 环	① [90] ② 2.0 - 5.2	②焼成 ③底盤 ④口縁	縦縫整彌撫。体部：下端一部削れ。ハハの字に外縫。口縁部回転撫で。底部：右回転系切り。	覆土 若干内厚い				
74	H-26 埋土 直底	土師器 环	① 8.4 ② 1.7 - 4.8	②焼成 ③底盤 ④口縁	縦縫整彌撫。体部：浅いハの字。下部：高台部。若干高底から張る。底部：内厚。口縫部回転撫で。内面：刮削系切り未調整。	P 6 72.-73.より 小形				
75	H-26 埋土 高台柄	土師器 环	① [168] ② 6.0 - 8.0	②焼成 ③底盤 ④口縁	縦縫整彌撫。体部：ハハの字に聞く。高台部：やや高底から張る。下端丸み。底部：刮削系切り。底部：内厚。	32ほか	内厚い			
76	H-26 埋土 直底	土師器 环	① - ② - - -	②焼成 ③底盤 ④口縁	口縫部：切入外縫。背部：断面三角形。張り出し水平。口縫部：平坦。内面：刮削系切り未調整。口縫部：純作り直縫。内・外面回転撫で。口縫部内面：回転撫で。斜位底削。	4	作り比較的 丁寧			

番号	出土遺物 種類	種類名	①口縁 ②器高 ③底径	①船上 ②焼成 ③遺道	器種の特徴・整形・調査技術	登録番号	備考
77	H-26 床直	瓶と思 土器	① - ② - ③ -	①瓶底 ②二輪化粧 ③口縁部小片	口縁部：頗る外縁。胴部：上半直立気味。内・外縁：稍作り、回転擦で、器底丸い。	47	内面焼付
78	H-27 床直	瓶と思 土器	① [92] ② 20 ③ 45	①瓶底 ②二輪化粧 ③5.5-1.2	瓶底整形。体底：八の字状。底部：小さく。内厚。口縁部：回転擦で、底部：右回転差切り。器底：74に包み。	5	
79	H-27 床直	瓶と思 土器	① 87 ② 16 ③ 58	①瓶底 ②二輪化粧 ③4.5-4.5	瓶底整形。体底：八の字形に彫き。底座：底部：上げ底。口縁部：回転擦で、底部：右回転差切り。	7	器内や心舟 V
80	H-27 埋土 环	瓶と思 土器	① [75] ② 17 ③ [40]	①中段 ②二輪化粧 ③5.5-1.5 黄緑	瓶底整形。体底：下子部若干膨らみ。中位で弧る。口縁部：外半。口縁部：回転擦で、底部：右回転差切り。器底：内面薄い。	覆土	外面部吸
81	H-27 床直 高台輪	瓶と思 土器	① 120 ② 47 ③ 56	①中段 ②二輪化粧 ③5.5-1.5 黄緑	瓶底整形。体底：下子部丸み。上子部外手で高く。高台部：矧く。口縁部：底座：内面貼り付け後、回転擦で。器底：底面付着者。	1	器容器使用 か
82	H-27 陶内 羽羽	瓶と思 土器	① [24.4] ② [17.0] ③ -	①瓶底 ②二輪化粧 ③口縁部 [1.8]	口縁部：内凹気味。脚部：瓶底リ字型。貼り付け後の調整。口縁部：回転擦で、底部：右回転差切り。器底：内・外面回転擦で、外面部擦工具による旋び抜き。	25	つくり補
83	H-27 陶内 土器	瓶と思 土器	① - ② - ③ -	①瓶底 ②二輪化粧 ③口縁部小片	口縁部：底外縁。内側の字状。脚部：頗る曲面。口縁部：丸い。内面：外縁：直線。底部：右回転差切り。器底：内面凹。	覆土	
84	H-29 床直	瓶と思 土器	① [116] ② 34 ③ 58	①瓶底 ②二輪化粧 ③5.5-1.5 黄緑	瓶底整形。体底：下端丸け。頗る曲面。口縁部：回転擦で、内面わずかにくぼみ状。底部：右回転差切り。	17	
85	H-29 埋土 环	瓶と思 土器	① - ② [10.5] ③ -	①中段 ②二輪化粧 ③5.5-1.5 黄緑	瓶底整形。体底：底座に内凹気味。底部：高台貼り付け部。くの字状。内面：外縁に外する高さ。高台部：底座：外面上手葉付着。	24	
86	H-29 陶内 羽羽	瓶と思 土器	① [21.0] ② [8.2] ③ -	①中段 ②二輪化粧 ③5.5-1.5 黄緑	器底：う。口縁部：底外縁。脚部：瓶底三角形。内向きに張り出す。貼り付け後調査。口縁部：平面。口縁部：脚部底：回転擦で。器底：相手引張れ。	8	内面黒色味
87	H-29 床直 羽羽	瓶と思 土器	① [21.0] ② [9.0] ③ -	①中段 ②普通 ③口縁部 [1.4]	器底：う。口縁部：底外縁。脚部：瓶底三角形。内向きに張り出す。貼り付け後調査。口縁部：平面。口縁部：脚部底：回転擦で。器底：相手引張れ。	28	はかね
88	H-30 陶内 环	瓶と思 土器	① [100] ② 22 ③ [6.4]	①中段 ②二輪化粧 ③5.5-1.5 黄緑	瓶底整形。口縁：外傾。脚部：瓶底直立。内面：外縁に張り出す。内面回転擦で。底部：内面中央やくぼみ。回転差切り。	49	
89	H-30 陶内 环	瓶と思 土器	① 100 ② 27 ③ 54	①中段 ②二輪化粧 ③5.5-1.5 黄緑	瓶底整形。口縁：外傾。脚部：瓶底直立。内面回転擦で。脚部：断面：角形に近い状態。やや上向きに付す。貼付後、丁寧な回転擦で。	50	蓋支脚に質 さって出土
90	H-30 埋土 羽羽	瓶と思 土器	① - ② - ③ [6.9]	①中段 ②二輪化粧 ③口縁部 [4.5]	口縁：くの字形に折れ現る外反。回転擦で。胴部：上位が膨らみ付す。器底大径。外縁縦差削り、内面削り。	41	
91	H-30 床直 土器	瓶と思 土器	① - ② - ③ [13.4]	①中段 ②二輪化粧 ③3.5-3.5 破片	瓶底整形。口縁：外傾。脚部：直線的な体部から口縁や外反。内面回転擦で。底部：右回転差切り。	16	
92	H-31 床直 环	瓶と思 土器	① [104] ② 32 ③ 55	①中段 ②二輪化粧 ③5.5-1.5 黄緑	瓶底整形。口縁：外傾。脚部：直線的な体部から口縁や外反。内面回転擦で。底部：右回転差切り。	23	保付着
93	H-31 床直 环	瓶と思 土器	① 107 ② 31 ③ 50	①中段 ②二輪化粧 ③5.5-1.5 黄緑	瓶底整形。口縁：外傾。脚部：直線的な体部から口縁や外反。内面回転擦で。底部：右回転差切り。	27	内面黒色味
94	H-31 床直 环	瓶と思 土器	① 108 ② 30 ③ 50	①中段 ②二輪化粧 ③5.5-1.5 黄緑	瓶底整形。器内に覆付着。口縁：底部：丸みを帯びる体部から口縁まで。内面無付着。	A-1	内面覆付着
95	H-31 埋土 环	瓶と思 土器	① [100] ② 33 ③ 46	①中段 ②二輪化粧 ③5.5-1.5 黄緑	瓶底整形。器内に覆付着。口縁：底部：丸みを帯びる体部から口縁まで。内面無付着。	40	
96	H-31 陶内 羽羽	瓶と思 土器	① - ② [18.5] ③ -	①中段 ②二輪化粧 ③5.5-1.5 黄緑 破片	口縁部：ほぼ直立。回転擦。脚部：瓶底三角形に近く。ほは水平に付す。貼付後の調整は難。胴部：直線的に外傾。外面部回転擦で。底部：中位が膨らみます。外縁中位回転擦で。下位斜位差削り。回転擦で。	28	
97	H-31 埋土 羽羽	瓶と思 土器	① - ② [12.0] ③ -	①中段 ②二輪化粧 ③5.5-1.5 黄緑 底部	胴部：中位が膨らみます。外縁中位回転擦で。下位斜位差削り。回転擦で。	6	はかね
98	H-31 陶内 环	瓶と思 土器	① [23.6] ② [15.5] ③ -	①中段 ②二輪化粧 ③5.5-1.5 黄緑 [口縁1/4]	口縁：くの字形に折れ現る外反。回転擦で。下半屈曲部に指痕があり。脚部：膨らみ少ない。外縁縦、斜位差削り、内面削り。輪縁無痕残る。	31	はかね
99	H-32 陶内 环	瓶と思 土器	① [109] ② 36 ③ 50	①中段 ②二輪化粧 ③5.5-1.5 黄緑	瓶底整形。口縁：脚部：丸みを帯びる体部から口縁外傾。回転擦で。底部：回転差切り。	40	
100	H-32 埋土 环	瓶と思 土器	① [164] ② 77 ③ 68	①中段 ②二輪化粧 ③5.5-1.5 黄緑	瓶底整形。器内に裏剥きにより黑色処理。口縁：体部：底盤が丸みを帯びる深く、底盤から口縫わざずに外反。底部：やや高い高台を貼付後、回転擦で調整。調査は難。	18	内黒縫
101	H-32 床直 环	瓶と思 土器	① [154] ② 52 ③ -	①中段 ②二輪化粧 ③5.5-1.5 黄緑	瓶底整形。清け付け施術。口縁：体部：丸みを帯びる体部から口縫わざずに外反。底部：静止系差切り。	6	
102	H-32 床直 环	瓶と思 土器	① [156] ② 56 ③ -	①中段 ②二輪化粧 ③5.5-1.5 黄緑	瓶底整形。清け付け施術。口縁：体部：丸みを帯びる体部から口縫わざ。	31	
103	H-32 床直 高台輪	瓶と思 土器	① - ② 26 ③ [8.2]	①中段 ②二輪化粧 ③5.5-1.5 黄緑	瓶底整形。清け付け施術。口縁：やや高い高台を貼付後、回転擦で調整。調査は難。	29	
104	H-32 床直 小鉢	瓶と思 土器	① 47 ② 35 ③ 37	①中段 ②良好 ③5.5-1.5 黄緑	瓶底整形。清け付け施術。体部：底盤：やや丸みを帯びる部分から口縫わざに外反。底部：右回転差切り。	19	内面黒色物 付着
105	H-32 床直 灰	瓶と思 土器	① - ② [12.7] ③ -	①中段 ②二輪化粧 ③5.5-1.5 黄緑	瓶底整形。清け付け施術。体部：底盤：やや丸みを帯びる上位。肩部：丸みを帯びる。外縁下位回転差削り。上位斜位差削り。	7	
106	H-33 陶内 羽羽	瓶と思 土器	① [200] ② [16.4]	①中段 ②二輪化粧 ③5.5-1.5 黄緑	口縁部：内傾。回転擦で。脚部：瓶底三角形で、やや上向きに付す。貼付後丁寧に回転擦で。胴部：やや膨らむ。外縁中位下位斜位差削り。輪縁無痕残る。	96	
107	H-34 埋土 环	瓶と思 土器	① [102] ② 27 ③ [7.0]	①中段 ②二輪化粧 ③5.5-1.5 黄緑	瓶底整形。内面全体に付着者。口縁：体部：直線的な体部から口縫わざに外反。底部：静止系差切り。	覆土	内面覆付着
108	H-34 埋土 环	瓶と思 土器	① 122 ② 21 ③ 68	①中段 ②瓶真 ③5.5-1.5 黄緑	瓶底整形。清け付け施術。口縁：体部：底盤が丸みを帯びる上位。肩部：丸みを帯びる。外縁下位回転差削り。上位斜位差削り。	H-45- 56	
109	H-34 陶内 羽羽	瓶と思 土器	① - ② [14.4]	①中段 ②二輪化粧 ③5.5-1.5 黄緑	口縁部：内傾。回転擦で。脚部：瓶底三角形で、ほは水平に付く。脚部：直線的に外傾。外縁下位回転擦で。輪縁無痕残る。	85	
110	H-35 床直 环	瓶と思 土器	① 99 ② 26 ③ -	①中段 ②二輪化粧 ③5.5-1.5 黄緑	瓶底整形。全体に器内削り。口縁：体部：丸みを帯びる体部から。口縫わざに外反。底部：右回転差切り。	7	
111	H-35 床直 环	瓶と思 土器	① [104] ② 25 ③ 56	①中段 ②二輪化粧 ③5.5-1.5 黄緑	瓶底整形。口縁：体部：底盤：直線的に外反。底部：突出部。右回転差切り。	19	はかね
112	H-35 床直 高台輪	瓶と思 土器	① 110 ② 29 ③ 64	①中段 ②二輪化粧 ③5.5-1.5 黄緑	瓶底整形。口縁：体部：底盤や外縁。内面回転擦で。底部：やや高い高台を貼付後、回転擦で調整。	34	

番号	生息環境	種名	①口仔	②都那	③武羅	④船	⑤沙	⑥底	⑦成	⑧造道	器種の特徴・整形・調整技術	登録番号	備考
113	H-25 礁内	須德野 土螺	○	-	(124)				口縁：くの字状に外反。内外面回転飾で、指揮圧痕有。脇部：上位から要らん型。	51ほか			
114	H-26 礁底	須德野 环	○	(130)	②	39	○	70	口縁：2種類化端	3にない型。(破裂)	内面横張り。	14ほか	
115	H-26 礁内	須德野 环	○	124	②	26	○	73	口縁：2種類化端	3にない型。	内面横張り。底部：内面横張りで、底部：脇部を切り、斜面系切り。	18	
116	H-36 礁底	須德野 高台輪	○	108	②	46	○	63	中軸：2種類化端	3にない型。	内面横張り。底部：内面横張りで、底部：脇部を切り、斜面系切り。	3	内部保存着
117	H-36 礁底	須德野 高台輪	○	(156)	②	59	○	85	中軸：2種類化端	3にない型。	内面横張り。底部：内面横張りで、底部：脇部を切り、斜面系切り。	9	
118	H-36 礁内	須德野 土螺	○	256	②	85	○	85	中軸：2種類化端	3にない型。	内面横張り。底部：内面横張りで、底部：脇部を切り、斜面系切り。	24ほか	
119	H-37 礁底	須德野 环	○	86	②	21	○	44	中軸：2種類化端	3にない型。	内面横張り。底部：内面横張りで、底部：脇部を切り、斜面系切り。	13ほか	
120	H-37 礁底	須德野 环	○	(96)	②	18	○	58	中軸：2種類化端	3にない型。	内面横張り。底部：内面横張りで、底部：脇部を切り、斜面系切り。	25	
121	H-37 礁底	須德野 环	○	(75)	②	13	○	52	中軸：2種類化端	3にない型。	内面横張り。底部：内面横張りで、底部：脇部を切り、斜面系切り。	覆土	
122	H-37 礁内	須德野 环	○	97	②	30	○	50	中軸：2種類化端	3にない型。	内面横張り。底部：内面横張りで、底部：脇部を切り、斜面系切り。	1	底支撑に被 さって出土
123	H-27 礁内	須德野 环	○	103	②	26	○	56	中軸：2種類化端	3にない型。	内面横張り。全体から脇部厚。	2	
124	H-37 礁底	須德野 环	○	(143)	②	43	○	68	中軸：2種類化端	3にない型。	内面横張り。底部：右回転系切り。	振り方	
125	H-27 礁底	須德野 高台輪	○	114	②	23	○	58	中軸：2種類化端	3にない型。	内面横張り。底部：右回転系切り。	62	
126	H-27 礁底	須德野 高台輪	○	144	②	53	○	75	中軸：2種類化端	3にない型。	内面横張り。底部：右回転系切り。	41	
127	H-27 礁底	須德野 高台輪	○	96	②	40	○	54	中軸：2種類化端	3にない型。	内面横張り。底部：右回転系切り。	42ほか	保存着
128	H-27 礁底	須德野 土螺	○	-	②	(105)	○		中軸：2種類化端	3にない型。	内面横張り。底部：右回転系切り。	32	
129	H-28 礁底	須德野 环	○	(120)	②	47	○	54	中軸：2種類化端	3にない型。	内面横張り。底部：右回転系切り。	2	
130	H-28 礁底	須德野 土螺	○	(190)	②	182	○	80	中軸：2種類化端	3にない型。	内面横張り。底部：右回転系切り。	3	
131	H-28 礁底	須德野 大要	○	(210)	②	73	○	50	中軸：2種類化端	3にない型。	内面横張り。底部：右回転系切り。	1	
132	H-40 礁底	須德野 环	○	(112)	②	31	○	51	中軸：2種類化端	3にない型。	内面横張り。底部：右回転系切り。	床下覆	
133	H-40 礁底	須德野 环	○	(116)	②	12	○	60	中軸：2種類化端	3にない型。	内面横張り。底部：右回転系切り。	21	
134	H-40 礁底	須德野 高台輪	○	(183)	②	80	○	75	中軸：2種類化端	3にない型。	内面横張り。底部：右回転系切り。	42ほか	
135	H-40 礁底	須德野 羽羽	○	(115)	②	25	○	50	中軸：2種類化端	3にない型。	内面横張り。底部：右回転系切り。	46ほか	
136	H-40 礁底	須德野 羽羽	○	(240)	②	55	○	60	中軸：2種類化端	3にない型。	内面横張り。底部：右回転系切り。	57ほか	
137	H-41 礁底	須德野 环	○	102	②	25	○	66	中軸：2種類化端	3にない型。	内面横張り。底部：右回転系切り。	7 土坑状内	
138	H-41 礁底	須德野 环	○	104	②	20	○	66	中軸：2種類化端	3にない型。	内面横張り。底部：右回転系切り。	31 土坑状内	
139	H-41 礁底	須德野 环	○	109	②	23	○	62	中軸：2種類化端	3にない型。	内面横張り。底部：右回転系切り。	43 土坑状内	
140	H-41 礁底	須德野 环	○	99	②	25	○	60	中軸：2種類化端	3にない型。	内面横張り。底部：右回転系切り。	8 土坑状内	
141	H-41 礁底	須德野 环	○	(88)	②	23	○	50	中軸：2種類化端	3にない型。	内面横張り。底部：右回転系切り。	9 土坑状内	
142	H-41 礁底	須德野 环	○	98	②	28	○	58	中軸：2種類化端	3にない型。	内面横張り。底部：右回転系切り。	13 土坑状内	
143	H-41 礁底	須德野 环	○	98	②	30	○	56	中軸：2種類化端	3にない型。	内面横張り。底部：右回転系切り。	14 土坑状内	
144	H-41 礁底	須德野 环	○	104	②	27	○	60	中軸：2種類化端	3にない型。	内面横張り。底部：右回転系切り。	15 土坑状内	
145	H-41 礁底	須德野 环	○	(148)	②	38	○	63	中軸：2種類化端	3にない型。	内面横張り。底部：右回転系切り。	10 土坑状内	
146	H-41 礁底	須德野 环	○	120	②	42	○	58	中軸：2種類化端	3にない型。	内面横張り。底部：右回転系切り。	41	
147	H-41 礁底	須德野 环	○	(142)	②	45	○	75	中軸：2種類化端	3にない型。	内面横張り。底部：右回転系切り。	22ほか	土坑状内
148	H-41 礁底	須德野 高台輪	○	138	②	53	○	67	中軸：2種類化端	3にない型。	内面横張り。底部：右回転系切り。	12	
149	H-41 礁底	須德野 高台輪	○	133	②	47	○	61	中軸：2種類化端	3にない型。	内面横張り。底部：右回転系切り。	11ほか	
150	H-41 礁底	須德野 高台輪	○	128	②	49	○	61	中軸：2種類化端	3にない型。	内面横張り。底部：右回転系切り。	27	

番号	出土遺物 種類	種類名	①口径 ②底径 ③底深 ④造出	①船上 ②縁成 ③縁調 ④造出	器物の特徴・整形・調整技術	登録番号	備考
151	H-41 床直	瓶	①[96] ② 41 ③[62]	①中粒 ②酸化端 ③明治 ④縁成	瓶體整形。体部・丸く内湾。口縁部・外縁。底部・高台貼り付け。回転撚で。	36はか	土坑状内
152	H-41 床直	瓶	①[100] ② 22 ③[52]	①中粒 ②酸化端 ③明治 ④縁成	瓶體整形。高台貼り付け後、回転撚で。底部・内・外面回転撚で。	32	土坑状内
153	H-41 床直	瓶	①[75] ② - ③ -	①中粒 ② - ③縁成 ④縁成	瓶體整形。底部・丸く内湾。口縁部・外縁。高台貼り付け後斜削で。	26	土坑状内
154	H-41 床直	瓶	①[156] ②(118) ③小形	①中粒 ②酸化端 ③明治 ④縁成	口縁部・短く外縁。肩・一部部直に気味に立ち上がる。口縁部・胴部・上手斜削で。下手部斜削・斜位窓削り。	45はか	
155	H-42 床直	瓶	①[96] ② 27 ③[58]	①中粒 ②酸化端 ③明治 ④縁成	瓶體整形。体部・口縁部ハハ字に外縁。口縁部紙く外反、内・外斜削で。底部・右斜削直切り。	21	
156	H-42 床直	瓶	① - ② - ③羽根	①中粒 ②酸化端 ③明治 ④縫合部小片	瓶體整形。口縁部・短く直反、谷部丸み。胴部・だれた台形状。脚部下端で。脚部・直角斜削り。	15	
157	H-43 床直	瓶	①[108] ② [32] ③ -	①中粒 ②良好 ③縁成 ④縁成	体部・穂の骨、口縁部・短く内湾。口縁部・横撚で。体部・底部・斜位窓削り。	47	
158	H-43 床直	瓶	①[109] ② 37 ③ -	①中粒 ②良好 ③縁成 ④縁成	体部・穂く内彌。口縁部・短く内彌。口縁部・横撚で。体部・底部・斜位窓削り。口縁部・体部内縁斜削付着物。	66	
159	H-43 床直	瓶	①[106] ② 33 ③ -	①中粒 ②良好 ③縁成 ④縁成	体部・穂く弯曲。口縁部・直立。口縁部・横撚で。体部・底部・斜位窓削り。口縁部外縁部吸収。	68はか	
160	H-43 床直	瓶	①[100] ② 25 ③ -	①中粒 ②良好 ③縁成 ④縁成	瓶體整形。身部・浅く、やや扁平。口縁部・外傾して聞く。口縁部斜削で。大井部・脚部下半部・横位手持ち差削り。	14	
161	H-43 床直	瓶	① - ② 制帽82 ③羽根	①中粒 ②良好 ③縁成 ④縫合部	瓶體整形。底部・不定端な平底。胴部・直側に外縁。肩部の字状。脚部斜削で。底部・胴部下半部・横位手持ち差削り。	10	
162	H-43 床直	瓶	① - ② 制帽165 ③ -	①中粒 ②良好 ③縁成 ④縫合部	瓶體整形。肩部・脚部偏球形。大井部・筋状板閉塞部。胴部・上半手平底状。下半手斜削り。	75	
163	H-43 床直	瓶	①[245] ②(35.0) ③ -	①中粒 ②良好 ③縁成 ④縁成	口縁部・短く外反。上半枝をもつ。胴部・丸く内彌。口縁部回転撚で。胴部・外縁半手平底型。内縁斜削状で。	27はか	
164	H-43 内圓	瓶	①[10] ② - ③ -	①中粒 ②良好 ③縁成 ④縫合部	空筒・断面台形状。透孔・約60mm大円孔。時計回り方向に切り込み。外縁・筋目14本。内縁・縦・斜位切削で。	7	
165	H-44 覆土 坏	瓶	①[107] ② 26 ③[68]	①中粒 ②酸化端 ③黄黒端 ④縫合部	瓶體整形。体部・口縁部・穂く弯曲。口縁部回転撚で。底部右回転切り。	2	
166	H-44 覆土 坏	瓶	①[100] ② 26 ③[60]	①中粒 ②酸化端 ③縫合部 ④縫合部	瓶體整形。肩部・下半部膨らむ。口縁部・外縁。口縁部・回転撚で。底足右回転切削で。口縁部右回転切り。	21	
167	H-44 覆土 坏	瓶	①[100] ② 23 ③[70]	①中粒 ②酸化端 ③縫合部 ④縫合部	瓶體整形。底部・口縁部・外傾。口縁部・回転撚で。底部・右回転切り。つづり窓、影部・歪む。	33	
168	H-44 覆土 坏	瓶	①[146] ② 50 ③[76]	①中粒 ②酸化端 ③縫合部 ④縫合部	瓶體整形。底部・穂く腫脹。口縁部・外傾。底部・短く台形状の高台貼り付け。口縁部・回転撚で。腰部・底部・高台貼り付け後、回転撚。	16	
169	H-44 覆土 坏	瓶	① - ②(21.6) ③ -	①中粒 ②酸化端 ③縫合部 ④縫合部	倒部・直立気味。中位で若干膨らむ。脚部・短く、断続的に字状。倒部より内縁・設置部・制御部・斜位方の窓削り。内縁回転撚で。	26	
170	H-44 覆土 坏	瓶	①[150] ②(22.6) ③[142]	①中粒 ②酸化端 ③縫合部 ④縫合部	口縁部・短く外反。倒部・中位で膨らむ。底部・半直・横位地で調整。	23はか	
171	H-44 内圓 高台	瓶	① - ② - ③[102]	①中粒 ②酸化端 ③縫合部 ④縫合部	瓶體整形。底部・直立。口縁部・横位。底部・短く台形状の高台貼り付け。口縁部・回転撚で。腰部・底部・高台貼り付け後、回転撚。	1	
172	H-45 床直	瓶	① - ② 27.7 ③[93]	①中粒 ②良好 ③明治 ④縫合部	脚部・外反して聞く。『コ』の必要脚部。内・外縁・横撚で。	37	
173	H-45 床直	瓶	① - ② - ③ -	①中粒 ②酸化端 ③縫合部 ④縫合部	脚部・断面・角形。張り出し水平。口縁部・短く内傾。口唇部平坦。脚部・斜位付。胴部・回転撚で。つづり窓・調整具共に丁寧。	30	
174	H-46 覆土 坏	瓶	①[102] ② 46 ③[57]	①中粒 ②酸化端 ③縫合部 ④縫合部	瓶體成形。体部・口縁部・外縁。口縁部・回転撚で。底部・右回転切り。縦・横位置調整。	右回	3
175	H-46 覆土 坏	瓶	①[100] ② 33 ③[50]	①中粒 ②酸化端 ③縫合部 ④縫合部	瓶體成形。体部・外縫・中位膨らむ。下手部・若干括れ。口縁部・回転撚で。腰部・右斜削直切り。	18	
176	H-46 覆土 坏	瓶	① - ② (9.6) ③ -	①中粒 ②酸化端 ③縫合部 ④縫合部	縦・横々くり。口縁部・内縁・口縁部・半直。脚部・断面台形状。張り出し・内縁・小窓。口縁部・斜位付後、回転撚で。胴部・外縁横・斜位窓削り。内縁回転撚。	14	
177	H-46 覆土 坏	瓶	① - ② (17.1) ③ -	①中粒 ②酸化端 ③縫合部 ④縫合部	縦・横々くり。倒部・口縁部・直立。倒部・小形。断面三角形。張り出し・内縁・小窓。口縁部・内縁・上半手回転撚で。内縁回転切削で。外縁回転・つづり窓削り。	26	
178	H-47 覆土 坏	瓶	①[88] ② 18 ③[62]	①中粒 ②酸化端 ③縫合部 ④縫合部	瓶體成形。体部・口縁部・外縁。体部・浅く。口縁部回転撚で。底部・回転切り。	覆土	
179	H-47 覆土 坏	瓶	① - ② (3.2) ③[8.4]	①中粒 ②良好 ③縫合部 ④縫合部	高台部・高く、直立。虎虎山1号寮式併用。体部・内縁をさきけ付ける脚部・外縁・回転撚で。	20	
180	H-47 覆土 坏	瓶	①[300] ② (9.8) ③ -	①中粒 ②酸化端 ③縫合部 ④縫合部	口縁部・短く外反。倒部・直立気味。口縁部・半直。口縁部・回転撚で。脚部・回転撚で。やや内縁。	19はか	
181	H-48 覆土 坏	瓶	①[136] ② (3.8) ③ -	①中粒 ②酸化端 ③縫合部 ④縫合部	瓶體整形。体部・下半部膨らみ、上半部外縁。口縁部・穂く外反して聞く。口縁部・回転撚で。	8	
182	H-48 覆土 坏	瓶	①[154] ② (6.2) ③ -	①中粒 ②酸化端 ③縫合部 ④縫合部	体部・中位で膨らみ、上半部外縁。口縁部・わざかに外反。口縁部・回転撚で。底部・高台貼り付け。脚部・回転撚で。筋り付け後の調整鋸。	1はか	
183	H-48 覆土 坏	瓶	①[246] ②(12.6) ③ -	①中粒 ②酸化端 ③縫合部 ④縫合部	口縁部・短く直反。口唇部丸み。胴部・肩部付近で膨らむ。筋つくり。口縁部・回転撚で。胴部・外縁・横位窓削り。内縁・回転撚で。腰部・内縁直。	5	
184	H-51 龜内 坏	瓶	① 85 ② 13 ③ 51	①中粒 ②酸化端 ③縫合部 ④縫合部	瓶體整形。体部・浅い扭状。腰部・若干丸み。口縁部・回転撚で。肌部・厚薄、回転撚等。	15	
185	H-51 龜内 坏	瓶	① [84] ② 20 ③ 41	①中粒 ②酸化端 ③縫合部 ④縫合部	瓶體整形。体部ハハ字に外縁。底部・小さく。やや突出。口縁部・回転撚で。右回転・左回転直切り。	龜内	
186	H-51 龜内 坏	瓶	① 87 ② 33 ③ 57	①中粒 ②酸化端 ③縫合部 ④縫合部	瓶體整形。体部・高台部の形態186に同。口縁部・回転撚で。底部・高台貼り付け後、回転撚。	10	
187	H-51 龜内 坏	瓶	① 92 ② 36 ③ 57	①中粒 ②酸化端 ③縫合部 ④縫合部	瓶體整形。体部・高台部の形態186に同。口縁部・回転撚で。底部・高台貼り付け後、回転撚。	11	
188	H-51 性穴	瓶	① 137 ② 64 ③ 80	①中粒 ②酸化端 ③縫合部 ④縫合部	瓶體整形。体部・下半部膨らみ、上半部ハハ字に外縁。高台部・ハハ字状で、やや高い。口縁部・回転撚で。底部・高台貼り付け、回転撚。	12	部分的に 瓶底

番号	出土位置	層種名	①口縁	②器高	③底径	④船上	⑤焼成	⑥色調	⑦造形度	器種の特徴・整形・調査技術	登錄番号	備考
189	H-54 床直	土器器 環	① 109 ③ -	② 3.4	③ -	①細粒 ②良好 ③明希	④2/3	⑤ -	⑥ -	尖り気味の丸底のため体部から口縁が短く内張する。口縁と体部の間は弱い接合となる。外面：口縁部横撫で、体部皺削り。内面：無。	-	
190	H-54 床直	須恵器 環	① 110 ③ -	② 3.0	③ -	①細粒 ②焼元輪	③ -	⑤ -	⑥ -	平底から浅い体部が直線的に開いて立ち上がる。内・外面：輪縁整形撫で、底部：鋸削り。	-	
191	H-54 床直	須恵器 環	① 164.0 ③ -	② 8.0	③ -	①細粒 ②選元輪	③灰白	⑤ -	⑥ -	前部から鋸削外反し、口縁が更に聞く。外面：口縁部横撫で、側上部牙縁き口を磨いて消す。内面：口縁部横撫で、側上部指頭撫による整形。	-	
192	B-1 P4	土器器 環	① 98.3 ③ -	② 3.0	③ -	①中粒 ②焼化端	③橙	⑤ -	⑥ -	底部：体部・内溝、口縁部：短く内傾。口縁部：横撫で。底部：体部・内溝、口縁部：横撫で。P4復土	P4復土	
193	B-1 P18	土器器 環	① 104.1 ③ -	② 2.3	③ -	①中粒 ②良好	③明希	⑤ -	⑥ -	口縁部：変換凸接合成、体部・内溝。口縁部：横撫で。体部：外側面は鋸削り、内面放射状整形。	P18復土	
194	B-1 P18	土器器 環	① 100.3 ③ -	② 2.3	③ -	①中粒 ②良好	③橙	⑤ -	⑥ -	口縁部：変換凸接合成、外側：体部・横く内溝。口縁部：横撫で。底部：外側面鋸削り。	P18復土	
195	T-2 床直	土器器 環	① 111.2 ③ -	② 3.0	③ -	①細粒 ②良好	③橙	⑤ -	⑥ -	丸く深い丸底のため体部から口縁が短く内張する。口縁と体部の間は弱い接合による。口縁部：口縁部横撫で、体部：鋸削り。	8	ほか
196	T-2 床直	土器器 環	① 213.3 ③ -	② 4.9	③ -	①中粒 ②良好	③橙	⑤ -	⑥ -	頭部が鋸削外反し、口縁は直線的に立ち上がる。外面：口縁部横撫で。側上部指頭接合による。内面：口縁部横撫で。	3	ほか
197	T-3 床直	須恵器 環	① 92.3 ③ 5.8	② 2.0	③ -	①中粒 ②焼化端	③明希	⑤ -	⑥ -	平底から浅い体部が直線ややかに済曲する。外・外面：輪縁整形撫で。底部：回転系切り未調査。	3	
198	T-3 床直	須恵器 環	① 96.3 ③ 5.1	② 2.7	③ -	①細粒 ②焼化端	③橙	⑤ -	⑥ -	径のやや小さい丸底から浅いの体部が直線ややかに済曲して立ち上がる。内・外面：輪縁整形撫で。	30	
199	T-3 床直	須恵器 環	① 108.3 ③ 6.3	② 3.2	③ -	①細粒 ②焼化端	③明希	⑤ -	⑥ -	下部のみをつむぎの体部から、口縁がわざかに外反して開く。内・外面：輪縁整形撫で、底部：回転系切り未調査。	11	
200	T-4 床直	須恵器 環	① 108.3 ③ 5.3	② 2.9	③ -	①中粒 ②焼化端	③にい黄	⑤ -	⑥ -	ややや径の平底から浅いの体部が直線ややかに済曲して立ち上がる。内・外面：輪縁整形撫で、底部：回転系切り未調査。	12	
201	T-4 撫り方	須恵器 環	① 102.3 ③ 5.3	② 3.5	③ -	①中粒 ②焼化端	③にい黄	⑤ -	⑥ -	ややや径の平底から体部が直線やかに内張して聞く。口縁はこくわざかに反する。内・外面：輪縁整形撫で、底部：回転系切り未調査。	13	ほか
202	T-5 埋理	須恵器 環	① 112.3 ③ 5.7	② 3.7	③ -	①中粒 ②焼化端	③にい黄	⑤ -	⑥ -	平底から体部がやかに内張し、口縁は外反して聞く。内・外面：輪縁整形撫で。底部：回転系切り未調査。	7	
203	T-5 埋理	須恵器 環	① 122.0 ③ 7.2	② 5.0	③ -	①細粒 ②焼化端	③明希	⑤ -	⑥ -	内側に味の体部から、口縁がわざかに外反して聞く。内・外面：輪縁整形撫で。底部：回転系切り後、高台を付した後。	1	ほか
204	W-1 埋土	土器器 環	① 100.3 ③ -	② 3.0	③ -	①細粒 ②良好	③橙	⑤ -	⑥ -	丸底丸底の浅い体部から口縁が短く内張する。外面：口縁部横撫で。底部：回転系切り未調査。	2層・橘	
205	W-1 埋土	須恵器 環	① 100.3 ③ 5.0	② 3.5	③ -	①細粒 ②焼化端	③黄	⑤ -	⑥ -	径のやや小さい丸底から体部が紙やかに内張る。内・外面：輪縁整形撫で、底部：回転系切り未調査。	2層・橘	
206	W-1 埋土	須恵器 環	① 92.3 ③ 5.9	② 2.3	③ -	①細粒 ②焼化端	③橙	⑤ -	⑥ -	底ややく済曲した浅い体部から、口縁がわざかに外反する。内・外面：輪縁整形撫で。底部：回転系切り未調査。	63	
207	W-1 埋土	須恵器 環	① 102.3 ③ 5.2	② 3.1	③ -	①細粒 ②焼化端	③黑	⑤ -	⑥ -	底ややく済曲した浅い体部から、口縁がわざかに内張る。内・外面：輪縁整形後暗黒。底部：高台を付した後。	59	
208	W-1 埋土	須恵器 環	① 140.2 ③ 7.9	② 5.6	③ -	①粗粒 ②焼化端	③橙	⑤ -	⑥ -	底ややく内張する体部から、口縁がわざかに外反して聞く。高台：ハガの間に聞く。内・外面：輪縁整形撫で。底部：高台を付した後撫。	2層・橘	
209	W-1 埋土	須恵器 環	① 154.2 ③ 5.7	② 5.7	③ -	①粗粒 ②焼化端	③橙	⑤ -	⑥ -	体部基部や内側に開く。口縁が外反して聞く。底部：ハガの間に聞く。内・外面：輪縁整形撫で。底部：高台を付した後撫。	28	ほか
210	W-1 埋土	須恵器 環	① 190.3 ③ 5.9	② 13.2	③ -	①粗粒 ②焼元輪	③灰白	⑤ -	⑥ -	頭部：直線的に立ち上がり、中粒。底部：口縁部横撫で。頭部：回転系切りによる撫。	8	ほか
211	D-9 埋土	須恵器 環	① 96.3 ③ 5.7	② 2.2	③ -	①中粒 ②焼化端	③にい黄	⑤ -	⑥ -	頭部：直線的。体部：下部若干膨らむ。口縁部：外傾。口縁部：回転撫で。底部：回転系切り。体部：處理。浅い粗削。	1	
212	D-14 床直	須恵器 環	① 100.3 ③ 5.8	② 2.1	③ -	①中粒 ②焼化端	③灰白	⑤ -	⑥ -	頭部：直線的。各部分に外傾。口縁部：やや内厚。口縁部：回転撫で。底部：回転系切り。	1	
213	D-21 底面	須恵器 環	① 120.3 ③ 5.9	② 5.0	③ -	①中粒 ②焼元輪	③灰白	⑤ -	⑥ -	底ややく内張する体部から、口縁が外反して聞く。内・外面：輪縁整形撫で。底部：底面：灰白。	1	
214	D-21 底面	須恵器 環	① 105.3 ③ 5.0	② 3.4	③ -	①細粒 ②焼化端	③灰白	⑤ -	⑥ -	体部基部や内側に開く。口縁がわざかに内張して聞く。内・外面：輪縁整形撫で。底部：回転系切り未調査。	1	
215	D-21 底面	須恵器 環	① 111.4 ③ 6.7	② 4.7	③ -	①細粒 ②焼化端	③にい黄	⑤ -	⑥ -	体部基部や内側に開く。口縁はくわざかに反する。内・外面：輪縁整形撫で。底部：底面：三角の高台を付した後、周辺部撫。	2	
216	D-24 埋土	須恵器 環	① 111.0 ③ 6.4	② 5.0	③ -	①粗粒 ②焼化端	③にい黄	⑤ -	⑥ -	下部に丸みをつける体部から、口縁が紙やかに済曲。口縁がわざかに外反する。内・外面：輪縁整形撫で。底部：前面台形の高台を付した後。撫。	覆土一括	
217	D-22 埋土	須恵器 環	① 98.3 ③ 5.1	② 2.8	③ -	①細粒 ②焼化端	③灰白	⑤ -	⑥ -	下部：やや丸みをつける体部から、口縁が外反して聞く。内・外面：輪縁整形撫で。底部：回転系切り未調査。	1	
218	D-40 須恵器 環	① 190.3 ③ 4.8	② 2.7	③ -	①中粒 ②焼化端	③明希	⑤ -	⑥ -	浅いの体部が底やかに内張して聞く。内・外面：輪縁整形撫で。底部：回転系切り未調査。	10		
219	D-40 須恵器 環	① 100.3 ③ 5.7	② 4.5	③ -	①中粒 ②焼化端	③灰白	⑤ -	⑥ -	体部の内骨氣体に聞く。内・外面：輪縁整形撫で。底部：輪面白三の高台を付した後。撫。	27		
220	D-42 須恵器 環	① 84.3 ③ 5.4	② 2.0	③ -	①細粒 ②焼化端	③にい黄	⑤ -	⑥ -	(A)底盤が直線的に聞く。内・外面：輪縁整形撫で。底部：回転系切り未調査。	覆土一括		
221	X273 Y138	壺	① 21.0 ③ 13.0	② 3.72	③ -	①中粒 ②焼化端	③明希	⑤ -	⑥ -	頭部：圓。口縁部：外反。肩部：底く済曲。肩部：最大径。底盤：平底。外面：錐底土壁を覗き。内面：口縁部：頭部底盤土壁主体部覗き。	一括	
222	表持	須恵器 壺	① 124.3 ③ 6.8	② 4.3	③ -	①細粒 ②焼化端	③にい黄	⑤ -	⑥ -	直線的に聞く体部から。口縁がわざかに外反する。内・外面：輪縁整形撫で。底部：高台を付した後。撫。内面撫着。	表土一括	

注) ①層は、「床直」：床面より10cm以内の層位からの検出、「埋土」：床面より10cm以上の層位からの検出の2段階に分けた。籠内の検出につづいては「籠内」と記載した。

②口径、器高の単位はcmである。現存値を()、復元値を[]で示した。

③船上は、繩紋(0.9mm以下)、中粒(1.0~1.9mm以下)、粗粒(2.0mm以上)とした。特徴的な鉢物が入る場合に鉢物名等を記載した。

④種類名については、輪縁使用のものを須恵器、輪縁不使用のものを土器器に分類した。

⑤焼成は、基本的に極良・良好・不良の三段階とした。ただし、須恵器について焼成化端焼成のものは「焼化端」と記載した。

⑥色調は土器外面で観察し、色名は新版標準土色帳（小山・竹原1976）によった。

Tab.12 古墳～奈良・平安時代石製品・土製品観察表

番号	出土遺構／層位	器種名	最大長	最大幅	最大厚	重さ	石材	遺存度	登録番号	備考
1	H-11 埋土	砥石	(6.6)	39	09	(41.2)g	流紋岩	1/2程度	覆土	小口面含む五面に研磨痕。裏面除く四面に擦痕。
2	H-32 埋土	砥石	(23)	(23)	(17)	10.2g	流紋岩	小片	C一括	調製紙。多面体。三面に研磨痕。一面擦痕。
3	H-37 掘り方	砥石	23	18	18	9.5g	流紋岩	小片	掘り方	調製紙。多面体。小口を含む五面に研磨痕。
4	H-40・42 埋土	砥石	(31)	(30)	18	18.2g	流紋岩	小片	覆土	調製紙。多面体。器底剥落。三面に研磨痕。
5	H-43 床面	砥石	(28)	(28)	(26)	20.8g	流紋岩	小片		調製紙。多面体。五面に研磨痕。一部条線状。
6	H-43 床面	砥石	(23)	(26)	(23)	10.6g	流紋岩	小片	83	調製紙。三角形状。各面研磨痕顯著。
7	H-43 床面	砥石	7.3	41	25	130g	流紋岩	長方形状	21	多面体。小口面を含め七面に研磨痕。研ぎ減り顕著。
8	H-43 埋土	砥石	(32)	(29)	(19)	21g	流紋岩	小片	A一括	調製紙。多面体。四面に研磨痕。一部刃部痕。
9	H-43 埋土	砥石	(22)	(21)	20	12g	流紋岩	小片	覆土	調製紙。多面体。五面に研磨痕。
10	H-43 掘り方	砥石	(4.3)	(4.5)	(2.7)	25g	角閃石 安山岩	小片	掘り方	調製紙。多面体。片側小口を含め、五面に研磨痕。片側端部工具痕断続。
11	H-43 埋土	砥石	(32)	(33)	(30)	24.8g	角閃石 安山岩	小片	B一括	調製紙。多面体。小口面を除く六面に研磨痕。
12	H-43 埋土	砥石	(4.0)	(4.3)	18	14.6g	角閃石 安山岩	小片	A一括	調製紙。多面体。小口を含め四面に研磨痕。
13	H-43 埋土	砥石	(4.2)	(5.0)	(2.0)	21.8g	角閃石 安山岩	小片	A一括	調製紙。多面体。研ぎ減りにより周縁円形化。一部刃部痕残。
14	H-45 貯藏穴	砥石	(18.3)	93	73	1870g	輝石 安山岩	2/3程度	P5内	荒砥。断面2面体。研ぎ減り顕著。器面被熱による色変すみあり。
15	表採	砥石	(11.5)	44	22	145g	流紋岩	2/3程度	-	片側小口面。四面に研磨痕。うち二面に条線状刃部痕。研ぎ減りによる四面形成。
16	表採	砥石	(34)	(28)	(17)	25.8g	流紋岩	小片	-	調製紙。片側小口面残。裏面を除く三面に研磨痕。
17	H-45 床面	凹石	7.7	83	48	180g	角閃石 安山岩	完形	74	孔径30mm、深さ15mm。上面周縁加工剥離痕。器面平滑。
18	H-26 龜内	凹石	27.8	231	181	10g	輝石 安山岩	完形	龜材	上面穿孔部平面形成。裏面2箇所に幅6mm～8mm、深さ20mm大の凹部を形成。
19	H-4 埋土	結節率	38		15	40.2g	滑石	完形	74	孔径7.5mm、断面台形。前面平滑に仕上げ。
20	表採	石製 模造品	35	26	04	6.7g	滑石	下端一部 欠損	-	有孔円板（単孔）。孔径18mm。
21	D-8 埋土	管玉	(1.9)	05	05	1.0g	碧玉製	完形	覆土	孔径0.2mm、両端部若干凹面形成。片側端部穿孔径やや幅広。
22	H-35 埋土	臼玉	1.0	1.0	0.2	0.4g	滑石製	完形	48	器一部剥離か。側面の調整やや難。片側平面穿孔部周辺わずかに削む。
23	B-1 P10	白玉	0.9	0.9	0.5	0.7g	滑石製	完形	P10覆土	側面中央部のみ、擦痕状剥離痕。両端部共に穿孔部に向かい穿む。
24	H-43 床直	円板状 石製品	(25)	(26)	14	13.4g	流紋岩	完形	92	砥石として使用？。周縁丸い。
25	H-45 埋土	円板状 土製品	46	47	16	38.4g	瓦転用	完形	36	平瓦転用。片側平面端部平滑。荒磨き調製。側面丸く削りだす。
26	H-30 床直	土鍤	(34)	11	09	2.7g	-	ほぼ完形	30	細身。側面に疣状らむ。穿孔径0.2mm、片側穿孔部断面稍円形狀。
27	H-30 埋土	土鍤	31	105	95	33g	-	完形	42	形態・調製26に似。側面中位膨らみ弱い。
28	H-37 床直	土鍤	4.9	16	16	128g	-	完形	63	大振り。外面彫状。穿孔径0.45mm。外表面で両端部、皺状。
29	H-32 床直	輪羽口	(6.8)	(37)	21	36.8g	-	先端部片	1	先端部被熱により黒色海綿状。S字状繊維混。地肌にぶい程。
30	H-32 埋土	輪羽口	(4.7)	(4.3)	17	29.6g	-	先端部片	D一括	32に同。
31	H-32 掘り方	輪羽口	(4.1)	(4.3)	19	31.2g	-	先端部片	掘り方	32に同。
32	H-34 埋土	輪羽口	(5.2)	(5.4)	23	63.5g	-	先端部片	覆土	器肌被熱による色調変化。灰色味帯びる。地肌・灰斑。白色粒混。
33	H-43 埋土	輪羽口	(4.3)	(5.1)	21	40.8g	-	先端部片	A一括	最先端部欠。被熱による色調変化。地肌・明黄褐。酸化鉄粒子混。白色粒を含む。

注) ①層位は、「床直」:床面より10cm以内の層位からの検出、「埋土」:床面より10cm以上の層位からの検出の2段階に分けた。龜内の検出については「龜内」と記載した。

②最大長・最大幅・最大厚の単位はcmである。現存値を()で記した。

Tab.13 鉄器観察表

番号	出土遺物/層位	器種名	最大長	最大幅	最大厚	重さ	遺存度	備考
1	H-11 埋土	刀子	13.6	0.8	0.4	14.2	刃部、茎 先端欠	両面。茎は長く、基部の幅が広め。
2	H-13 床	刀子	(10.0)	1.9	0.3	7.8	刃部先端欠	両面。刃部は、長年の中使用による研ぎ上げのためか、身幅が狭い。
3	H-13 床	刀子	(11.9)	1.2	0.5	11.4	茎欠・刃部 先端欠	両面は繊やかで、刃部と茎部の境が不明瞭。
4	H-27 掘り方	刀子	(14.9)	刃1.1	刃0.2	14.8	基部先端欠	茎先端欠、種部L字に張り出す。刃部背側平。茎部本質残。切先鋭利。茎幅0.3、茎長(6.5)。刃部長8.4。
5	H-44 埋土	刀子	(4.7)	1.2	0.3	8.0	刃部片?	背側平。刃部下端部欠損か。片側幅狭。
6	D-3 埋土	刀子	(10.0)	刃1.7	刃0.3	15.8	茎・刃部 先端欠	茎一部残。刃部背平。種部・刃区間にL字に折れる。切先幅0.6、刃長0.2、切先シャープ。
7	H-8 床	鐵	(9.2)	1.7	0.7	11.8	先端欠	身部長三角形状。先端欠。鉢被部は下端で肥厚し、一辺延の断面正方形となり、一側縦に断面正方形の溝が取り付く。鉢被長2.1
8	H-27 床直	鐵	(8.3)	刃1.5	刃0.3	13.6	鉢被・身部 先端欠	身部長三角形状。先端錐角。鉢被部断面長方形状。下に棒状の突起出る。鉢被長2.6、幅0.6、鉢被0.7。
9	H-26 埋土	不明	(5.9)	身0.8	身0.2	3.7	基部下端欠	身部薄い板状。基部断面方形状。
10	H-38 床直	鉢	(8.3)	刃0.65	刃0.2	5.5	刃部・基部 先端欠	刃部先端、断面扁平な三角形状。先端部わずかに反る。基部剥落鉢者、断面円形。基部幅0.3、厚0.2弱。
11	H-6 床	釘	(10.5)	0.9	0.5	15.0	先端欠	先端から中央付近までは、断面正方形。
12	H-40 床直	棒状	(6.8)	3	3	3.6	基部	断面方形状。上下両端部欠。
13	H-32 床直	筋鉢具	(16.8)	筋幅3.6	筋幅0.2	14.4	3/4程度	軸部先端欠。基部断面指円形状。
14	H-3 埋土	小札	7.0	2.1	0.1	1.0	ほぼ完形	上半部に7個、下半部に6個の織目孔。裏面に織縫状の痕跡。
15	H-27 床直	不明	(5.6)	-3.2	0.4	10.4	基部断面方形状。先端部不整形状に張り出す。厚0.2。半製品?。	
16	H-46 埋土	鑿・鑿?	(8.0)	-4.5	1.3	76.0	基部断面方形状、下端部付近でやや丸み。先端部薄い板状、先端に先端部T字形に張り出し上方に延びるか。先端部厚0.7。	
17	H-46 床直	鍤	(6.4)	2.3	0.2	16.6	刃部先端欠	先端部彎曲。断面薄い舌状。器面磨耗。
18	H-46 床直	鍤	(13.0)	2.3	0.3	31.0	刃部先端欠	柄装着部L字形に折れる。刃部弓張り状に済曲。器面研ぎ減り。
19	H-33 埋土	不明鉢 製品	(2.1)	0.5	0.15	0.5	小片	鉢製品。断面薄い板状。長軸先端部欠。

注) ①層位は、「床直」: 床面より10cm以内の層位からの検出、「埋土」: 床面より10cm以上の層位からの検出の2段階に分けた。

②最大長・最大幅・最大厚の単位はcmであり。重さの単位はgである。現存値を()で記した。

Tab.14 瓦観察表

番号	出土遺物 層位	器種名	①長さ 厚さ	②幅 色調	③遺存度	器種の特徴・整形・調整技術	登録番号	備考
1	H-29 窓内	平瓦	①(10.8) ② 2.2	④細粒 ⑤酸化端 ⑥純い緑 ⑦L字	一枚作り。凸面斜化木目叩き。凸面書き文字「毛」か。側面面取り3回。	3・5	織縫渠材	
2	H-29 窓内	平瓦	①(9.8) ② 1.8	④中粒 ⑤酸化端 ⑥L字 ⑦小片	一枚作り。凸面叩き整形。縫合の撫で内整形。	2	*	
3	H-26 窓内	平瓦	①(16.3) ② 1.7	④中粒 ⑤不真 ⑥灰白 ⑦1.6	一枚作り。広瀬端26.8、鷹頭幅2.1。凸面端・横棟叩き整形。側面面取り2回。凹面書き文字か。	2・6	*	
4	H-26 窓内	丸瓦	①(12.4) ② 1.4	④中粒 ⑤良好 ⑥灰黄黒 ⑦破片	凸面端・横棟の撫で整形。凹面端合わせ目底。白色粒子含。	41	*	
5	H-29 窓内	丸瓦	①(9.6) ② 2.2	④中粒 ⑤良好 ⑥灰 ⑦小片	手作り。凸面木目叩き。陰灰輪柱付。側面面取り3回。凹面書き文字「生」。白色粒子多含。	16	*	
6	H-44 窓内	丸瓦	①(8.4) ② 1.7	④中粒 ⑤良好 ⑥灰 ⑦成片	凸面端・横棟の撫で整形。側面面取り2回。	3	*	
7	H-44 窓内	丸瓦	①(36.5) ② 2.0	④中粒 ⑤慶元端 ⑥灰白 ⑦破片	広瀬端19.5、側面端1.7。手作り。凸面端叩き整形。縫・横棟の撫で内整形。側面面取り2回。凹面布合せ目底。黒色底物含。凹面一部赤色味。	25・37	*	
8	H-44 窓内	丸瓦	①(29.2) ② 1.9	④中粒 ⑤慶元端 ⑥灰 ⑦4.5	広瀬端19.3、側面端1.5。手作り。凸面端叩き整形。縫・横棟の撫で内整形。側面面取り3回。凹面布合せ目底。黒色底物含。凹面一部赤色味。	38	*	
9	H-44 窓内	丸瓦	①(38.7) ② 2.7	④中粒 ⑤良好 ⑥灰 ⑦1.6	側面端12.3、側面端2.0。手作り。凸面端叩きの撫で整形。側面面取り3回。凹面布合せ目底。白色粒子多含。凹面一部赤色味。	24・28	*	

注) ①層位は、「床直」: 床面より10cm以内の層位からの検出、「埋土」: 床面より10cm以上の層位からの検出の2段階に分けた。窓内の検出については「窓内」と記載した。

②長さ・厚さの単位はcmである。現存値を()で記した。

VI　まとめ

本遺跡は、推定上野国府城（木津 1998）の北縁辺部に位置する。今回の調査における主な成果は、①縄文時代晩期の遺構・遺物、②平安時代後期を主体とする集落跡、③大型掘立柱建物跡（B-1号）の検出、④古代の大溝（W-1号）である。まとめとして、これらの成果について述べ、今後の課題を明らかにしたい。

1 縄文時代の遺構・遺物について

元総社蒼海遺跡群の発掘調査では、これまで縄文時代の遺構・遺物として前期および中期の堅穴住居等が検出されている。分布域は蒼海遺跡群西部の染谷川左岸の台地上が中心で、北部の牛池川右岸の台地上にまで前期の遺構が確認されている。しかし東部地域の牛池川左岸の台地上で縄文時代の遺構が検出されたのは始めてであり、しかも、晩期の住居が検出されたのは予想外であった。県内の縄文晩期の遺跡の立地を見ると、河川沿いの低位段丘面上か、台地から沖積地への移行部分が多く、今回のように河川沿いの低地を後背地に持たない台地上での検出は珍しい。しかし、本遺跡の南約300mに位置する「元総社明神遺跡Ⅳ」の調査では、As-C下水田下位の砂礫層中から縄文時代末ないし弥生時代初頭の土器片がまとまって出土しており、あまり磨滅していないことから調査区近くに当該期の遺跡が存在することを想定していた。

今回検出した住居の時期は、晩期前半の安行3a～3b式、大洞B C式～C1式段階と考えられ、元総社明神遺跡Ⅳ出土の土器より古い。調査区出土の土器を見ても、晩期初頭や中葉に比定できる土器が認められず、形式的連続性がたどれない。ある意味單独遺跡のようで、ごく限られた時期に集落が営まれたことが想定できる。出土した土器の点数は少ないものの、限られた時期の大洞系のセット関係を示す良い資料と言える。しかし、集落を営んだ人々の系統や、何故単発的に集落が形成されたのかについては何も解明できていない。晩期末から弥生初期の遺跡の検出とともに今後の課題と言えよう。

2 古墳～奈良・平安時代の集落について

(1) 堅穴式住居跡の時期的傾向

本遺跡からは、古墳時代から奈良・平安時代にかけての堅穴式住居跡が計49軒検出された。ここでは、簡単にこれらの住居跡の時期的な傾向を概観したい。

右表に検出された住居跡の時期を示した。ここからは、集落の形成は7世紀代に入ってからみられ、8・9世紀代に入ると住居数は減少し、10世紀以降著しく増加するという傾向が看取される。

(2) 集落の性格とほかの遺構との関係

これらの住居跡から出土した遺物をみると、官衙関連と思われるような遺物は出土しておらず日常雑器類がほとんどで、集落の性格はいずれの時期においてもごく一般的なものと考えられる。

本遺跡における集落の在り方を、調査区南側で検出された大溝（W-1）の性格およびその存続時期と関連させて考えてみたい。W-1は昨年度の調査ですでに判明しているように、国府城を区画する可能性のある溝跡である。時期については明確ではないが、主軸方向からすると8世紀以降に掘削されたものと考えられ、As-B降

表1 堅穴式住居の時期と軒数

時期	軒数	遺構名
7世紀	8	H-3, 5, 11, 21, 22, 25, 43, 54
8世紀	1	H-16
9世紀	3	H-10, 15, 19
10世紀～	33	H-4, 6, 8, 9, 12, 13, 14, 17, 18, 20, 23 24, 26, 27, 29, 30, 31, 32, 33, 34, 35, 36 37, 38, 40, 41, 42, 44, 45, 46, 47, 48, 51
不明	4	H-7, 49, 50, 53

下時には埋没している。周辺の集落との関係で注目されるのは、溝縁部に住居の竈構築材として用いられた凝灰質砂岩の探査坑が存在することである。切り出された竈構築材は近隣の集落に供給されていたものと考えられ、この時にはすでに溝が本来の機能を失っていたものと考えられる。本遺跡で検出された10世紀以降の住居跡にも、この石材が用いられていると考えられる。つまり、本遺跡で10世紀以降に住居数が増加するという現象は、W-1の機能が失われ、本遺跡周辺の土地利用に制約がなくなったことに起因すると推測される。8~9世紀の住居が少ないこともW-1との関係で説明がつく。

官衙に関係する建物と考えられる大型掘立柱建物跡（B-1）については次節で述べるが、この建物と集落との関係についても若干ふれておきたい。B-1の時期については出土遺物や主軸方向から7世紀中葉頃が想定される。7世紀代の住居跡について前・後半に区分すると、7世紀前半：H-3, 21、7世紀後半：H-5, 11, 22, 25, 43, 54となり、住居跡がB-1の時期に前後する形で存在していることがわかる。このことは、次節で詳述するようにB-1が一時的な建物であったことの根拠のひとつとして考えたい。

（3）今後の課題

平成11年より継続的に調査が行われている元總社舊海遺跡群では、これまで多くの集落が調査されている。これららの調査で検出された遺構については、I期（～7世紀前半：律令期以前）、II期（7世紀後半～10世紀初頭：律令期）、III期（10世紀前半～：律令期以後）という時期区分により、集落の時期的傾向や広がり、変遷が探られている。本来、国府推定地およびその縁辺にあたる本遺跡群においては、その画期を国序・国衙の成立、衰退、廃絶に求め、そのなかで国府周辺に形成された集落の変遷を明らかにすべきであろう。しかし、国序・国衙に関する遺構はまったく検出されておらず、そのような時期区分を設定することは難しいのが現状である。そこで逆に集落の変遷のなかにその画期を求めるこにより、上野国における国府が整備される時期や国府周辺の景観形成と変化といった問題が探れないだろうか。これまでの調査状況を一瞥すると、7世紀代にはそれほど大きな変化は認められず、8世紀に入ってから集落の増加や建物方向の統一のいった変化が認められるため、この時期にひとつの画期があるようと思われる。また、本遺跡では10世紀以降に新たな集落の形成がみられるが、これは国府の衰退に伴う現象のひとつとも考えられ、この時期にもうひとつの画期があるのではないか。

今後これらのこととを証明するためには、これまでの調査で蓄積された資料の分析をおこない、本遺跡群での出土資料をもとにした編年から遺構の年代を精緻に見ていく必要があろう。このような作業をおこなうことにより、時期区分の見直しや細分化が可能となり、国府周辺における集落形成の推移、さらには国序・国衙の造営と衰微といった問題も見えてくるのではないだろうか。

3 大型掘立柱建物跡（B-1号）について

（1）B-1号掘立柱建物跡と周辺の遺構・遺跡

調査区北東より検出したB-1号掘立柱建物跡（以下B-1）は、桁行10間、梁行3間の側柱建物で、長さは桁行28.2m（94尺）、梁行5.9m（約20尺）ある超大型の建物である。確認できた柱穴は側柱のみで庇は付かず、間仕切もない。棟方向は東西で、主軸（桁行）方向は座標北から62° 東に傾く。柱穴の形状は、方形もしくは円形を呈し、柱間寸法は桁行で2.45~3.45m、梁行で1.70~2.20mと統一性はみられない。柱穴の規模も長辺が0.90~1.42mとなりばらつきがみられる。柱痕は確認できたものと不明瞭なものとがあり、柱痕が明瞭な柱穴では、掘り方に版築状に土を入れて搾き固めている（図4）。なお、この埋土から7世紀中葉ごろの土器器皿が出土している。柱抜き取りの痕跡や柱穴の重複などは見られず建替えはなされなかったとみられる。

この建物に付随もしくは関連すると考えられる遺構は今回の調査区からは検出できなかった（図1）。なお、平成13年度に本調査区の北側隣接地が調査されている（總社閑泉明神北II遺跡、齊木ほか2001）が、関連性をう

かがわせる遺構はやはり検出されていない。B-1の南側で検出されている大溝（W-1）は、国府域を区画する大溝の可能性がある。時期は、覆土の状況からAs-B軽石降下時に埋没していたことが確認されている。上限年代は不明だが、B-1とは走行方向を異にするため



図1 元総社蒼海遺跡群(9)・(10) 遺構配置図

並存は考えられない。ただ、本調査区の南東隅接地を調査した17年度の調査（元総社蒼海遺跡群7）では、B-1と方向を同じくする溝跡（W-3号）が検出されており、これがB-1に関連する可能性も考えられる。また、同時期と考えられる堅穴住居跡には、H-22が確認されており、似た主軸方向をとることなどから同時並存していたと考えられなくはない。しかし、B-1に近接しすぎること、また出土遺物には特筆すべきものはみられず、この時期の一般的な住居と考えられることから、B-1との並存・関連を考えるのは難しいだろう。

B-1の性格については、まずその規模から官衙関連の遺構であることは間違いない。また、方向が振れる建物であることから、国府関連施設そのものとはいがたく、これに先行する建物と考えるのが妥当であろう。掘り方埋土から出土した遺物（Fig.52-192~194）もこのことを示唆している。ただ現在のところ、確実にB-1に伴う遺構が検出されていないことから、この建物の性格を推測するのは困難である。このため、同様の規模を持つ建物跡を他遺跡から見出し、比較・検討したい。

(2) 10×3間の建物跡の検出例

『古代の官衙遺跡I』（奈良文化財研究所2003）によれば、全国の地方官衙建物1685棟のうち、10×3間の側柱建物は7棟確認されている。その割合は0.4%に過ぎず、非常に特異な平面形式の建物といえよう。規模からいえば、図2のとおり桁行が8間を超えると急に建物数が少くなり、その割合は全体の5%に満たない。このことからもB-1の桁行10間という規模は、全国の地方官衙建物のなかでも最大クラスといえよう。

今回、B-1と同じ10×3間の建物跡を2遺跡から計6棟（熊本県鞠智城1棟・島根県不入岡遺跡5棟）確認することができた。以下報告書等の記述から簡単にその概要をみてみたい。

①熊本県鞠智城（大田1993・1995、図3）

鞠智城は熊本県の北、鹿本郡菊鹿町の米原台地にその中心城を置く古代山城である。文献では『続日本紀』文武二年（698年）五月条にその名が初めてみられ、築城年代は大野城や基肆城と同じ天智天皇四年（665年）ごろと考えられている。規模は、土壘に囲まれた平坦部「内城」55haとその外縁部65haを併せ、総面積120haとなる巨大な山城である。昭和42年から継続的に発掘調査が行われており、内城の中心城から多数の建物跡が検出されている。平成6年度の第16次調査時まで55棟の建物が検出されており、その内訳は構造の分かっているもので八角形建物跡2棟、掘立柱建物34棟、礎石建物14棟、掘立柱の庇が付く礎石建物が3棟となっている。

掘立柱建物には、絶柱と側柱のものがあり、側柱が多数を占める。側柱建物は規模の点から5タイプに分けられ、そのうちもっとも大きなタイプに分類されるのが、10×3間の建物跡（16号）である。八角形建物以外の大

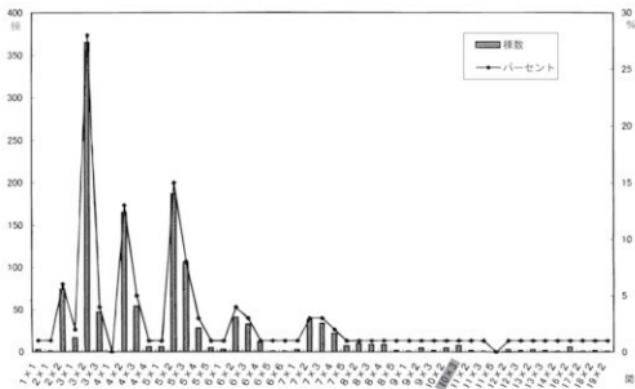


図2 地方官衛官舎の平面形式（高床倉庫・門・仮設建物を除く）

半は倉庫の類と考えられているが、16号のような超大型タイプのものは別の用途もあった可能性が考えられている。年代については、検出されている建物の大半が創建期（7世紀）のものと推測されている。

②鳥取県不入岡遺跡（倉吉市教育委員会1995・1996、図4）

鳥取県中央部の倉吉市不入岡に所在する遺跡で、は場整備に伴い平成5・6年度で計22,000m²あまりが調査されている。遺跡は南西から北東に延びるなだらかな丘陵（久米ヶ原丘陵）の尾根上に広がる。周辺には南西15kmの同一丘陵上に伯耆国府跡があり、その東側に伯耆国分寺、さらにその北東には伯耆国分尼寺が存在する。不入岡遺跡からは縄文時代から中世にかけて幅広い時代にわたる遺構が検出されているが、特筆すべきは奈良・平安時代の掘立柱建物群である。

この建物群は2時期の変遷がみられる。I期は溝で区画された内郭に建物が「コ」の字状に北・東・南に配置され、そのなかに身舎4×2間に四面庇が付く建物が置かれる。外郭には、西側および北側にそれぞれ掘立柱塀で区画された空間があり、そのなかに建物が配置される。II期は溝による区画は残るが、建物の配置は大きく改変される。内郭ではI期の建物群を取り壊し、南北棟の純柱建物や東西棟の側柱建物が規則的に配置される。注目すべきは外郭西側の大型掘立柱建物群で、東西51m・南北110m以上の敷地を溝で区画したなかに、長大な東西棟の掘立柱建物が10棟以上建てられる。これらの建物は東側柱列をそろえて等間隔に並列して配置される。建物の規模は、桁行10間前後（24m前後）、梁行3間（6m前後）である。建替えも行われており、建替えられた建物は概して規模が縮小される。このうち桁行10間の建物はSB02a、SB18、SB22、SB25、SB27の5棟である²¹。I・II期の実年代は、相対的にそれぞれI期が8世紀前半、II期が8世紀後半～10世紀と推定されている。

これらの建物群の性格としては、I期の遺構は内郭の建物配置の様相から伯耆国衙もしくは久米郡衙の政府跡である可能性が指摘されている²²。II期の大型掘立柱建物群の性格については馬房や兵舎、工房、物資収納施設（倉庫）など諸説あるが、建物の形態や規模、出土遺物などから伯耆国衙に関連する倉庫群であった可能性の高いことが指摘されている。

(3) B-1号掘立柱建物跡との比較

以上、10×3間の掘立柱建物跡を検出している2遺跡の概要をみてきたが、次にこれらの建物とB-1との比較を行う（表2、図5）。まず建物の構造についてはすべて共通し、いずれも個柱のみで構成される建物である。

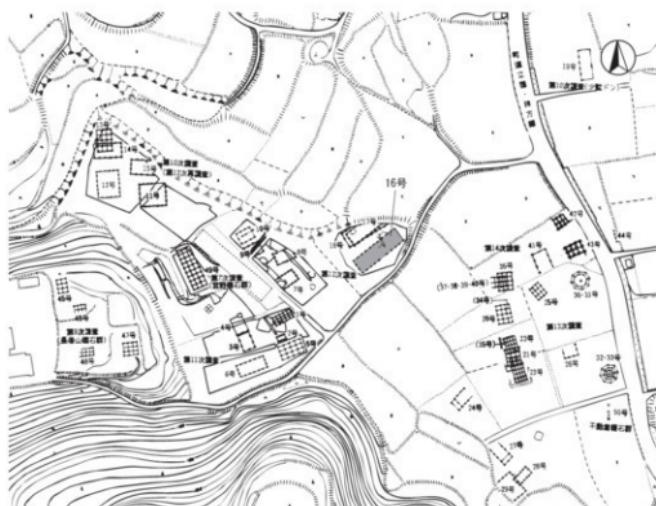


図3 熊本県鞠智城跡遺構配置図（1:2,500）



図4 鳥取県不入岡遺跡遺構配置図（1:2,500）

建物の方向は東西棟である点は同じだが、不入岡遺跡の建物は真北方位をとるのに対し、本遺跡B-1・鞠智城16号は斜めにふれる方位をとる。鞠智城などは山城という遺跡の性格上、建物の方位が地形に制約されている可能性があるため概にいうことはできないが、本遺跡B-1と不入岡遺跡の建物群の方位の差異は7世紀代と8世紀後半以降という造営時期の違いを反映しているといえよう。つぎに規模を比較してみると、桁行の長さは本遺跡のものが最大（28.2m）であり、規模を縮小して建替えられた不入岡遺跡SB22が最小（18.6m）となるが、いずれも概ね20mを超える長大な建物である。柱間寸法を比較すると、鞠智城16号では桁行26.5m等間、梁行26m等間に統一されるのに対し、本遺跡B-1と不入岡遺跡では、桁行・梁行ともにばらつきが大きく統一性がない。また、柱穴の規模や掘り方の形状がまちまちである点も不入岡遺跡と類似する。

表2 10×3間の掘立柱建物跡の比較

遺跡名	遺構名	建物の種別	主軸方向 ※ (間)	建物規模 (長さの単位はm)		備考
				平面形式 (形)	桁行・ 梁行絆長 柱間寸法 (桁行、梁行)	
本遺跡	B-1	側柱	N62° E (間)	10×3	28.2×5.9 245~345、170~220	時期は出土遺物から7C中葉以降。
鞠智城	16号	側柱	N53° E (間)	10×3	26.6×7.8 265、26	
不入岡 遺跡	SB02a	側柱	N92.8° E (間)	10(11)×3	24.6×6.0 12~30、15~24	桁行は南北で柱間数が異なる。SB02bへ建替え。
	SB18	側柱	N94.5° E (間)	10(9)×3	23.7×6.0 18~33、18~24	桁行は南北で柱間数が異なる。SB19へ建替え。
	SB22	側柱	N95° E (間)	10×3	18.6×5.4 12~27、12~21	SB21からの建替え。
	SB25	側柱	N95.7° E (間)	10×3	20.1×6.3 15~27、18~24	
	SB27	側柱	N95.5° E (間)	10×3	23.7×5.7 18~27、18~21	

※主軸方向は桁行方向で統一した。

(4) B-1号掘立柱建物跡の性格

以上、B-1と他の遺跡の建物とを比較してきたが、不入岡遺跡の建物群との類似性、とくに柱間寸法に統一性がみられないという点に着目し、B-1の性格について考えてみたい。不入岡遺跡の建物群が伯耆国衙関連の倉庫群とみられていることは前述したとおりだが、この倉庫群は恒久的な施設ではなく仮設的なものとみられている。その論拠としては、①柱間寸法や柱穴の掘り方形状に統一性がなく、柱筋の通りも悪いことから比較的簡易な構造の建物と考えられること、②建物同士が軒を接するほどに近接しており、火災による類焼などの防災の備えを欠くことが挙げられている。B-1も①と同様の特徴をもっており、とくに桁行の柱間寸法のばらつきが大きく、詳細な設計をもって造られたとは考えにくい。規模は大きいが造りは雑な建物といえる。B-1の性格については倉庫であるかまたはほかの施設（例えば兵舎・馬房など）であるかは決め手に欠けるものの、いずれにせよ不入岡遺跡と同じく仮設的な施設であったといえよう。B-1に前後して、周辺に住居跡が存在していることも、このことの証左となろう。周辺から関連する遺構が検出されていない点は不入岡遺跡と異なるが、このことは逆に区画施設等が必要のないほど一時的・単独的な施設だったということを示

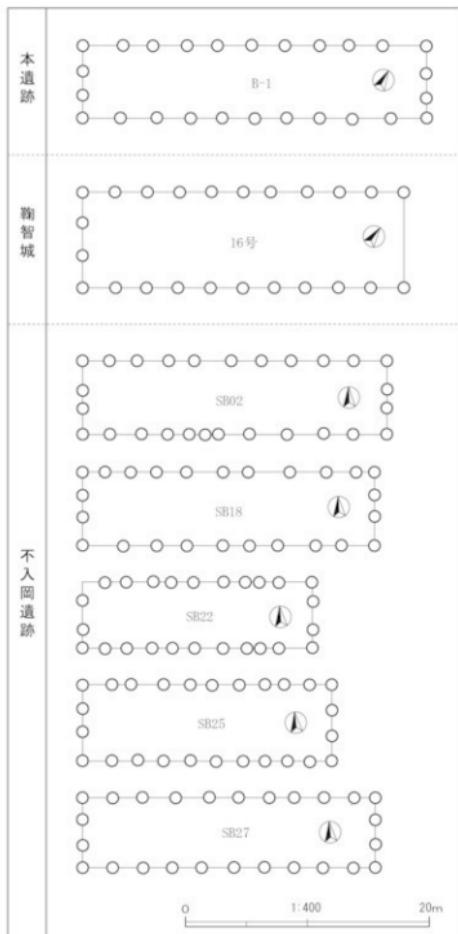


図5 10×3間の掘立柱建物跡模式図 (本遺跡・鞠智城・不入岡遺跡)

唆しているのではないか。

上野国府については、これまで関連する遺構（とくに建物）がほとんど検出されていないというのが現状である。B-1の性格については仮設性・単独性が強く、しかも時期は国府に先行する建物である可能性が高いものの、今回、国府周辺域から官衙関連の遺構が検出されたことは大きな成果であった。今後周辺の調査でこのような建物の検出例が増加し、さらに国庁・国衙や関連施設の様相が分かれば、この建物の性格についても自ずと明らかになるものと思われる。

註1 SB02aとSB18は桁行の柱間数が南北で異なる。SB02aは北側柱列10間、南側柱列11間。SB18は北側柱列10間、南側柱列9間。

2 不入岡遺跡の南西15kmに位置し、すでに全容が明らかになっている伯耆国衙は8世紀後半～10世紀初頭の存続と推定されている。I期の遺構はこれに先行するため、8世紀前半に営まれた前身国衙である可能性が考えられている。

※本節で使用した図版の出典は下記のとおり。一部改変・トレースを行った。

図2 奈良文化財研究所2003

図3 大田幸博1993

図4 倉吉市教育委員会1996

図5 梅智城：大田幸博1993、不入岡遺跡：倉吉市教育委員会1996

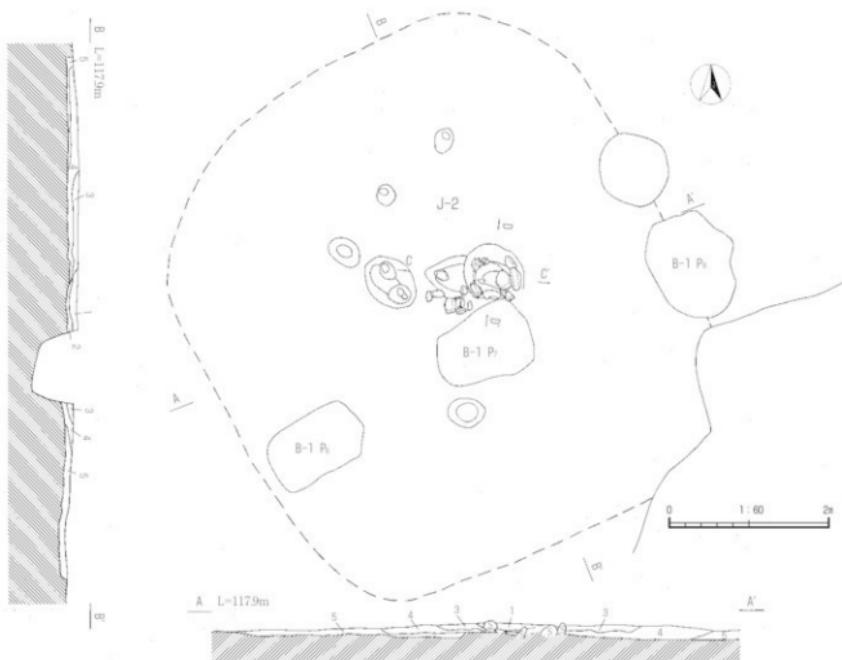
4 古代の大溝（W-1号溝）について

本年度も昨年度の「元総社蒼海遺跡群（7）」で検出したW-1号溝の西側延長、牛池川崖線までの調査を行った。今年度調査区は元総社明神地区の区画整理により、総社砂層硬質部より上面を大きく削平させていたが、溝の掘り込みが深いため、その下半部を検出することができた。溝からの出土遺物は昨年度調査と同様、10世紀代を中心とする日常雜器が多く、直接に溝の構築時期を示す遺物の出土は認められなかった。また、溝の側壁からは昨年度同様に、窓構築材の採掘痕が検出された。この採掘痕については、昨年度の調査により、「W-1号溝が国府域を区画する大溝と仮定した場合、採掘の時期は国府権力が衰える10世紀以降である」と想定したが、今年度の調査により、溝の北側に窓構築材の供給先と考えられる10～11世紀の集落が検出され、逆にW-1号溝が国府域を区画する溝である蓋然性をさらに強くすることとなった。

さて、W-1号溝の構築時期であるが、昨年度から気になっていたことに、W-1号溝に切られているW-3号溝の時期がある。W-3号溝は今年度調査で検出したB-1号掘立柱建物跡と方向が合致している。B-1号掘立柱建物跡はその規模の大きさから官衙的な建物と想定できるが、W-3号溝はその区画施設の可能性が考えられる。B-1号掘立柱建物跡の構築時期は出土遺物から7世紀中葉頃と推定されるが、すると昨年度調査で保留にしておいたW-3号溝底面出土の球茎状の甕の破片とも時期が合致する。国衙や郡衙など、官衙施設の正方位への転換は8世紀初頭と言われているが、7世紀中頃の建立とされる山王廃寺はすでに正方位を探っている。それらを考え合わせると、W-1号溝の構築時期は、最も古くみた場合で7世紀中頃まで遡らせることができようか。国府域の区画溝か条理遺構か今後も検討が必要であるが、併せてB-1号掘立柱建物跡に伴う施設やW-3号溝の延長についても、充分に注意を払う必要がある。

《引用参考文献》

- (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 『清里・陣場道路』 1981年
- (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 『中尾』 1984年
- 坂口一『奈良・平安時代の土器の編年』 群馬県史編さん委員会編 『群馬県史研究24』 1986年
- (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 『上野国分僧寺・尼寺中間地域(1)~(8)』 1986年~
- 群馬県教育委員会 『史路上野国分寺跡』 1988年
- 藤岡市教育委員会 『C 7 神明北道路 C 8 谷地道路』 1988年
- 安中市教育委員会 『注連引原Ⅲ道路』 1988年
- 群馬県教育委員会・(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 『鳥羽道路 L・M・N・O区』 1990年
- 前原 豊編 『元絶社明神道路』 前橋市埋蔵文化財発掘調査団1990年
- 東京都埋蔵文化財センター 『資料目録6』 (財)東京都教育文化財団東京都埋蔵文化財センター 1991年
- 大田幸博 『恵智城から検出された建物跡について』『古文化談叢』30(下) 1993年
- 『肥後・輪智城』『古代文化』47-11 1995年
- 倉吉市教育委員会編 『不入国道路群発掘調査報告書』 1996年
- 大山加久・坂口好孝編 『大星敷道路』 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1995年
- 木津博明 『上野国』『東国の國府 in WAYO』 1998年
- 山武考古学研究所編 『絶社閑泉明神北II道路』 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1999年
- 真塙明男・飯田祐二編 『上野国分尼寺寺域確認調査』 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2000年
- 鈴木雅浩・高橋一彦編 『元絶社七地道路・上野国分尼寺寺域確認調査Ⅱ』 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2000年
- 山武考古学研究所編 『元絶社蒼海道路群 元絶社小見内Ⅲ道路』 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2000年
- 山武考古学研究所編 『元絶社蒼海道路群 元絶社小見内Ⅳ道路』 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2001年
- 齊木一敏・近藤雅頼編 『元絶社蒼海道路群 総社甲福荷塚大道西道路・総社閑泉明神北II道路・総社甲福荷塚大道西IV道路』 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2001年
- 齊木一敏・高坂麻子編 『元絶社蒼海道路群 元絶社小見内Ⅴ道路』 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2002年
- 高橋一彦・近藤薰編 『元絶社蒼海道路群 総社甲福荷塚大道西III道路・総社閑泉明神北II道路』 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2002年
- 山武考古学研究所編 『元絶社蒼海道路群 元絶社小見II道路』 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2002年
- 山武考古学研究所編 『元絶社蒼海道路群 元絶社小見III道路・元絶社草作V道路』 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2002年
- 奈良文化財研究所 『古代の宮衛道路』 道情編 2003年
- 高橋一彦・高坂麻子編 『元絶社蒼海道路群 元絶社小見V道路』 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2003年
- 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2003年
- 高橋一彦・高坂麻子編 『元絶社蒼海道路群 元絶社小見VI道路』 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2003年
- 近藤雅頼・植垣慎太郎編 『元絶社蒼海道路群 元絶社小見内Ⅶ道路』 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2003年
- 近藤雅頼・植垣慎太郎編 『元絶社蒼海道路群 元絶社小見内Ⅷ道路・総社甲福荷塚大道西IV道路』 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2003年
- (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 『総荷塚東道路』 2003年
- 岩崎琢磨・高坂麻子編 『元絶社蒼海道路群 元絶社小見内X道路』 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2005年
- 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2005年
- 山武考古学研究所編 『元絶社蒼海道路群 元絶社小見内X道路』 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2005年
- スナガ環境測設株式会社編 『元絶社蒼海道路群(3) 元絶社小見Ⅸ道路』 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2005年
- 梅澤克典・井上 登編 『元絶社蒼海道路群(7)』 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2006年

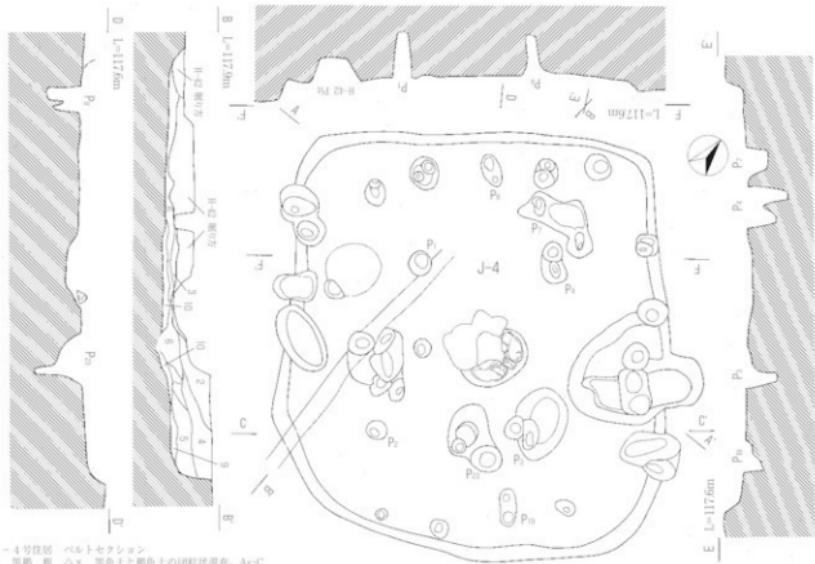


J-2号住居 ベルトセクション
 1 黒褐色 線 △△ 5~8mm大の黄褐色土小ブロックを2%、1~2mm大の黄色・
 橙色粒を5%含む。
 2 黒褐色 線 △△ 黄褐色土と褐色土のしみ状~粒状混在。
 3 黒褐色 線 △△ 黑褐色土中に少量の褐色土がしみ状混在。黄色粒2%含む。
 4 褐褐色 線 △△ 褐褐色土中に少量の黒褐色土が30%しみ状混在。モザイクとしては少
 ない土層。
 5 褐褐色 線 △△ 1mmの大の白色・黄色粒を含む褐褐色土。モザイクとしては少
 ない土層。



J-2号住居 炉
 1 褐褐色 線 ×× 樹木が30%しみ状~粒状に混在。
 2 黒褐色-褐褐色 線 ×× 黑褐色土と褐褐色土のしみ状混在土上。
 3 褐褐色 線 ×△ 少量の褐色土と黄褐色土がしみ状~斑状に混在。燒土粒を2%含む。
 4 褐褐色-褐褐色 線 ×△ 少量の黄褐色土がしみ状~粒状に混在。軌道焼土を30%しみ状~粒状に含む。
 5 黑褐色 線 ×× 明赤褐色燒土ブロック。
 6 黑褐色 線 △△ 少量の黄褐色土がしみ状~小ブロック状に混在。
 7 褐褐色 線 △△ 褐褐色土と褐色土のしみ状混在土上。
 8 褐褐色 線 △△ わずかに褐褐色土がしみ状混在。

Fig. 6 J-2号住居跡



- J - 4号住居 ベルトセクション
 1 黒褐 土 粗 △△ 黒色土と褐色土の团块状混在。As-C
 粒35%含む。淡色黒ゴトク土に似る。
 2 黒褐 土 ○△ 2~4 mmの大粒白色粘土を20%含む。
 3 黒褐 土 ○○ 2段人の頭部粘子を15%含む。細粒、
 均勻な褐色帶と褐色土の混在。一見
 粘土質を示すが、白色粘子を多く含む。
 4 黒褐 土 ○△ 黑色ガラス土の底層。
 黑色土が15%团块状に混在。1 mm
 の白色粘土を5%, 2~3 mmの大粒
 粘子を3%含む。
 5 黒褐 土 △△ 黒色土。黃褐色土と黑色土のくみ
 状ブロック状混在。2~3 mmの大
 粒白色粘子を含む。地盤強度。
 6 黒褐 土 ○△ 黒色土と褐色土のくみ状
 ブロック状混在。3層より
 やや多く黄色粘子を含む。
 7 黒褐 土 ○○ 黄化物5%, 橙色粘土を2%含む。や
 すく流動。
 8 黒褐 土 ○△ 黑色土と褐色土が30%し
 み合ってブロック状に混在。三角形基
 土。
 9 黒褐 土 ○△ 黑色土と褐色土のくみ状混在。
 地盤強度。
 10 塩褐 土 ○△ 黑色土と黄褐色土のしみ状混在。

- J - 4号住居 部
 1 黒白 土 △△ 灰岩
 2 黒褐 土 ○○ 黄色ブロック (φ 1~2 mm) 10%。黄色粘
 5%, 黑色土を少量含む。伊石の擦き取
 亂。
 3 黒褐 土 ○○ 伊石を少量含む。
 4 黒褐 土 ○△ 3層よりしましてややひい黄色ブロック
 (φ 1~2 mm) 2%, 黄色粘土 (φ 1~2 mm) 2%
 含む。
 5 黑褐 土 ○○ 3層よりしましてやや強い黄色土 (φ 1~
 2 mm) 3%, 黄色粘土 2%。白色粘土を多量
 含む。
 6 黑褐 土 ○△ 黄色土 (φ 1~3 mm) を含む。下層面に
 地上ブロック (φ 1~2 mm) を3%含む。
 伊石付方土。
 7 黑褐 土 ○○ 黄色土 (φ 1~3 mm) 5%, 黑褐色土ブ
 ロックを少量含む。赤色粘土 (飛来粘土) をわ
 ざらに含む。黄色粘土ブロックがまだらに
 合む。
 8 黑褐 土 △△ 黄色土がブロック状混在。黃褐色粘
 土 (φ 1~3 mm) 2%。黃褐色ブロック 1粒を若干
 含む。
 9 黑褐 土 ○○ 黄色ブロック 1粒、黃褐色粘土
 のブロックを少量含む。伊石の擦き方。
 10 黑褐 土 ○○ 黄色ブロック 1粒、赤色粘土を含む。8~
 9層よりやや黄色味が帶びる。白色粘土 2%含む。
 黄褐色土がブロック状混在。伊石の擦き方と黃褐
 土のまだらな帶、擦り方土。

Fig. 7 J - 4号住居跡

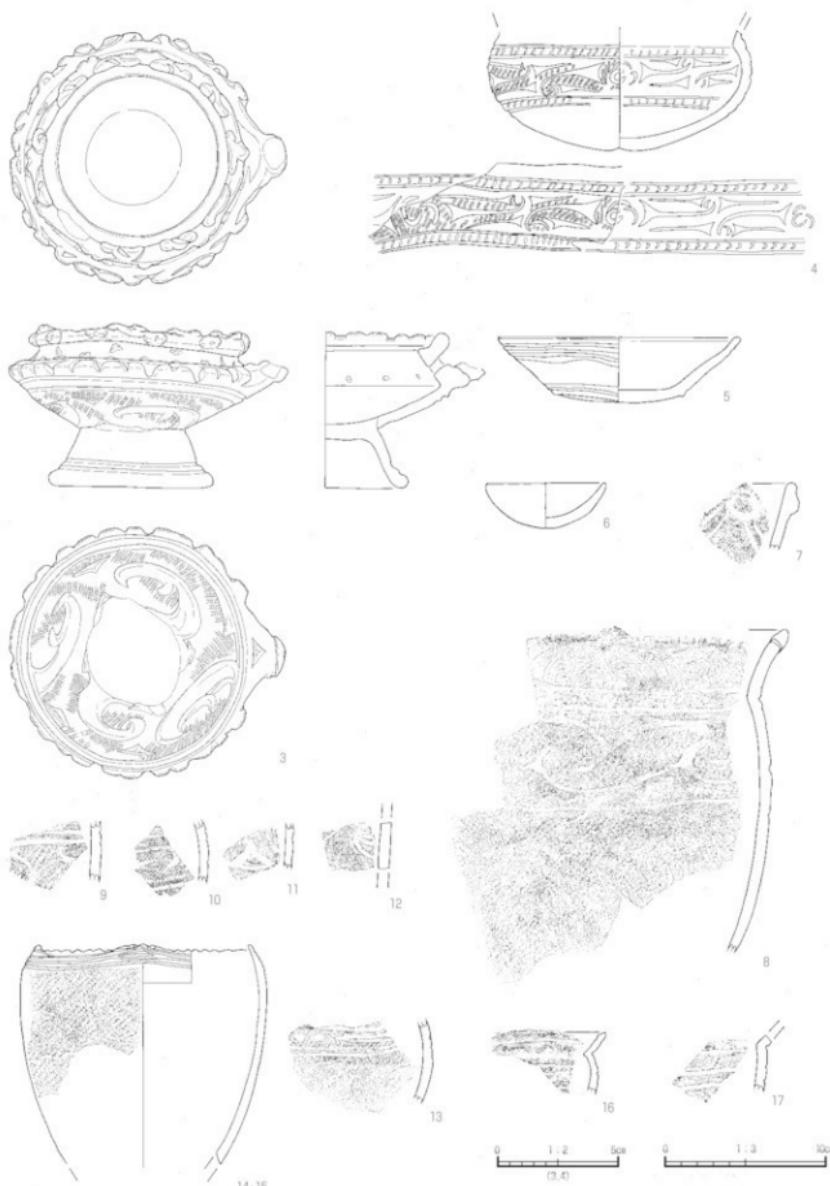


Fig. 8 J-4号住宅出土土器

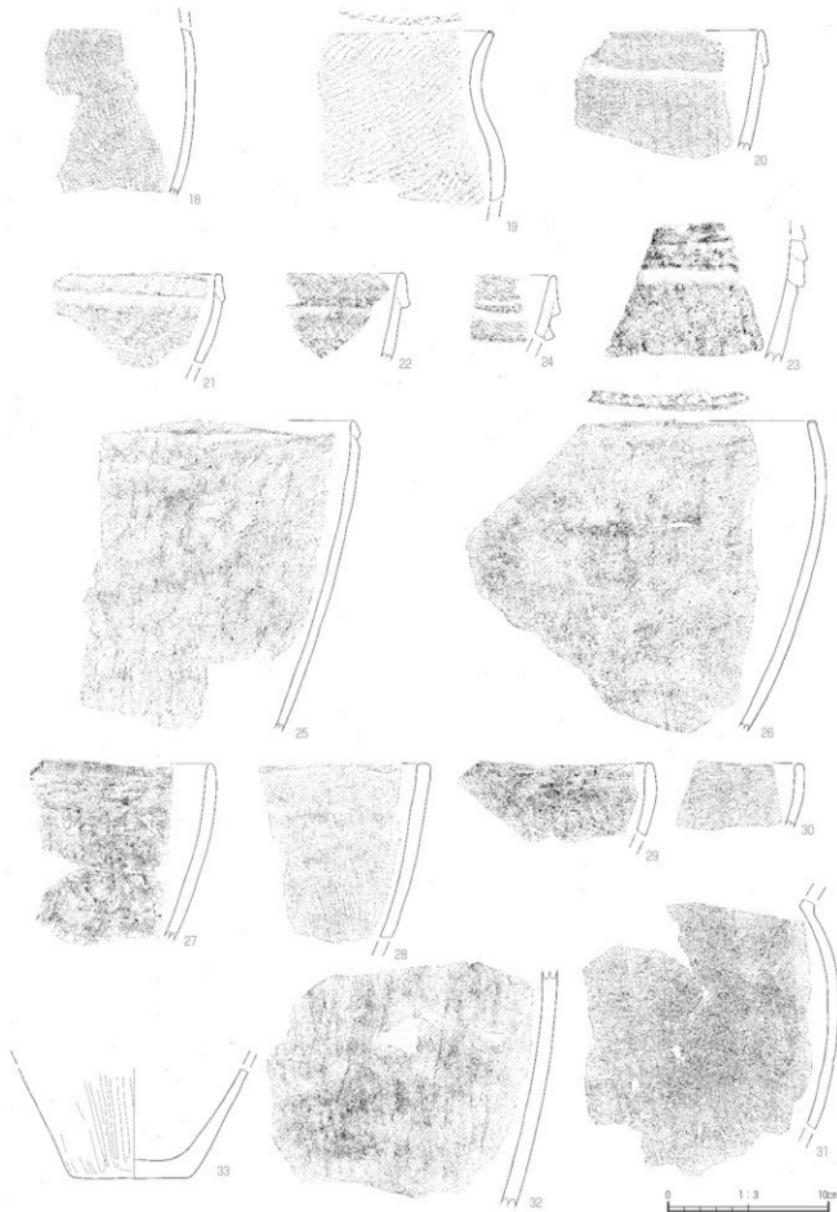


Fig. 9 J-4号住居跡出土土器

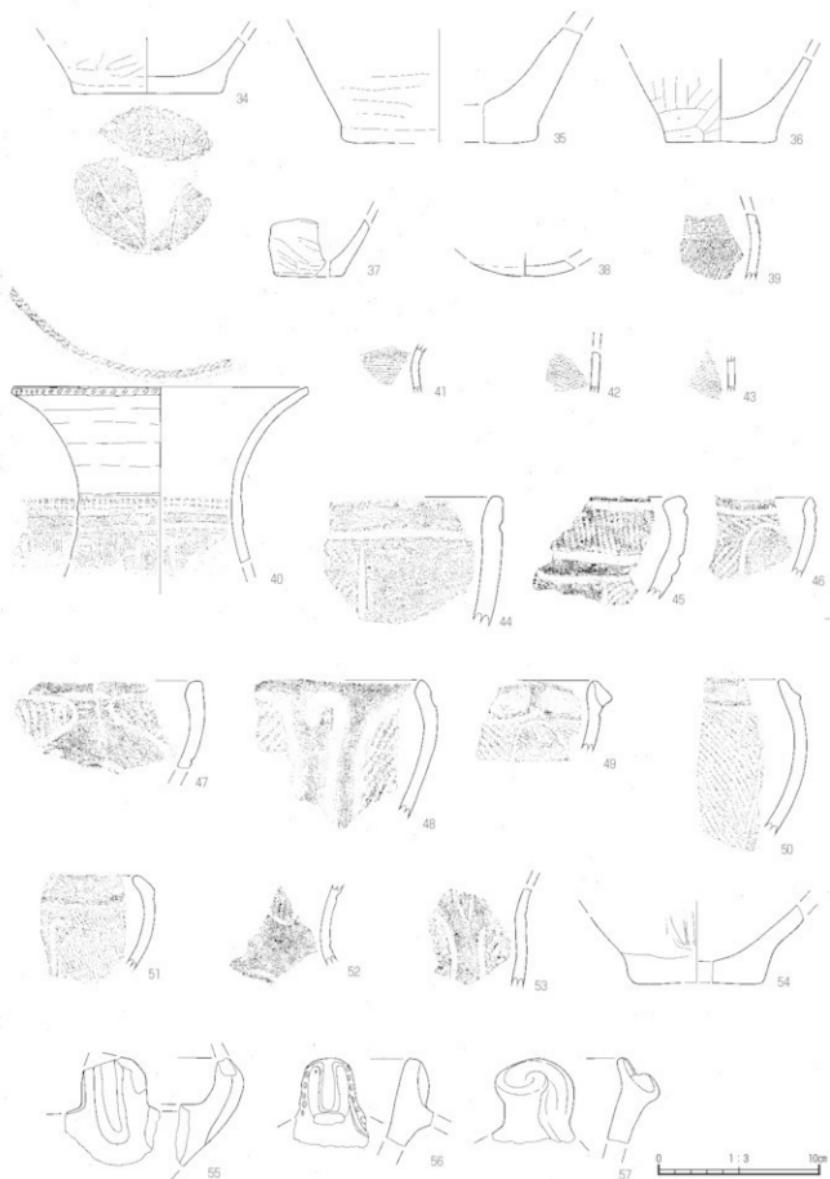


Fig.10 J-4号住居跡、調査区出土土器

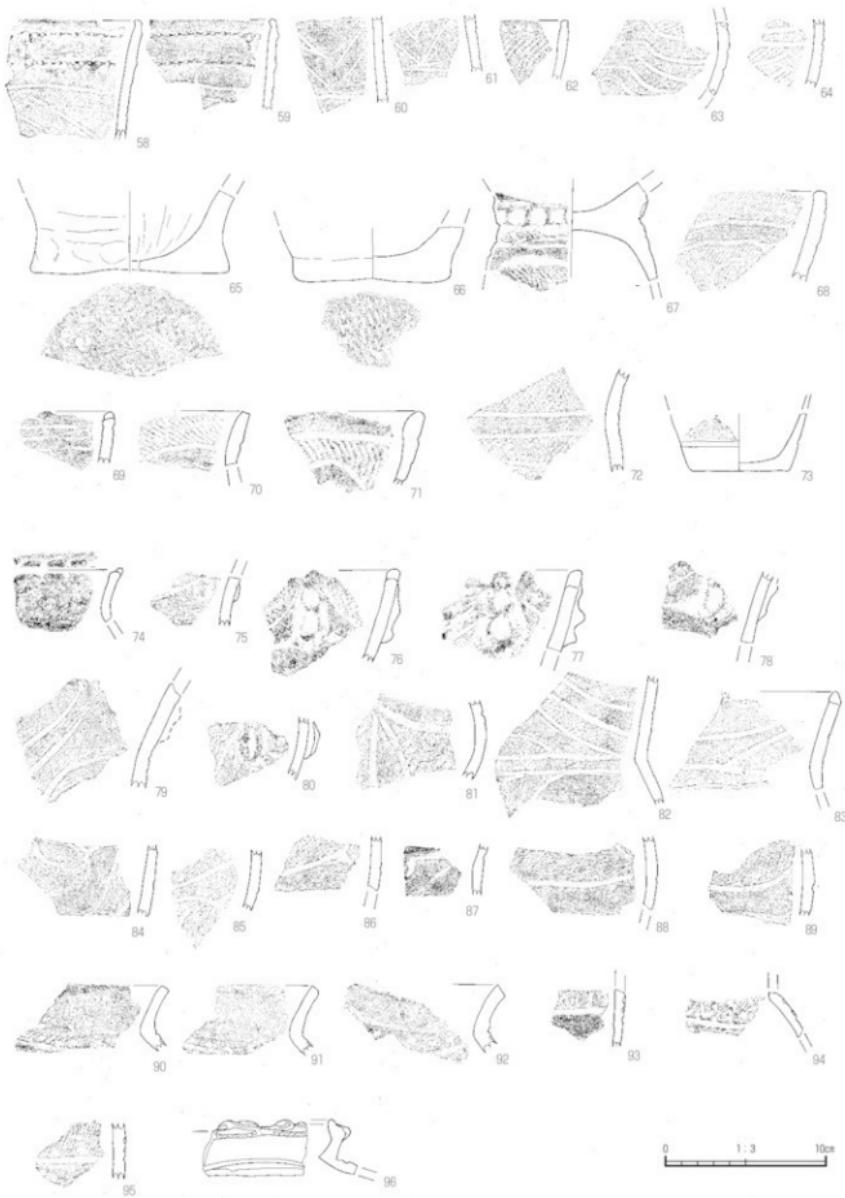


Fig.11 調査区出土土器



Fig.12 調査区出土土器、J-4号住居出土土製品、石製品

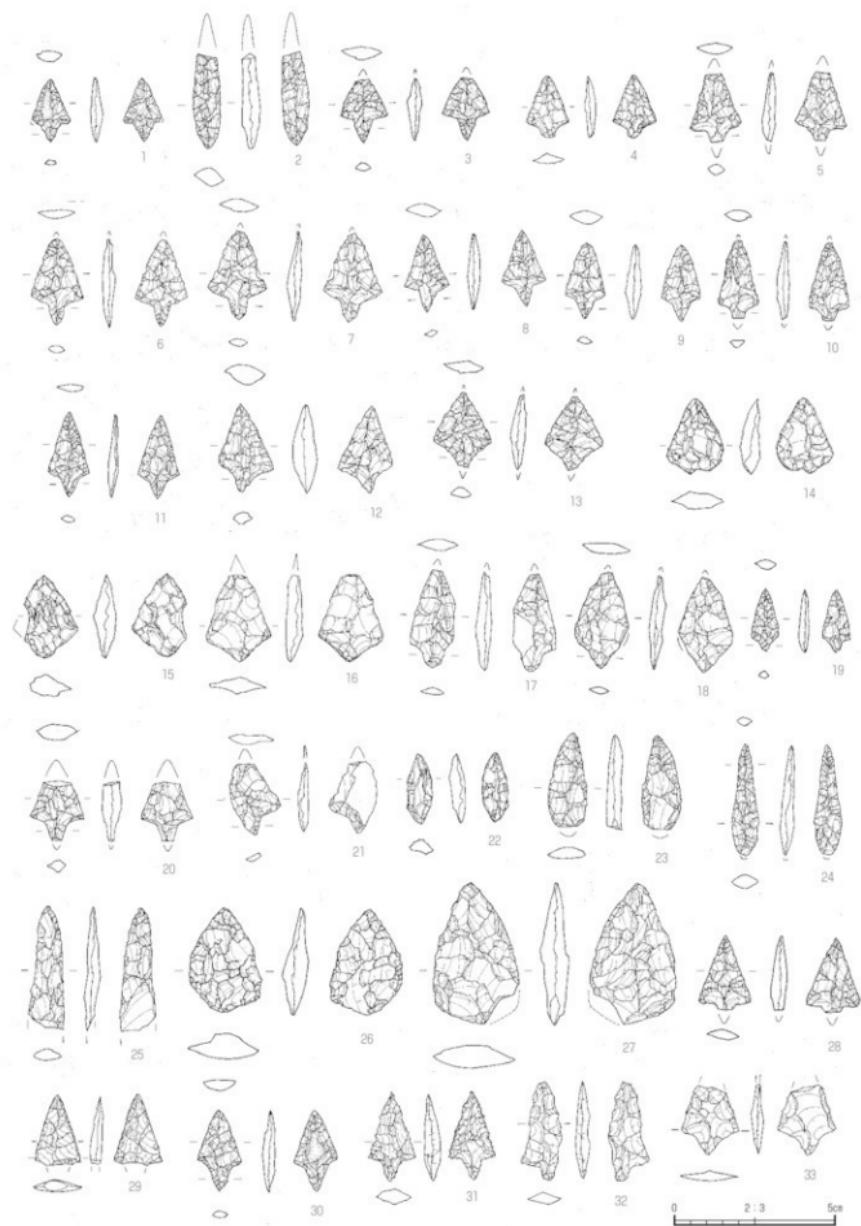


Fig.13 J-2, J-4号住居、調査区出土の石器

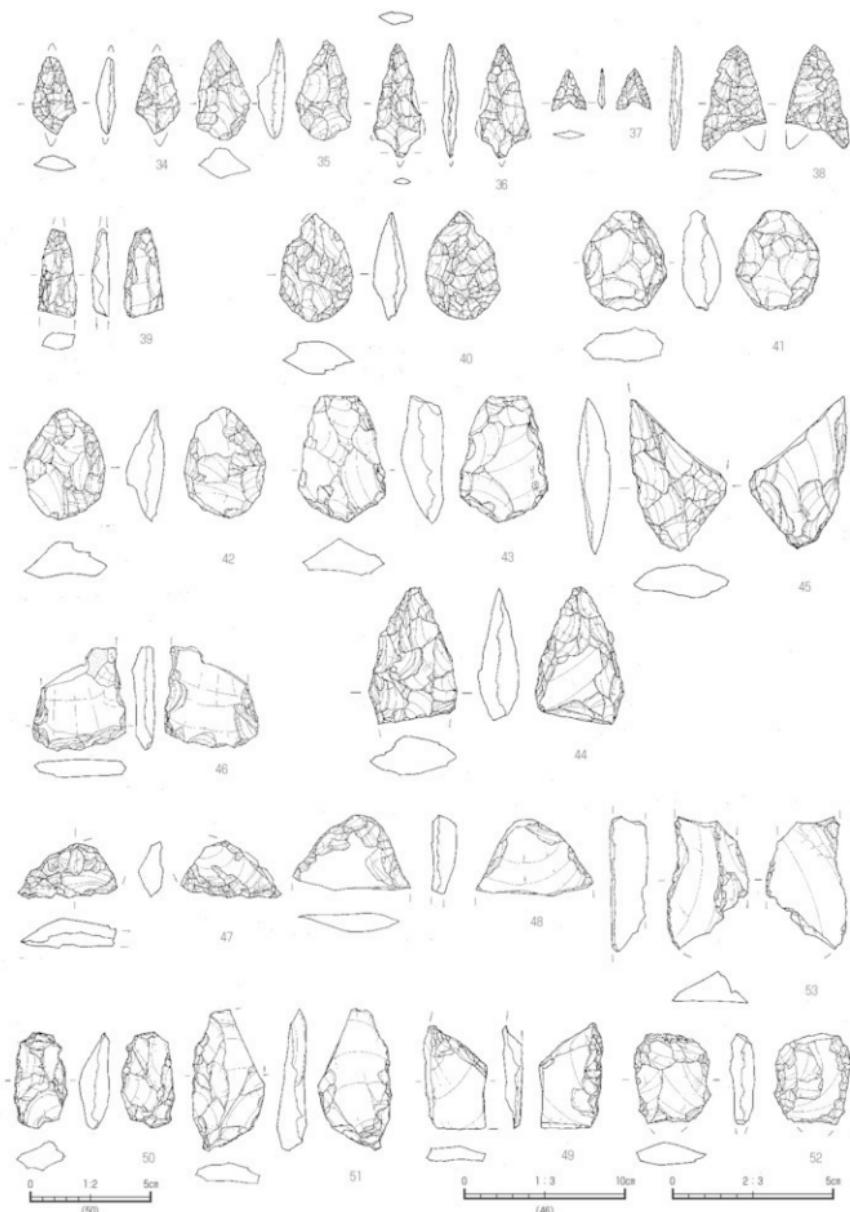
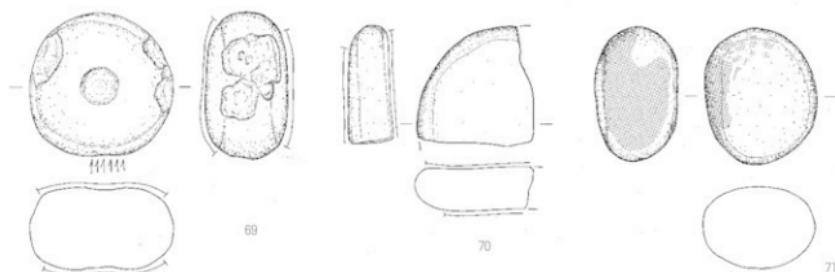
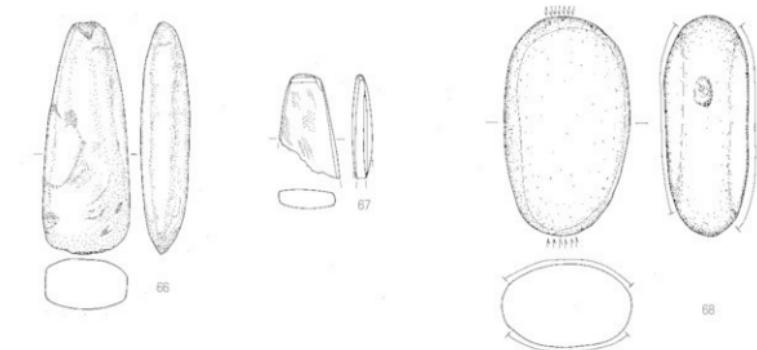


Fig.14 J-4号住居、調査区出土の石器



Fig.15 J - 4 号住居、調査区出土の石器



0 1:3 10cm

Fig.16 J-2, J-4号住居、調査区出土の石器

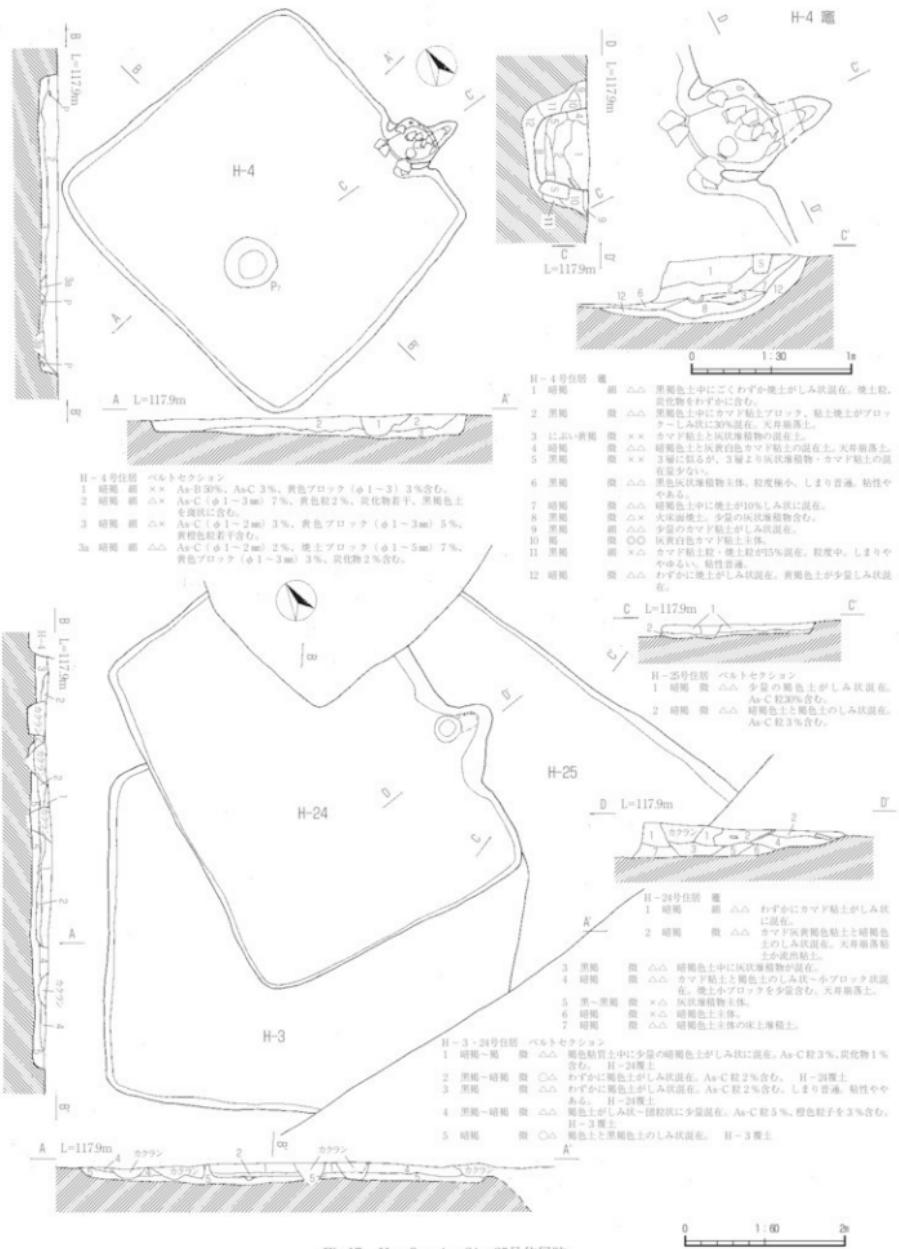


Fig.17 H-3・4・24・25号住居跡

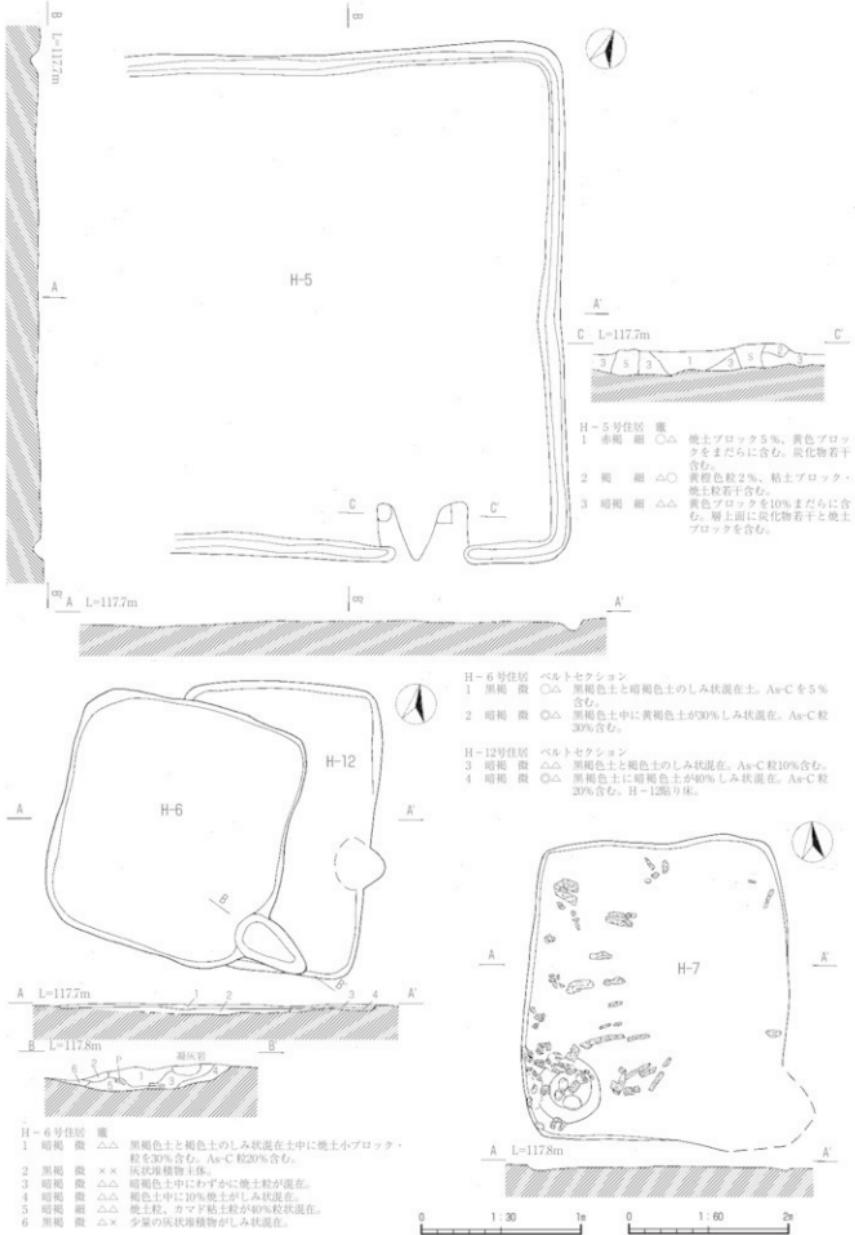


Fig.18 H - 5 · 6 · 7 · 8号住居跡

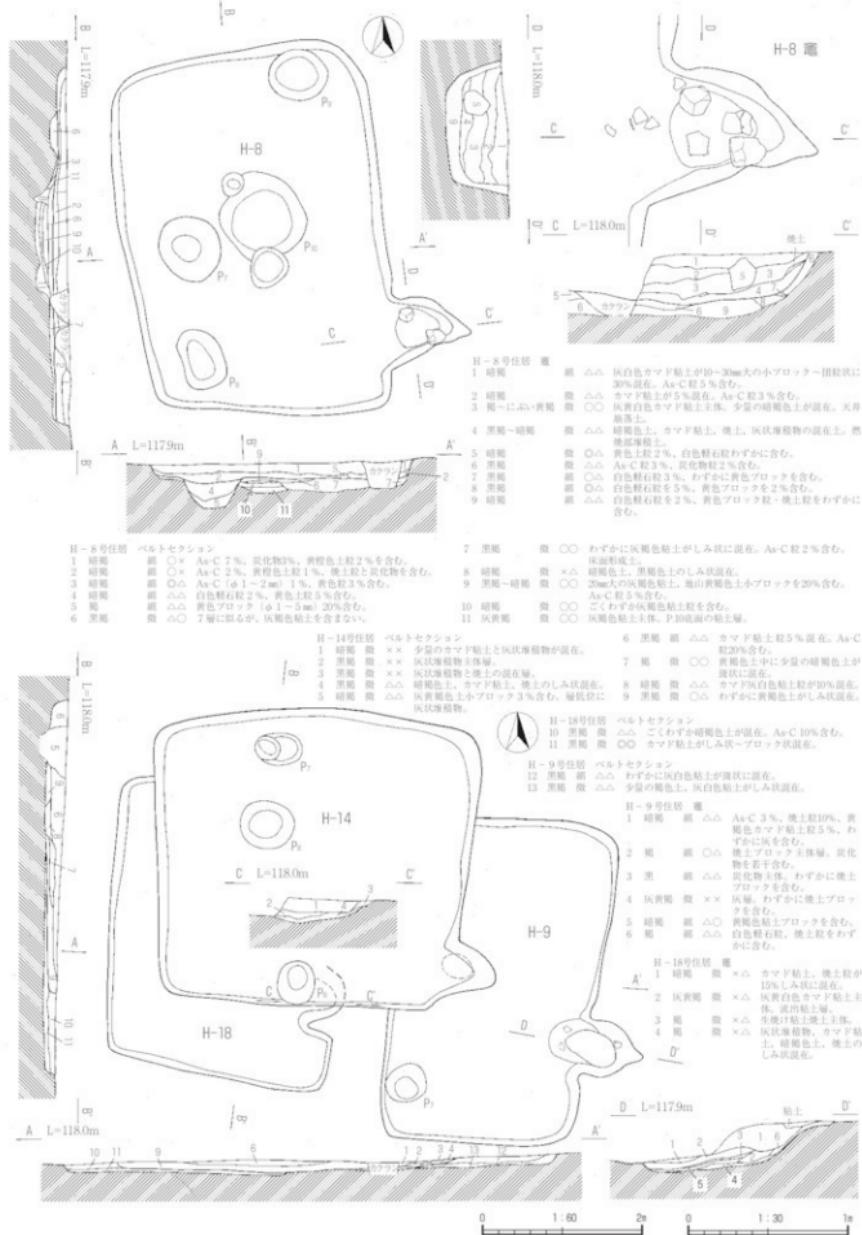


Fig.19 H-8・9・14・18号住居跡

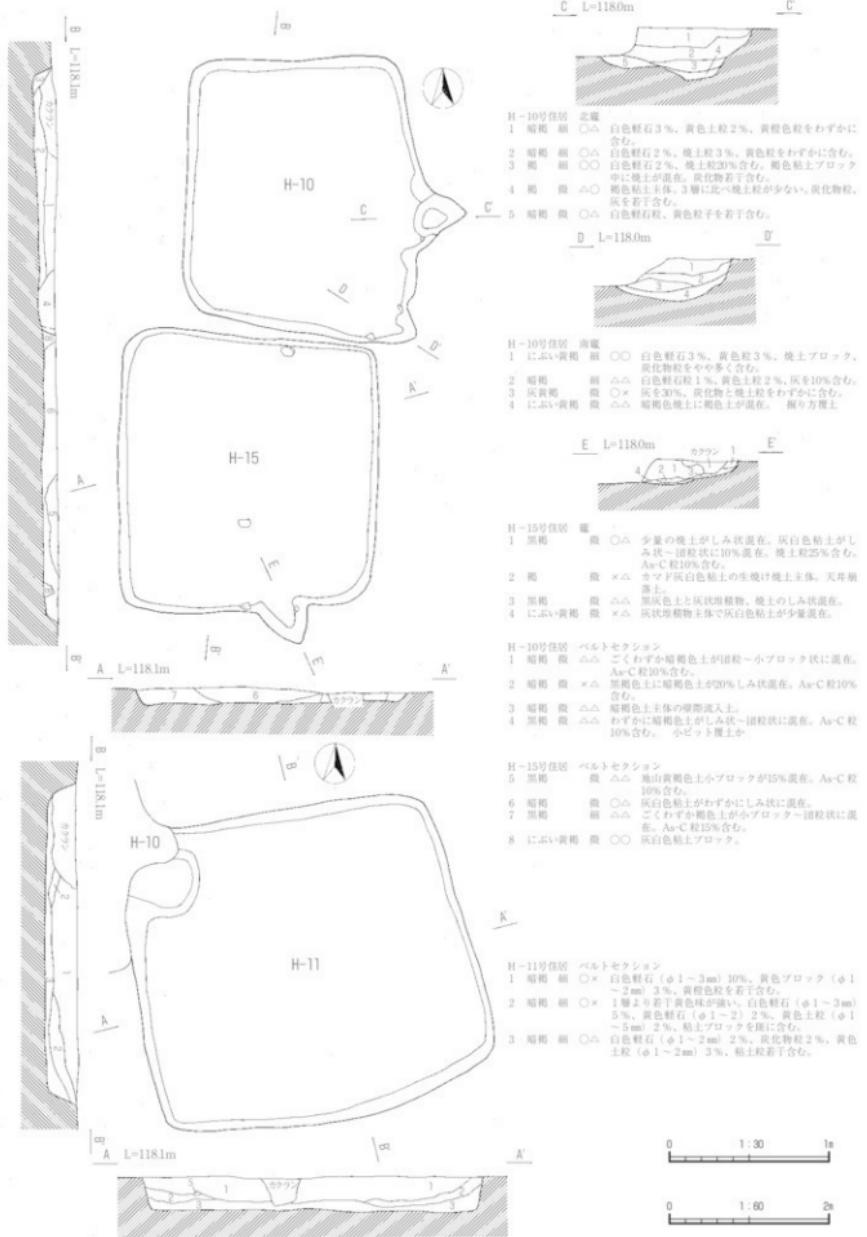


Fig.20 H-10・11・15号住居跡

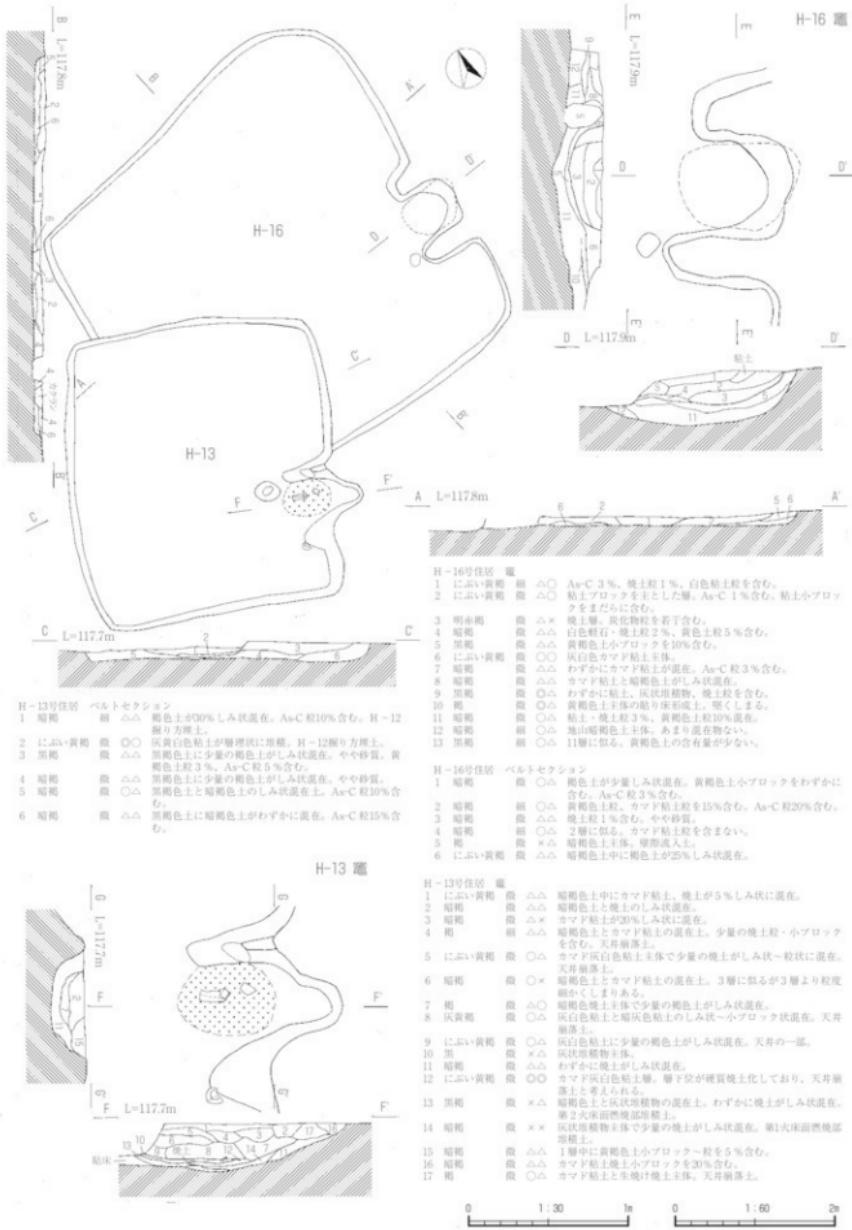


Fig.21 H-13・16号住居跡

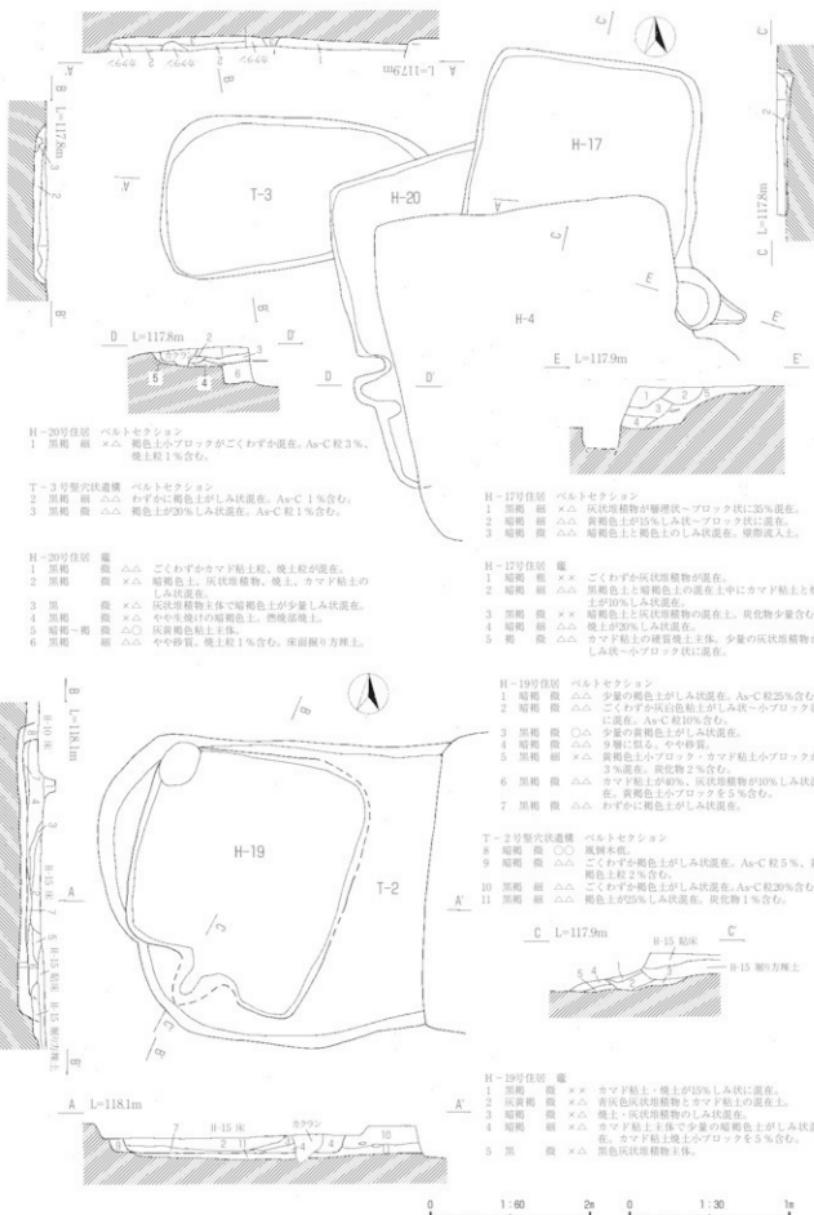
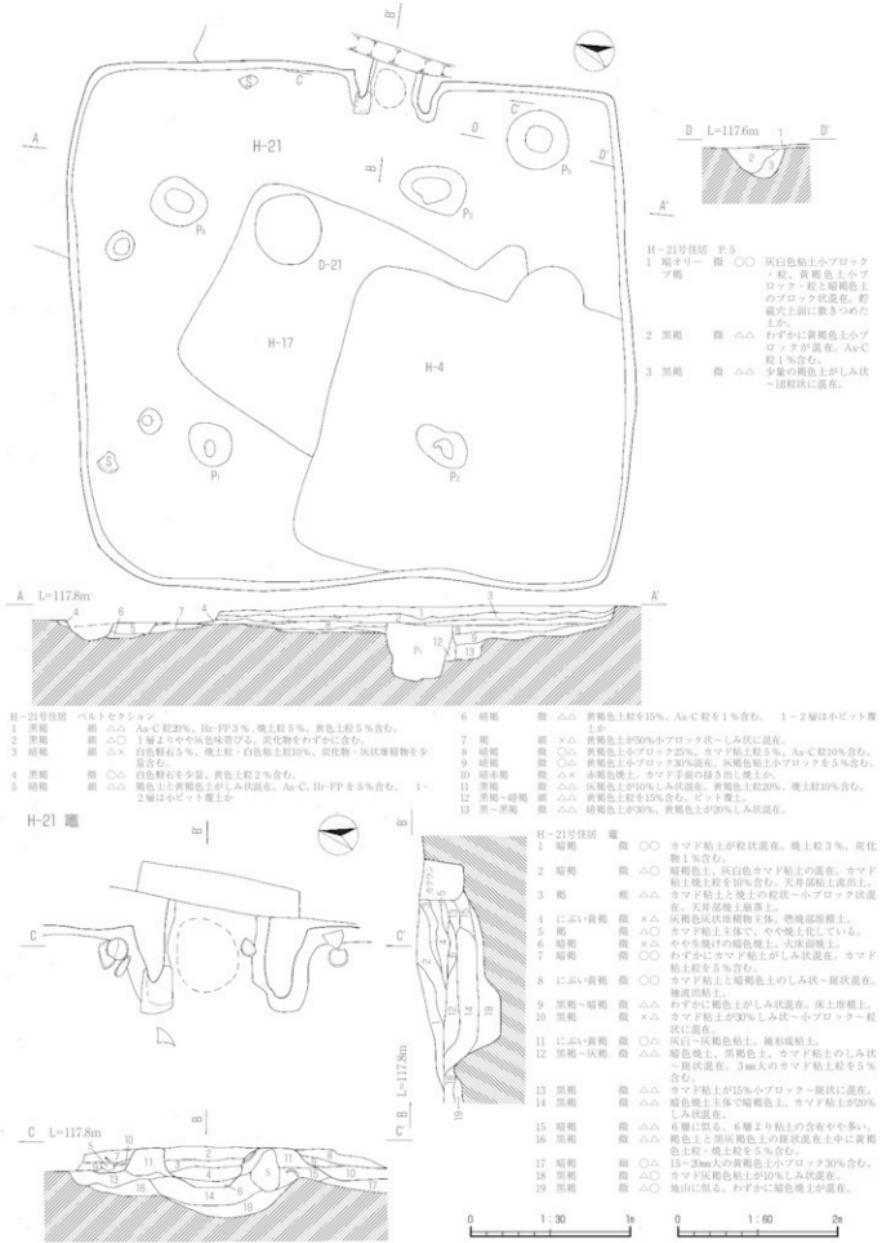
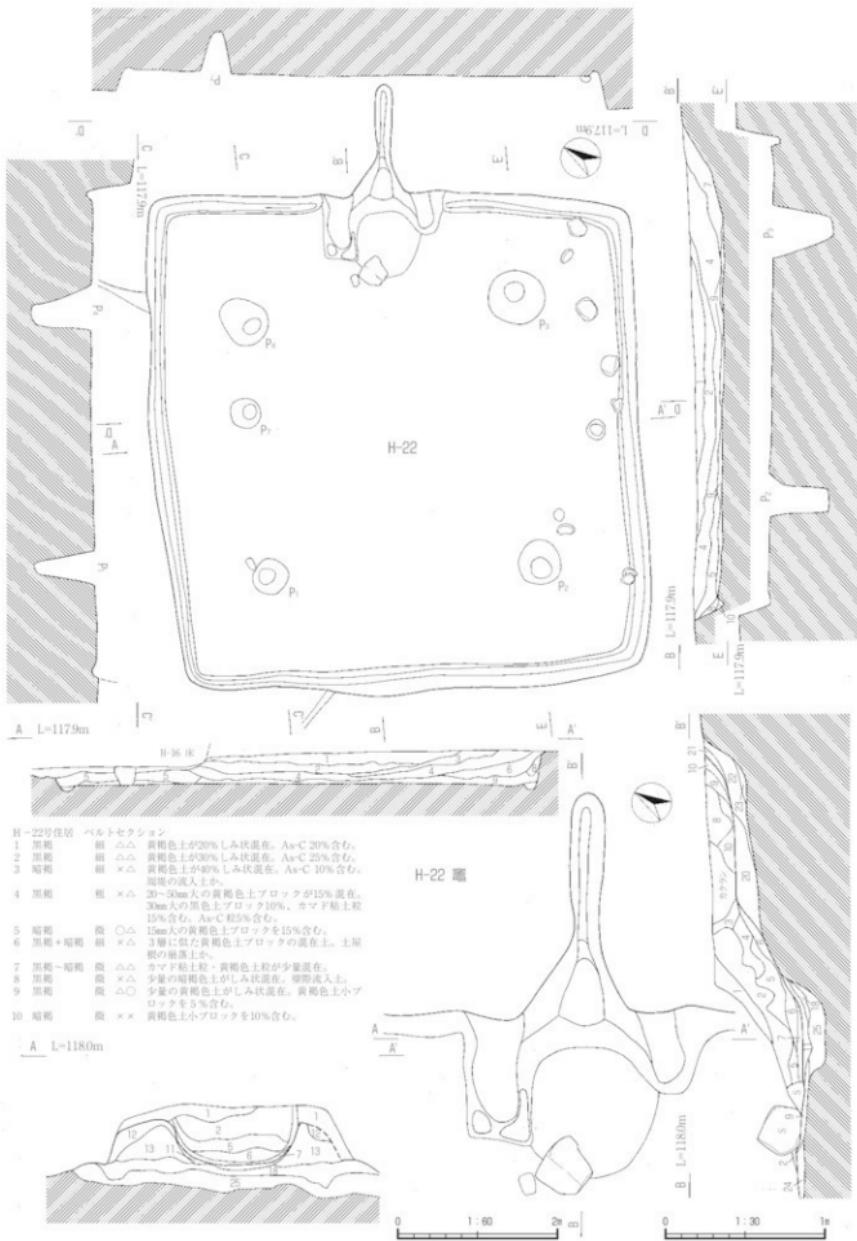


Fig.22 H-17・19・20号住居跡、T-2・3号堅穴状構造





H-22 竪 堀の方

E L=118.0m



E



H-22号住居 縦

- 1 堀地 線 ×△ As-C 10%、堆土粒・粘土ブロック少量を含む。黄色粒子を3%含む。
- 2 フリーフ地 線 ○△ 黄褐色地とカマド粘土の7:3混在。火灰層を含む。
- 3 地山 壁 線 △○ 黄褐色粘土粒の20%のみで混在。2~5mmの大粒の堆土粒30%含む。
- 4 堀底地 線 ○○ 黄褐色地とカマド粘土の7:3混在。火灰層を含む。
- 5 地山 壁 線 ○○ 黄褐色地の堆土粒ブロックをや多く含む。火灰物粒3%、堆土粒30%含む。

6 地山 壁 線 ○○ 黄褐色地と灰褐色地粘土が混在。

7 地山 壁 線 ○○ 黄褐色地と灰褐色地粘土が混在。

8 地山 壁 線 ○○ 黄褐色地とカマド粘土の7:3混在。火灰物粒を若干含む。

9 明視 壁 線 ○○ 黄褐色地とカマド粘土の7:3混在。火灰物粒を若干含む。

10 明視 壁 線 ○○ 黄褐色地とカマド粘土の7:3混在。火灰物粒を若干含む。

11 にぶい黄褐色 壁 線 ○○ 黄褐色地とカマド粘土の7:3混在。火灰物粒を若干含む。

12 灰褐色 壁 線 ○○ 黄褐色地とカマド粘土の7:3混在。火灰物粒を若干含む。

13 にぶい黄褐色 壁 線 ○○ 黄褐色地とカマド粘土の7:3混在。火灰物粒を若干含む。

14 堀地 線 ○○ 黄褐色地とカマド粘土の7:3混在。火灰物粒を若干含む。

15 堀地 線 ○○ 黄褐色地とカマド粘土の7:3混在。火灰物粒を若干含む。

16 堀地 線 ×△ 黄褐色地と灰褐色地粘土のしみ状混在。

17 にぶい 壁 線 ○○ 灰褐色地粘土のしみ状混在。

18 堀地 線 △ 黑褐色地、黄褐色地、褐色地の3種類が混在。

19 堀地 線 △○ 黄褐色地、黄褐色地、褐色地の3種類が混在。

20 黒褐色 線 △ 黑褐色地と黄褐色地が混在。

21 黒褐色 線 △ 黑褐色地中に黒色地が40%のみで混在。

22 黒褐色 線 △ 黑褐色地の3種類の地層が混在。

23 黒褐色 線 ×△ 黑褐色地上、カマド粘土がわずかに混在。

24 堀地 線 ○○ 黄褐色地とカマド粘土の層が混在。

25 堀地 線 △○ 黑褐色地が5%ブロックししみ状に混在。

H-23号住居 ベルトセクション

- 1 褐色 線 ×○ As-B輕石混土層。凝灰質砂岩ブロック(φ1~5mm) 5%、堆土ブロック(φ1~3mm) 2%、白色粘土ブロック、火灰物粒を若干含む。

1a 堀地 線 ○△ As-C(φ1~2mm) 2%、黄色ブロック(φ1~3mm) 2%、堆土粒を若干含む。

2 黒褐色 線 ×○ As-B輕石混土層。

3 褐色 線 ○○ As-C(φ1~2mm) 10%、黄色粒子を5%含む。下層面に火灰物粒を若干含む。

4 堀地 線 ○△ As-C(φ1~2mm) 10%、黄色粒子を5%含む。下層面に火灰物粒を若干含む。

5 褐色 線 ×△ 黄色ブロック、粒をわずかに含む。

H-23号住居 P.5

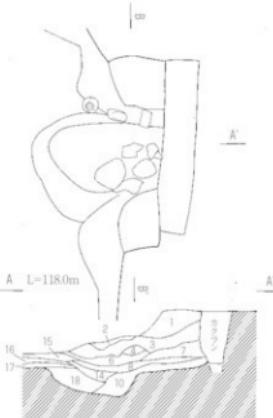
- 1 黒褐色 線 ×△ 黑褐色地と火灰地に褐色・黄褐色地が20%しみ状混在。火灰物粒2%含む。
- 2 黑褐色 線 ×△ 黄褐色地が5%で細粒、堆土粒を2%含む。
- 3 黑褐色 線 ×△ 黄褐色地が20%しみ状混在。
- 4 堀地 壁 線 ×△ 堀地・堀地・黄褐色地と黄褐色地のしみ状・小ブロック状混在。

H-23 竪



L=118.0m

A



K'

A

B

B'

0 1:60 2a 0 1:30 1a

Fig.25 H-22・23号住居跡

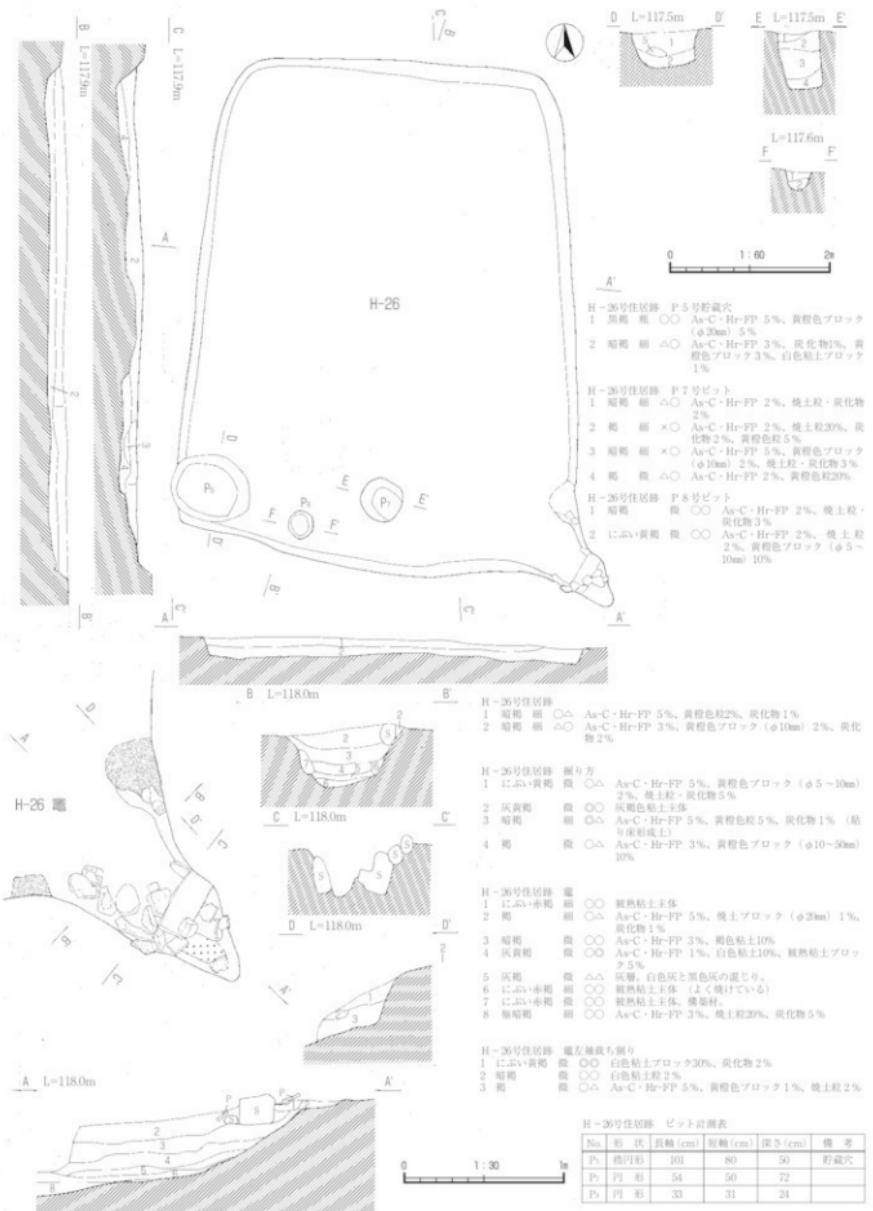
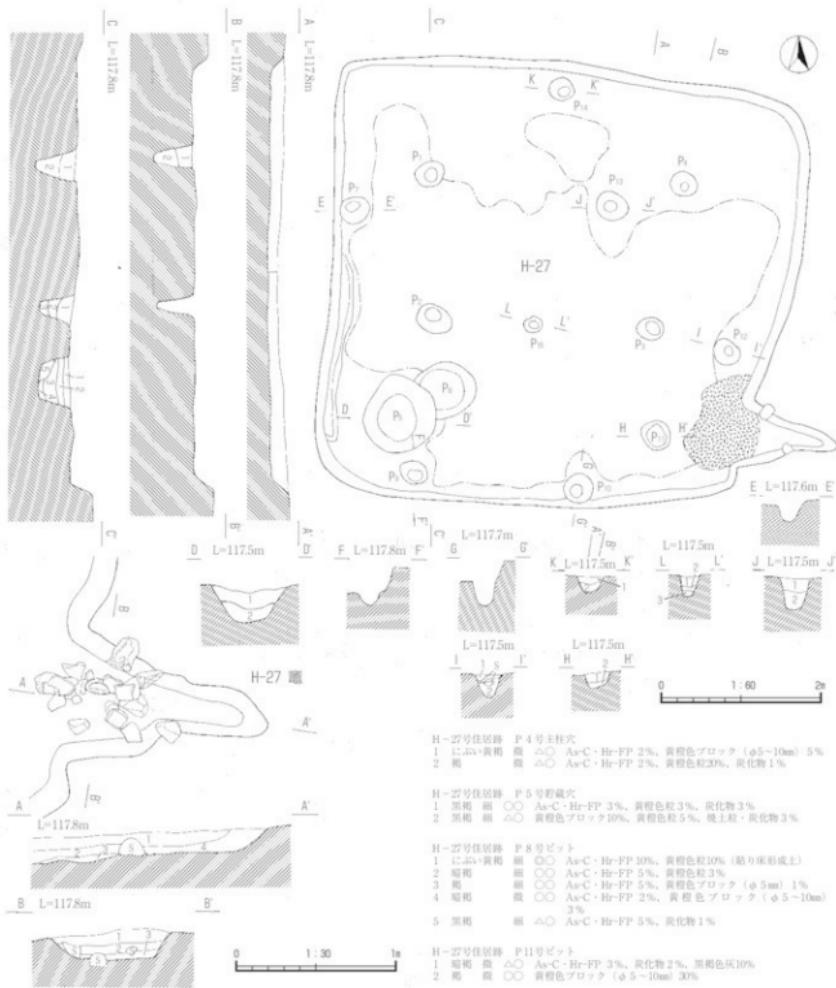


Fig.26 H-26号住居跡



H-27号住居跡 1. にふい黄褐色 細△△ As-C・Hr-FP 5%, 黄褐色粒2%

H-27号住居跡 磨
1. 磨褐色 細○○ As-C・Hr-FP 3%, 黄白色粘土ブロック(φ20mm) 2%
2. 磨褐色 細△△ As-C・Hr-FP 3%, 黄白色粘土ブロック(φ20mm) 2%
3. 磨褐色 細○○ 黄褐色粘土ブロック(φ20mm) 2%
4. 明赤褐色 細△△ 黄褐色, 塗上粒, 黄化物5%, 黄褐色粘土主体, 植基材の崩落。

H-27号住居跡 P1号柱穴
1. にふい黄褐色 細△△ As-C・Hr-FP 2%, 黄褐色粒2%, 黄化物1%
2. 黑褐色 細△△ As-C・Hr-FP 2%, 黄褐色粒20%, 黄褐色ブロック(φ10mm) 5%, 黄褐色粒20%, 黄化物1%

H-27号住居跡 P2号柱穴
1. 黑褐色 細△△ 黄褐色ブロック(φ 5~10mm) 5%, 黄化物2%
2. にふい黄褐色 細△△ 黄褐色粒20%
3. 黑褐色 細△△ 黄褐色粒20%, 黄褐色ブロック(φ 5~10mm) 30%, 黄化物1%

H-27号住居跡 P4号柱穴
1. にふい黄褐色 細△△ As-C・Hr-FP 2%, 黄褐色粒20% (砾底床形成) 5%
2. 黑褐色 細△△ As-C・Hr-FP 2%, 黄褐色粒20%, 黄化物1%

H-27号住居跡 P5号野藏穴
1. にふい黄褐色 細○○ As-C・Hr-FP 3%, 黄褐色粒3% (砾底床形成) 3%
2. 黑褐色 細△△ 黄褐色粒10%, 黄褐色粒3%, 黄化物3%

H-27号住居跡 P8号ビット
1. にふい黄褐色 細○○ As-C・Hr-FP 10%, 黄褐色粒10% (砾底床形成) 10%
2. 黑褐色 細△△ As-C・Hr-FP 5%, 黄褐色粒3%
3. 黑褐色 細○○ As-C・Hr-FP 5%, 黄褐色ブロック (φ 5mm) 1%
4. 黑褐色 細△△ As-C・Hr-FP 2%, 黄褐色ブロック (φ 5~10mm) 3%
5. 黑褐色 細△△ As-C・Hr-FP 5%, 黄化物1%

H-27号住居跡 P11号ビット
1. 黑褐色 細△△ As-C・Hr-FP 3%, 黄化物2%, 黑褐色灰10%
2. 黑褐色 細△△ 黄褐色ブロック (φ 5~10mm) 5%, 黄褐色粒20%

H-27号住居跡 P12号ビット
1. 黑褐色 細△△ As-C・Hr-FP 3%, 黄褐色粒2%
2. にふい黄褐色 細△△ 黄褐色粒20% (φ10mm) 5%, 黄褐色粒20%

H-27号住居跡 P13号ビット
1. にふい黄褐色 細△△ As-C・Hr-FP 3%, 黄褐色粒10%
2. 黑褐色 細△△ As-C・Hr-FP 2%, 黄褐色粒2%, 黄褐色粒20%

H-27号住居跡 P14号ビット
1. 黑褐色 細△△ As-C・Hr-FP 2%, 黄褐色粒3%
2. 黑褐色 細△△ 黄褐色ブロック (φ20mm) 2%, 黄褐色粒20%

H-27号住居跡 P15号ビット
1. 黑褐色 細△△ As-C・Hr-FP 2%, 黄褐色粒20% (φ 5~10mm) 10%
2. にふい黄褐色 細△△ As-C・Hr-FP 2%, 黄褐色粒10%
3. 黑褐色 細△△ 黄褐色ブロック (φ 10mm) 10%, 黄化物1%

Fig.27 H-27号住居跡

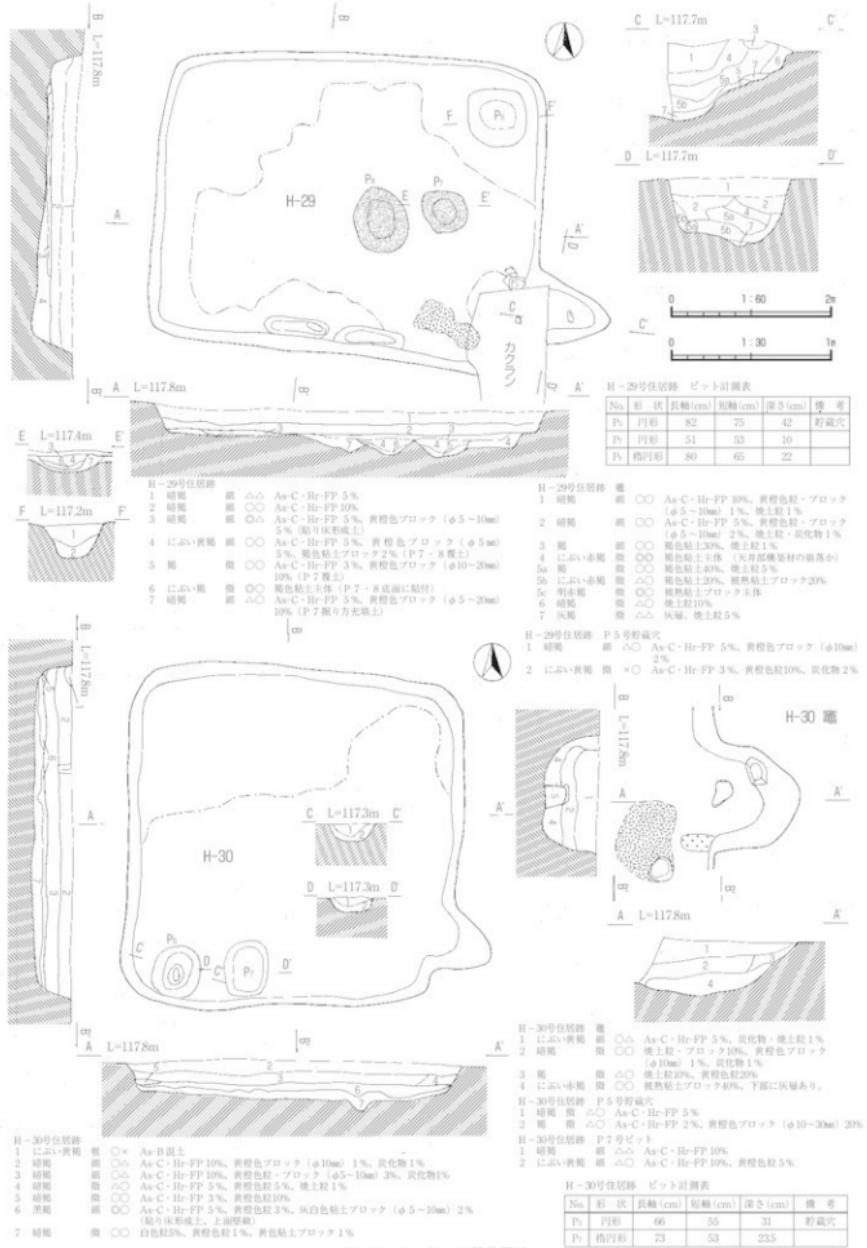


Fig.28 H-29・30号住居跡

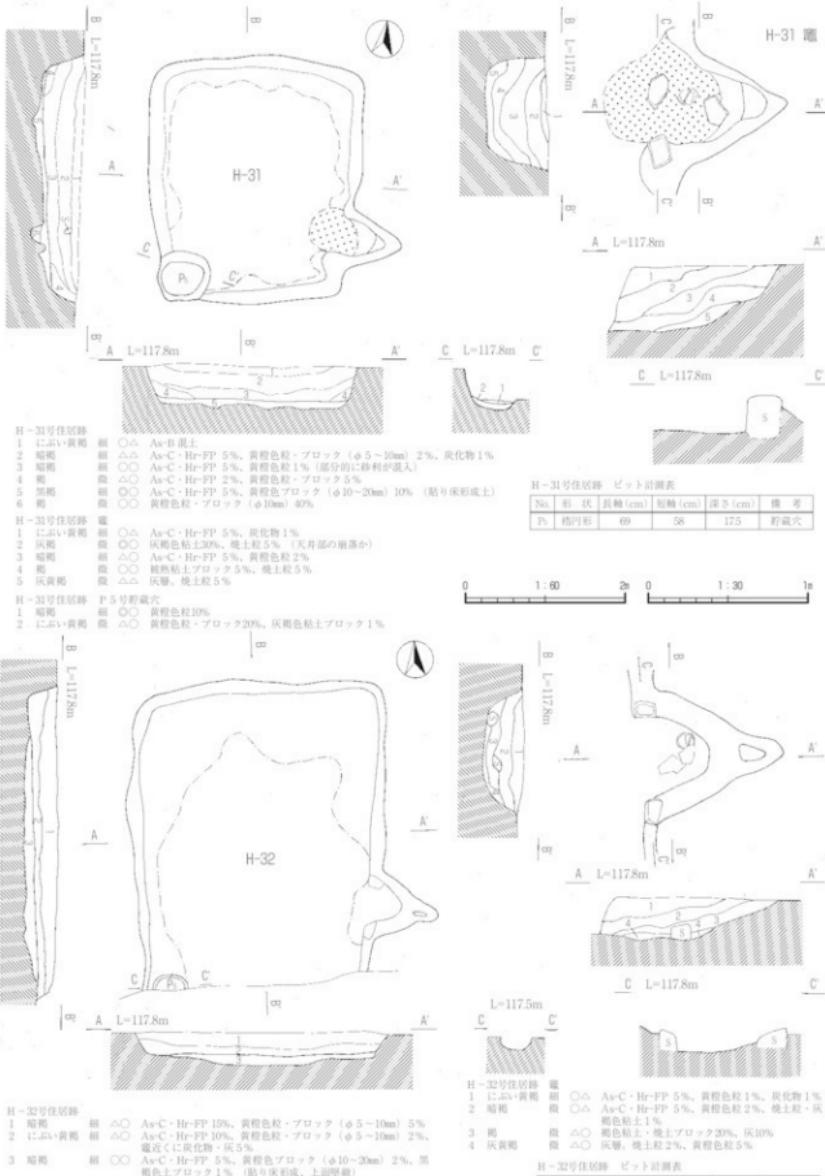


Fig.29 H-31・32号住居跡

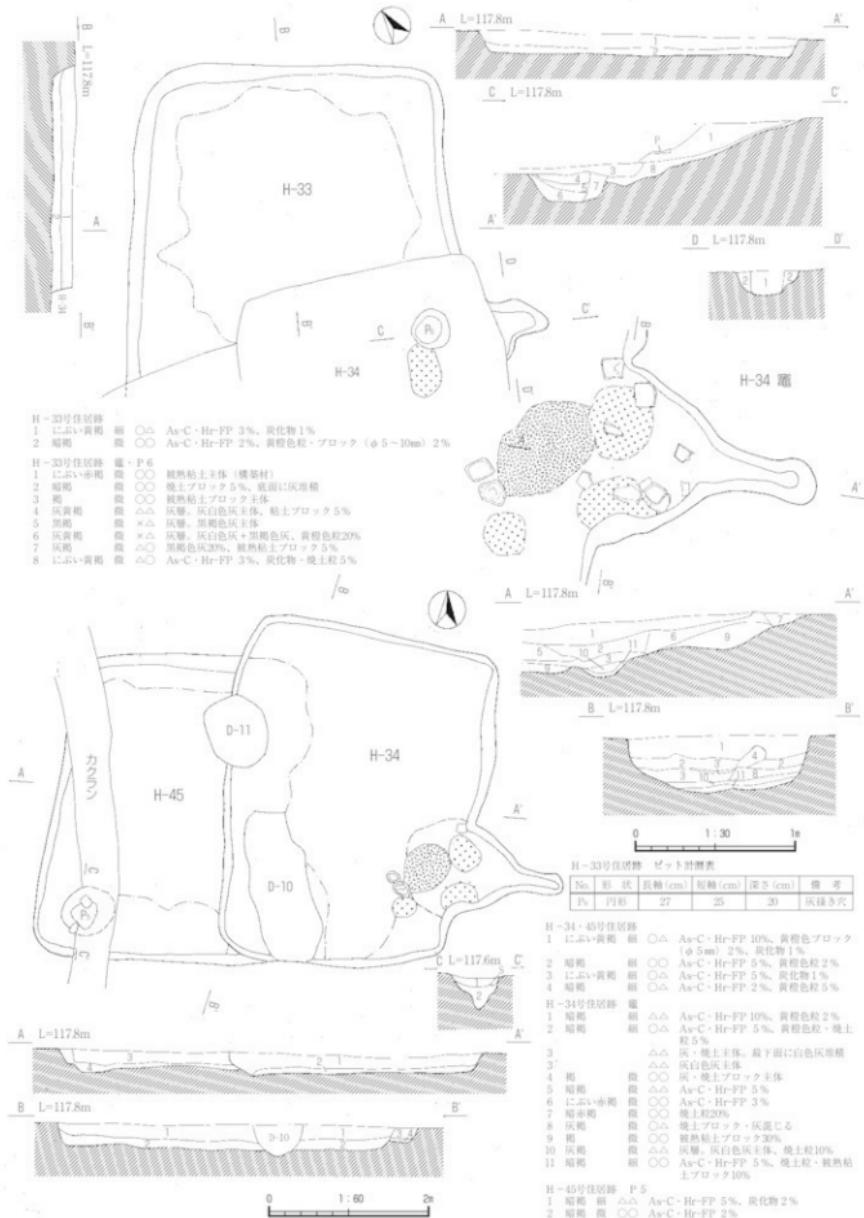


Fig.30 H-33・34・45号住居跡

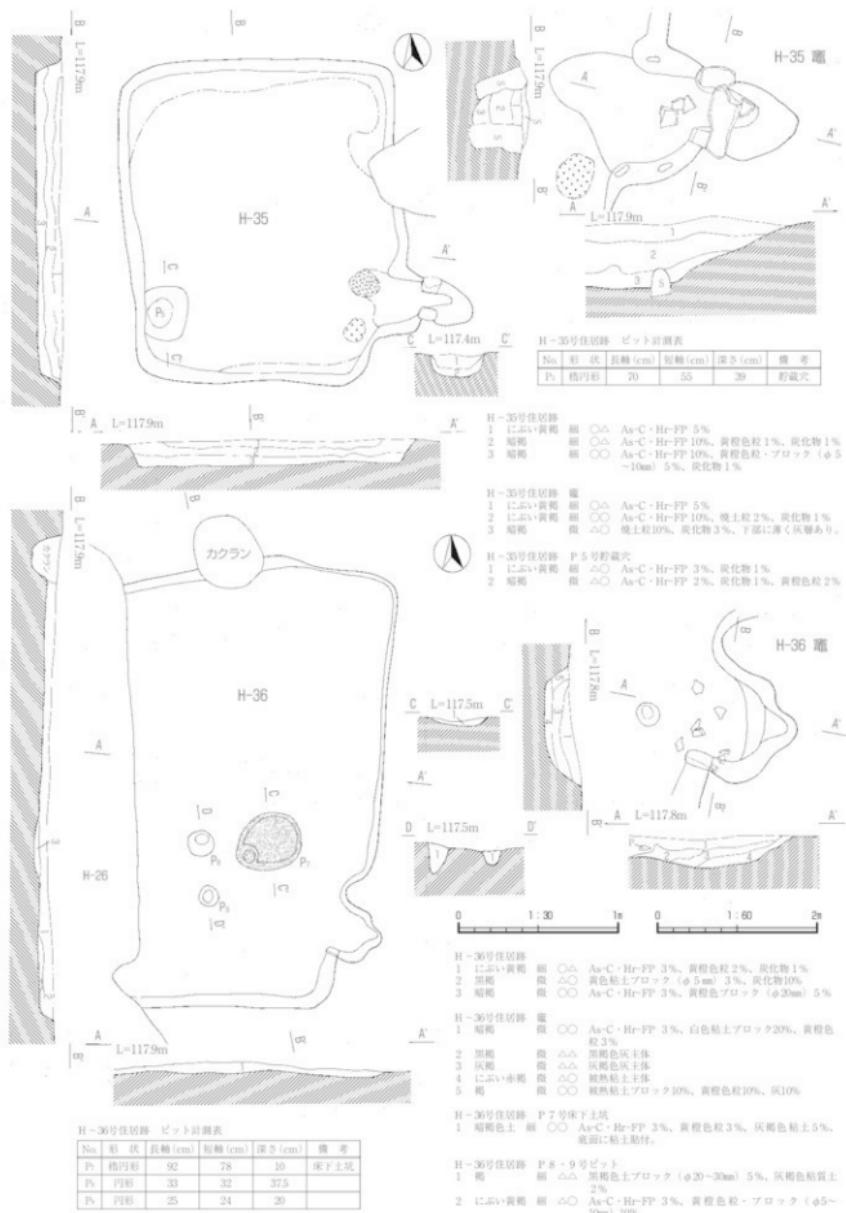


Fig.31 H-35・36号住居跡

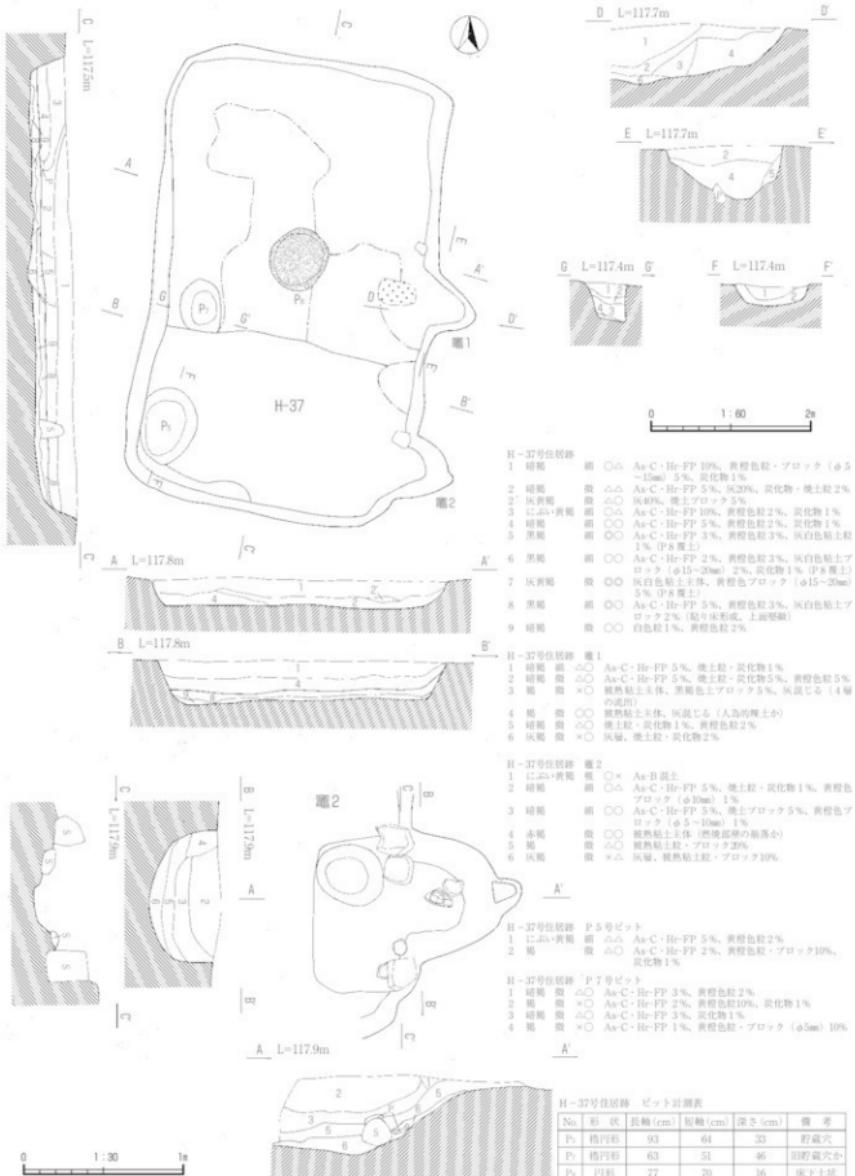


Fig32 H-37号住居跡

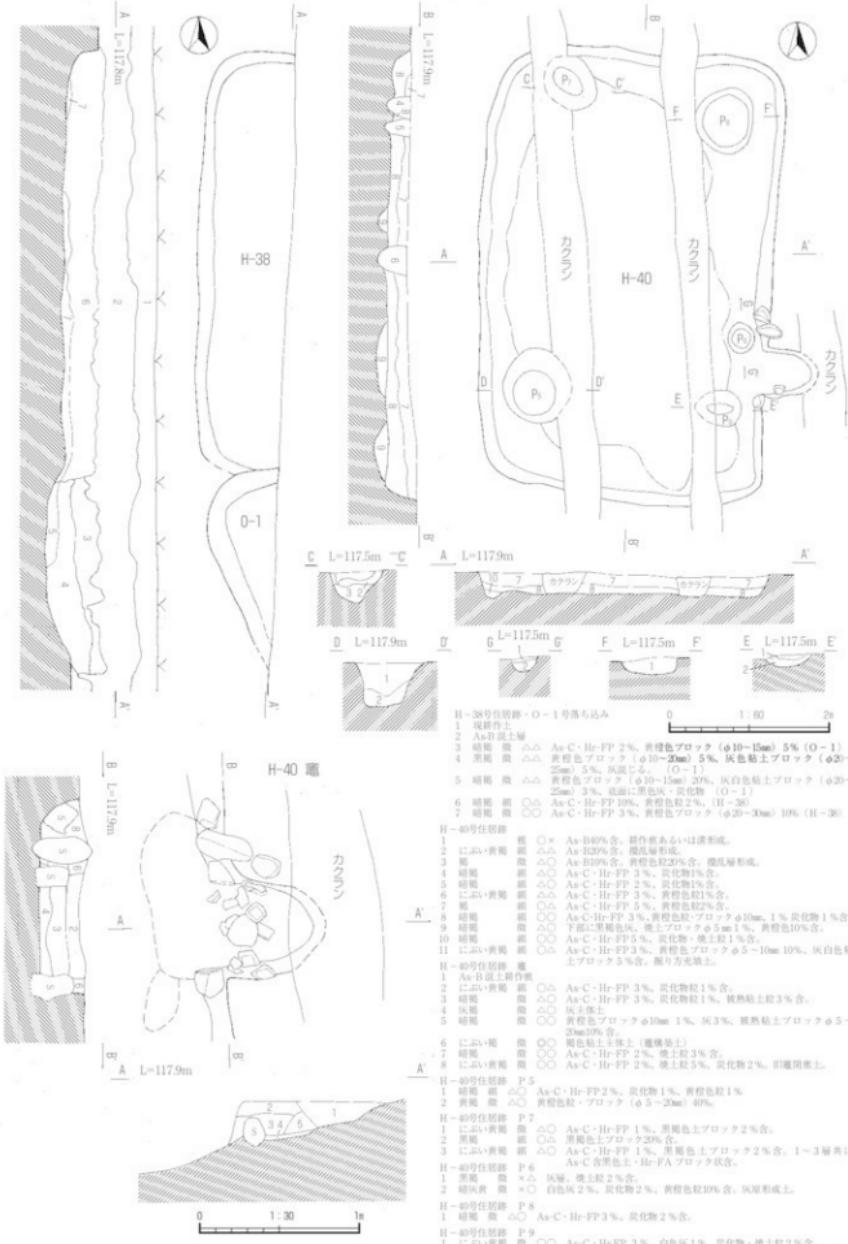


Fig.33 H-38・40号住居跡、O-1号落ち込み

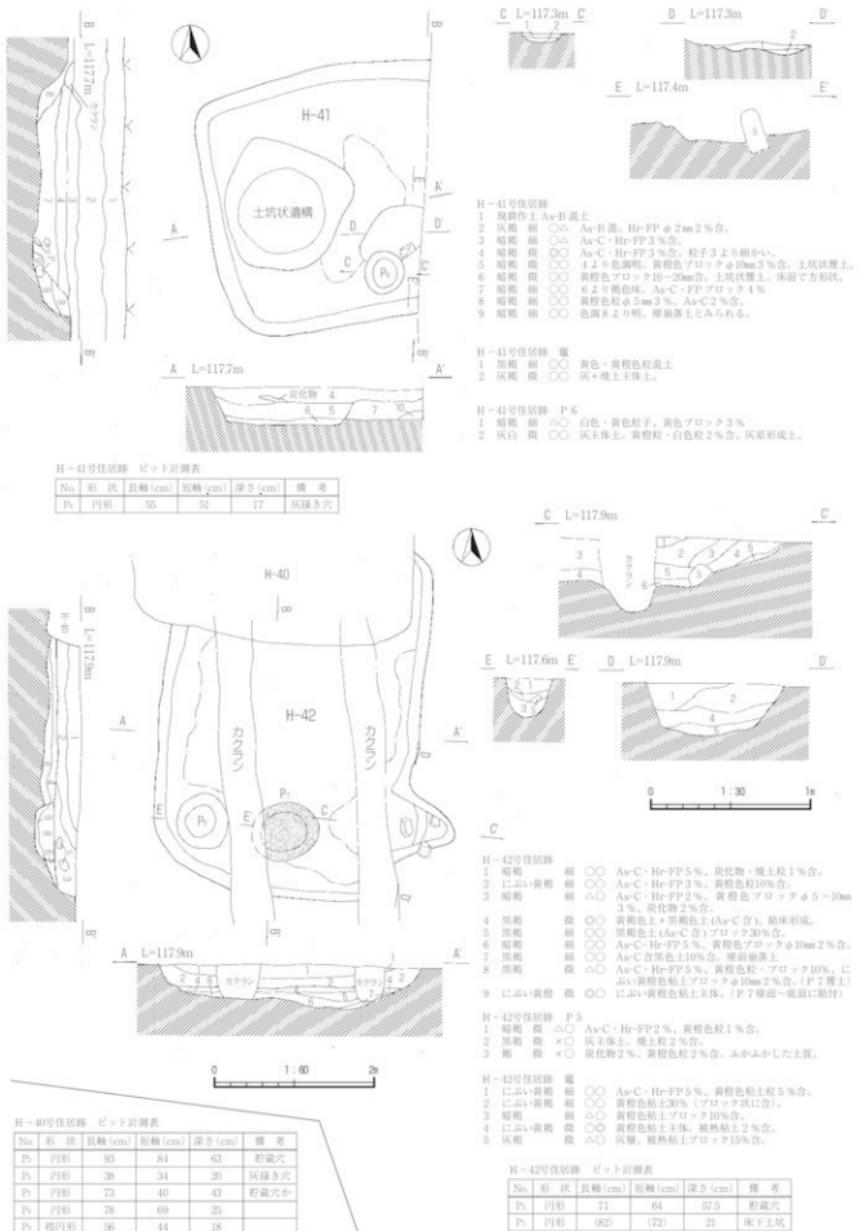


Fig.34 H-41・42号住居跡

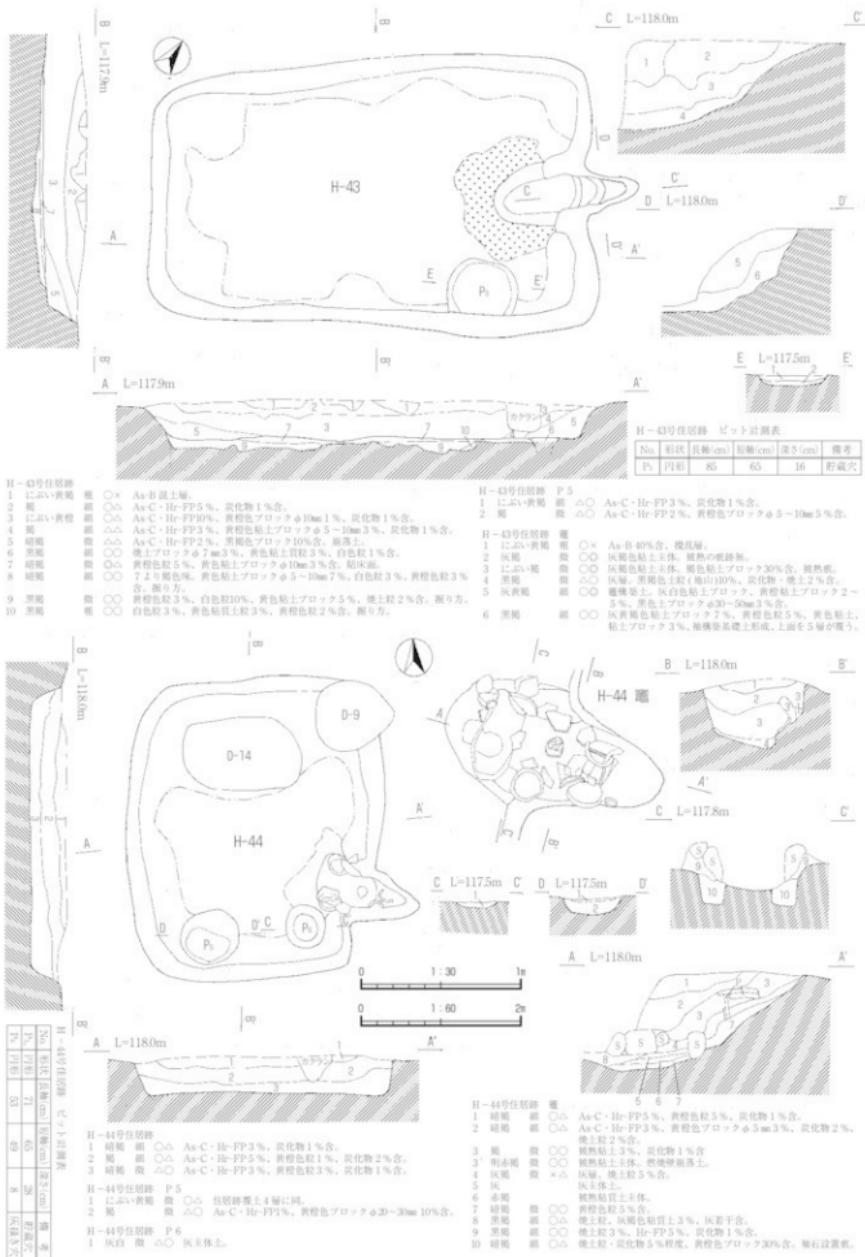


Fig.35 H-43・44号住居跡

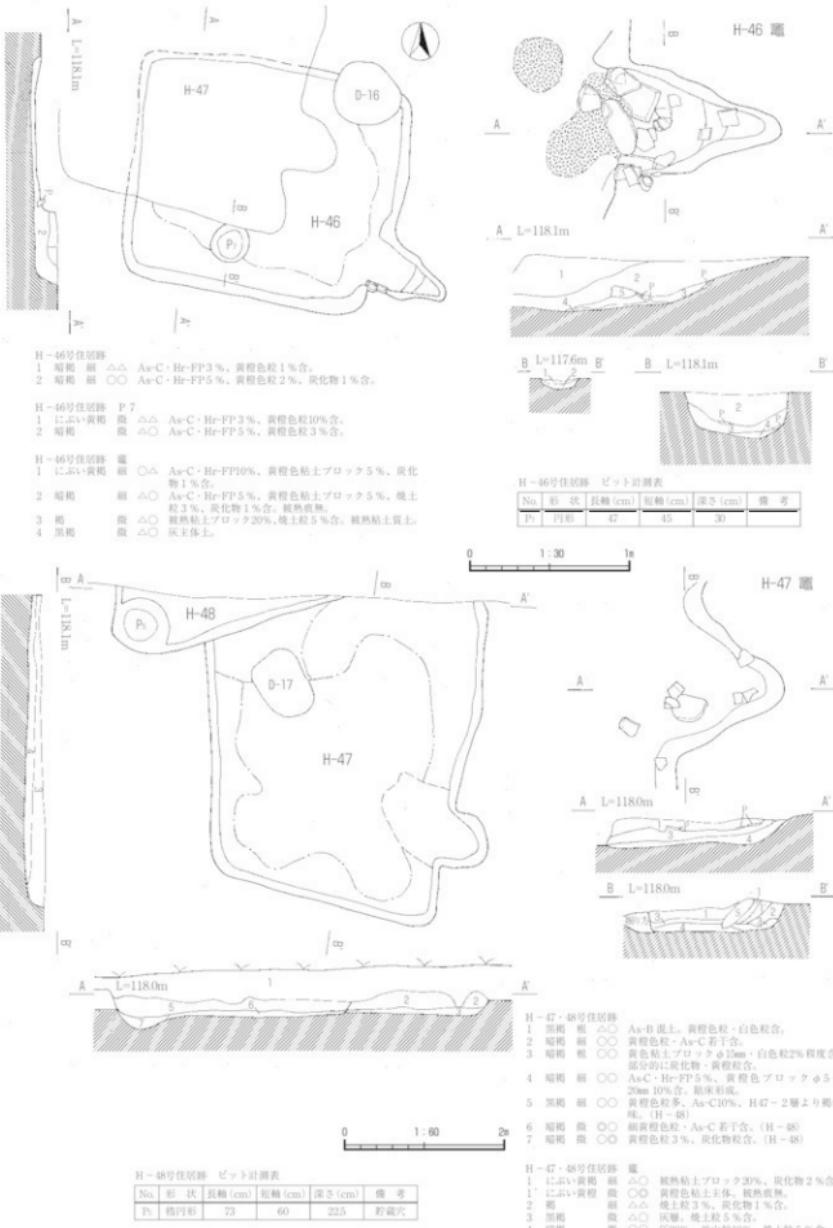


Fig.36 H-46・47・48号住居跡

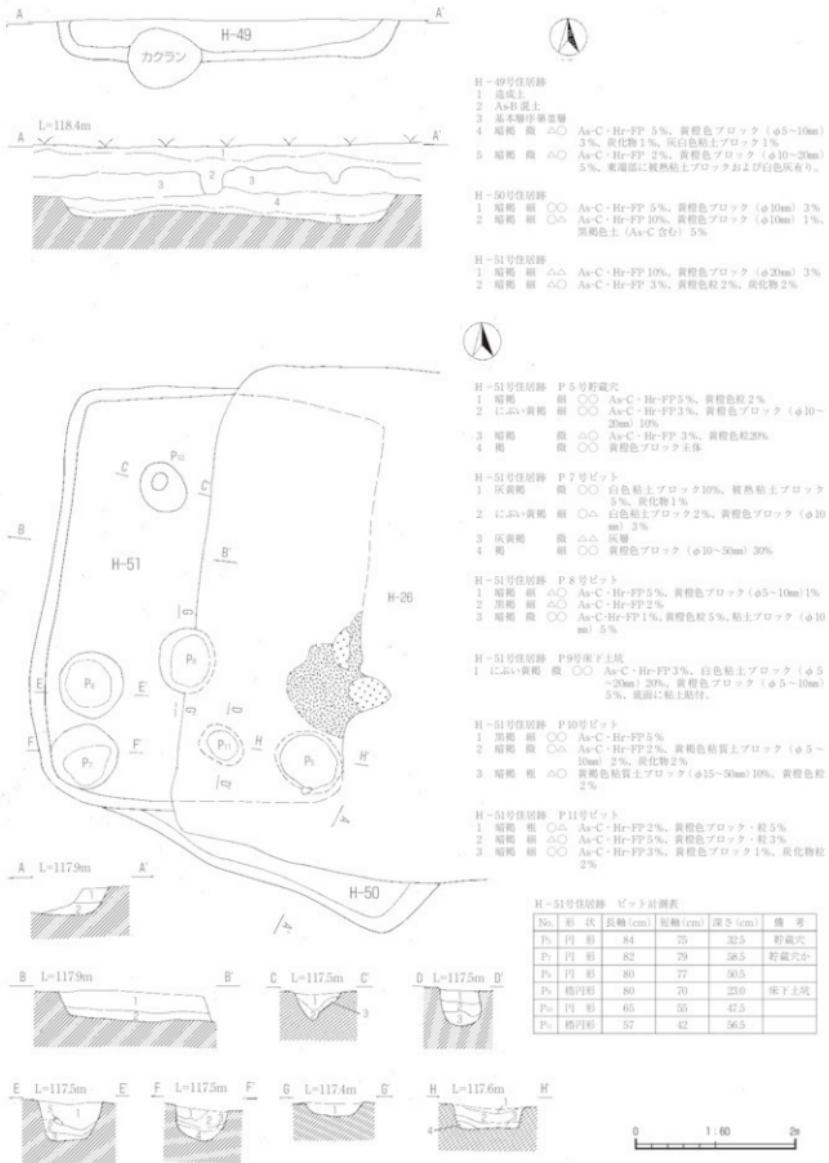


Fig.37 H-49・50・51号住居跡

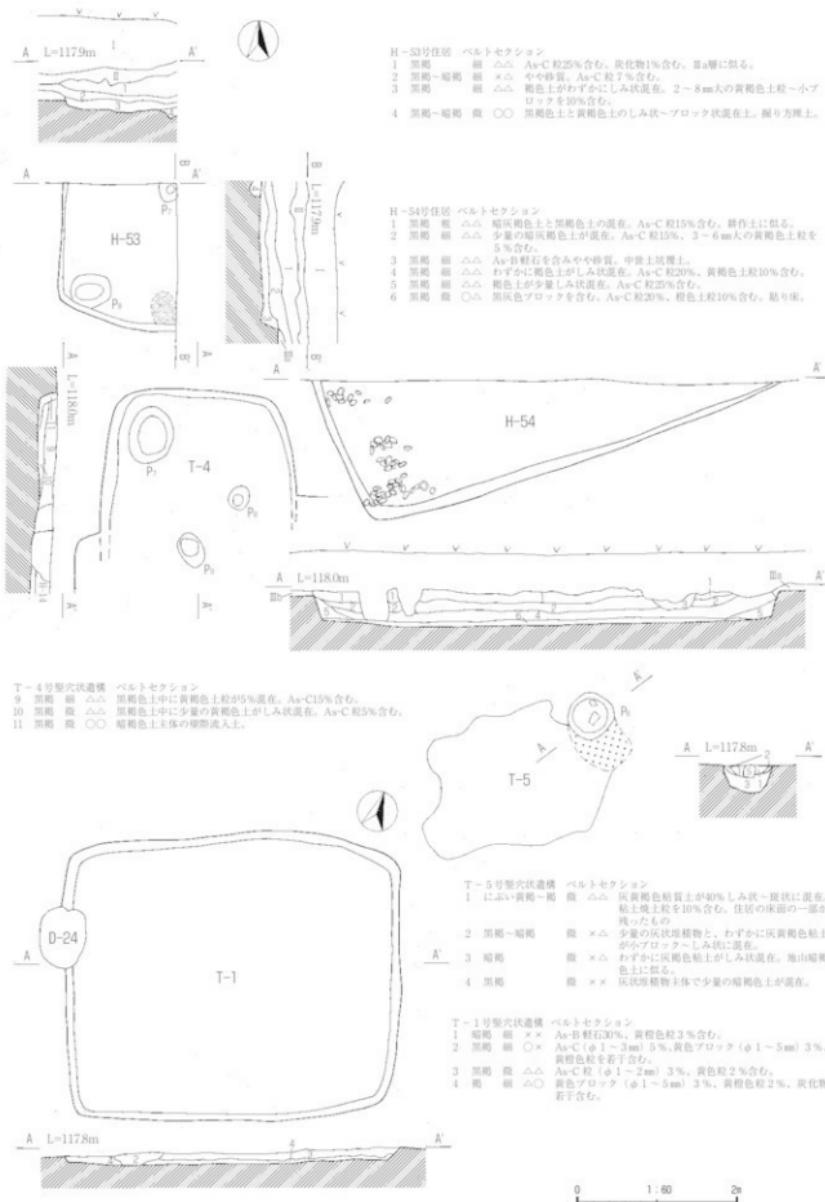
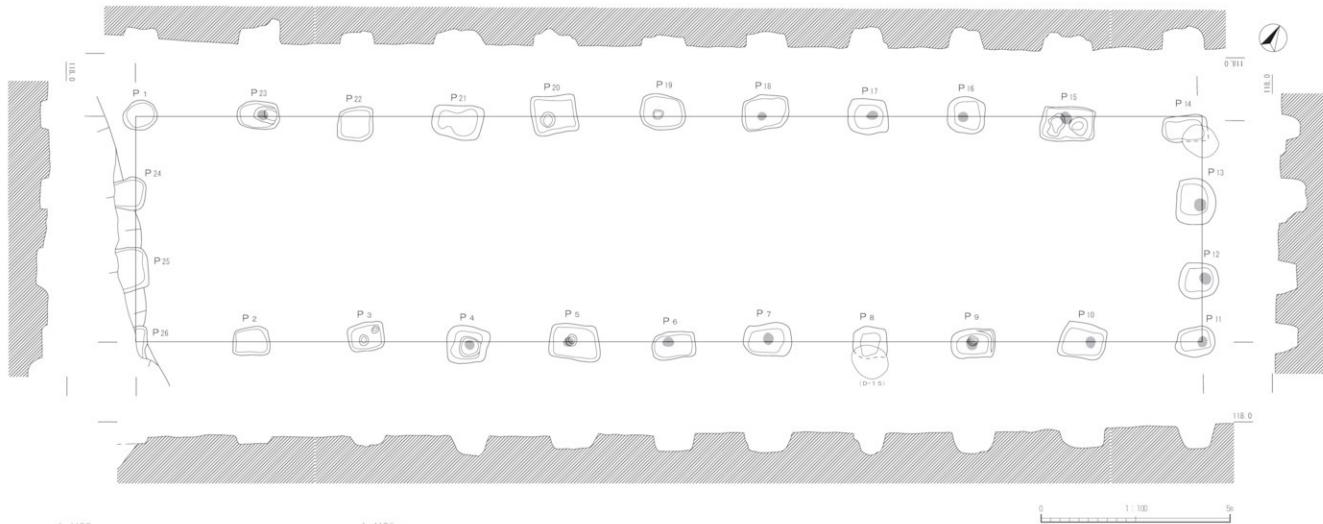


Fig.38 H-53・54号住居跡、T-1・4・5号堅穴状遺構



Fig.39 B - 1号掘立柱建物跡 柱穴断面図

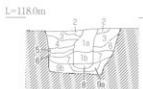


P1
1. に低い黄褐色土。白色粘質土 (Irr-C 含む) 含む。
2a. 前面土。地山プロック少量。柱根埋土。
3. 前面土。地山プロック多量。
4. に低い黄褐色土。地山プロック少量。
5. 前面土。地山プロック少量。
6. 前面土。地山プロック多量。
7. 前面土。6層より成る砂質物。
8. 黄褐色土。地山プロック土体。



P1
1. 前面土。
2a. 前面土土体。縦まり無。柱根埋土。
2b. 前面土土体。縦まり無。柱根埋土。
2c. 前面土土体。地山プロック少量。柱根埋土。
3. 前面土。地山プロック少量。
4. に低い黄褐色土。地山プロック多量。
5. 前面土。
6. 黄褐色土。地山プロック少量。
7. 黄褐色土。地山プロック多量。
8. 黄褐色土。縦まり強。柱のあたり。

P2
1. 細色粘質土と黑色土 (Ax-C 含む)。縦まり無。柱根埋土。底面硬化。
2. に低い黄褐色土。縦色粘質土プロック少量。
3. 前面土。地山プロック少量。
4. 前面土。地山プロック多量。
5. 前面土。黑色土 (Ax-C 合む) プロック多量。



B - 1 号掘立柱建物跡柱穴調査表

No.	形状	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	備考	No.	形状	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	備考
P1	円形	91	80	255		P16	長方形	118	70	535	
P2	長方形	98	74	290		P17	長方形	142	90	430	柱痕・あたり
P3	長方形	94	75	315	柱痕・底面凹	P18	隅丸方形	100	98	545	柱痕・あたり
P4	隅丸方形	106	100	515	柱痕・あたり	P19	隅丸方形	106	92	555	柱痕
P5	隅丸長方形	135	92	405	柱痕・あたり	P20	隅丸長方形	125	90	370	柱痕・あたり
P6	長方形	112	70	465		P21	隅丸長方形	120	90	235	
P7	隅丸長方形	125	80	535	柱痕・あたり	P22	長方形	120	100	400	
P8	隅丸方形	90	85	580		P23	隅丸長方形	135	90	310	
P9	隅丸方形	116	76	570	柱痕・あたり	P24	隅丸方形	94	88	305	
P10	長方形	122	90	520	柱痕・あたり	P25	隅丸長方形	110	73	540	柱痕・あたり
P11	隅丸長方形	110	80	590	柱痕	P26	方形	(84)	(68)	250	
P12	105	90	565	柱痕・あたり	P27	方形	(120)	(78)	355		
P13	隅丸長方形	120	102	745	柱痕・あたり	P28	方形	(84)	(26)	185	

* 柱穴内のアミ掛け部分は、確認面より10~15cm掘り下した時の柱痕のプランである。なお裁ち割りについては、P 1~10および P 15~23は東西方向、P 11~14および P 25は南北方向で行い、それぞれ前面と西面で土層の観察を行った。

Fig.40 B - 1 号掘立柱建物跡

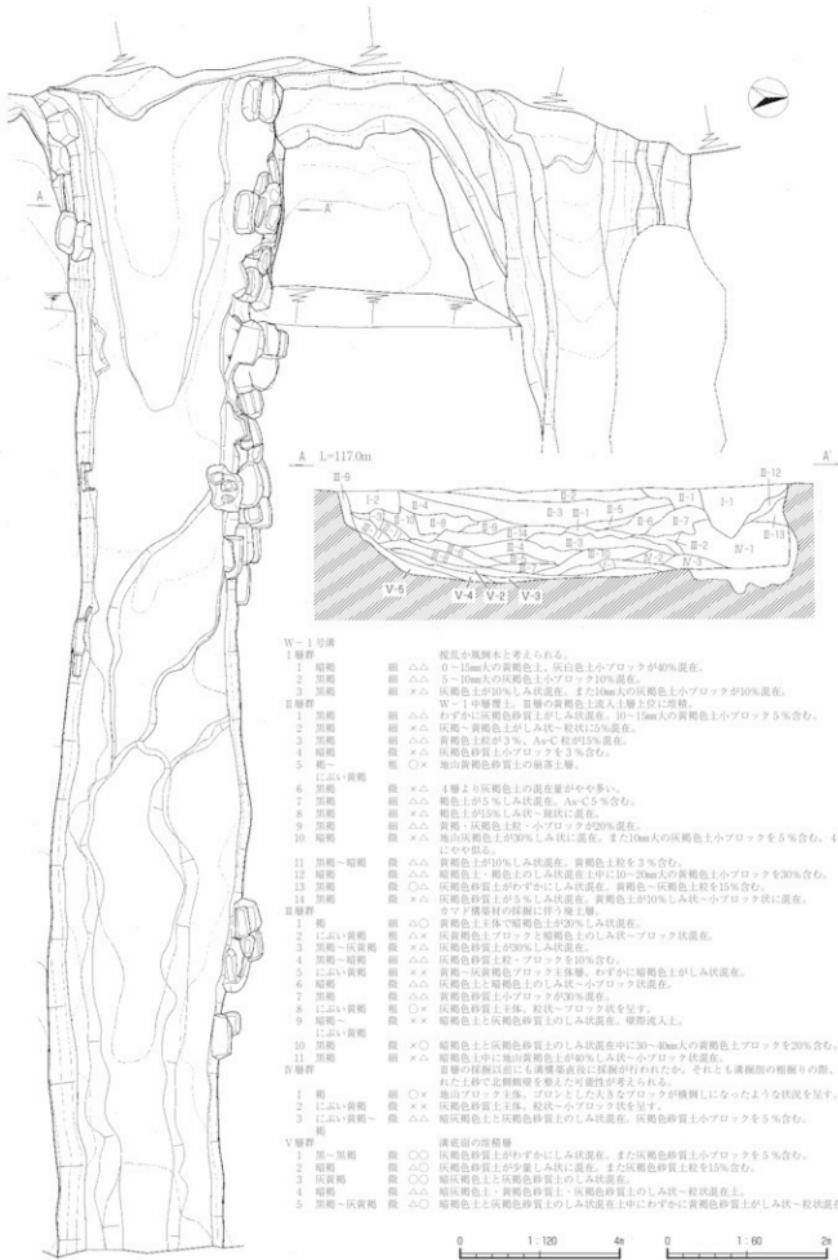
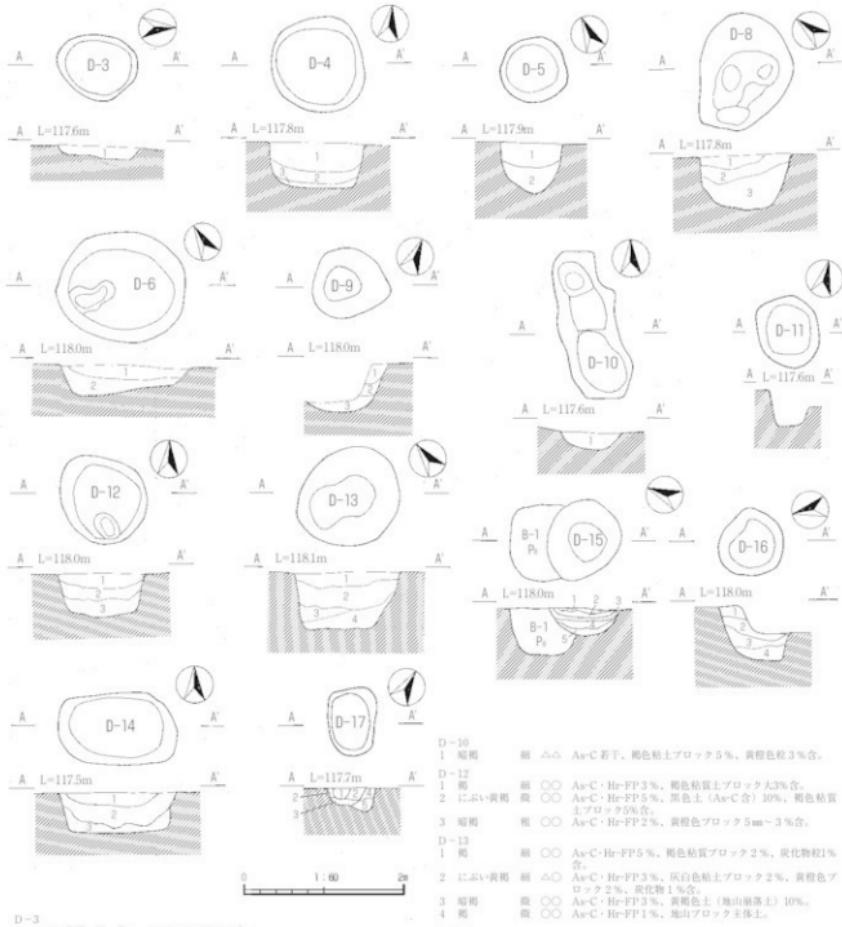


Fig.41 W-1 - 2号溝跡



D-3
1 にぶい黄褐色 細 ○△ As-C・Hr-FP10%含。

D-4
1 軽開 前 △○ Hr-FP3%, 黄褐色ブロックφ5mm1%, 硫化物1%含。
2 にぶい黄褐色 細 △○ Hr-FP1%, 硫化物2%, 黑5%, 地上物2%含。

D-5
1 にぶい黄褐色 細 ○× As-B40%, 硫化物1%含。
2 軽開 細 ○△ AsB30%, Hr-FP10%, 黄褐色包有ブロックφ20~30mm5%, 黄褐色10%, As-C・Hr-FP30%含。

D-6
1 軽開 細 ○× As-B40%含, As-B混上。
2 にぶい黄褐色 細 ○○ AsB30%, Hr-FP10%含。

D-8
1 にぶい黄褐色 細 ○△ As-C・Hr-FP5%含。

D-9
1 黄褐色 細 ○○ 黄褐色約20%含。
2 軽開 細 ○○ 黄褐色約3~10%含, 白色約5%, 黑土粒若干含。
3 黄褐色 細 △○ 黄褐色ブロックφ10mm10%含。

D-10
1 黄褐色 細 △△ As-C若干, 黄褐色粘土ブロック5%, 黄褐色3~5%含。

D-12
1 黄褐色 細 ○○ As-C・Hr-FP3%, 黄褐色粘土ブロック10%含。
2 にぶい黄褐色 細 △○ As-C・Hr-FP5%, 黑色土(As-C含)10%, 黄褐色粘土ブロック5%含。

D-13
1 黄褐色 細 ○○ As-C・Hr-FP5%, 黄褐色粘土ブロック2%, 使化物1%含。
2 にぶい黄褐色 細 △○ As-C・Hr-FP3%, 黄褐色粘土ブロック2%, 黄褐色ブロック2%, 黄褐色包有物1%含。

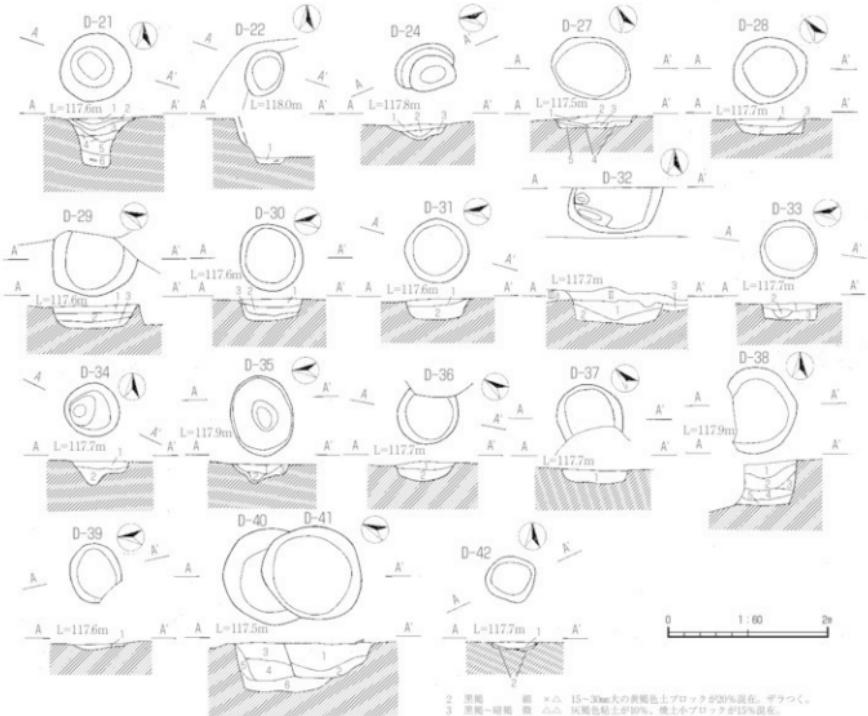
D-14
1 にぶい黄褐色 細 △○ As-C・Hr-FP3%, 黄褐色2%, 硫化物1%含。
2 軽開 細 △○ As-C・Hr-FP2%, 硫化物1%含。

D-15
1 にぶい黄褐色 細 ○△ As-C・Hr-FP5%含。
2 黄褐色 細 ○○ 黄褐色粘土上体。

D-16
1 黄褐色 細 ○○ As-C・Hr-FP5%, 黄褐色粘土上体。
2 軽開 細 ○△ As-C・Hr-FP5%, 黄褐色ブロック3%。

D-17
1 にぶい黄褐色 細 △○ 黄褐色粘土上体。
2 軽開 細 ○○ As-C・Hr-FP5%, 黄褐色ブロック若干含。
3 黄褐色 細 ○○ As-C・Hr-FP5%, 黄褐色ブロック3%含。
4 にぶい黄褐色 細 ○○ As-C・Hr-FP3%, 黄褐色ブロック2%, 硫化物1%含。
5 黄褐色 細 ○○ As-C・Hr-FP2%, 黄褐色3~5%含。

Fig.42 D-3~6, 8~17号土坑



D-21号土壤	1 黑褐	細 △△ 少量の黄白色土としみ状混在。わずかに黄褐色土上に小プロックを含む。
2 黒褐	細 △△ 少量の黄褐色土上に小プロックを含む。	
3 黒褐～暗褐	粗 △△ 少量の黄褐色土としみ状混在。	
4 黑褐～暗褐	粗 △△ 少量の黄褐色土。わずかに灰化層が混在。ごくわずかに黄褐色土。	
5 黑褐	粗 ✕△ わずかに黄褐色土上に小プロックを含む。	
6 砂粘	粗 ✕△ ごくわずかに黄褐色土上に小プロックを含む。サッとした感じ。	
D-22号土壤	1 黑褐～暗褐	✿ ✕△ あまり流入性ない。サッとした感じ。
D-24号土壤	1 黑褐	黄褐色土が少ししみ状に混在。耕作土に似る。
2 黑褐	細 ✕△ わずかに黑褐色土。黄褐色土としみ状に混在。As-C粒2%	
3 黑褐～暗褐	細 △△ 黄褐色土と黒褐色土とのみ混じ小プロック状混在。	
D-27号土壤	1 黑褐	黄褐色土プロック約40%混在。複雑な層構造。
2 砂粘	粗 △△ 黄褐色土10%しみ状混在。As-C粒20%含む。	
3 黑褐粘	粗 △△ 4層半の黄褐色土と10%しみ状混在。	
4 黑褐	粗 △△ わずかに黒褐色土がしみ状混在。2~5mmの黄褐色土粒2%含む。	
5 黑褐	粗 △△ 地中の黄褐色土と4層土の状況混在。	
D-28号土壤	1 黑褐	2~8mmの塊状土5%含む。As-C粒5%含む。
2 黑褐	細 △△ わずかに黒褐色土がみ混在。As-C粒3%含む。5~20mmの大塊化物2%含む。	
3 黑褐	細 △△ 地中の黒褐色土と2層土のしみ状混在。	
D-29号土壤	1 黑褐～暗褐	As-C粒2%含む。
2 黑褐～暗褐	粗 △△ やや骨質の黄褐色土上に土作。	
3 黑褐	粗 ✕△ わずかに黄褐色土としみ状混在。	
D-30号土壤	1 黑褐～暗褐	As-C粒2%含む。
2 黑褐～暗褐	粗 △△ 小ちや貫の黒褐色～暗褐色土。As-C粒25%、炭化物1%含む。	
3 黑褐～暗褐	粗 ○△ 10~15mmの黄褐色土小プロック約30%含む。	
D-32号土壤	1 黑褐	As-B粒群多量に含む。10~15mmの黄褐色土小プロックを3%、5mmの大黒褐色土を2%含む。ザラつく。
D-33号土壤	1 黑褐	As-C-Hr-FP2%含む。表面に炭化物を多く(φ1~5mm)3%含む。層下部に黄褐色土を5%含む。
D-34号土壤	1 黑褐	As-C粒5%、炭化物1%含む。
2 黑褐～暗褐	粗 ✕△ 3層より3層の部分。	
3 黑褐～暗褐	粗 ✕△ やや緻密でやや粘質。As-C粒を1%含む。	
D-35号土壤	1 黑褐	As-C粒20%、炭化物1%含む。
2 黑褐～暗褐	粗 △△ わずかに暗褐色土としみ状混在。As-C粒5%含む。	
3 黑褐	粗 △△ 3層より3層の部分。	
D-36号土壤	1 黑褐	As-C粒5%含む。
2 黑褐～暗褐	粗 △△ 2層(1:12mm)、炭化物1%含む。	
D-37号土壤	1 黑褐	As-C粒5%含む。
2 黑褐～暗褐	粗 △△ 3層より3層の部分。	
D-38号土壤	1 黑褐	As-C粒5%含む。
D-39号土壤	1 黑褐	As-C粒5%含む。
D-40号土壤	1 黑褐	As-C粒5%含む。
D-41号土壤	1 黑褐	As-C粒5%含む。
D-42号土壤	1 黑褐	As-C粒5%含む。

Fig.43 D-21・22・24・27~42号土壤

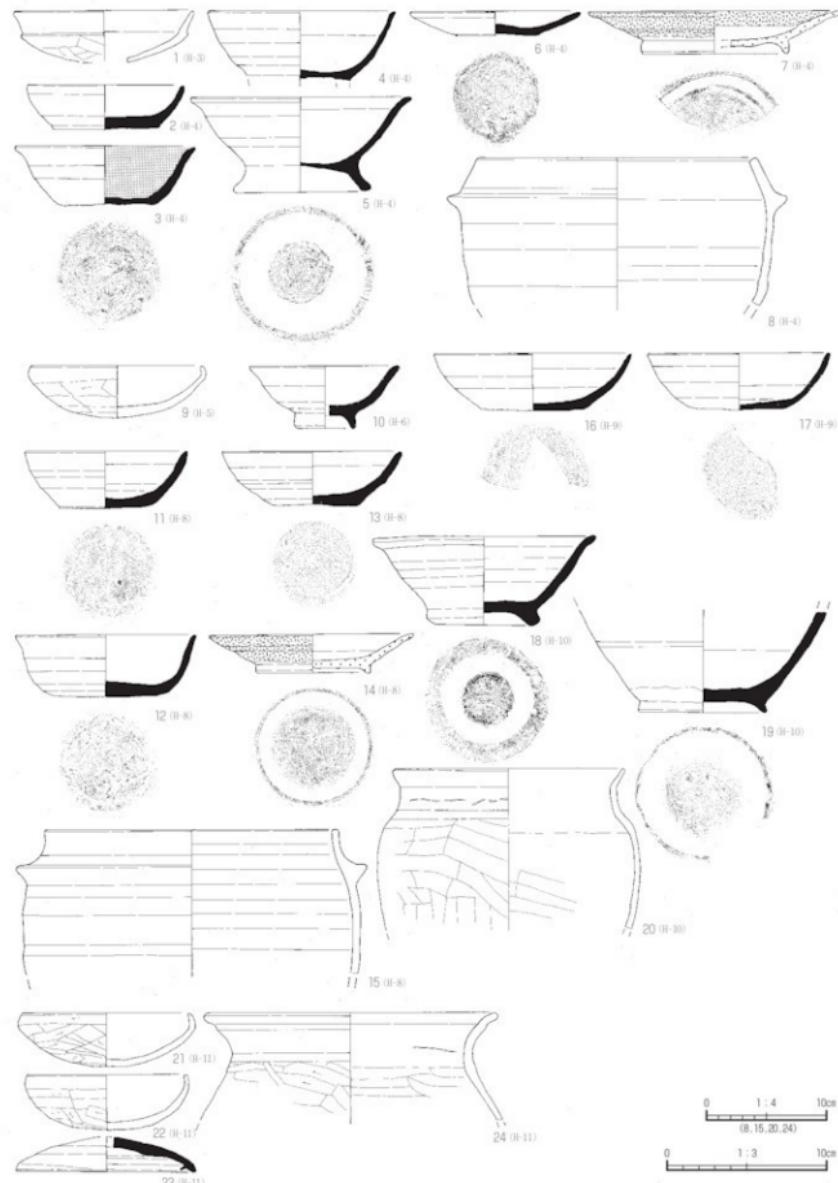


Fig.44 H-3~6、8~11号住居跡出土土器

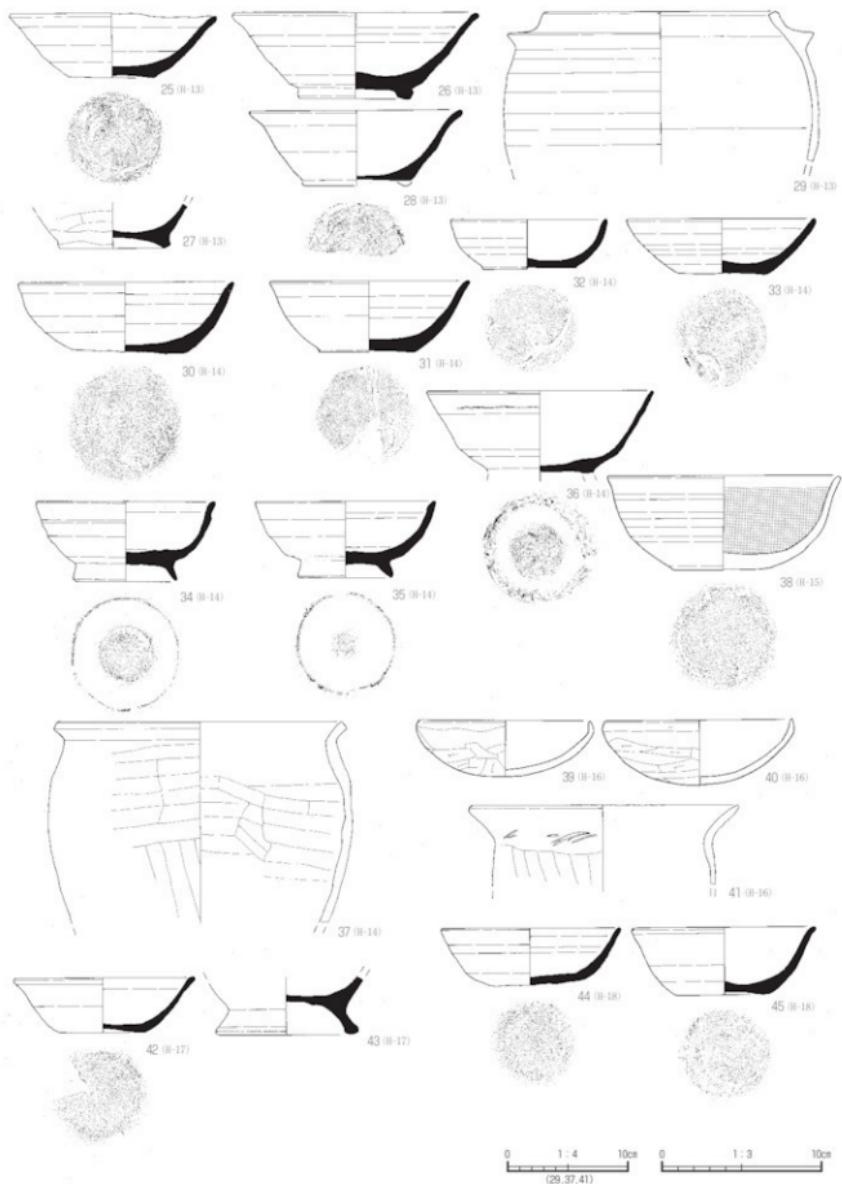


Fig.45 H-13~18号住居跡出土土器

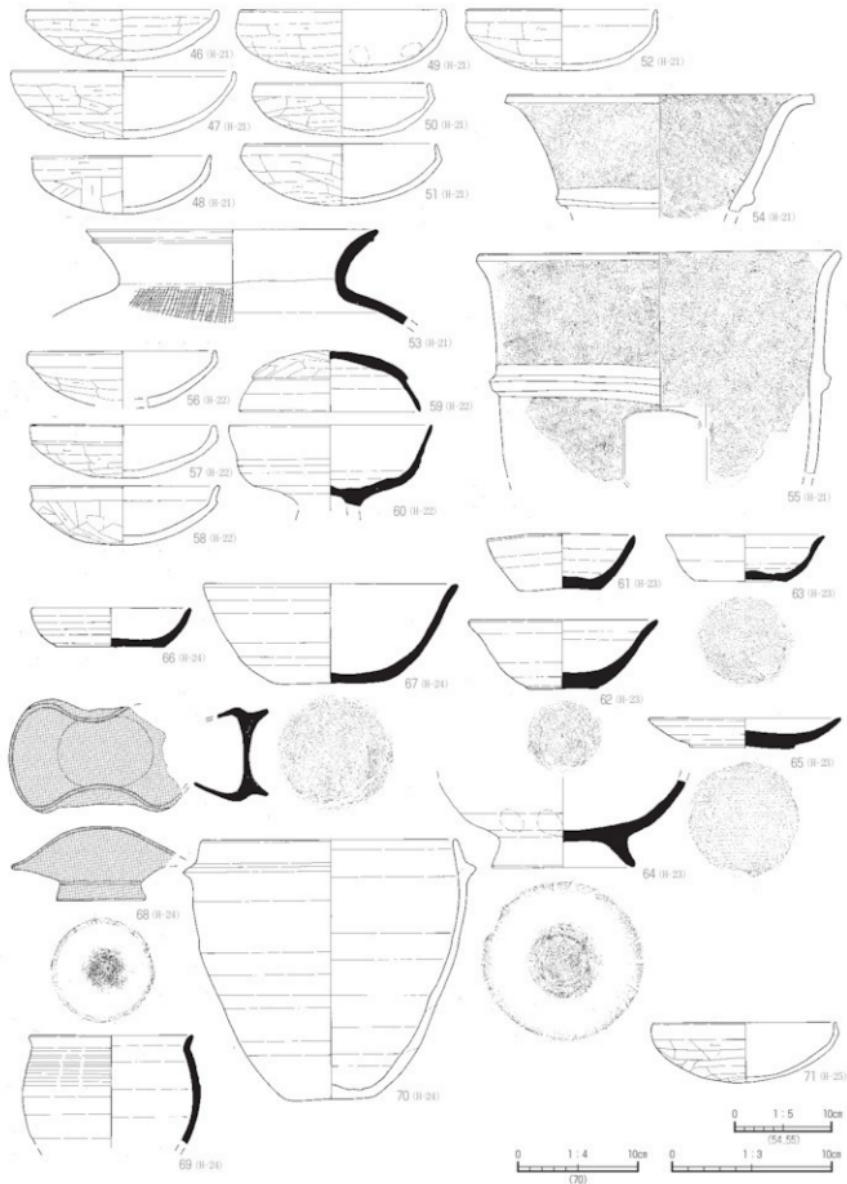


Fig.46 H-21~25号住居跡出土土器

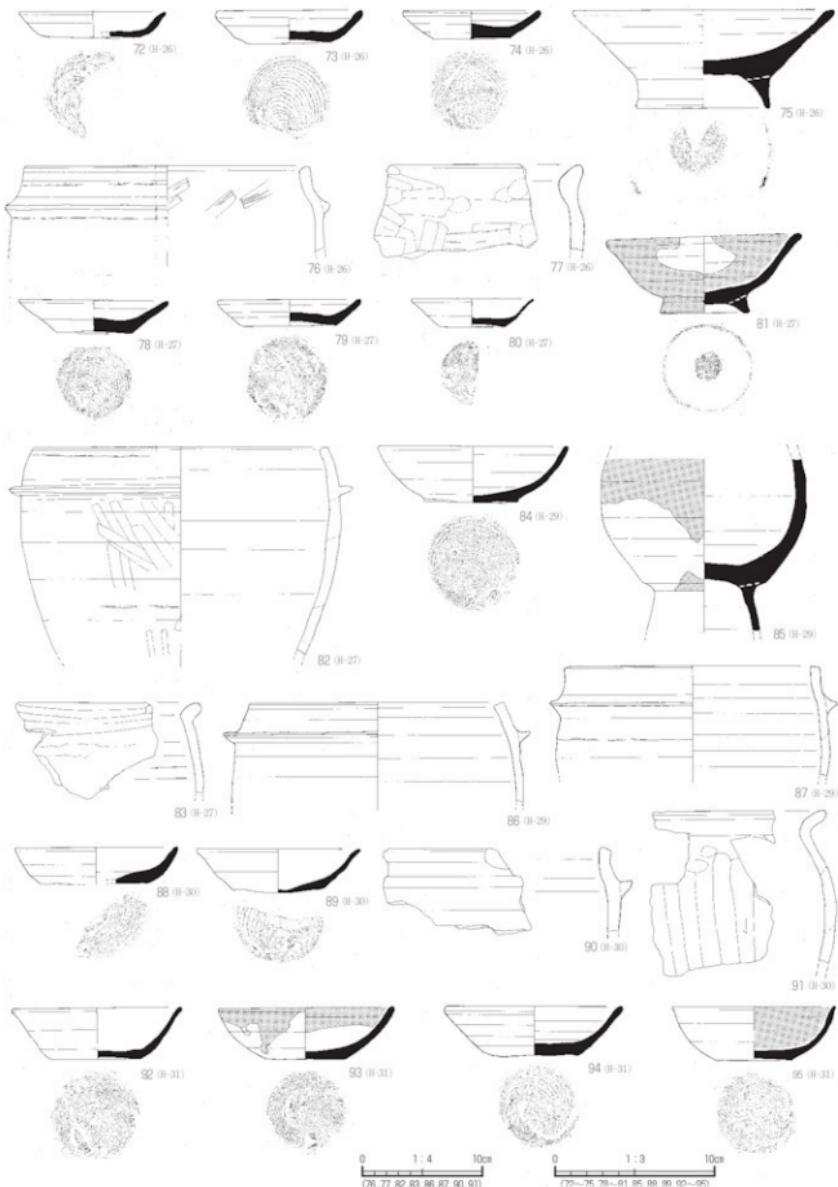


Fig.47 H-26·27·29~31号住居跡出土土器

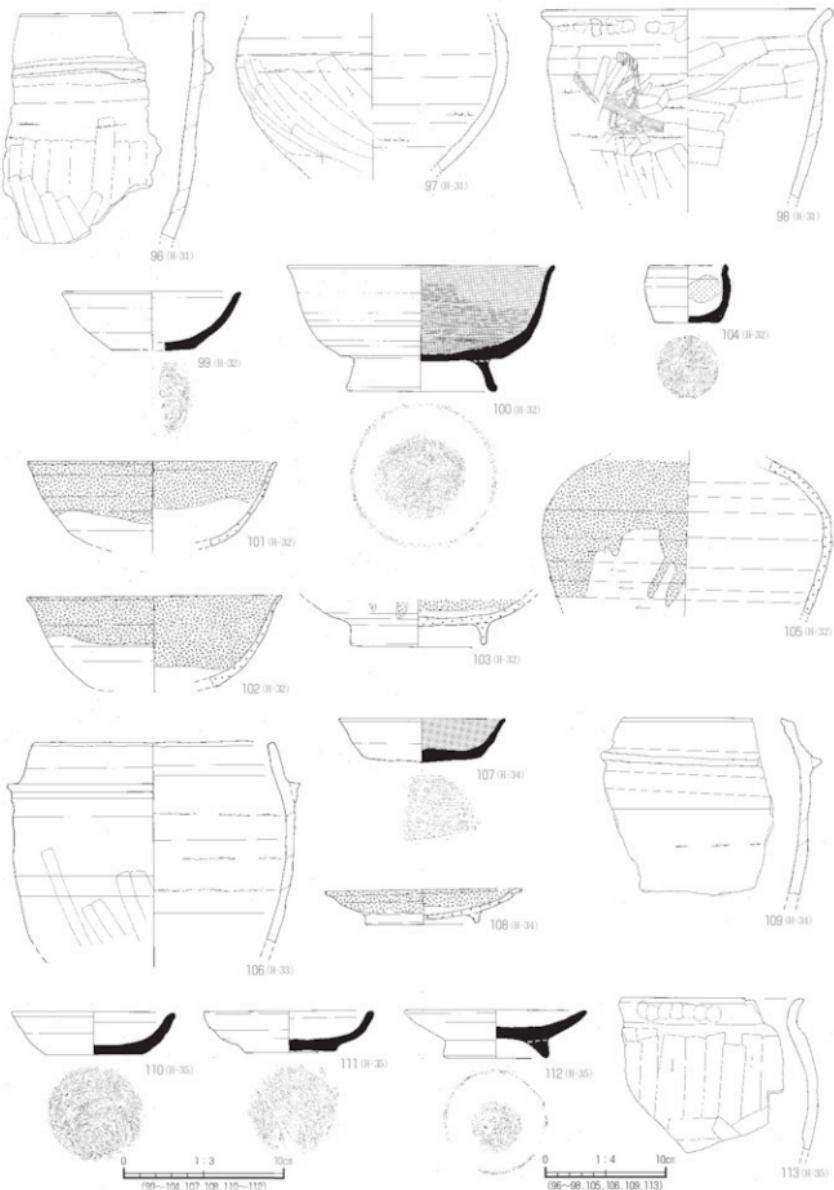


Fig.48 H-31~35号住居跡出土土器

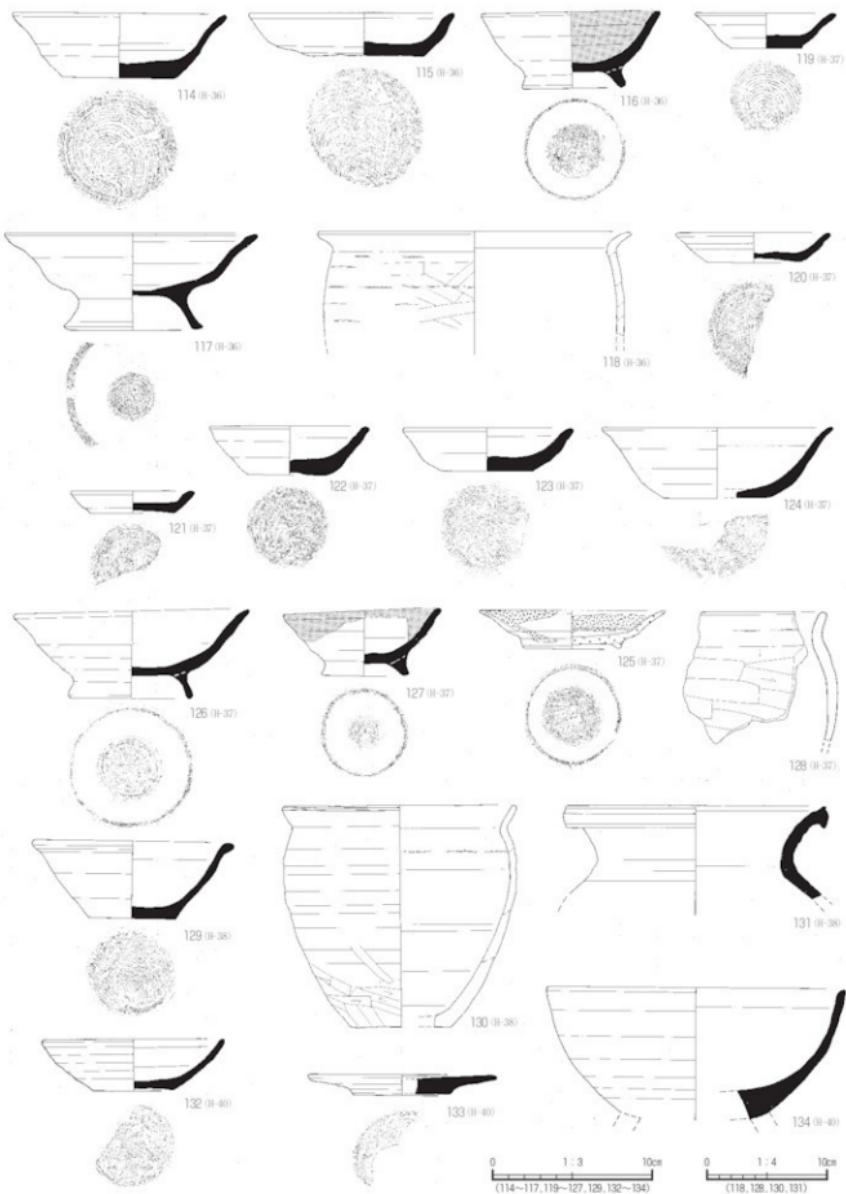


Fig.49 H-36~38 · 40号住居跡出土土器

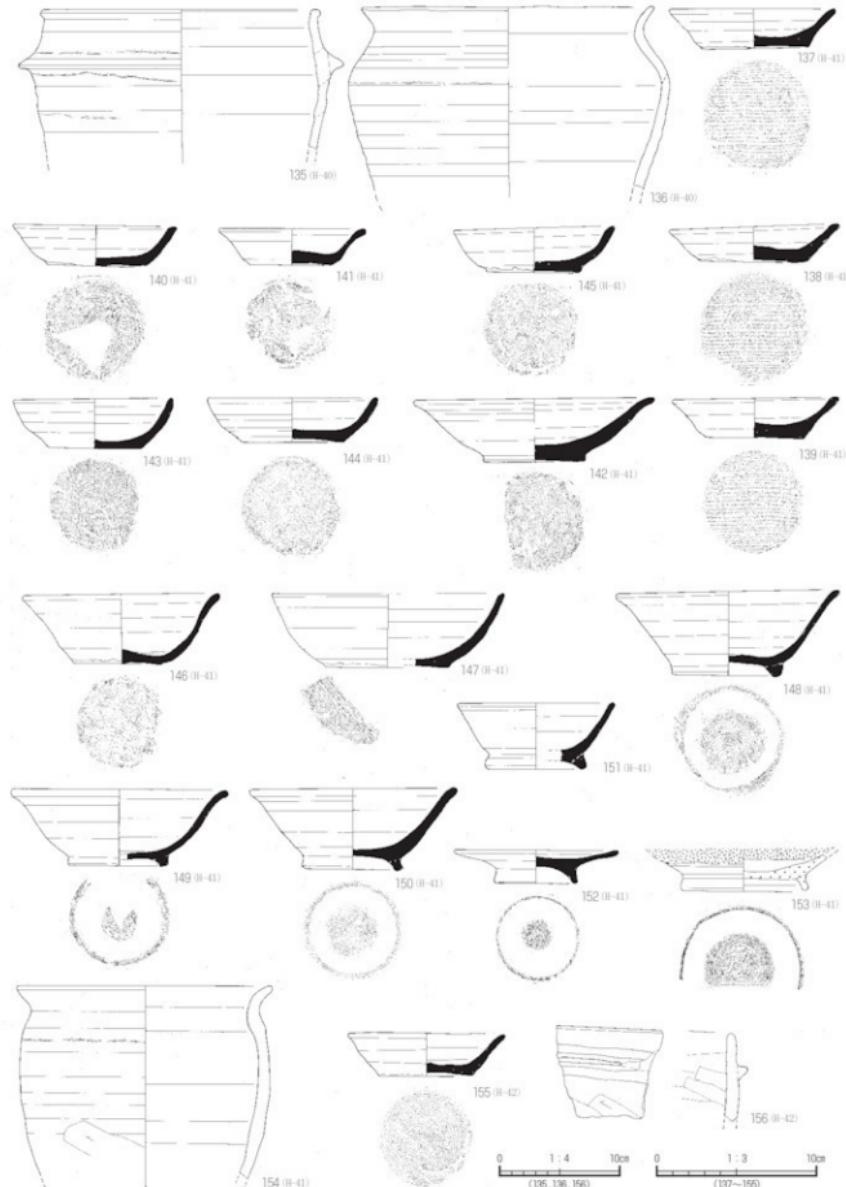


Fig.50 H-40~42号住居跡出土土器

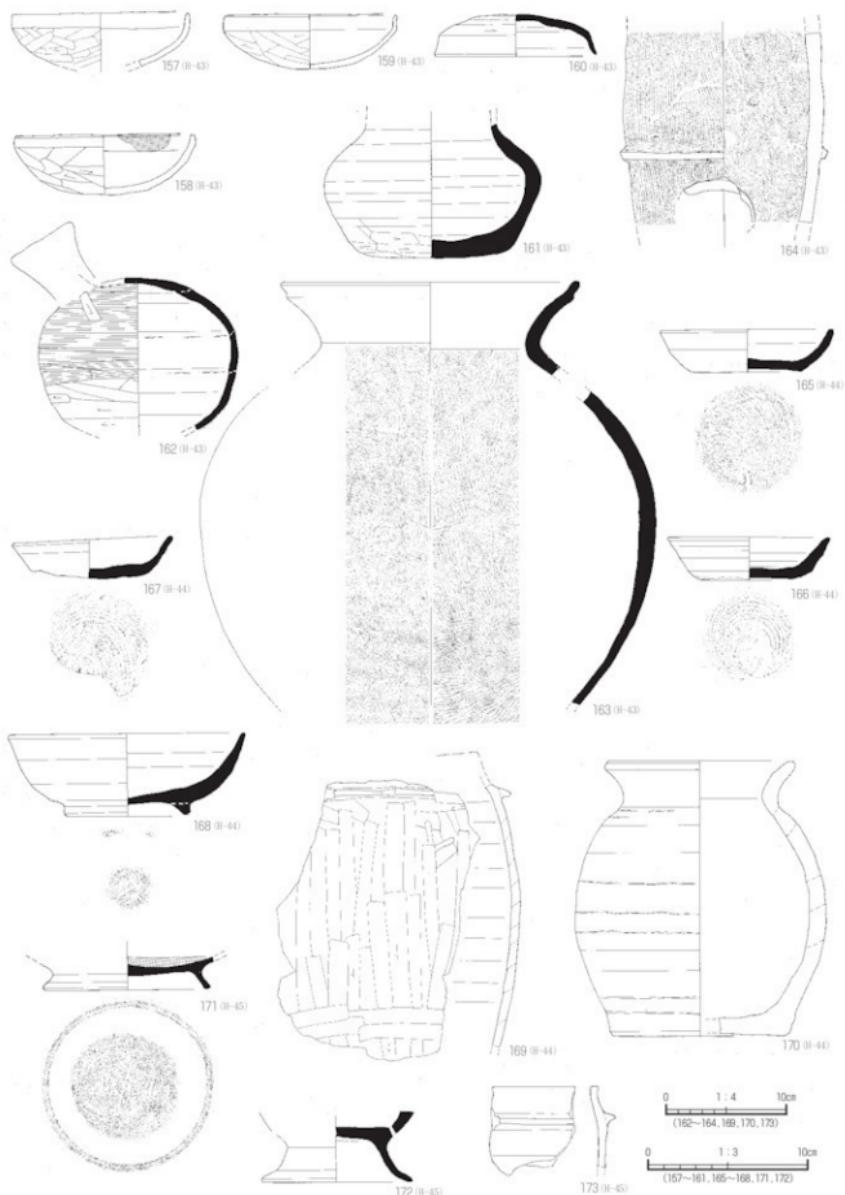


Fig.51 H-43~45号住居跡出土土器

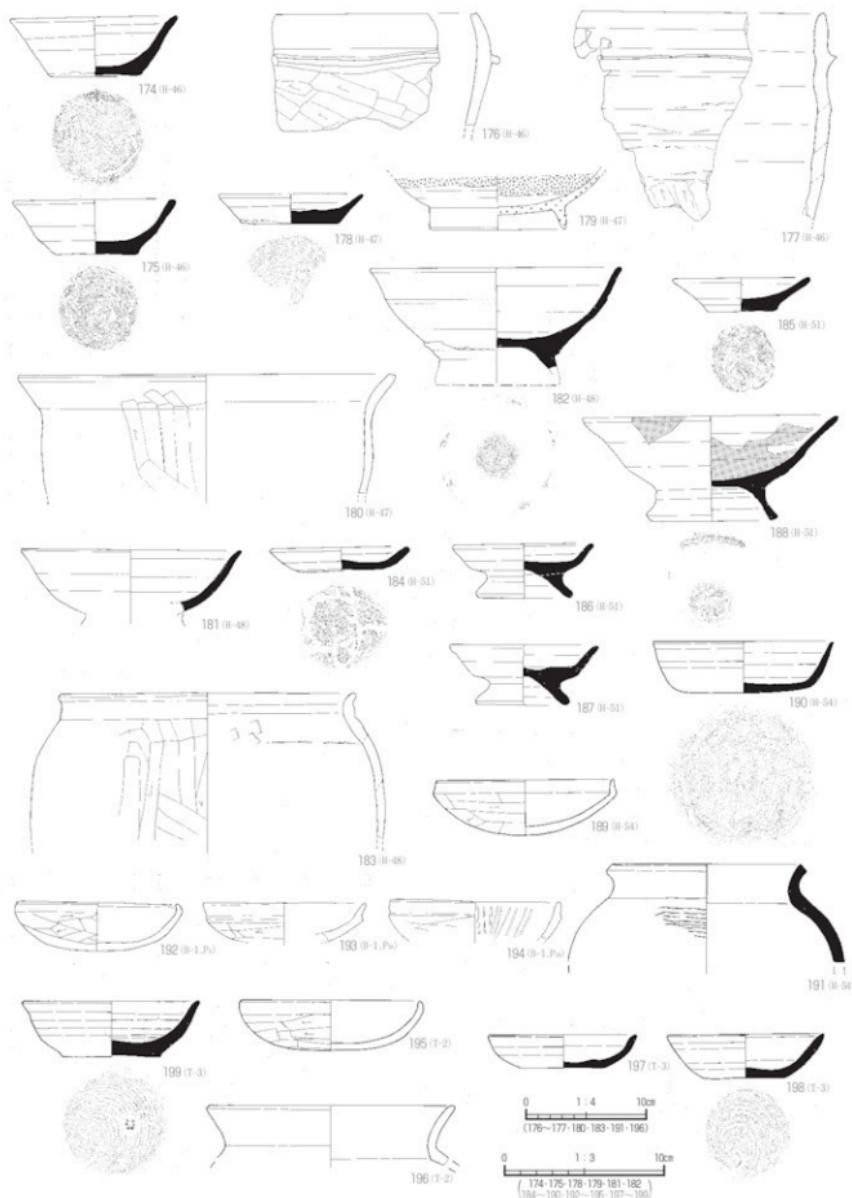


Fig.52 H-46~48·51·54号住居跡、B-1号掘立柱建物跡、T-2·3号堅穴状遺構出土土器

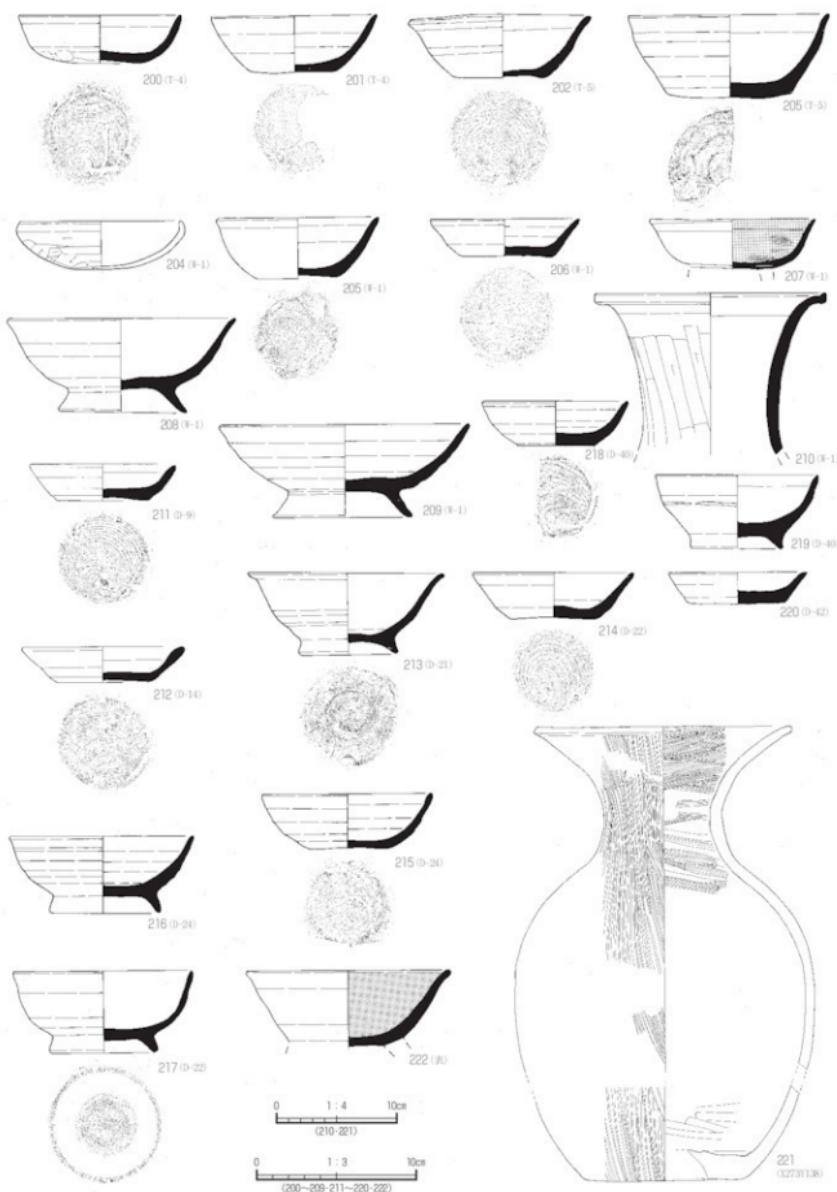


Fig.53 T-4 · 5号竖穴状遗構、W-1号溝跡、土坑、表採土器

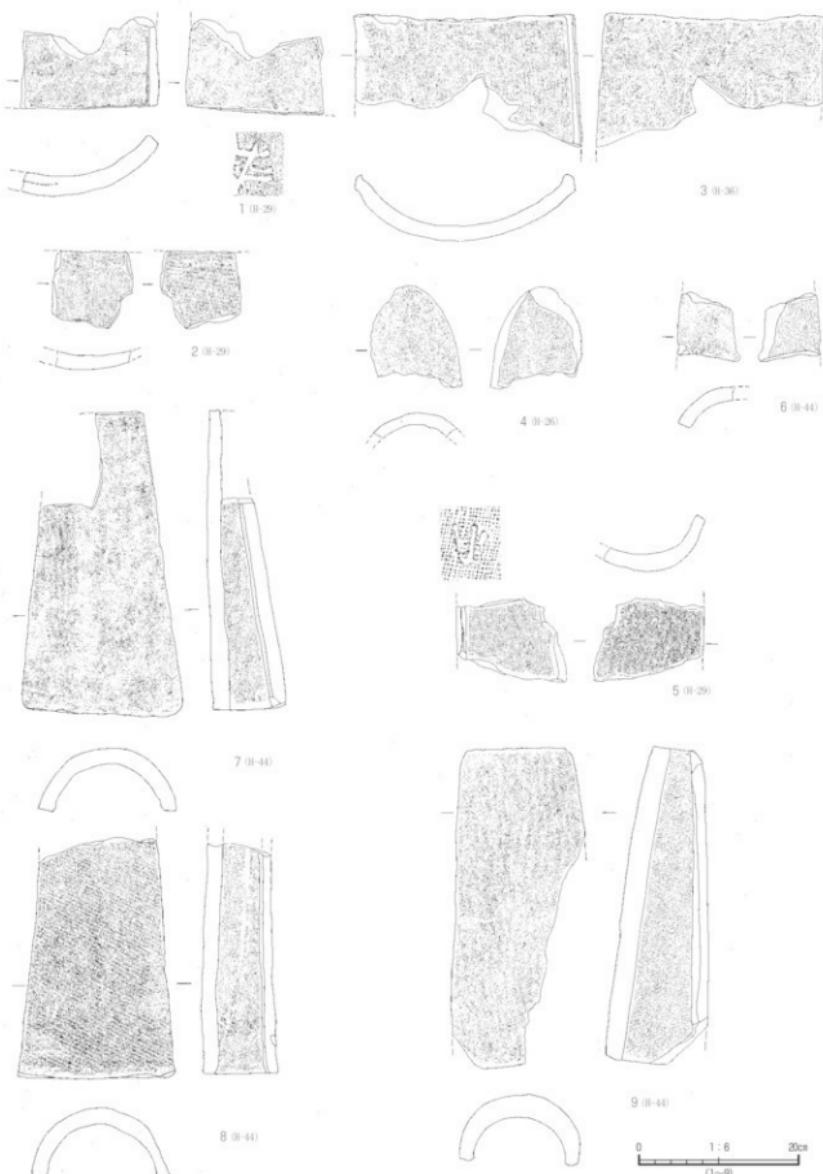


Fig.54 瓦実測図

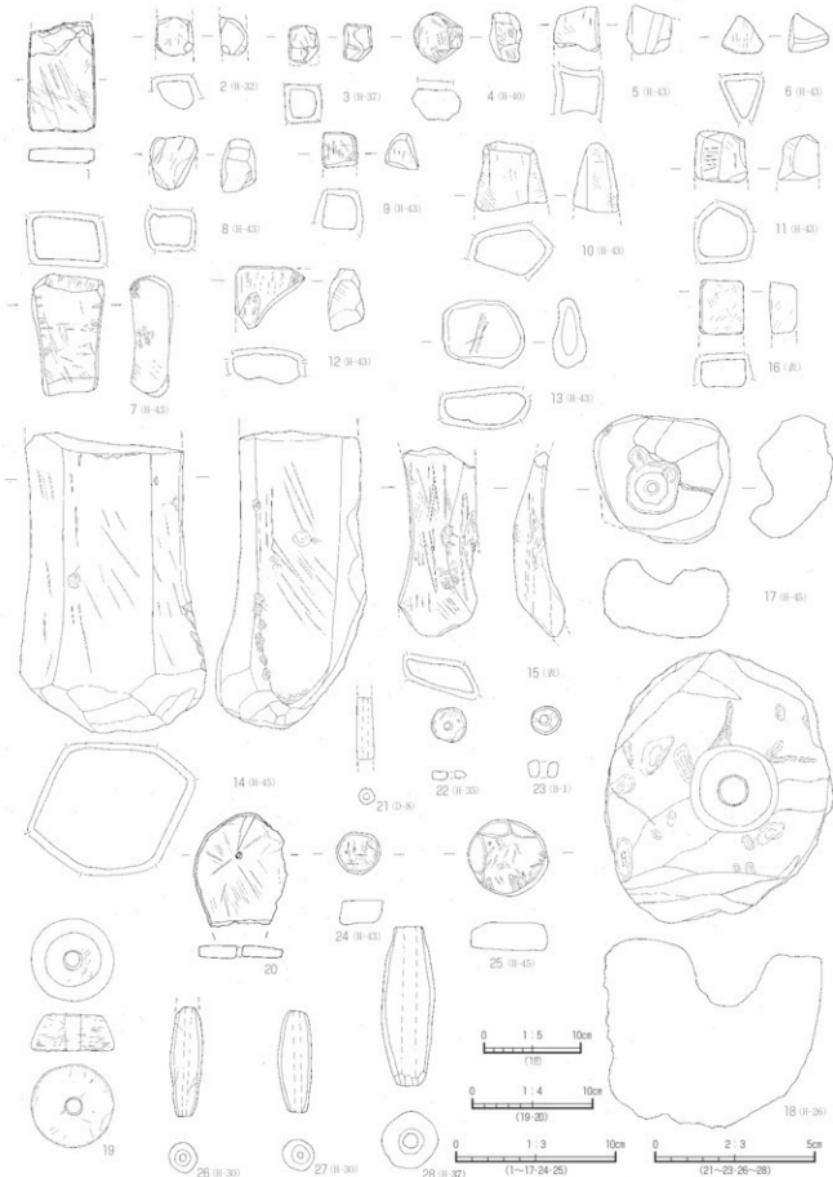


Fig.55 石製品・土製品実測図

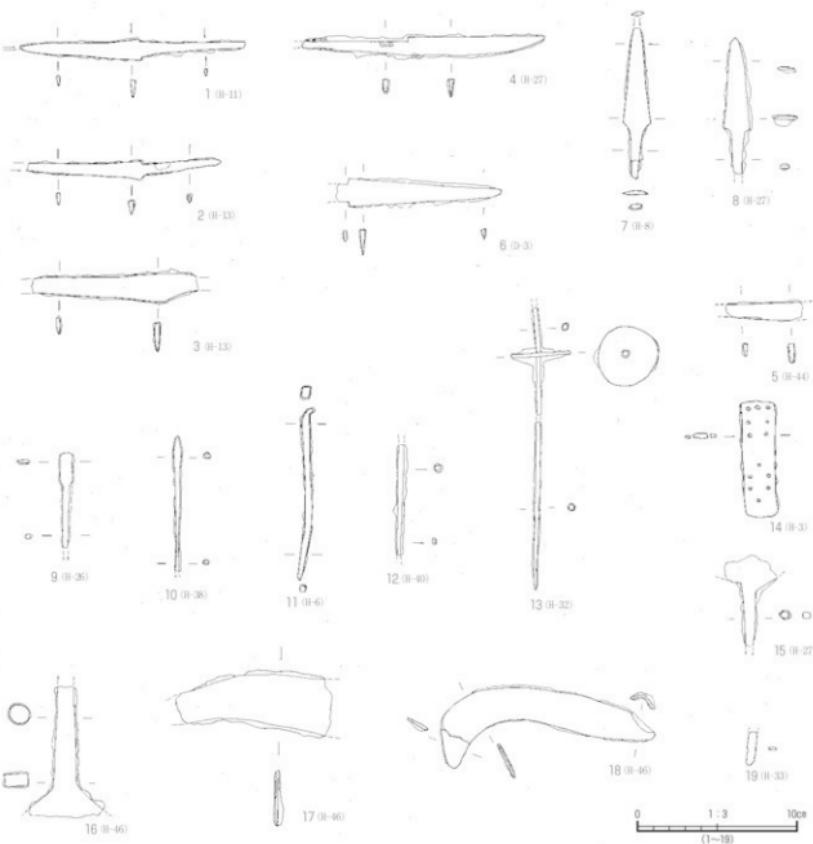
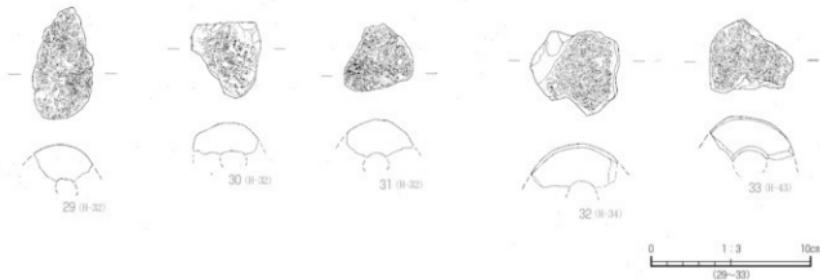


Fig.56 銅羽口、鐵器実測図



J-2号住居跡全景（南東から）



J-2号住居跡全景（北から）



J-4号住居跡全景（北西から）



J-4号住居跡セクション（南西から）



J-4号住居跡 炉（北西から）



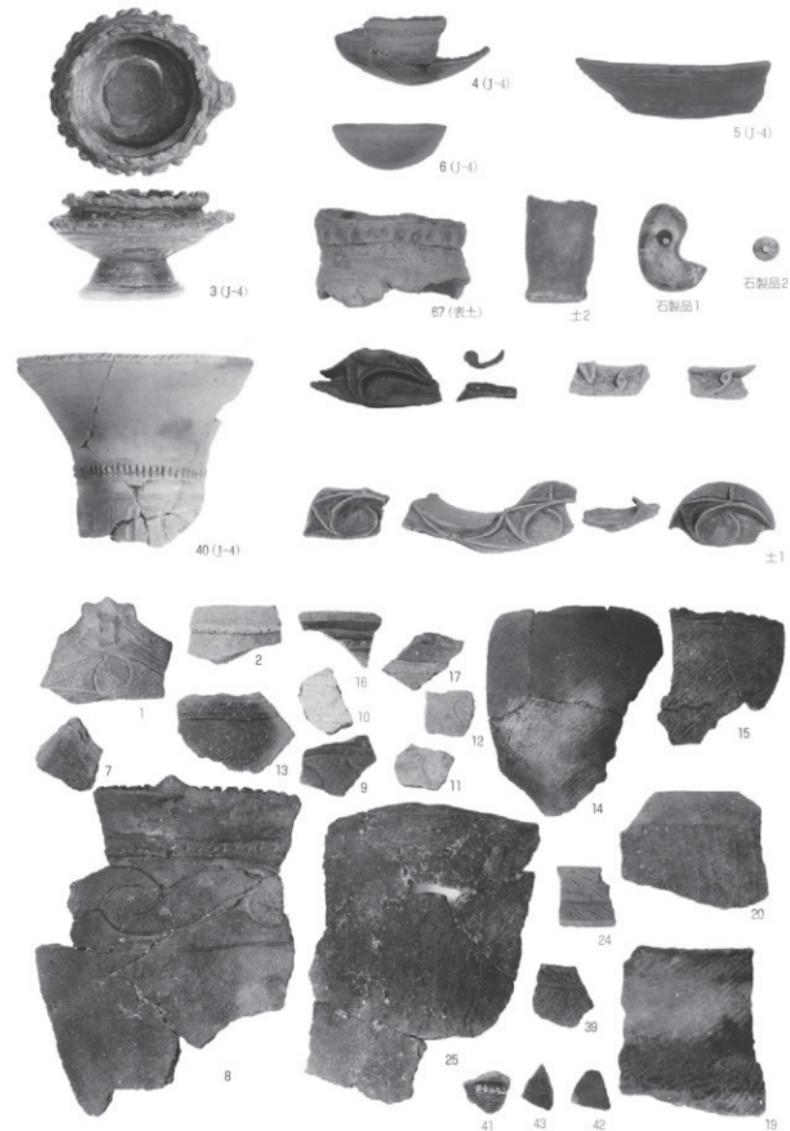
J-4号住居跡 炉セクション（南西から）

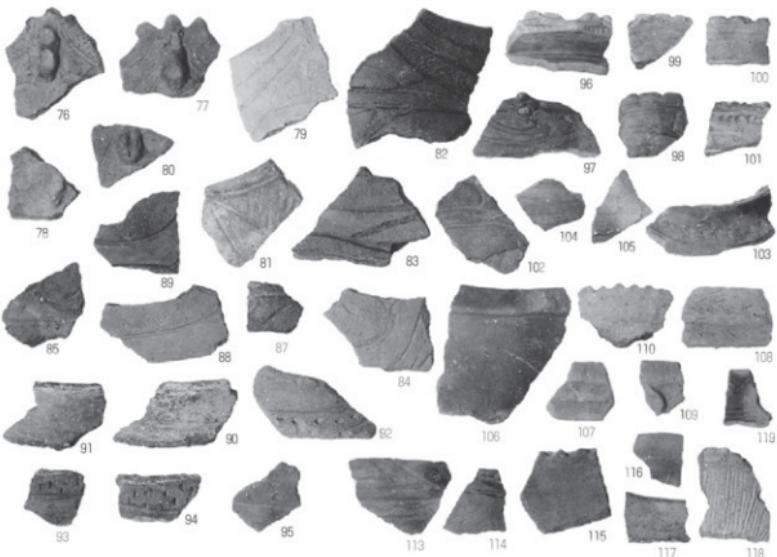
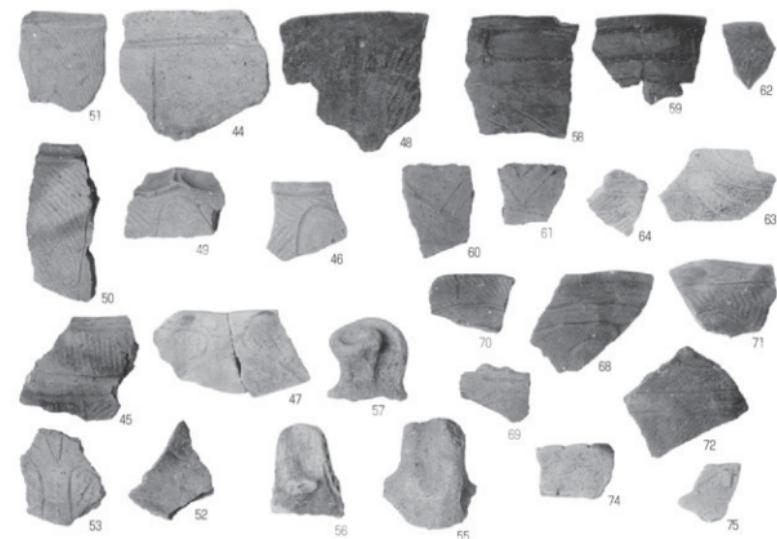


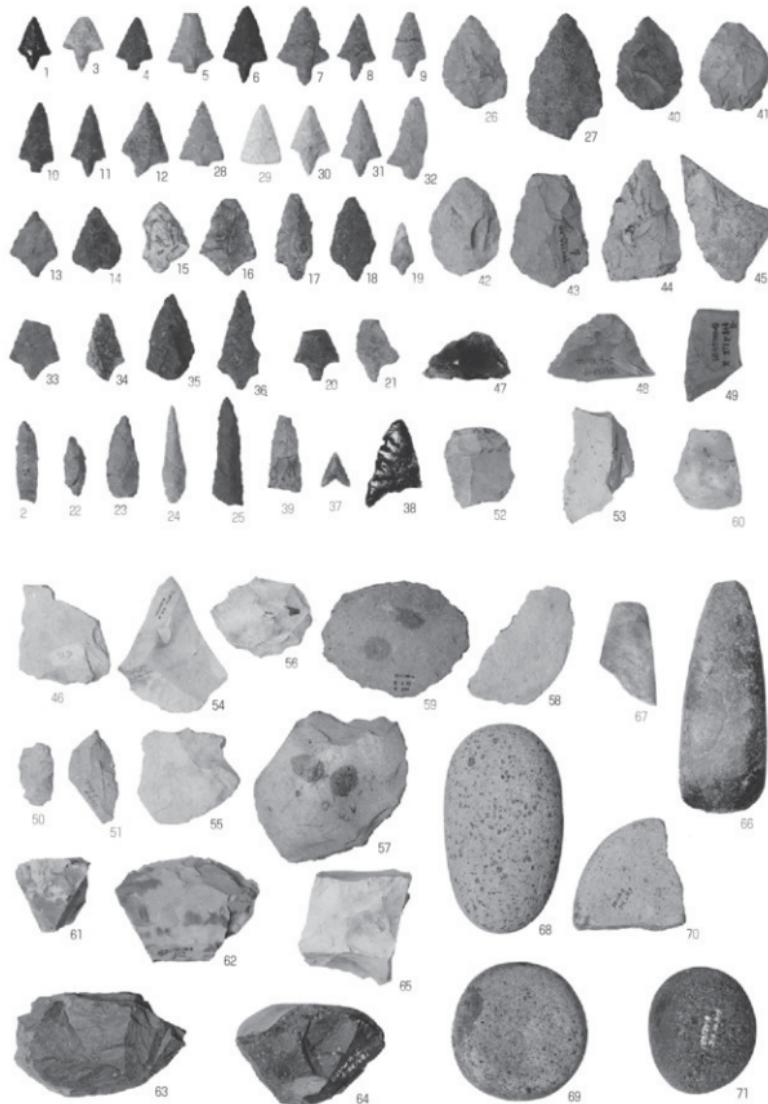
J-4号住居跡 遺物出土状況（北西から）



J-4号住居跡 耳飾り出土状況（西から）









H-3号住居跡全景（北東から）



H-5号住居跡全景（北西から）



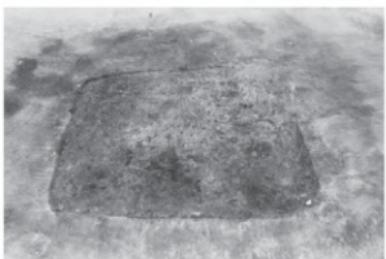
H-4号住居跡全景（西から）



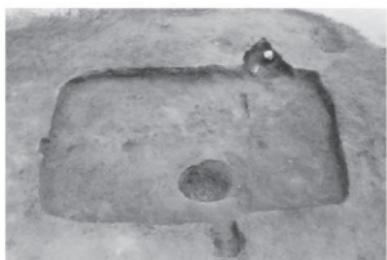
H-4号住居跡 窓（西から）



H-6号住居跡全景（西から）



H-7号住居跡全景（西から）



H-8号住居跡全景（西から）



H-9号住居跡全景（西から）



H-10号住居跡全景（西から）



H-11号住居跡全景（北東から）



H-12号住居跡全景（西から）



H-13号住居跡全景（北西から）



H-14号住居跡全景（西から）



H-15号住居跡全景（北から）



H-16号住居跡全景（西から）



H-17号住居跡全景（西から）



H-18号住居跡全景（西から）



H-19号住居跡全景（北から）



H-21号住居跡全景（南西から）



H-21号住居跡 窓（南西から）



H-22号住居跡全景（南西から）



H-22号住居跡 窓（南西から）



H-23号住居跡全景（西から）



H-24号住居跡全景（西から）



H-26・50・51号住居跡全景 (西から)



H-26号住居跡 罐全景 (西から)



H-27号住居跡全景 (西から)



H-27号住居跡 ピット検出状況 (西から)



H-27号住居跡 罐全景 (西から)



H-29号住居跡全景 (西から)



H-29号住居跡 床下土坑セクション (北から)



H-30号住居跡全景 (西から)



H-30号住居跡 罹全景（西から）



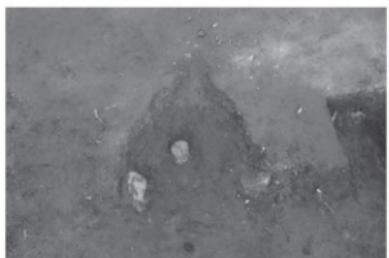
H-31号住居跡 遺物出土状況（西から）



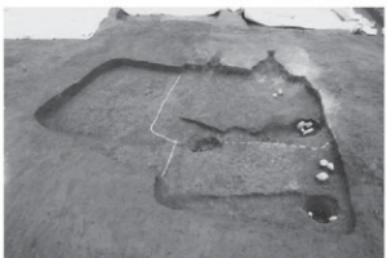
H-32号住居跡全景（西から）



H-31号住居跡全景（西から）



H-32号住居跡 罹全景（西から）



H-33・34・45号住居跡全景（西から）



H-33・34・45号住居跡 遺物出土状況（西から）



H-34号住居跡 罹全景（西から）



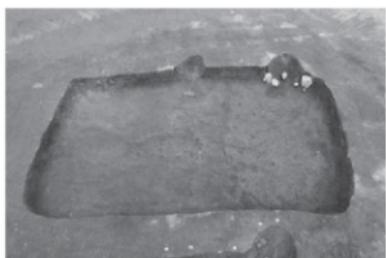
H-36号住居跡 全景（西から）



H-36号住居跡 蟻全景（西から）



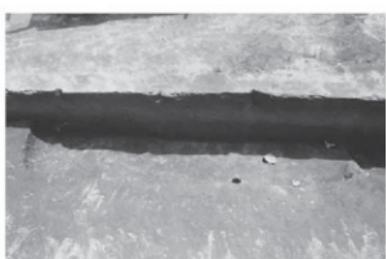
H-37号住居跡 遺物出土状況（西から）



H-37号住居跡 全景（西から）



H-37号住居跡 新竈全景（西から）



H-38号住居跡 全景（西から）



H-41号住居跡 遺物出土状況（西から）



H-41号住居跡 竈全景（西から）



H-40・42号住居跡全景（南西から）



H-40号住居跡 窑全景（西から）



H-40号住居跡 窯セクション（西から）



H-42号住居跡 窯全景（西から）



H-43号住居跡全景（南西から）



H-43号住居跡 遺物出土状況（東から）



H-44号住居跡全景（南西から）



H-44号住居跡 窯全景（西から）



H-46号住居跡全景（西から）



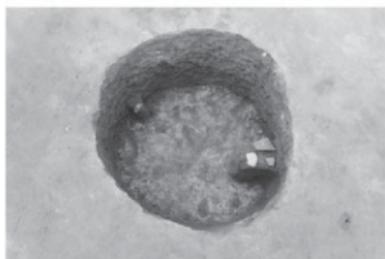
H-46号住居跡 遺物出土状況（西から）



H-47・48号住居跡全景（西から）



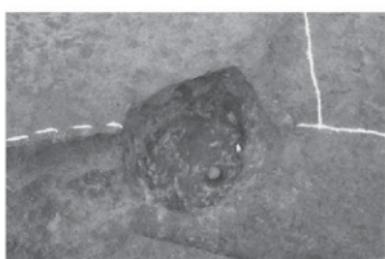
H-49号住居跡全景（西から）



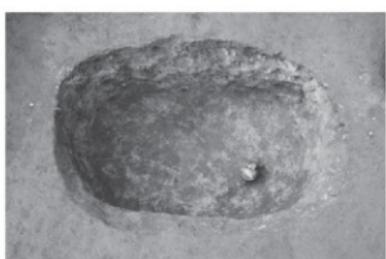
D-4号土坑全景（南から）



D-10号土坑全景（南から）



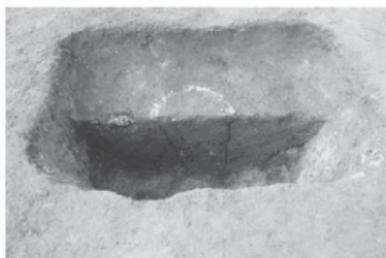
D-11号土坑全景（東から）



D-14号土坑全景（南から）



B-1号掘立柱建物跡全景（西から）



P6号柱穴セクション（南から）



P10号柱穴セクション（西から）



P10号柱穴セクション（西から）



P10号柱穴完掘状況（西から）



T-1号竪穴状遺構全景（南東から）



T-2号竪穴状遺構全景（北西から）



T-3号竪穴状遺構全景（南西から）



T-4号竪穴状遺構全景（南から）



W-1号溝全景（西から）



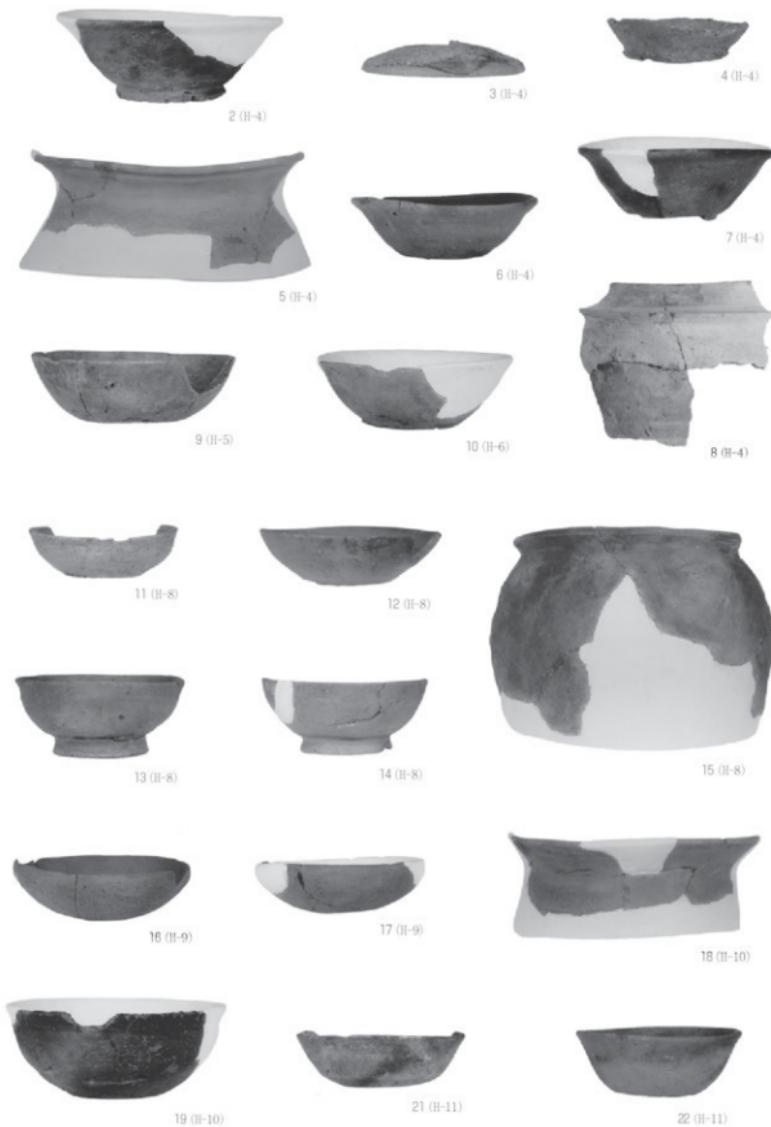
W-1号溝全景（東から）



W-1号溝 鹽構築材採掘痕（南西から）



W-1号溝 鹽構築材採掘痕（南東から）





26 (II-13)



23 (II-11)



27 (II-13)



24 (II-11)



25 (II-13)



28 (II-13)



30 (II-14)



31 (II-14)



29 (II-13)



32 (II-14)



33 (II-14)



37 (II-14)



34 (II-14)



35 (II-14)



40 (II-16)



39 (II-16)



41 (II-16)



38 (II-15)

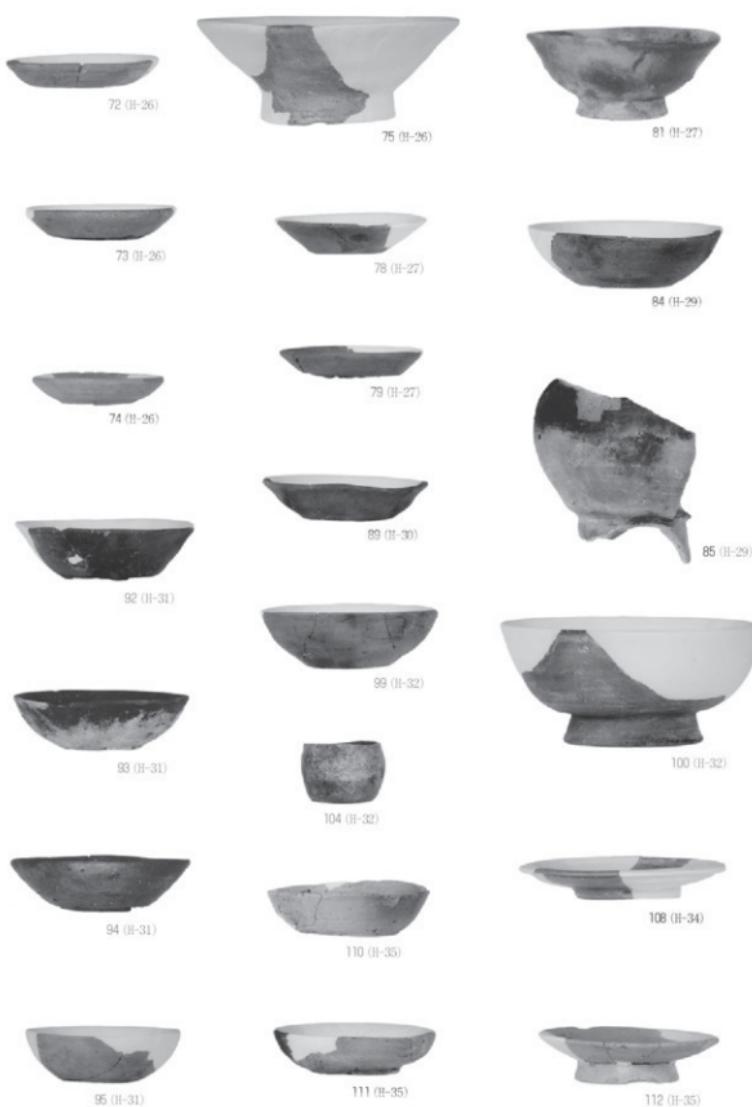


44 (II-18)



45 (II-18)







140 (II-41)



142 (II-41)



144 (II-41)



141 (II-41)



143 (II-41)



145 (II-41)



155 (II-42)



146 (II-41)



147 (II-41)



157 (II-43)



148 (II-41)



149 (II-41)



158 (II-43)



151 (II-41)



150 (II-41)



159 (II-43)



161 (II-43)



162 (II-41)



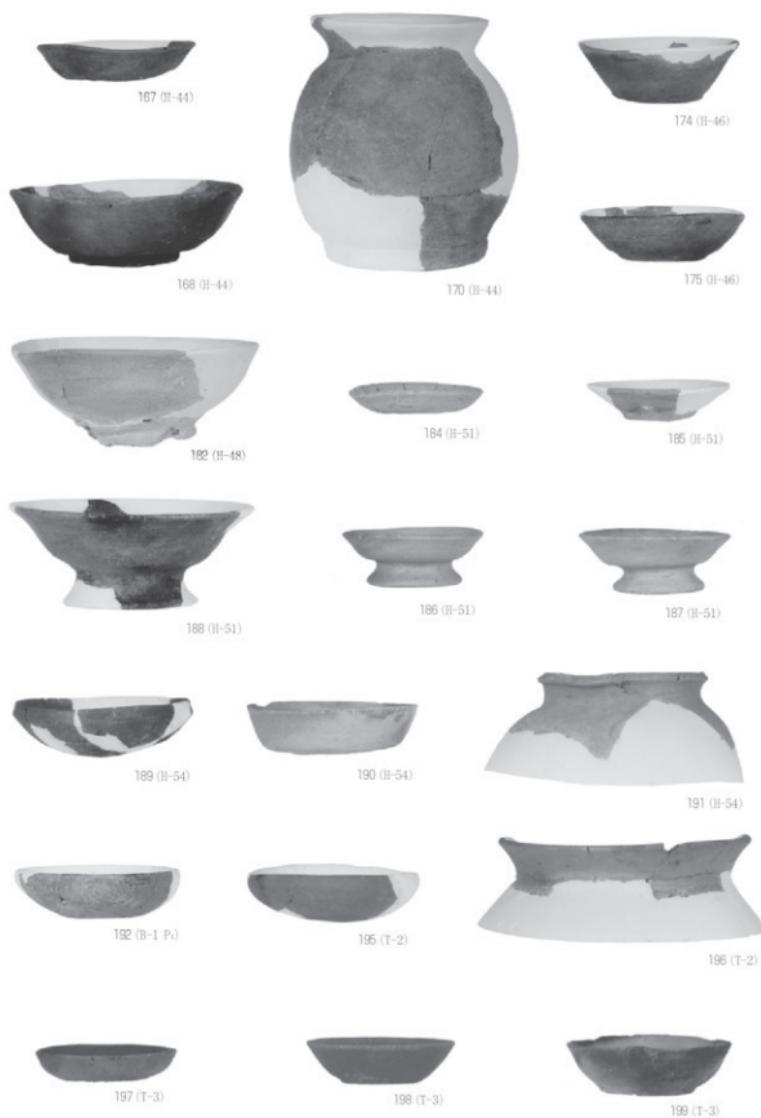
160 (II-43)



166 (II-44)



165 (II-44)





200 (T-4)



201 (T-4)



202 (T-5)



204 (III-1)



205 (III-1)



206 (III-1)



207 (III-1)



213 (D-21)



214 (D-24)



215 (D-24)



216 (D-9)



212 (D-14)



217 (D-22)



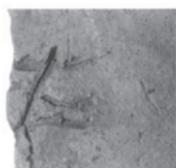
218 (D-40)



220 (D-42)



221 (D273Y138)



1 (II-29)



3 (II-36)



5 (II-29)



5 (II-29)



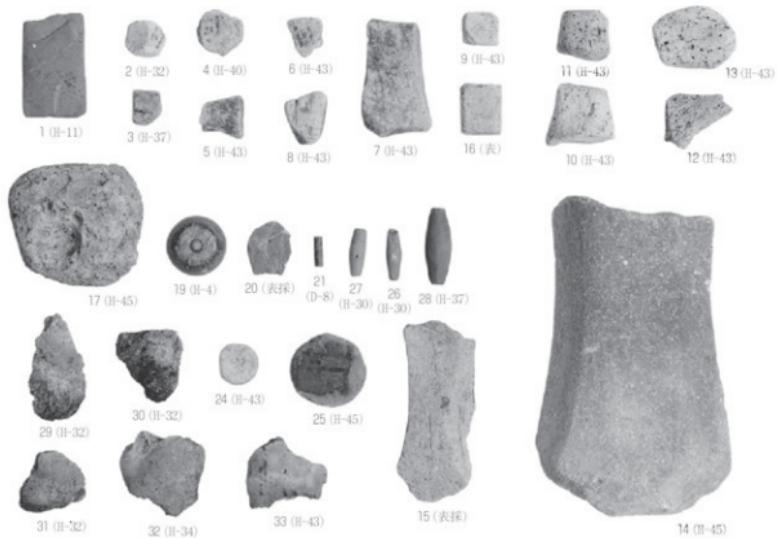
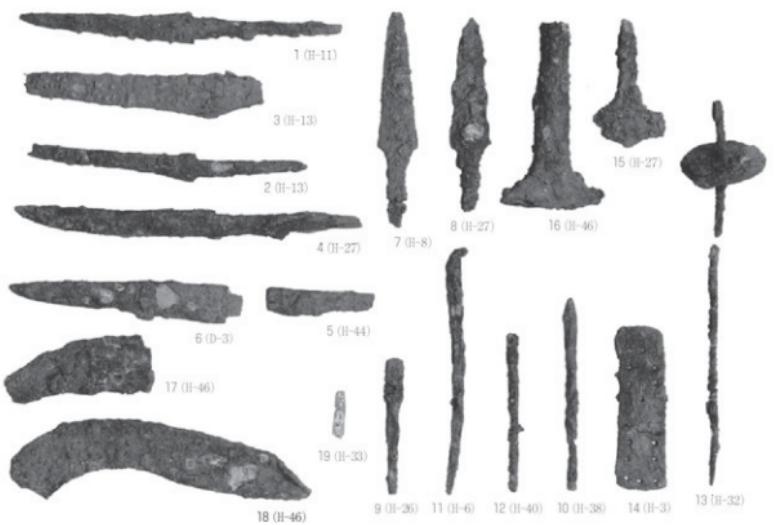
7 (II-44)

8 (II-44)



石18 (II-26)

9 (II-44)



抄 錄

フリガナ	モトソウジャオウミイセキグン
書名	元総社蒼海遺跡群(9)・元総社蒼海遺跡群(10)
副書名	前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業および元総社公民館新築移転工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
編著者名	梅澤 克典・池田 史人・綿貫 純子・遠藤たか美
編集機関	前橋市埋蔵文化財発掘調査団
編集機関所在地	〒371-0018 群馬県前橋市三俣町二丁目10-2
発行年月日	西暦2007年3月19日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		位置(日本測地系)		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
モトソウジャオウミイセキグン 元総社蒼海遺跡群 (9)・(10)	マスパルシモトソウジヤ 前橋市元総社 マサ 町3丁目1-1 14か	10201	17A130 -9・10	36°23'20"	139°02'26"	20051108 ~ 20051219	4.201m ²	土地区画整理 事業 元総社公民館 新築移転工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
元総社蒼海遺跡群 (9)・(10)	集落跡	縄文	竪穴住居跡2軒	縄文土器、石器	晩期の遺構・遺物を検出。
		古墳	竪穴住居跡6軒	土師器、須恵器	
		奈良・平安	竪穴住居跡43軒、掘立柱建物跡1棟、溝跡1条、土坑32基 ほか	土師器、須恵器、灰釉陶器、鉄器、瓦など	大形掘立柱建物跡(3×10間)
		中世以降	溝跡1条 ほか		

元総社蒼海遺跡群(9)(10)

2007年3月14日 印刷

2007年3月19日 発行

編集発行 前橋市埋蔵文化財発掘調査団

前橋市三俣町二丁目10-2

TEL 027-231-9531

印刷 日本特急印刷株式会社

前橋市下小出町二丁目9-25

TEL 027-233-2002

